秋田県文化財調査報告書第494集

藤 株 遺 跡 (第2次)

——般国道7号鷹巣大館道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI—

2014.9

秋田県教育委員会

藤株遺跡(第2次)

──般国道7号鷹巣大館道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ─

2014.9

秋田県教育委員会



1 昭和55年撮影藤株遺跡全景(北東→)



2 藤株遺跡全景(東→)



1 藤株遺跡全景①(南西→)



2 藤株遺跡全景②(南→)

本県には、これまでに発見された約5,000か所の遺跡をはじめとして、 先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化 財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解 を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、県北地域においては国道7号の混雑緩和、大館能代空港へのアクセス向上、生活圏中心都市間の連携強化などを目的とした一般国道7号鷹巣大館道路建設事業が行われています。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道7号鷹巣大館道路建設事業に先立って、平成24年度に、北秋田市において実施した藤株遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、縄文時代の竪穴建物跡やフラスコ状土坑、古代の溝跡などが見つかり、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所、北 秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成26年9月

秋田県教育委員会 教育長 米田 進

例 言

- 1 本書は、一般国道 7 号鷹巣大館道路建設事業に伴い、平成24 (2012) 年度に発掘調査した秋田県 北秋田市脇神字高森堂ノ上 83-3 外に所在する藤株遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査の成果 については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報31 (平成24年度)』及び発掘調査報 告会資料などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
- 2 調査要項

遺 跡 名 藤株遺跡(ふじかぶいせき)

遺 跡 略 号 2 F K

遺跡所在地 秋田県北秋田市脇神字高森堂ノ上83-3外

調 査 期 間 平成24年6月4日~平成24年10月30日

調 査 面 積 8,700㎡

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 山田徳道・水品仁志・簗瀬圭二・袴田道郎・山村剛(以上、秋田県埋蔵文化財 センター中央調査班 学芸主事) 菅野美香子(同文化財主任)

総務担当者 菊地尚久 (秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 主査) ※以上の職名は当時のもの

調査協力機関 国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所 北秋田市教育委員会

- 3 本書第5図は、国土地理院発行の1/25,000地形図『鷹巣東部』(平成14年発行)・『鷹巣西部』(平成10年発行)を、第6図は、国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所提供の1/1,000工事用 平面図を、第154図は北秋田市提供の1/2,500鷹巣町都市計画図をもとに作成した。
- 4 遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本 色彩研究所色票監修『新版標準土色帖2005年版』を使用した。
- 5 発掘調査及び整理作業における以下の作業は下記の業者に委託した。

水準測量、方眼杭設置作業:高橋測量有限会社

遺跡空中写真撮影:株式会社シン技術コンサル

土器・土製品の実測及びトレース:株式会社ラング

石器・石製品の実測及びトレース:株式会社アルカ

遺物写真撮影:株式会社岩田写真

6 以下の理化学的分析は、下記の業者に委託した。なお、本書ではその分析結果報告を第4章に掲載した。

24 年度

木製品保存処理・樹種同定:株式会社吉田生物研究所

樹種同定・放射性炭素年代測定・テフラ分析:株式会社加速器分析研究所

リン・カルシウム分析及び黒曜石産地推定:株式会社パレオ・ラボ

25 年度

樹種同定·放射性炭素年代測定:株式会社加速器分析研究所

出土石器類石質鑑定:株式会社古環境研究所

7 執筆担当は下記の通りである。編集は簗瀬圭二が行った。

第1章第1節、第3章第2節1・3節1・4 (土器・土製品記述部分以外)、第5章: 簗瀬圭二 第1章第2節: 袴田道郎 第1章第3節2・3、第3章第1・2節2・3: 菅野美香子

第2章第1節:水品仁志 第2章第2節、第3章第3節4(土器・土製品記述部分):山田徳道 第3章第3節2・3:調査担当者

8 本書を作成するにあたり、以下の方々や諸機関から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上 げます。

[五十音順·敬称略]

秋田県立博物館 秋田地方法務局大館支局 榎本剛治 熊谷常正 関根達人 大橋泰夫 櫛原功一 慶応義塾大学 大工原豊 天理大学付属天理参考館 東京国立博物館 東北大学総合学術博物館 中村耕作 南山大学人類学博物館 藤沼邦彦

月, 例

- 1 本報告書に掲載した平面図(遺構実測図)の方位は、世界測地系平面直角座標第X系による座標 北を示す。原点 (MA50) における座標北と磁北との偏角は西偏8°53'である。本文及び巻末の報 告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。
- 2 遺構については検出順にその種類を示す略記号と通し番号を付したが、後に遺構ではないと判断 したものは欠番とした。遺構に使用した略記号は以下の通りである。

SI:竪穴建物跡 SIX:円形柱穴列建物跡 SB:掘立柱建物跡 SA:柱穴列

SK: 土坑 SKF: フラスコ状土坑 SQN: 石囲炉 SN: 焼土遺構 SR: 土器埋設遺構 SKQ:配石土坑 SQ:配石遺構 SD:溝跡 SX:畑跡 SKP:柱穴様ピット

- 3 遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構内層位には算用数字を使用した。
- 4 遺構実測図及び遺物実測図には、それぞれスケールを付して縮尺を示した。
- 5 出土遺物観察表・挿図・図版などに付した出土遺物番号のうち、番号(アラビア数字)の前の「S」 は石器・石製品を、「W」は木製品を、「J」は磁器を示す。
- 6 挿図中に使用した網フセ・記号は以下の通りである。これ以外については、個々の頁に示した。

<遺構関連>















Δ (礫)

(強い被熱)



炭化物集中範囲







(土器) (石器)

(炭化物)

<遺物関連>













アスファルト

磨面(石器) 朱塗り(土器)

自然面(石器) 炭化物付着

割れ口

摂理面(石器)

目 次

巻頭凶版	例言 ii	目次	·····iv	表目次······vii
序	凡例······iii	挿図目次…	v	図版目次······viii
第1章 調査の	り経過	(1	7)石開炉	125
	査に至る経緯·······1		◎焼土遺構…	127
第2節 発掘	屈調査の経過 1	(9 土器埋設遺 ²	構131
第3節 整理	理作業の経過3	(j	⑩配石土坑	132
第2章 遺跡の	の位置と環境	(j	⑪配石遺構…	134
第1節 地理	理的環境5	Ø	②石器製作関	連遺構134
第2節 歴史	史的環境7	(I	③柱穴様ピッ	\} 136
1 藤株江	遺跡と周辺遺跡7	(2)出土遺物…	158
2 学史_	上の藤株遺跡10	(D土器	158
第3章 調查0	の方法と成果	(2	②土製品	162
第1節 調	査の方法15		③石器・石製品	∄······163
1 発掘詞	調査15	3	古代以降・時期	期不明214
2 整理化	作業16	(1)遺構と遺構	内出土遺物214
第2節 基本	本層序17	(①掘立柱建物!	跡214
1 A区0	の基本層序17		②柱穴列	218
2 B区	の基本層序18		③焼土遺構…	220
3 A·B	区基本層序の対応関係に	(2	④ 溝跡	220
ついっ	₹ 23	(5畑跡	230
第3節 検	出遺構と遺物26		⑥柱穴様ピッ	F230
1 概要·	26	(2)出土遺物…	230
(1)遺材	構と出土遺物26	第4章 耳	理化学的分析	
(2)遺標	冓種別・性格について26	第1節	炭化材・木製	⊌品の樹種・種実同定…235
2 縄文師	寺代·弥生時代······39	第2節	放射性炭素	年代(AMS測定)241
(1)遺材	構と遺構内出土遺物39	第3節	テフラ分析	247
①竪2	穴建物跡39	第4節	土坑出土土	器内採取土壤
②円升	形柱穴列建物跡73		のリン・カノ	レシウム分析251
③掘5	立柱建物跡87	第5節	黒曜石の剥	片の産地推定256
4柱2	穴列89	第6節	石器類石質	鑑定259
⑤土均	坑89	第5章 絲	総括	261
⑥ フラ	ラスコ状土坑113			

図版 報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	鷹巣大館道路と関連遺跡4	第41図	S I 1023 (1) ······67
第2図	工事計画と調査範囲4	第42図	S I 1023 (2) ·····68
第3図	藤株遺跡位置図5	第43図	S I 1041·1043·1059······70
第4図	地形区分図6	第44図	S I 1063(1)72
第5図	藤株遺跡と周辺遺跡位置図8	第45図	S I 1063 (2) ······73
第6図	遺跡範囲図・調査区位置図13	第46図	S I X64······75
第7図	周辺地形図・グリッド配置図16	第47図	S I X91·····76
第8図	藤株遺跡等高線図·基本層序	第48図	S I X93······78
	位置図19・20	第49図	S I X96·····79
第9図	A区基本層序断面図21	第50図	S I X97·····81
第10図	B区IV層上面地形図23	第51図	S I X99·····82
第11図	B区基本層序断面図124	第52図	S I X100·····83
第12図	B区基本層序断面図225	第53図	S I X 102·····85
第13図	遺構配置区割図27	第54図	S I X106·····86
第14図	遺構配置区割図①・②28	第55図	S B 12 • 13 · · · · · · · · 88
第15図	遺構配置分割図③29	第56図	S B 1045, S A 11·····90
第16図	遺構配置分割図④30	第57図	S K02·04·09·14、S K F 03·····92
第17図	遺構配置分割図⑤31	第58図	S K 24 • 26 • 29 • 30 • 33 • 34 • 36 · · · · · · · · · 96
第18図	遺構配置分割図⑥32	第59図	S K 37 · 38 · 40 · 43 · 108 · · · · · · · 98
第19図	遺構配置分割図⑦33	第60図	S K 44 • 45 • 47 • 49 • 51 • 54 • 92 · · · · · · · 101
第20図	遺構配置分割図⑧34	第61図	S K 55 • 65 ~ 67 • 70 · · · · · · · · 103
第21図	遺構配置分割図⑨35	第62図	S K80~82 · 84 · 85 · 87 · · · · · · · · 106
第22図	遺構配置分割図⑩36	第63図	S K89·95·104·110·1003······109
第23図	遺構配置分割図⑪37	第64図	S K 1017 • 1026 • 1029 • 1036 • 1042 · · · · · 112
第24図	遺構配置分割図⑫・⑬38	第65図	S K 1044 • 1047 • 1060 • 1061 · · · · · · · · 114
第25図	S I 18(1) ······40	第66図	S K F 20 • 25 • 31 • 32 · · · · · · · · · 117
第26図	S I 18(2) ······41	第67図	S K F 1001 • 1021, S N 1004 · · · · · · · 119
第27図	S I 21(1) ······43	第68図	S K F 1022 • 1033 • 1048 · · · · · · · 121
第28図	S I 21(2) ······44	第69図	S K F 1049 • 1050 • 1054 · · · · · · · 124
第29図	S I 52(1)46	第70図	SKF1057·1068~1070·····126
第30図	S I 52(2) ······47	第71図	S Q N 56, S N 22 • 27 • 59 • 60 • 1012 · · · 130
第31図	S I 52(3)49	第72図	S R 10 • 28 • 1005 , S K Q 1002 · · · · · · · 133
第32図	S I 61(1)52	第73図	S Q 69, S Q X 1007 • 1015 · · · · · · · 135
第33図	S I 61(2)53	第74図	遺構内出土土器(1)139
第34図	S I 71·····55	第75図	遺構内出土土器(2)140
第35図	S I 98·····57	第76図	遺構内出土土器(3)141
第36図	S I 112·····59	第77図	遺構内出土土器(4)142
第37図	S I 1011 ······60	第78図	遺構内出土土器(5)143
第38図	S I 1019(1) ·····62	第79図	遺構内出土土器(6)144
第39図	S I 1019(2)63	第80図	遺構内出土石器(1)145
第40図	S I 1019(3)64	第81図	遺構內出土石器(2)146

第82図	遺構內出土石器(3)·石製品147	第124図	遺構外出土石器(17)·石製品(2)…202
第83図	遺構內出土石器(4)148	第125図	S B 16·····215
第84図	遺構内出土石器(5)149	第126図	S B 19 · 1062 · · · · · · · 217
第85図	遺構内出土石器(6)150	第127図	S B 1073 • 1075 • 1076 · · · · · · · · · · 219
第86図	遺構內出土石器(7)151	第128図	S A 1072, S N 1013 • 1039 • 1064 · · · · · 221
第87図	遺構內出土石器(8)152	第129図	S D1014······223
第88図	遺構內出土石器(9)153	第130図	S D1018······224
第89図	遺構內出土石器(10)154	第131図	S D 1040 • 1071 · · · · · · · 226
第90図	遺構內出土石器(11)155	第132図	S D 1074 (1) · · · · · · · 228
第91図	遺構內出土石器(12)156	第133図	S D 1074 (2) · · · · · · · 229
第92図	遺構內出土石器(13)157	第134図	S X 113·····231
第93図	遺構外出土土器(1)171	第135図	遺構内出土土器・石器・木製品(1)…233
第94図	遺構外出土土器(2)172	第136図	遺構内出土木製品(2)234
第95図	遺構外出土土器(3)173	第137図	炭化材·種実遺体(1) ······237
第96図	遺構外出土土器(4)174	第138図	炭化材·種実遺体(2) ·····237
第97図	遺構外出土土器(5)175	第139図	木製品(草履芯)238
第98図	遺構外出土土器(6)176	第140図	顕微鏡写真238
第99図	遺構外出土土器(7)177	第141図	種実遺体240
第100図	遺構外出土土器(8)178	第142図	暦年較正年代グラフ(1)244
第101図	遺構外出土土器(9)179	第143図	暦年較正年代グラフ(2)246
第102図	遺構外出土土器(10)180	第144図	重鉱物組成248
第103図	遺構外出土土器(11)181	第145図	火山ガラスの屈析率249
第104図	遺構外出土土器(12)182	第146図	テフラ・重鉱物249
第105図	遺構外出土土器(13)183	第147図	リン・カルシウム分析
第106図	遺構外出土土器(14)184		試料採取位置251
第107図	遺構外出土土器(15)・土製品185	第148図	プレス試料及びリンとカルシウム
第108図	遺構外出土石器(1)186		の元素マッピング図(1)254
第109図	遺構外出土石器(2)187	第149図	プレス試料及びリンとカルシウム
第110図	遺構外出土石器(3)188		の元素マッピング図(2)255
第111図	遺構外出土石器(4)189	第150図	北海道・東北地方の黒曜石
第112図	遺構外出土石器(5)190		原石採取地の分布図257
第113図	遺構外出土石器(6)191	第151図	黒曜石産地推定判別図(1)258
第114図	遺構外出土石器(7)192	第152図	黒曜石産地推定判別図(2)258
第115図	遺構外出土石器(8)193	第153図	藤株遺跡遺構配置図(昭和55年度
第116図	遺構外出土石器(9)194		調査分)263・264
第117図	遺構外出土石器(10)195	第154図	藤株遺跡遺構配置図(過年度
第118図	遺構外出土石器(11)196		調査分も含む)265・266
第119図	遺構外出土石器(12)197	第155図	A区縄文·弥生土器出土状況図268
第120図	遺構外出土石器(13)198	第156図	B区縄文·弥生土器出土状況図269
第121図	遺構外出土石器(14)199	第157図	縄文早期·弥生土器出土状況図
第122図	遺構外出土石器(15)200		及び石器出土状況図270
第123図	遺構外出土石器(16)·石製品(1)…201		

表 目 次

第1表	藤株遺跡周辺の遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
第2表	縄文時代柱穴様ピット一覧(1)	137
第3表	縄文時代柱穴様ピット一覧(2)	138
第4表	土器観察表(1)	203
第5表	土器観察表(2)	204
第6表	土器観察表(3)	205
第7表	土器観察表(4)	206
第8表	土器観察表(5)	207
第9表	土器・土製品観察表	208
第10表	石器・石製品の分類別出土点数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	209
第11表	石器・石製品の器種別出土点数・重量及び掲載点数・率・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	209
第12表	石器·石製品観察表(1)······	210
第13表	石器観察表(1)	211
第14表	石器観察表(2)	212
第15表	石器·石製品観察表(2)·····	213
第16表	古代以降・時期不明柱穴様ピット一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	232
第17表	樹種同定・種実同定結果	236
第18表	出土木製品同定表	238
第19表	種実同定結果	239
第20表	クリの大きさ	240
第21表	放射性炭素年代測定結果(1)(δ ¹³ C補正値)	242
第22表	放射性炭素年代測定結果(2)(δ ¹³ C未補正値、暦年較正用 ¹⁴ C 年代、較正年代)	243
第23表	放射性炭素年代測定結果(3)(δ ¹³ C補正値)	245
第24表	放射性炭素年代測定結果(4)(δ ¹³ C未補正値、暦年較正用 ¹⁴ C 年代、較正年代)	246
第25表	テフラ検出同定結果	248
第26表	重鉱物分析結果	248
第27表	分析対象一覧	251
第28表	半定量分析結果	252
第29表	分析対象	256
第30表	北海道・東北地方黒曜石産地の判別群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	256
第31表	測定値及び産地推定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	257
第32表	各岩種判定基準	259
第33表	器種毎構成岩種表	260
第34表	昭和55年度調査遺構整理表	263

図 版 目 次

巻頭図版1

巻頭図版2

図版1 遺跡全景 図版 2 S I 18·21·52、S K 47 図版 3 S I 61·71·112·1011 図版 4 S I 1019·1023·1059·1063, S I X93, S B 1045 図版 5 S K02·04·26·29·30·33·34·36·51, S K F 03·25 図版 6 S K 55 · 80 · 82 · 85 · 1003 · 1017 · 1026 · 1029 図版 7 S K 1036 · 1042 · 1044 · 1047 · 1060 · 1061, S K F 20 · 25 図版 8 SKF31·32·1001·1021·1022·1033·1048·1050·1068 図版 9 SKF1070, SN22·27·59·1004·1012, SQN56, SR10·28 図版10 SR1005、SKQ1002、SQ69、SQX1007·1015、SN1013·1039 図版11 S N 1064、S D 1014 · 1018 · 1040 · 1074、S X 113 図版12 遺構内出土土器(1) 図版13 遺構内出土土器(2) 図版14 遺構内出土土器(3) 図版15 遺構内出土土器(4) 図版16 遺構内出土土器(5) 図版17 遺構内出土石器(1)・石製品 図版18 遺構内出土石器(2) 図版19 遺構内出土石器(3) 図版20 遺構内出土石器(4) 図版21 遺構内出土石器(5) 図版22 遺構外出土土器(1) 図版23 遺構外出土土器(2) 図版24 遺構外出土土器(3) 図版25 遺構外出土土器(4) 図版26 遺構外出土土器(5)・土製品 図版27 遺構外出土石器(1) 図版28 遺構外出土石器(2) 図版29 遺構外出土石器(3)

図版30 遺構外出土石器(4) 図版31 遺構外出土石器(5)

図版32 遺構外出土石器(6)·石製品·磁器

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道 7 号鷹巣大館道路は、北秋田市脇神から摩当山を通り、大館市櫃崎で大館西道路に連結する総延長13.9kmの道路で、日本海沿岸東北自動車道の一部である。平成17年度には、大館市櫃崎から北秋田市栄までの8.3kmの建設事業が開始され、平成19年度には、北秋田市栄からあきた北空港I.Cまでの5.6kmの延伸が事業化された。一般国道 7 号鷹巣大館道路は国土交通省が自動車専用道路として整備を進めており、大館能代空港へのアクセス向上や、一般国道 7 号線の渋滞緩和、災害時の迂回路の確保と県内の交通ネットワークの形成など、地域の文化と経済交流の活性化を目的として計画された路線である(第1図)。

この事業に伴い秋田県教育委員会は、平成21年8月27日、11月9日~11日、16日~19日、12月7日、平成22年4月13日~15日、27日の2か年にわたり、北秋田市栄から脇神までの遺跡分布調査を行い、区間内に周知の遺跡である藤株遺跡、新発見の遺跡である中小又遺跡、ハケノ下遺跡、ハケノ下間遺跡を確認した。また、藤株遺跡は、従来確認されていた範囲の南東側の隣接地まで遺物包含地が広がっていることが判明した。この結果を受けて、平成22年10月21日~11月11日まで秋田県埋蔵文化財センターが藤株遺跡の確認調査を実施し、秋田県教育委員会は国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所長に工事区域内の8,700㎡の発掘調査が必要であることを通知した。これを受けて国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所長と秋田県教育委員会による協議を経て、平成24年6月4日~10月30日まで秋田県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は国道105号線を挟み西側をA区、東側をB区とし(第2図)、A区は平成24年6月18日~10月17日まで、B区は6月4日~10月30日まで実施した。調査に先立って5月28日~31日まで、A区は調査区内の側溝や標識、B区は建物に使用されたコンクリート片などの撤去を行った。その時点でB区北側台地に厚い廃棄物を伴った盛土箇所が見つかったことから、発掘調査に並行して盛土の除去を行うこととした。各週ごとの調査経過は次の通りである。

【第1週】6月4日~6月8日 B区に発掘機材などを搬入し、南西側から表土BI層の掘り下げを開始した。4日、高橋所長、利部・榮両班長が来跡し、B区作業開始に当たっての挨拶を行った。5日、国土交通省米塚監督官が来跡し、調査区境に関して現地協議を行った。6日、文化財保護室高橋主任学芸主事がA区の条件整備進行状況を確認するため来跡した。

【第2週】6月11日~6月15日 B区南側台地の掘り下げを継続した。南北方向の基本層序観察用畦西壁面で基本層序の記録作成を行った。調査区南西端から、北東が角張る孤状に礫を配したSKQ1002を検出した。11日、米塚監督官が来跡し、排土搬出に関する協議を行った。

【第3週】6月18日~6月22日 18日、A区に発掘機材などを搬入し、南側段丘縁辺部の国道側から

第1章 調査の経過

表土AI層の掘り下げを開始した。B区では剥片がまとまって出土したSQX1007を検出した。同日、 高橋所長、榮班長が来跡し、A区作業開始に当たっての挨拶を行った。19日、北秋田市教育委員会榎 本氏が来跡した。20日、米塚監督官が来跡し、A区排土置き場の現地協議を行った。

【第4週】6月25日~6月29日 A区ではSKF03などを検出した。B区では西端部よりSI1011の 土器埋設炉を検出した。29日、島根大学大橋教授、榎本氏が来跡した。

【第5週】7月2日~7月6日 A区ではSR28を検出した。また、第5試掘坑の北壁面を基本層序 観察用畦に設定し、土層断面を作成した。B区では南側台地中央付近でSD1014・1018を検出した。

【第6週】7月9日~7月13日 A区では中央部でSB16などを検出した。B区では南西端部に遺構が集中し、SI1019やSKF1021・1022などを検出した。

【第7週】7月17日~7月20日 A区では南側段丘縁辺部でSI21を検出した。B区では南東部でSI1023の石囲炉を検出した。

【第8週】7月23日~7月27日 A区ではSKF25より縄文時代後期の深鉢形土器が逆位で出土した。 B区では南側台地の遺構精査、掘り下げに並行して沢部の掘り下げを開始した。23・24日、北秋田市 立鷹巣南小学校6年生11名、教員3名が発掘体験を行った。24日、米塚監督官が来跡し、A区に隣接 する民有地進入路に関する現地協議を行った。26日、進入路切り回し造成工事を開始した。

【第9週】7月30日~8月3日 A区では南側段丘縁辺部で柱穴列が5重に回るSI52を検出した。 B区では北側台地の東端の表土BI層の掘り下げを開始し、SK1046などを検出した。1日、A区民 有地進入路切り回し造成工事を終了した。2・3日、B区沢部水路の切り回し工事が行われた。

【第10週】8月6日~8月10日 A区では遺構精査、掘り下げを継続した。B区では北側台地の東部でSKF1050を検出した。6~8日、合川中学校1年生2名が職場体験学習で発掘体験を行い、同日程で新屋高校石川教諭が教職員10年経験者研修を行った。9日、ペアーレ大仙歴史講座受講者25名、講師1名が来跡した。

【第11週】8月13日~8月17日 夏季休暇。

【第12週】8月20日~8月24日 A・B区では遺構精査、掘り下げを継続した。20日、弘前大学関根教授一行が来跡した。21日、榎本氏が来跡した。22日、米塚・石田両監督官、高橋主任学芸主事が来跡し、B区沢部の排水対策に関して現地協議を行った。山梨文化財研究所櫛原氏、國學院大学大工原氏、中村氏、他2名が来跡した。23日、國學院大学学生40名が来跡した。

【第13週】8月27日~8月31日 A区北端部の精査を終了した。B区は南側台地の調査がほぼ終了したことに伴い、ベルトコンベアーを北側台地に移動し排土置き場も変更した。

【第14週】9月3日~9月7日 A区では南側段丘縁辺部においてSIX64、SI71などを検出した。 B区では南側台地東部においてSI1059の土器埋設石囲炉を検出した。

【第15週】9月10日~9月14日 A区では遺構精査、掘り下げを継続した。B区では南側台地東端部、 沢部、北側台地の掘り下げを継続した。12日、鷹巣南中学校の生徒9名、教員3名が発掘体験を行っ た。13日、榮班長、村上文化財主査が来跡し、A区で出土した遺物の一部を搬送した。

【第16週】9月18日~9月21日 A区では遺構精査、掘り下げを継続した。B区では沢部の調査を終了した。19日、秋田県立秋田北鷹高校の2年生12名、教員1名が来跡した。

【第17週】9月24日~9月29日 A区では遺構精査、掘り下げを継続した。B区では北側台地で

S I 1063を検出した。26日、伊勢堂岱遺跡指導委員一行約10名が来跡した。28日、横手市教育委員会 島田氏他2名が来跡した。29日、現地見学会を行い、約200名の見学者が来跡した。

【第18週】10月1日~10月5日 両区ともに遺構精査、掘り下げを継続し、空中写真撮影のための調査区内全域の清掃作業を行った。3日、(株)シン技術コンサルによる遺跡空中写真撮影を実施した。2日・4日、古代発見バスツアーの一行(2日30名、4日31名)が来跡した。

【第19週】10月9日~10月12日 A区ではSIX91・93などを検出した。B区では遺構精査を継続した。9日、米塚監督官、他2名、高橋主任学芸主事、榮班長が来跡し、A区引き渡しに関する現地協議を行った。11日、古代発見バスツアーの一行27名が来跡した。

【第20週】10月15日~10月19日 A区では15日をもって現場作業を終了し、調査員は17日まで調査に関する整理を行った。B区では北側台地西端部からSKF1068~1070を検出した。15日、高橋副所長、榮班長が来跡し、A区の発掘調査終了に当たっての挨拶を行った。

【第21週】10月22日~10月26日 B区では北側台地の遺構精査、SD1074の掘り下げを継続し、26日、現場作業を完了した。25日、米塚監督官、他2名、榮班長が来跡し、現地引き渡しを行った。 【第22週】10月29日~10月30日 機材整理、撤収準備を進め、30日、機材を搬出し調査を終了した。

第3節 整理作業の経過

整理作業は平成24年10月1日~平成26年9月30日まで実施した。遺構の整理は、平成24年度に原稿 執筆及び第2原図の作成を行い、平成25年度に遺構図のトレース作業を行った。遺物整理は、平成24 年度に遺構内出土遺物及び遺構外出土遺物を洗浄し、終了後に注記、計数・計量、土器接合・復元を 行った。平成25年度には注記、計数・計量、土器接合・復元、分類、実測、トレースを進めた。平成 26年度にはトレース、収蔵のためのデータ作成、収納作業を行った。遺構・遺物の原稿作成及び編集 作業は、平成25年度から継続的に行った。各年度の担当者(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班所 属)は以下の通りである。

整理担当者

[24 年 度] 山田徳道・水品仁志・簗瀬圭二・袴田道郎・山村剛(以上、学芸主事) 菅野美香子(同文化財主任)

[25年度] 簗瀬圭二・山田徳道(以上、学芸主事) [26年度] 簗瀬圭二(学芸主事)

総務担当者

[24·25年度] 菊地尚久(主査) [26 年 度] 鈴木菜穂子(主査)

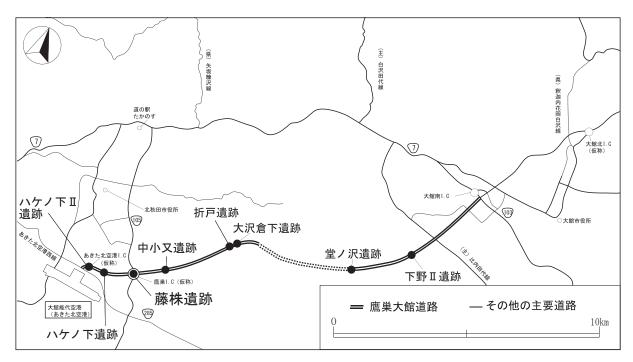
註 1 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第456集 2010(平成22)年

註2 註1に同じ

註3 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第465集 2011(平成23)年

註4 註3に同じ

第1章 調査の経過



第1図 鷹巣大館道路と関連遺跡



第2図 工事計画と調査範囲

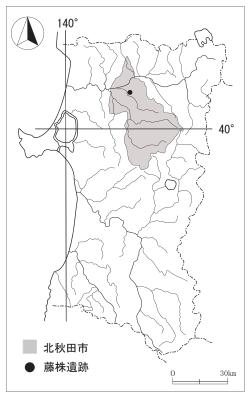
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

藤株遺跡が所在する秋田県北秋田市は県北部のほぼ中央、北緯40度12分8秒、東経140度23分47秒に位置する(第3図)。西側で藤里町・能代市・上小阿仁村、南側で秋田市・仙北市、北東から東側で大館市・鹿角市と接している。北秋田市は米代川の中流部に位置し、その市域は米代川流域のほか、支流の小猿部川、阿仁川などの流域を中心に広がっている。北秋田市の中心市街地は米代川と小猿部川が合流する鷹巣地区で、鷹巣盆地の北部に位置する。

本遺跡はJR奥羽本線鷹ノ巣駅から約3km南東の段丘上に位置する。本遺跡から北に続く段丘上には小さな湖沼群が見られる鷹巣中央公園があり、その周辺には縄文時代前期から晩期に至る遺跡が点在する。また段丘の南側は小猿部川の支流、小森川が北西に向かって流れる。段丘東側には摩当山とそれに連なる山地が続き、段丘が途切れる西側は、秋田県中央部に聳える森吉山に近い竜ヶ森を源流とする小猿部川によって形成された低地となっている。対岸の大野台台地上には大館能代空港が開設されており、同じ台地上先端には縄文時代後期の伊勢堂岱遺跡がある。

遺跡周辺の地形は、山地、丘陵地、台地、低地の4つに区分される(第4図)。北を十ノ瀬山山地(Id)、東を摩当山山地(Ig)、南を大野台台地(\mathbb{I} b)、西を荻ノ方山山地(Ic)・七座山山地(If)によって画され、山地南麓に綴子丘陵地(\mathbb{I} b)、西麓に栄丘陵地(\mathbb{I} g)・妹尾館丘陵地(\mathbb{I} h)があり、大野台台地

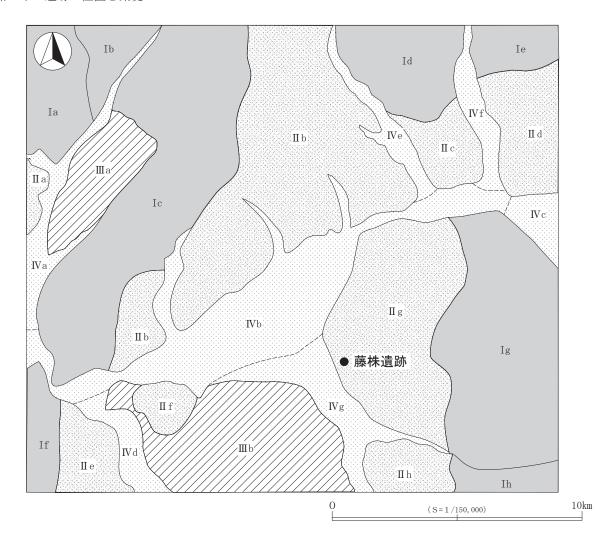


第3図 藤株遺跡位置図

の北西部に蟹沢山丘陵地(IIf)が形成されている。これらは全体的に平坦面が少なく、標高100~200mの起伏に富んだ地形をしている。地質は、綴子丘陵地(IIb)が新第三紀岩谷層、前山川層及び第四紀湯車層、蟹沢山丘陵地(IIf)が新第三紀小比内沢層、前山川層シルト岩及び礫岩、栄丘陵地(IIg)・妹尾館丘陵地(IIh)が新第三紀上部早口川層の玄武岩・凝灰岩などから構成されている。また丘陵地間には、米代川とその支流の小猿部川などによって造られた鷹巣低地(IVb)・小猿部低地(IVg)があり、低地周辺の丘陵地には数段の段丘が形成されている。

本遺跡は、鷹巣盆地南東部に隣接する摩当山山地(Ig)から西へ続く栄丘陵地(IIg)上の西端部に所在する。栄丘陵地は100~200mの尾根が南東から北西に向かって連なる。本遺跡は栄丘陵地から続く段丘縁辺部にあり、標高は29~43m前後である。その西側は小猿部川低地(IVg)に接する。低地面との比高は3~12mある。

第2章 遺跡の位置と環境



山 地

茂谷山山地 (Ia)・奥小比内山地 (Ib)・荻ノ方山山地 (Ic)・十ノ瀬山山地 (Id) 萱刈山山地 (Ie)・七座山山地 (If)・摩当山山地 (Ig)・坊山山地 (Ih)

丘陵地

11. 废地

粕毛丘陵地 (Π a)・綴子丘陵地 (Π b)・田代丘陵地 (Π c)・山田丘陵地 (Π d) 羽根山丘陵地 (Π e)・蟹沢山丘陵地 (Π f)・栄丘陵地 (Π g)・妹尾館丘陵地 (Π h)



藤琴台地 (Ⅲa)·大野台台地 (Ⅲb)

低 地

藤琴川低地 (IVa)・鷹巣低地 (IVb)・大館低地 (IVc)・阿仁川低地 (IVd) 早口川低地 (IVe)・岩瀬川低地 (IVf)・小猿部川低地 (IVg)

第4図 地形区分図

第2節 歷史的環境

1 藤株遺跡と周辺遺跡

北秋田市脇神を中心とする遺跡群の位置を『秋田県遺跡地図(北秋田地区版)』(2006年発行)に基づいて作成したのが第5図及び第1表である。掲載した55の遺跡は、主に米代川とその支流などによって形成された河岸段丘と、丘陵地や台地上に多く分布している。ここでは、発掘調査が行われた北秋田市鷹巣地区の遺跡を中心に、藤株遺跡(1)を取り巻く歴史的環境を概観する。

旧石器時代では、脇神館跡(35)から石刃を素材とするナイフ形石器が1点出土している。

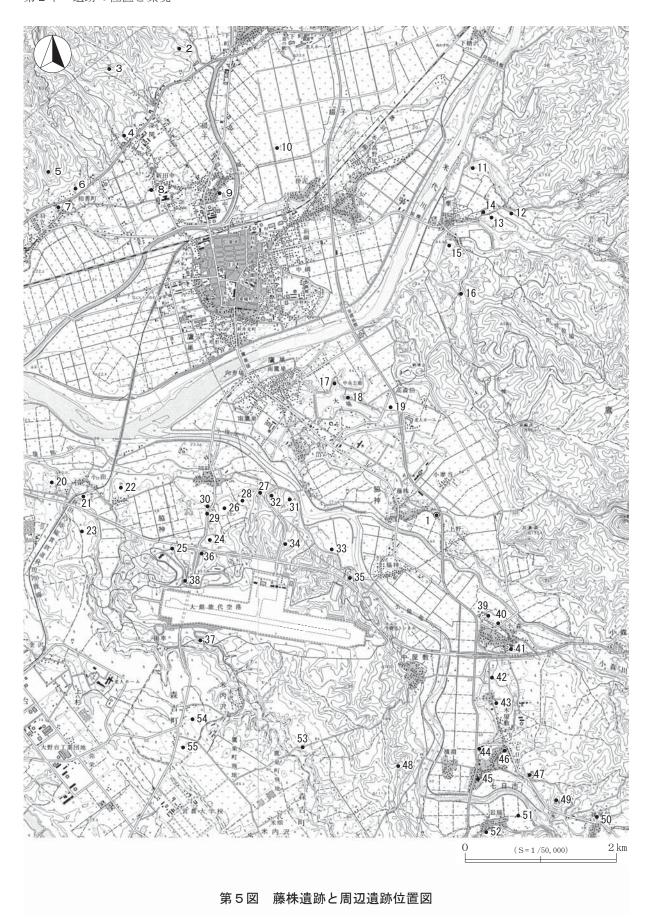
縄文時代に人々の活動の痕跡が確認できるのは早期以降である。早期では、遺物が断片的に出土しているのみである。伊勢堂岱遺跡(23)では、早期中葉の鳥木沢式土器が出土している。藤株遺跡から西約3kmの台地上に立地する湯車遺跡では、爪形の文様を施した土器が発見され、早期から前期頃の遺跡と考えられている。湯車遺跡は大館能代空港造成により周辺の地形がある程度改変され、現在の遺跡台帳では湯車Ⅱ遺跡(38)付近の位置に当たる。藤株遺跡では貝殻腹縁文の土器やトランシェ様石器が出土している。

前期中葉から後葉には、円筒下層 b 式期の竪穴建物跡 7 棟、円筒下層 d 式期の竪穴建物跡 1 棟が確認された藤株遺跡がある。七日市神明社に所在する伊勢堂岱遺跡(47)では、円筒下層 a 式土器、脇神館跡では円筒下層 b 式土器が出土している。本遺跡と同じ段丘上に隣接する高森岱遺跡(19)では、円筒下層 c・d 式土器が出土している。

中期では、藤株遺跡から円筒上層 $a \sim b$ 式期のフラスコ状土坑を検出している。摩当地区北端の米代川左岸に立地する碇岱(別称イカリ I) 遺跡 (11) では当該期の北陸系土器が出土し、当時から北陸地方と交流があったことが想定されている。相善遺跡 (7) では円筒上層 a 式土器、高森岱遺跡と七日市の伊勢堂岱遺跡では円筒上層 a ・b 式土器、石倉岱遺跡 (46) では円筒上層 b 式土器が出土している。タモノ木遺跡 (39)、山の上遺跡 (44) では大木 9 ・10式土器が出土している。

後期の遺跡には国指定史跡伊勢堂岱遺跡、石倉岱遺跡、藤株遺跡がある。伊勢堂岱遺跡は、藤株遺跡から西約4km、小猿部川と阿仁川の浸食により形成された舌状台地上に立地し、大館能代空港アクセス道路建設のため1995・1996(平成7・8)年度に調査を実施した。遺跡では後期前葉の4基の環状列石とそれを取りまく掘立柱建物跡などを検出し、遺跡は道路建設計画を変更して現地保存された。環状列石の下部には死者を埋葬した土坑墓が確認され、板状土偶など祭祀儀礼の道具も多く出土している。藤株遺跡から南約4.5kmの小猿部川右岸の河岸段丘上に立地する石倉岱遺跡では、環状配石遺構や立石遺構を検出し、十腰内I式を中心とする土器や土偶が出土している。藤株遺跡では後期前半10棟、後期後半8棟の竪穴建物跡を検出している。藤株遺跡北西約1.5kmの鷹巣中央公園内大堤に隣接する石の巻岱II(旧称陣場岱II)遺跡(18)からは香炉形土器が出土している。

晩期前葉になると藤株遺跡に多くの土坑墓が集中する大規模な墓域が出現し、大洞B式・BC式土器を中心に祭祀関連と考えられる遺物が数多く出土している。その一方で、藤株遺跡で検出した当該期の竪穴建物跡は6棟と少ない。藤株遺跡から北約1kmの同じ段丘上に隣接する高森岱遺跡では大型遮光器土偶が出土し、近接する石の巻岱 I (旧称陣場岱 I)遺跡(17)では大洞B式・BC式土器が出土しており、地理的・時期的にも藤株遺跡との関連が示唆される。



<u>8 —</u>

第1表 藤株遺跡周辺の遺跡一覧

					
番号	遺跡台帳番号	遺跡名	主な時代	遺構・遺物	文献
1	213-11-20	藤株	縄文 平安・近世	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、フラスコ状土坑、配石土坑、配石遺構、土 器埋設遺構、焼土遺構、石囲炉、陥し穴、溝跡、掘立柱建物跡、柱穴列、柱穴 様ピット、縄文土器(早期〜晩期)、弥生土器、石器、土製品、石製品、木製 品、陶磁器	本書
2	213-11-50	綴子館	中世	空堀、郭	4
3	213-11-9	深関太平山	平安	須恵器、土師器	14
4	213-11-10	深関沢	平安	須恵器、土師器	14
5	213-11-51	坊沢高館	平安	空堀、郭	4
6	213-11-11	無男口	弥生	続縄文土器(天王山式)	14
7	213-11-12	相善相善	縄文	縄文土器(中期)	14
8	213-11-13	胡桃館	平安	掘立柱建物跡、柵列、柱列、須恵器、土師器、木製品、鉄製品、建築遺材	1 · 2 3 · 15
9	213-11-14	田中	平安	須恵器、土師器	14
10	213-11-77	掛泥道上	平安	土師器、木製品(部材)	13 • 14 15
11	213-11-15	碇岱	縄文	縄文土器(中期)、石器	8 • 14
12	213-11-71	竹原岱 I	縄文	縄文土器	11
13	213-11-72	竹原岱Ⅱ	縄文	縄文土器	11
14	213-11-73	竹原岱Ⅲ	縄文	縄文土器	11
15	213-11-53	館平館	中世	郭 >₩-11->₩-14-	4
16	213-11-75	与治兵工谷地	/ /	溝状遺構 (T) (-1 - 17) (-25 - 17)	11
17	213-11-17	石の巻岱I	縄文	縄文土器(晩期)	14
18	213-11-18	石の巻岱Ⅱ	縄文	縄文土器(後期)、香炉形土器	14
19	213-11-19	高森岱	縄文	縄文土器(前期~晚期)、大型遮光器土偶	14
20	213-11-55	小勝田館	平安	空堀、腰郭	4
21	213-11-32	小ヶ田	平安	土師器、埋没家屋	14 • 15
22	213-11-62	槐岱道上館	中世	空堀、郭	14
23	213-11-36	伊勢堂岱	縄文・平安	掘立柱建物跡、溝跡、焼土遺構、土坑、フラスコ状土坑、土器埋設遺構、土坑 墓、環状列石、配石遺構、陥し穴、溝状遺構、柱穴、縄文土器(早期・後期)、 石器、土製品、石製品	9 • 16
24	213-11-30	からむし岱 I	縄文・平安 中世・近世	掘立柱建物跡、焼土遺構、土坑、陥し穴、竪穴建物跡、火葬墓、縄文土器(後期・晩期)、石器、土製品、石製品、須恵器、土師器、陶磁器	10
25	213-11-31	からむし岱Ⅱ	弥生	続縄文土器、壺形土器	14
26	213-11-39	からむし岱Ⅲ	縄文	土坑、土器	14
27	213-11-40	からむし岱IV	縄文	竪穴建物跡、土坑、縄文土器	14
28	213-11-41	からむし岱V	縄文・平安	竪穴建物跡、縄文土器、土師器	14
29	213-11-37	川口	縄文	縄文土器(後期)、石皿	14
30	213-11-38	Л□Ⅱ	縄文	縄文土器、石皿	14
31	213-11-42	法泉坊沢 I	平安	竪穴状遺構	14
32	213-11-43	法泉坊沢Ⅱ	縄文・平安	竪穴建物跡、竪穴状遺構、鍛冶炉、板塀跡、土坑、柱穴、縄文土器、磨製石 斧、土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、羽口	6
33	213-11-86	ハケノ下	中世・近世	掘立柱建物跡、土坑、柱穴様ピット、水田跡、須恵器、土師器、木製品、陶磁器、銭貨、杭、石製品、金属製品	18
34	213-11-87	ハケノ下Ⅱ	縄文・平安	竪穴建物跡、溝跡、焼土遺構、畑跡、柱穴、縄文土器(中期・後期)、石器、土 師器、須恵器、鉄滓	19
35	213-11-56	脇神館	旧石器 縄文 平安・中世	竪穴建物跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、焼土遺構、炭窯跡、土塁、空堀、溝跡、土坑、集石遺構、塚、柱穴様ピット、ナイフ形石器、縄文土器(前期・後期・晩期)、石器、須恵器、土師器、陶磁器、銭貨、鉄製品、鉄滓、羽口	4 · 7
36	213-11-45	五右工門屋敷下	縄文	縄文土器(中期)	14
37	213-11-44	湯車I	縄文		14
38	213-11-47	湯車Ⅱ	縄文		5 • 14
39	213-11-21	タモノ木	縄文	縄文土器(中期)	14
40	213-11-57	小森館	中世		4
41	213-11-22	小森	縄文	縄文土器(晩期)	14
42	213-11-23	根木屋敷岱I	平安	土師器	14
43	213-11-24	根木屋敷岱Ⅱ	縄文	縄文土器(後期・晩期)	14
44	213-11-25	山の上	縄文	縄文土器(中期)	14
45	213-11-26	囲の内	縄文	縄文土器(後期)	14
46	213-11-27	石倉岱	縄文	環状配石遺構、立石遺構、土坑、溝状遺構、焼土遺構、縄文土器(中期・後期)、石器、土製品、石製品 (石製品 (石製品) (日本) (日本) (日本) (日本) (日本) (日本) (日本) (日	14 • 17
47	213-11-28	伊勢堂岱	縄文	縄文土器(前期・中期)、石棒	14
48	213-11-58	横淵館	中世	郭	4
49	213-11-60	妹尾館	中世	郭	4
50	213-11-29	野尻	縄文	縄文土器(後期)	14
51	213-11-80	水門下タ	中世	陶器	12
52	213-11-59	岩脇館	中世	郭	4
53	213-11-46	大野台下	縄文	縄文土器	14
54	213-13-1	大沢岱A	縄文	縄文土器(後期)、石器	14
55	213-13-2	大沢岱B	縄文	縄文土器(後期)、石器	14

第2章 遺跡の位置と環境

続縄文時代では、天王山式に属する土器が出土した鰐口遺跡(6)、壺形土器が出土したからむし岱 Ⅱ遺跡(25)がある。

平安時代には、915(延喜15)年の十和田火山の噴火で発生した土石流が米代川を下り、当該地域に壊滅的な被害があった。その一つに、藤株遺跡から北西約4.5kmの米代川右岸の沖積低地に立地する胡桃館遺跡(8)がある。胡桃館遺跡は1967(昭和42)年から3か年にわたって秋田県教育委員会が発掘調査を実施した。胡桃館遺跡では平安時代の板校倉造建物跡など4棟の建物と、それらを囲むように弧状をなす柵列の一部が建ったままの状態で検出した。このことから、考古学や建築学的にも極めて重要な遺跡であるとして、2009年には出土品が国の重要文化財に指定されている。建物の他に「守」と解読できる墨書土器や「玉作」などを記した木簡、経典を読んだ墨書文字を記した扉板が出土していることから、「官衙」の可能性が指摘されている。小ヶ田遺跡(21)は、江戸時代の1817(文化14)年に脇神地区の小ヶ田付近で大雨と米代川の洪水による崖崩れがあり、平安時代の埋没家屋が2棟発見された遺跡である。この埋没家屋から梯子、曲物、机、干支の文字が刻まれた六方柱が出土した状況は菅江真澄、黒沢道形、平田篤胤などによって詳細に記録されている。また、胡桃館遺跡から東に1km離れた掛泥道上遺跡(10)でも、シラス土層中から人工的な加工を施した木材が出土している。

一方、米代川左岸にある大野台台地の縁辺では平安時代の集落が営まれる。脇神館跡では竪穴建物跡33棟、空堀、溝跡などを検出し、高台に営まれた集落は溝や堀で区画されていたと考えられている。 法泉坊沢II遺跡(32)では19棟、からむし岱I遺跡(24)で6棟、ハケノ下II遺跡(34)で1棟の竪穴建物跡を検出している。

中世以降の遺跡ではハケノ下遺跡(33)がある。ハケノ下遺跡は、鎌倉時代の掘立柱建物跡や近世の水田跡などが検出された集落跡である。中世城館では、米代川右岸に綴子館跡(2)、坊沢高館跡(5)、左岸に館平館跡(15)、小勝田館跡(20)、槐岱道上館跡(22)、脇神館跡、小森館跡(40)、横淵館跡(48)、妹尾館跡(49)、岩脇館跡(52)などの館跡が確認されている。脇神館跡は空堀で区切られた館が築かれ、さらに守りを固めるための土塁も造られていた。館平館跡、小森館跡、横淵館跡は当時比内地方を支配していた浅利氏の家臣が居城し、小森館跡は浅利氏支配から後に秋田実季の蔵入地となっている。

2 学史上の藤株遺跡

藤株遺跡は明治時代から亀ヶ岡式土器が出土する遺跡として注目され、これまで多くの研究者によって発掘調査が行われてきた。藤株遺跡が学術上の文献に初めて現れるのは、1886(明治19)年内田清太郎の『東京人類學會報告』によるもので、「藤蕪村上畑」から土器や石鏃が発見されたことを報告している。また、1887(明治20)年には、真崎勇助が『東京人類學會報告』で「藤蕪ハリツケ岱」から石鏃が発見されたことを報告している。

大正末期から昭和初期にかけて、藤株遺跡は多くの研究者の注目するところとなる。喜田貞吉は1925 (大正14)年に藤株遺跡を訪れ、同年に助手を伴って再訪している。1927 (昭和2)年には遺跡の一部を発掘調査し、その際の遺物は当時東北帝国大学に新設の奥羽史料調査部に所蔵された。1928 (昭和3)年には『日本石器時代遺物発見地名表』において、藤株遺跡から竪穴建物跡、環状列石、土偶、土版、岩版などの遺物が発見されたことが記載されている。また、喜田は1933 (昭和8)年の『我が國發見石鏃の脚に就いて』において、藤株遺跡の発掘で得られた石鏃138点のほとんどが逆V字形の有脚であ

り、逆V字形にならない無脚のものが15点に過ぎないことを述べている。喜田の調査と前後して、 1927・1928(昭和2・3)年には京都帝国大学の清野謙次が藤株遺跡を調査している。この調査の結果 は1969(昭和44)年の『日本貝塚の研究』の中に「羽後國北秋田郡澤口村藤株遺跡」として詳しく紹介 されている。清野は特に数多く出土した注口土器について、注口部分に装飾が集中することから土器 の正面性の問題を論じている。1929(昭和4)年には、当時喜田と親交があり一時奥羽史料調査部に嘱 託として籍を置いた武藤鉄城が『東京人類学会雑誌』に「藤株の住宅跡」と題する論文を発表している。 1930(昭和5)年、山内清男は東北地方の縄文時代晩期の土器編年について、岩手県大船渡市大洞貝塚 の発掘地点A・A'・B・C出土土器群から、大洞B式・BC式・C,式・C。式・A式・A'式の6型 式に区分した。型式設定の経過をみると、山内は「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」の 中で、東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部に所蔵されていた藤株遺跡出土資料を基に、B式とC式 の中間型式(BC式)を設けている。木村善吉は昭和初期に発掘調査を行っているが、それに関しての 文献は刊行されておらず、詳細は不明である。また、昭和1937(昭和12)年には江坂輝彌が発掘を行っ ているが、これについても詳細は明らかでない。1969(昭和44)年冨樫泰時は、『出羽路』の中で「藤 株遺跡とその周辺」と題して藤株遺跡とその周辺遺跡の出土品を紹介し、遺跡消滅の恐れと遺物の散 逸に関して警鐘を発している。

1980(昭和55)年、国道105号線のバイパス建設工事に先立って秋田県教育委員会による本格的な調 査が行われた。縄文時代前期・後期・晩期などの竪穴建物跡24棟の他、晩期の土坑墓が数多く検出さ れ、出土遺物は後期から晩期の復元できた土器が200個体余り、石器は2,000点以上に及んだ。特に土 坑墓の1基からは、火葬された状態のまま埋葬された、頭部のない遺体が発見され注目を集めた。こ の調査によって、前期から晩期まで小集落が断続的に営まれ、晩期には墓域が形成されたことが明ら かとなった。1989~1991(平成元~3)年には鷹巣町教育委員会(現北秋田市教育委員会)によって藤株 遺跡の範囲確認調査が実施され、遺跡の範囲が台地下の沖積地まで及んでいることが確認されて いる。藤株遺跡の総面積は100,000㎡以上と広大であり、発掘調査が行われたのは一部にすぎない(第 6図)。なお、これまで行われた発掘調査によって出土した遺物や表採遺物は北秋田市教育委員会の 他、諸機関に所蔵されている。

註1 本節は次の文献を参照した。

秋田県農政部農地整備課 『土地分類基本調査 鷹巣』 1985(昭和60)年 鷹巣町史編さん委員会 『鷹巣町史 第一巻・第二巻』 1988 (昭和63)年

註2 本節は次の文献を参照した。

鷹巣町史編さん委員会 『鷹巣町史 第一巻・第二巻』 1988 (昭和63) 年 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(北秋田地区版)』 2006(平成18)年

- 註3 第1表は秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(北秋田地区版)』2006(平成18)年から引用した。なお、『秋田県遺跡地図』 は現在インターネット上で『秋田県遺跡地図情報』として公開している。このホームページは秋田県教育庁生涯学習課文 化財保護室が運営しており、情報が随時更新されていることから、『秋田県遺跡地図』と『秋田県遺跡地図情報』の内容 が異なる場合は、『秋田県遺跡地図情報』の内容を優先した。また石倉岱遺跡は文献17により内容を変更している。
- 註4 冨樫泰時 「秋田県における北陸系の土器について」『物質文化』 1969(昭和44)年
- 註5 黒沢道形 「秋田千年瓦」『秋田叢書』第9巻 1931(昭和6)年

菅江真澄 「埋没家屋」『菅江真澄全集』第9巻 1973(昭和48)年

平田篤胤 「皇国度制考」『新修平田篤胤全集』補遺三 1978(昭和53)年

第2章 遺跡の位置と環境

- 註6 内田清太郎 「羽後国の古代の遺跡」『東京人類學會報告』第2巻第10号 1886(明治19)年
- 註7 真崎勇助 「秋田懸鏃石産地一覧表」『東京人類學會報告』第2巻第11号 1887(明治20)年
- 註8 喜田貞吉 「六十年の回顧」『喜田貞吉著作集14 六十年の回顧・日誌』 1982(昭和57)年
- 註9 東京帝国大学 『日本石器時代遺物発見地名表』第5版 1928(昭和3)年
- 註10 喜田貞吉 「我が國發見石鏃の脚に就いて (一)」『考古学雑誌』第23巻1号 1933(昭和8)年 喜田貞吉 「我が國發見石鏃の脚に就いて (二完結)」『考古学雑誌』第23巻2号 1933(昭和8)年
- 註11 清野謙次 「羽後國北秋田郡澤口村藤株遺跡」『日本貝塚の研究』 1969(昭和44)年
- 註12 武藤鉄城 「藤株の住宅跡」『東京人類学会雑誌』第42巻第6号 1929(昭和4)年
- 註13 山内清男 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻3号 1930(昭和5)年
- 註14 江坂輝彌 「藤株遺跡と木村善吉氏」『秋田考古学』18号 1961(昭和36)年
- 註15 註14と同じ
- 註16 冨樫泰時 「藤株遺跡とその周辺」『出羽路』第36号 1967(昭和42)年
- 註17 秋田県教育委員会 『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第85集 1981(昭和56)年
- 註18 秋田県鷹巣町教育委員会 『藤株遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 1990(平成2)年 秋田県鷹巣町教育委員会 『藤株遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 1991(平成3)年
 - 秋田県鷹巣町教育委員会 『藤株遺跡範囲確認調査報告書』 1992(平成4)年
- 註19 現状で確認できる所蔵機関や内容は以下の通りである。内容は各機関に照会し、ご教示いただいた内容をそのまま記載した。木村善吉による発掘調査出土遺物は昭和初期に売却され、多くが売却先で戦禍にあった可能性が指摘されている(註 14参照)。江坂輝彌による発掘調査出土遺物は、多くが調査後早い段階で散逸し、一部は慶應義塾大学に保管されていたようだが(註14参照)、現在は所在不明である。また、旧鷹巣町沢口小学校にも所蔵されていた記録があるが(註16)、これらも現在は所在不明である。さらに、複数の地元住民が表採遺物を所蔵している(註14・16参照)が、実態は把握できない。

=所蔵機関・内容=

北秋田市教育委員会

- ・昭和55年秋田県教委発掘調査出土遺物一式(SK05出土焼骨除く)
- ・平成元~3年鷹巣町教委発掘調査出土遺物一式
- ·鷹巣農林高校附属農林博物館寄贈品 縄文土器8個体、三脚石器1点 秋田県立博物館

秋田県立博物館

・鑓野目久米蔵コレクション(深鉢形土器 3 点、鉢形土器 1 点、浅鉢形土器 1 点、台付鉢形土器 5 点、壺形土器10点、注口土器 7 点、甕形土器 2 点、土偶頭部 1 点、岩版 1 点、石棒 2 点、磨製石斧 3 点、石鏃 6 点)

東北大学総合学術博物館

・昭和2年発掘調査出土遺物一式他(完形縄文土器100点以上、土器片・石器・土製品・石製品多数) ※工藤麻衣・川口亮「東北大学所蔵の麻生遺跡コレクション(2)」『秋田考古学』第56号(平成24年に内容の詳細あり。)

東京国立博物館

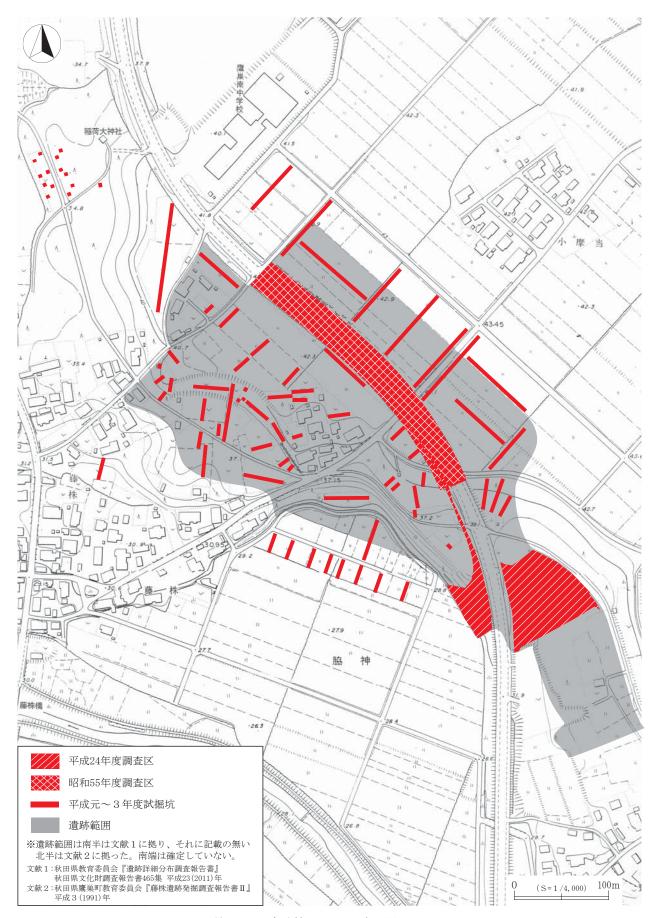
・収集品(鉢1点、浅鉢1点、台付浅鉢1点、壺3点、注口3点)

国立科学博物館

- ・昭和55年秋田県教委発掘調査SK05出土焼骨 ※分析を委託し、遺存状態が悪かったため、そのまま譲渡した。 南山大学人類学博物館 ※『南山大学人類学博物館紀要』第19号(平成12年に掲載)
 - ・清野謙治コレクションの一部を含む(注口土器2点、壺2点、香炉1点、小型土器1点)

天理大学附属天理参考館

・清野謙治コレクション



第6図 遺跡範囲図・調査区位置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1表の文献

- 1 秋田県教育委員会 『胡桃館埋没建物発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第14集 1968(昭和43)年
- 2 秋田県教育委員会 『胡桃館埋没建物遺跡第2次発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第19集 1969(昭和44)年
- 3 秋田県教育委員会 『胡桃館埋没建物遺跡第3次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第22集 1970(昭和45)年
- 4 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 5 鷹巣町教育委員会 『藤株遺跡発掘調査報告書 I 』 1990(平成2)年
- 6 秋田県教育委員会 『法泉坊沢Ⅱ遺跡-地方特定道路整備工事鷹巣町湯車工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー』秋田 県文化財調査報告書第278集 1998(平成10)年
- 7 秋田県教育委員会 『脇神館跡-県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I 』秋田県文化財調査報告書第284集 1999(平成11)年
- 8 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分調査報告書』秋田県文化財調査報告書第291集 1999(平成11)年
- 9 秋田県教育委員会 『伊勢堂岱遺跡-県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-』秋田県文化財調 査報告書第293集 1999(平成11)年
- 10 秋田県教育委員会 『からむし岱 I 遺跡-大館能代空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』秋田県文化財調査報告書第339集 2002(平成14)年
- 11 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分調査報告書』秋田県文化財調査報告書第365集 2003(平成15)年
- 12 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分調査報告書』秋田県文化財調査報告書第380集 2004(平成16)年
- 13 鷹巢町教育委員会 『町内遺跡詳細分布調査報告書』鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第11集 2004(平成16)年
- 14 北秋田市教育委員会 『市内遺跡詳細分布調査報告書』北秋田市埋蔵文化財調査報告書第4集 2006(平成18)年
- 15 北秋田市教育委員会 『胡桃館遺跡埋没建物部材調査報告書』 2008(平成20)年
- 16 北秋田市教育委員会 『史跡伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書』北秋田市埋蔵文化財調査報告書第13集 2011(平成23)年
- 17 國學院大学伝統文化リサーチセンター 「石倉岱遺跡発掘調査報告」『研究紀要』第4号 2012(平成24)年
- 18 秋田県教育委員会 『ハケノ下遺跡――般国道 7 号鷹巣大館道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV―』秋田県 文化財調査報告書第483集 2012(平成24)年
- 19 秋田県埋蔵文化財センター 『秋田県埋蔵文化財センター年報』31 2013(平成25)年

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査

発掘調査では、仮設施設の設営や発掘作業員による掘削業務及びその管理などについては、「掘削作業管理業務」とし、一括して外部委託した。

A区では、北端部の表土層及びML・MM52~56グリッド付近の撹乱層はバックホーにより掘削し、掘削土は調査区外へ排出した。バックホーによる掘削深度は北端部の表土層が平均15cm前後、撹乱層は最も深い部分で1 m前後である。表土(A I 層)及び表土直下の無遺物層(A Π 層)は人力で掘り下げた。遺物包含層(A Π 層)は、層中で焼土遺構や土器埋設遺構などが検出されたため、スコップ・ジョレン・移植ゴテなどを用いて面的な精査を繰り返し、遺構や遺物の検出に努めながら地山まで掘り下げた。B区では、北西部の造成土はバックホーにより掘削し、掘削土は調査区外へ搬出した。掘削深度は北西縁付近で最も深く、4 m前後である。表土(B I 層)及び遺物包含層(B Π 層)は、遺構や遺物の検出に努めながら、地山まで掘り下げた。沢部の堆積土(B Π 層)や水路の堆積土(B Π 層)については、層が厚く遺物が少量であったことから、水場などの遺構に留意しながら人力で掘り下げた。

測量は、委託により遺跡全域に 4 m区画の方眼を設定し、調査区内の方眼交点に方眼 (グリッド) 杭を打設して当該作業の基準点とした。方眼原点 (MA50) は平面直角座標第 X 系の X = 22550.000 m、 Y = -37200.000 m とし、座標北方向の南北線及び東西方向の東西線により、原点を基点に 4 m区画の方眼を組んだ。南北線は東から西に向かって、MA・MB・MC・・・と昇順となるアルファベット 2 文字の組み合わせで、東西線は南から北に向かって、50・51・52・・・・と昇順となるアラビア数字でそれぞれ呼称した。なお、南北線のアルファベットは A ~ T までの 20 文字の繰り返しとした。個々の 4 m区画は南東角を画する南北線と東西線の呼称を組み合わせて「MA50」のように呼んだ。

遺構は、A区では01、B区では1001からの通し番号と、遺構種別を表すアルファベットの記号を組み合わせて、SI 01のように識別番号を付した。遺構は形態・規模に応じて、原則として 2分割もしくは 4分割して掘り下げ、埋土の堆積状況を検討した後、すべての埋土を掘り上げた。

記録は、図面と写真及び遺構の特徴を記載する調査カードを用いた。図面は原則として、埋土の堆積状況を記録する土層断面図と、完掘後の形状を記録する平面図を1/20の縮尺で作成し、必要に応じて、遺構確認時点での平面図や遺物出土状況などの微細図も作成した。また、地形図などの等高線図も作成した。図面作成はいずれも手作業で行った。写真はすべての遺構について確認状況、土層断面、完掘状況を撮影し、適宜遺物出土状況や調査状況などを撮影した。また、調査が終了した範囲は全景写真を撮影した。調査カードには、遺構の検出層位や形態、埋土の状況や特徴などの情報を記載し、他の情報は野帳に記録した。

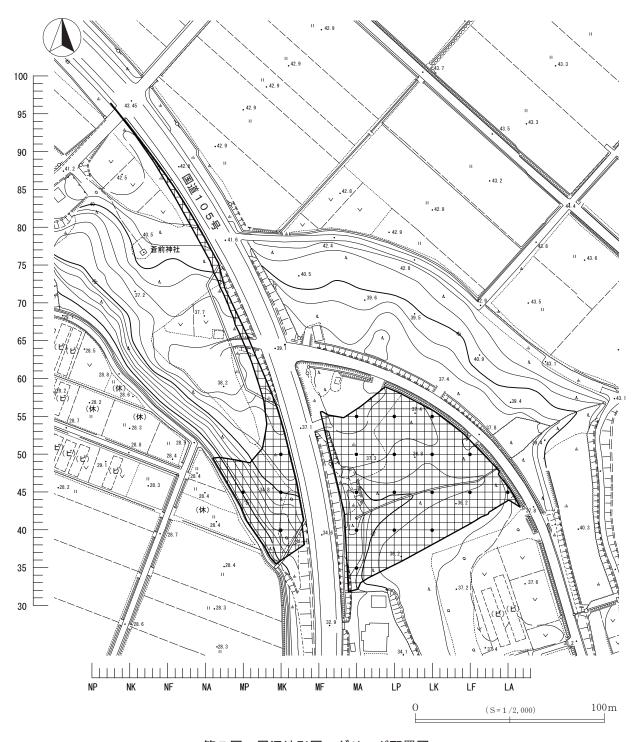
出土遺物は、遺構名や区名、グリッド名と層位及び出土年月日を記録して取り上げた。意図的な廃棄などが推定されたり、一定範囲に面的に分布するものなどは、遺物出土状況図やドットマップ図を作成した後に取り上げた。

第3章 調査の方法と成果

写真撮影は35mm版のカラーポジフィルムとモノクロネガフィルムを使用し、併せて約1,200万画素のコンパクトデジタルカメラの撮影も実施した。また、委託によるラジコンへリコプターを使用した遺跡空中写真撮影も実施した。

2 整理作業

遺構の図面は、発掘調査で作成した図を第1原図とし、これを基に平面図と断面図、遺物出土状況 図などを組み合わせて作成し、第2原図とした。



第7図 周辺地形図・グリッド配置図

遺物は、洗浄・注記を行った後、土器・石器類の接合作業を行った。その後、時期や器種ごとに分類し、重量と総点数を計量・集計した。その後に報告書掲載土器類を360点選別し、適宜エポキシ樹脂充填による復元作業を行い、実測図を作成した。また、必要に応じて拓本も作成した。石器類については器種ごとに分類し、重量と総点数を計量・集計した後に、報告書掲載石器類287点を選別し、実測図の作成を行った。

報告書に掲載した遺構図面及び遺物図は、遺構の第2原図及び遺物実測図をスキャニングして下図とし、ドローイングソフト(アドビ システムズ社製「Illustrator」)を用いてデジタルトレースした。また、拓本も同時にスキャニングしてトレース図と組み合わせた。なお、土器10点、石器266点についてはトレースも含めて委託した。これらの図は最終的にドローイングソフト(アドビシステムズ社製「Illustrator」)を用いてレイアウトを行った。

第2節 基本層序

藤株遺跡は、小猿部川と小森川により形成された河成低地に面する段丘上に位置する。A区は、北 半が段丘平坦面、南半は低地に向かう急・緩斜面で、北半の段丘平坦面では埋没沢を確認している。 B区は段丘平坦面であり、調査区中央付近には比高約4mの東から西に傾斜している沢(近代以降と 考えられる)が開析している。また、B区北端縁から西端縁にかけても沢が開析しており(SD1074)、 A区と分断される。

今回の調査では、A区とB区それぞれに基本層序を作成し、層序番号を付した。本来ならば、地点が異なっても統一の層名を用いることが望ましいが、各調査区の地形が異なること、調査区が国道に分断されており連続した観察ができないこと、古代以降は水路に分断され、土地の利用状況が異なると推定されることから、統一した層序名を付すことは困難と判断した。層序名は遺構内埋土と区別するためローマ数字を用い、必要に応じて枝番を付した。アラビア数字の前には、各調査区を示すA・Bの記号を付している。以下A区・B区の基本層序の詳細を述べる。

1 A区の基本層序

A区は沖積地と接する段丘縁辺部の斜面が多くを占める。A区の基本層序はAI~AV層に分層した。AI層は表土・耕作土、AⅡ層はわずかに火山灰を含み、遺物をほとんど含まない黒ボク土、AII層は遺物が含まれる黒ボク土、AIV層は地山漸移層、AV層は地山層である。

A I 層はA I a・A I b 層に細分した。A I a 層は現表土・耕作土である。A I b 層は国道105号線建設時の盛土で(国道の西端から約15mの範囲が国道施設時に買収済み)、南側の段丘縁辺部の傾斜地から沖積地を覆っている。そのうち下層は段丘の高位面を削って盛土したと考えられる黒ボク土(AⅢ・AⅣ層)と地山土(A V層)が斑状に混じる層である。上層は円礫が大部分を占める層で、他から搬入された造成土である。

AⅡ層は火山灰を含む堆積層で、段丘の平坦面から緩斜面に広く分布し、遺物はほとんど出土しない。北側ではA区基本層序B断面図(第9図)に記載したように、AⅡ層を切る3条の並行に延びる溝状の窪み(SX113)を検出した。溝の底には、十和田a火山灰と推定される火山灰(第4章第3節参照)

が多く見られ再堆積の形態を示している。AⅡ層は西暦915年に降下したとされる十和田 a 火山灰を 含むことから、古代以降には畑地などの耕作地として利用されていたと推測される。

AⅢ層はAⅢ a からAⅢ c 層に細分した。AⅢ層からは出土遺物の大半が出土し、縄文時代後期初頭から後期末葉までの遺構検出面になっている。AⅢ a 層はAⅢ b からA V 層土が段丘崖の斜面下に崩落してできた層である。AⅢ b 層は黒色土で最大厚34cm、AⅢ c 層は黒褐色土で最大厚46cmで、両層は土性、混入物などが類似し、漸移的に変化する。南側段丘縁辺部のAⅢ層では、早期から中期の土器片が出土し、調査区から出土する土器の大半を占める後期土器片と混在することから、後期には建物の頻繁な建て替えなどによる整地が行われ、早期から中期の遺構が破壊されたものと考えられる。MH~MS47グリッド以北ではAⅢ b 層の土色がAⅢ c 層に浸潤したためか、AⅢ b 層とAⅢ c 層を明確に分層できず、AⅢ b・c 層と表記した。なお、MR~N B75グリッド以北では道路造成による削平を受け、AⅢ層及びAIV層が存在していない。

AIV層はAⅢ層からAV層へと漸移的に変化する地山漸移層である。黒ボク土の生成開始時期は定かではないが、AⅢ c 層下位からは縄文時代早期から中期の遺物も出土することから、同時期には黒ボク土が生成する環境であった可能性が考えられる。A区では遺構がAⅢ c 層下位を掘り込みとする縄文時代後期初頭から前葉の竪穴建物跡が検出されたことから、AⅢ c 層の黒ボク土の生成作用が本格化したのは後期初頭以降であると考える。縄文時代後期末葉の遺構が検出されたAⅢ b 層の堆積までの期間は黒ボク土の生成作用が早く、土性、混入物などが類似することから、堆積環境の変化が比較的少なかったものと推測される。

2 B区の基本層序

B区の地形は平坦面と沢状地形からなる。調査区内に開析する沢状地形は2条あり、1条は調査区中央を東から西へ流れ、もう1条(SD1074)は調査区北端から西端を流れる。平坦面はこれらの沢状地形に分断され、南北2か所の舌状台地となっている。舌状台地の平坦面はどちらも標高約37mで、台地の突端部である西側は緩やかに低く傾斜する。平坦面上には、南側に3か所、北側に1か所の雨裂が形成され、中央部の沢へ流れ込む。

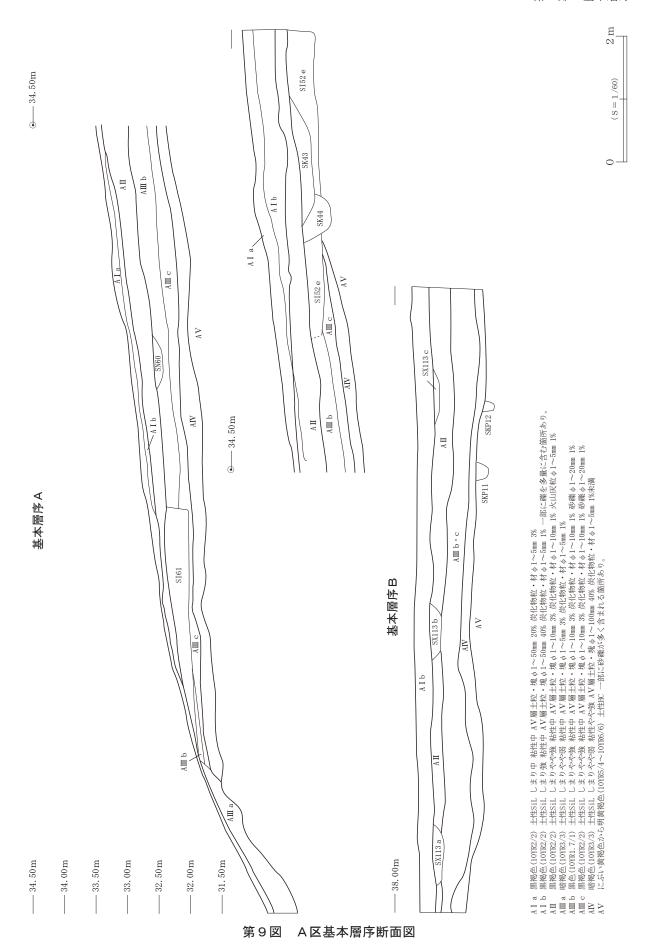
B区の基本層序はそれらの地形がすべて通る南北のラインで作成した。層序はBI~B™層に分けた。BI層は表土・水田耕作土、BII層は遺物が含まれる黒ボク土、BII層はSD1074内に堆積する地山漸移層由来土、BIV層は地山漸移層、BV層は雨裂の最深部にみられるBVI層由来堆積層、BVI~BVII層は地山である。

BI層はBI①~BI④層に細分した。BI①層は表土である。調査区全域に堆積するがSD1074付近は重機で造成土を除去したため、残存していない。BI②・BI③層はSD1074内に堆積する流入土で、BI②層は表土由来、BI③層はBI④層由来である。BI④層はSD1074南肩部の平坦面に堆積する。下位層が水平に削平されていることに加え、土質が比較的均質な粘質土であることから、水田の床土と考えられる。このことから、SD1074が一定程度埋没した段階で、SD1074南肩部の平坦面には狭小ながらも水田が営まれていたと推定される。周囲からは近代の陶磁器が出土することから、水田は近代に造営された可能性が高い。

 ${\bf B} \, {
m I\!I} \, {
m B} \, {
m I\!I} \, {
m B} \, {
m I\!I} \, {
m 3} \, {
m g}$ に細分した。その他に、沢部へ流入した ${\bf B} \, {
m I\!I}$



第8図 藤株遺跡等高線図・基本層序位置図



層由来土はB Π 沢 1 ~沢20層とした。 B Π ①層は平坦面で確認できる層で、層厚は20~30cm程度である。下位層とは不整合であり、下位層の小塊が含まれることや、縄文時代の遺物の他に、近世の陶磁器も出土することから、近世期に畑地などに利用され、撹乱された可能性が考えられる。B Π ②層は、近世期の撹乱を受けていない均質な黒色土である。平坦面に形成された雨裂内など、撹乱の影響を受けない比較的深い箇所のみに残存している。なお、B Π ①層とB Π ②層は断面では分層できたが、本来同一層であるため区別は難しく、平面的に層の範囲を捉えることはできなかった。このため、遺物はB Π 層として一括で取り上げている。B Π ③層はS D 1074南肩部に堆積したB Π 層由来の流入土である。S D 1074の時期が11世紀後半から12世紀前半である(第 3 章第 3 節参照)ことから、本層はそれ以降の堆積と考えられる。

黒ボク土の生成開始時期は定かではないが、本遺跡で検出されている最も古い時期の建物跡が縄文時代前期中葉であることから、遅くともその時期には遺跡周辺が拓かれ、黒ボク土の生成に作用した可能性が考えられる。ただし、縄文時代早期の遺物も一定数出土していることから、周辺が拓かれた時期が縄文時代早期に遡る可能性もある。BII層は、平坦面では堆積の厚さが20~30cm程度と比較的薄い。本調査区は段丘の縁辺部にあたることから、縄文時代以降現代に至るまで、生成と流出が繰り返されたものと推定される。

沢部は、基本層序を観察した地点では最大で2mの堆積を確認した。明らかに水成堆積と確認できる層がないことから、天候や季節などによる一時的な流水があった可能性はあるものの、基本的には水は流れていなかったと推定される。堆積土はB II 層由来の流入土が主体ではあるが、中位層であるB II 沢 $3 \cdot$ 沢 $5 \cdot$ 沢 $9 \cdot$ 沢11 層や下位層であるB II 沢18 層はB 11 層回来である。このことから、何らかの事情で沢の斜面にB 11 層の響が露出し、崩落することが数回あったと考えられる。また、B 11 沢 $12 \cdot$ 沢 $14 \cdot$ 沢15 層など、B 11 層由来土に礫が含まれる層があることから、大規模な崩落ではないものの、恒常的にB 11 層流入とともにB 11 層の礫が転落していたと考えられる。B 11 $12 \cdot$ ののに常的にB $13 \cdot$ の同様である。上下層と比較して黒みが強いことや均質であることから、旧表土の可能性があり、一時期沢の埋没が停滞した時期があった可能性が高い。なお沢部の開析時期は、B $13 \cdot$ の甲間の可能性が高いこと、沢部に向かって開口する雨裂の最下層 $13 \cdot$ の単積時期が黒ボク土($13 \cdot$ の用を付きます。 の単積時期が黒ボク土($13 \cdot$ の用を付きます。 の単積時期が黒ボク土($13 \cdot$ の用を付きます。 の用を付きます。 の用を付きます。 の用を付きます。 のまるに関する のまるに対する のまるに関する のまるに対する のまるに対する のまるに関する のまるに対する のまるに対する のまるに対する のまるに関する のまるに対する の

BⅢ層はSD1074の堆積層である。SD1074の構築時期が古代以降であることから、古代から中世以降の堆積と考えられる。BⅢ①~BⅢ③層に細分した。BⅢ①・BⅢ②層はBⅥ層土由来の流入土である。SD1074の南斜面に露出したBⅥ層が流出したものと考えられる。BⅢ①層はBⅢ②層に比べ青みが強く、グライ化している。どちらもBⅡ③層が斑状に混入することから、水流の影響を受けていると推定される。BⅢ③層は均質な黒色土である。BⅢ①・BⅢ②層堆積以前のSD1074の底面堆積層と考えられる。なお、SD1074の土層断面は他に2か所で作成しているが、基本層序に当たる箇所はSD1074の一部にすぎず、巨視的に層を対比することができなかったため、BⅡ③層も含めて、他の土層断面と層を対応させることは不可能であった。

BIV層はBII層からBVI層へと漸移的に変化する地山漸移層である。沢部を除いた調査区全面で確認できる。

B V層はB VI層由来の流入土である。雨裂や地割れの下位に堆積する。B V ①・B V ②層に細分した。B II 層由来土が含まれないことから、黒ボク土が発達する以前に堆積したものと考えられる。B V ①・B V ②層どちらからも 5 mm 程度の土器小破片が 1 点ずつ出土している。

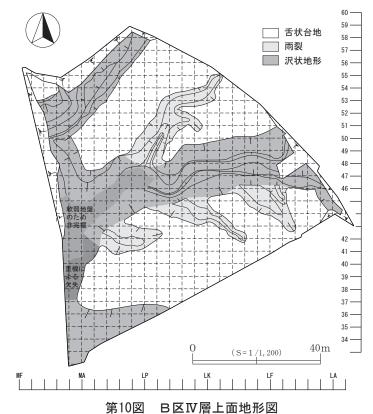
B VI 層は黄褐色土の地山である。遺構の大半は本層もしくはIV 層上面で確認した。鳥越火砕流の堆積の可能性が考えられる。

BVII層はBVI層の下に堆積する厚さ5cm程度の粘土質の地山である。基本的には地山を深く掘削した場合に確認できるが、調査区南西端に位置するSI1019の床面にも露出する。

BⅧ層は砂・礫から成る地山であり、湧水層である。BⅦ層の下に堆積する。深く掘削した場合の他、沢部やSD1074の中位から底面付

以上のことから、本遺跡が営まれた 縄文時代のB区の地形を復元すると次 のように推定できる。平坦面は上面が 近世の耕作で一定程度撹乱を受けてい るが、水田開発や宅地造成などで土が 大きく移動した痕跡は確認できないこ とから、概ね現状と同様の平坦面だっ たと考えられる。沢状地形も先述の通 り、縄文時代にはすでに開析されてい たと推定できることから、縄文時代に は南北2か所の舌状台地が形成されて いたものと考えられる。なお、平坦面 に形成された雨裂は縄文時代には中位 程度まで埋没したものと考えられるも のの、浅い溝状に痕跡が残っていたも のと推定される。

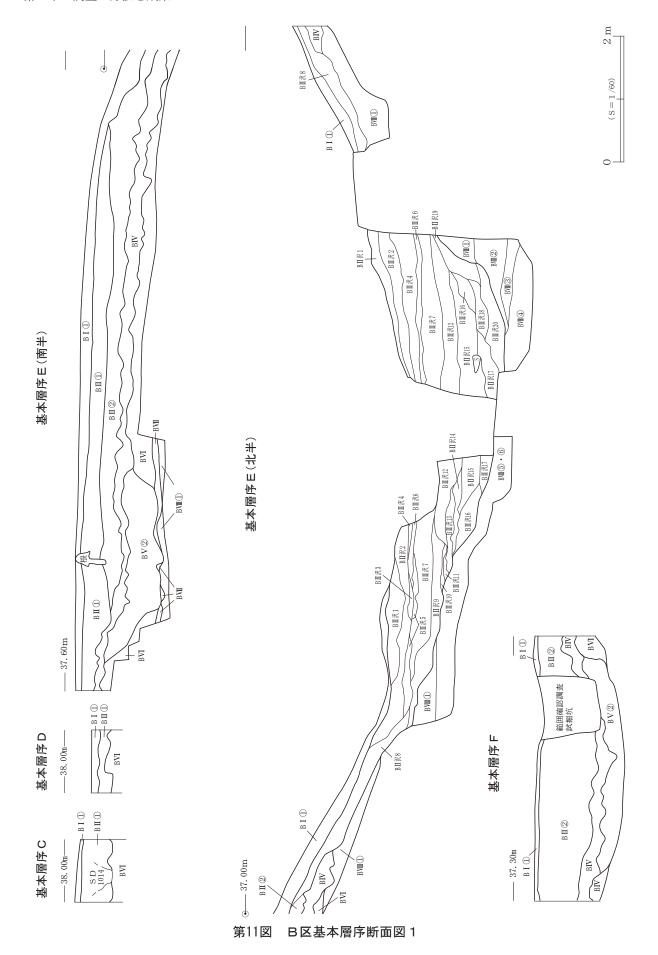
近で確認できる。

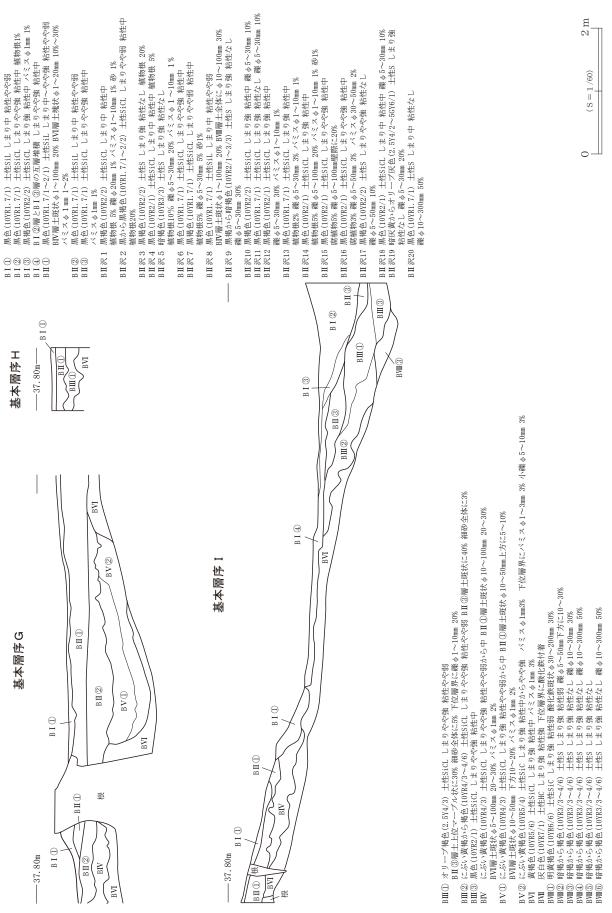


3 A・B区基本層序の対応関係について

A区の基本層序とB区の基本層序との対応関係は以下の通りである。

AI層とBI①層はともに表土であり、同一層である。BII層は、堆積時期から推定するとAII層とAIII層が含まれると推定されるものの、BII層は生成と流出が繰り返されており、また近世の撹乱を受けている部分もあることから、明確な対応関係にはない。AIV層とBIV層はともに地山漸移層であり、同一層である。AV層は基本的にはBVI層に対応する。BVII・BVII層はA区でも部分的に認められるが、地山としてAV層に含めている。





第12図 B区基本層序断面図 2

第3節 検出遺構と遺物

1 概要

(1) 遺構と出土遺物

今回の藤株遺跡(第2次調査)で検出した遺構数は、縄文時代の竪穴建物跡14棟、円形柱穴列建物跡9棟、掘立柱建物跡3棟、柱穴列1列、土坑48基、フラスコ状土坑17基、石囲炉1基、焼土遺構6基、土器埋設遺構3基、配石土坑1基、配石遺構1基、石器製作関連遺構2基、柱穴様ピット116基である。古代以降の遺構は、掘立柱建物跡6棟、柱穴列1列、焼土遺構3基、溝跡5条、畑跡1か所、柱穴様ピット10基である。その他に時期不明の柱穴様ピット25基を検出した。特にA区段丘縁辺部では、竪穴建物跡や円形柱穴列建物跡が密集して検出された。

第2次調査の遺構内遺物は縄文時代早期から晩期の縄文土器3,233点(79,473.7g)、弥生土器1点(48.4g)、石器・石製品1,604点(59,549.8g)、平安時代の草履芯材、木製椀などの木製品が出土した。このうち縄文時代後期の遺物が多くを占める。遺構外出土遺物は、第3節2(2)及び3(2)の出土遺物の項目で記述する。

なお、B区の東端 L G 53 グリッドの B II ②層中位面で検出した S K 1046 は、円礫が集中して出土し、当初は古い時代の遺構と認識していた。しかし、埋土から検出した炭化物の放射性炭素年代測定値は M odern (現代)を示すことから (第4章第2節参照)、現代に構築された土坑と判断し、詳細については本報告から省くこととした。

(2) 遺構種別・性格について

本調査区では竪穴建物跡と円形柱穴列建物跡が多く重複し、それらと関連する炉や柱穴などの帰属や認定が複雑だったので、遺構種別や性格について次のように補足する。

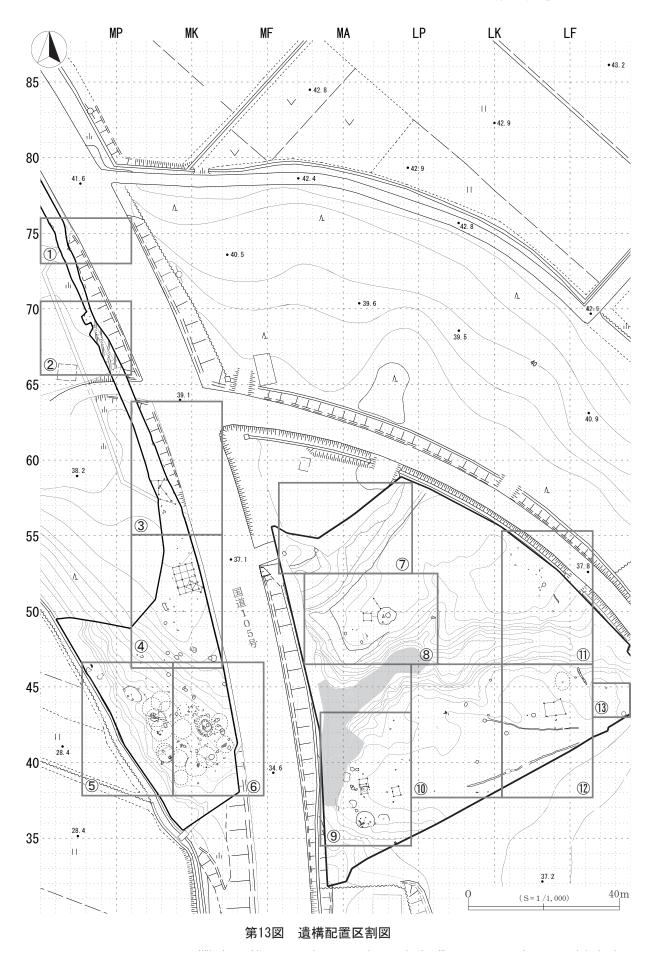
竪穴建物跡

第2次調査では、基本的に「竪穴掘り込み」及び「炉」、または「竪穴掘り込み」及び「柱穴」が検出できたものを竪穴建物跡とした。その他に、構築面が地山土面で地床炉や土器埋設炉が検出(SI1041・1059)された場合も、竪穴建物跡とした。縄文時代中期・後期については、遺構の埋土中に黒色土が含まれていることから、黒ボク土の形成が一定程度進んでいたと考えられる。つまり、当時の地表面は黒ボク土中と判断できる。このことから、当該時期の炉については一定程度黒ボク土を掘削して構築されたと判断できる。なおSN27とは、SIX102との平面位置からSIX102に帰属する可能性もあるが、類似するSN22はSN27と近接しSIX遺構を伴わないことから、ここでは単体の遺構として報告することとした(第18図)。

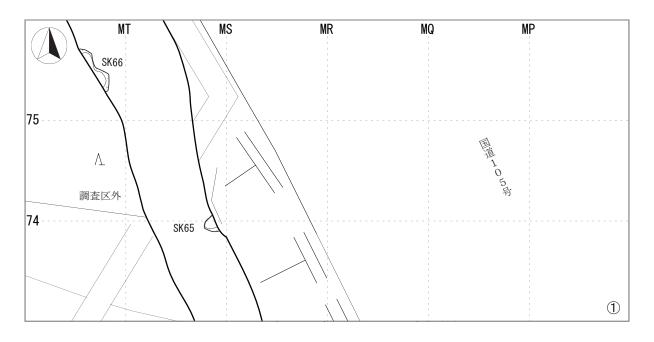
本調査では、地床炉や石囲炉、土器埋設炉の検出状況から、竪穴建物跡と判断したものが10棟、炉は伴わないが、竪穴建物跡の掘り込みと床面の一部が確認できたものが4棟見つかった。なお、調査では掘り下げを面的に水平に行い、焼土遺構を含めた炉の検出に努めたことから、炉の伴わない建物については遺構の重複や廃棄行為によって失われてしまったものと考える。

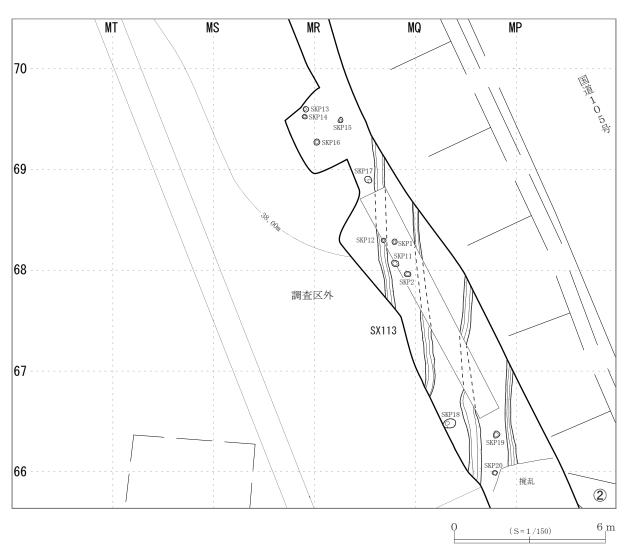
円形柱穴列建物跡

本調査では、杭状の柱穴列が円形に回るものをAV層地山斜面で9棟検出した。また14棟の竪穴建物跡のうち6棟で同様の柱穴列を検出しており、これらの中には、竪穴がAⅢ層中に構築されるため、

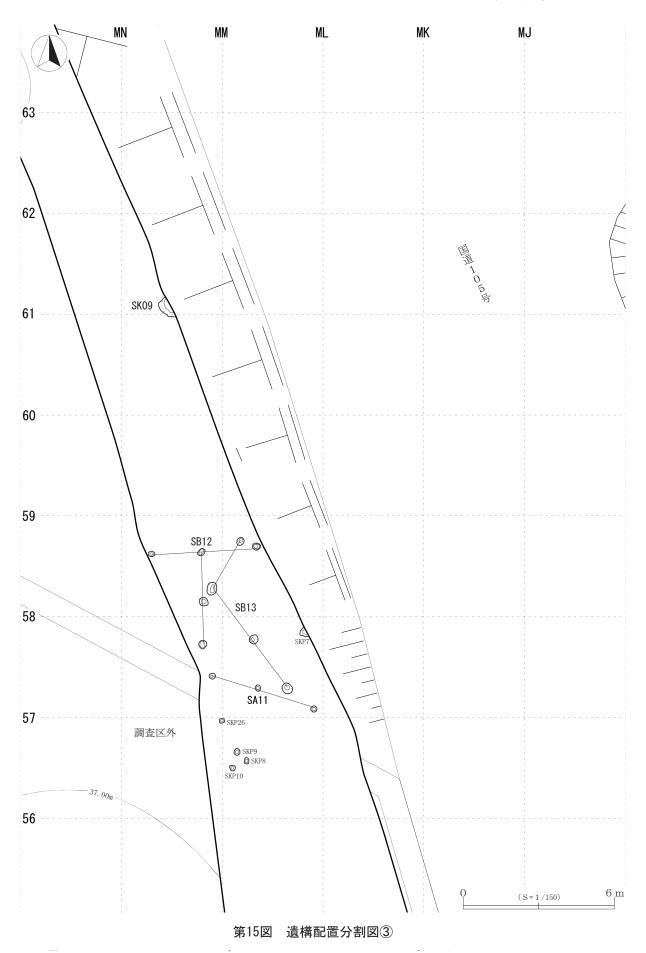


第3章 調査の方法と成果



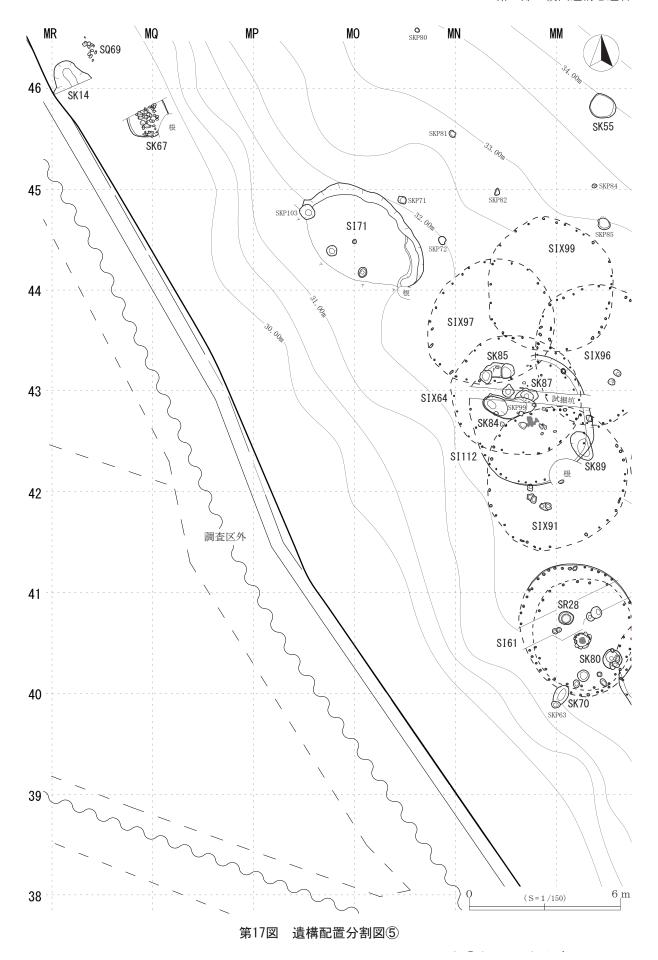


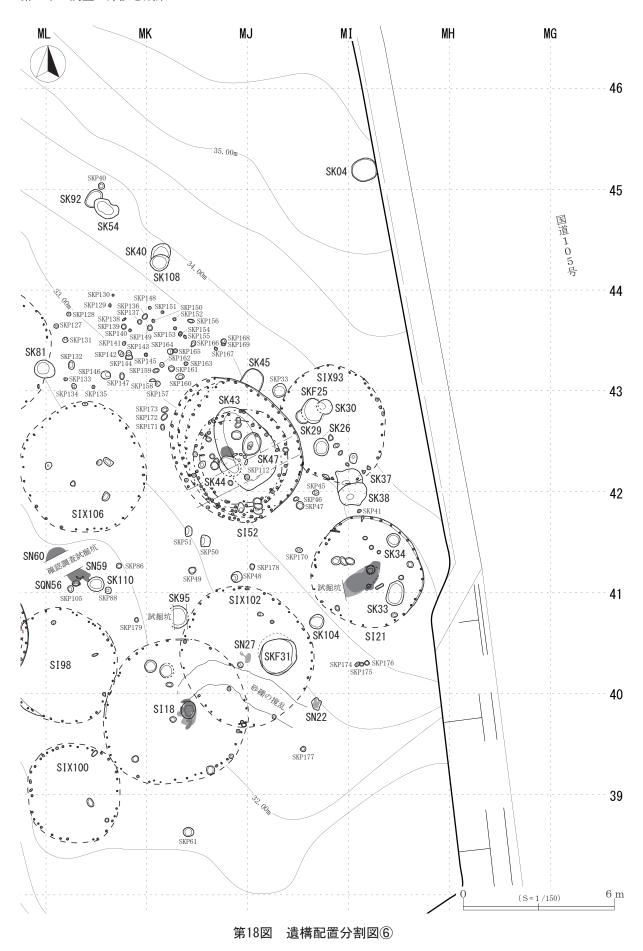
第14図 遺構配置分割図①·②



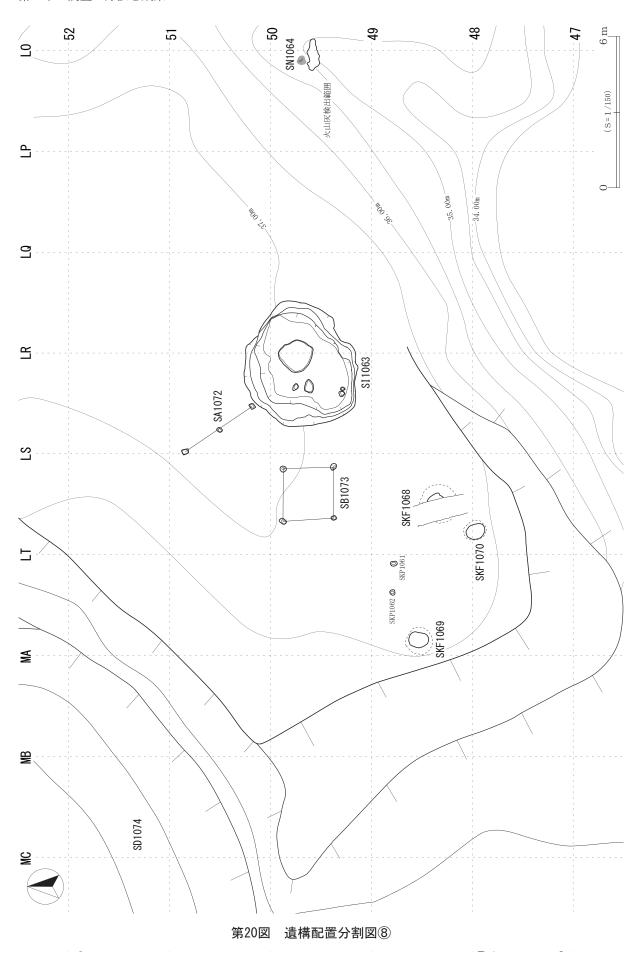


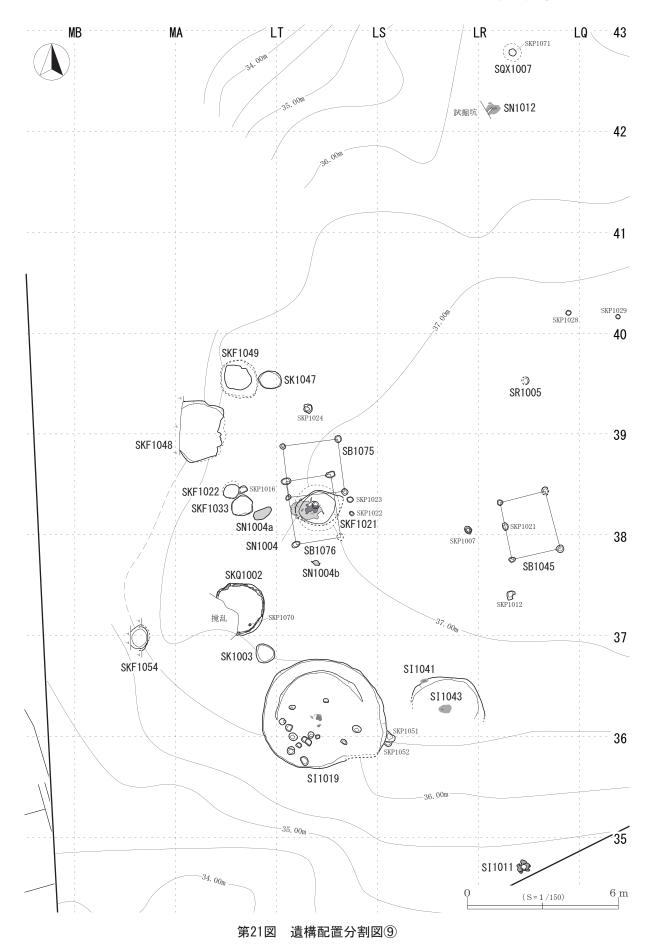
— 30 —



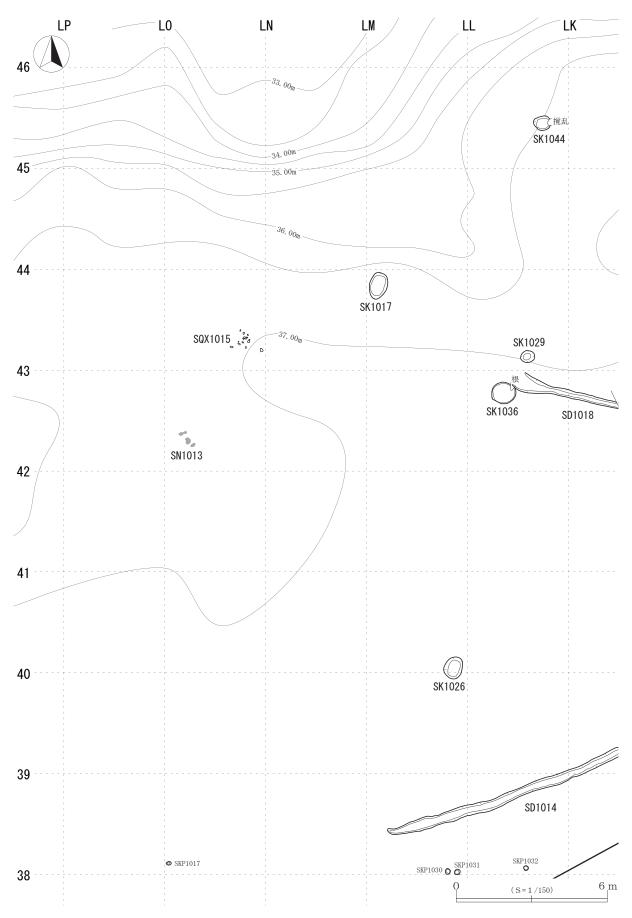




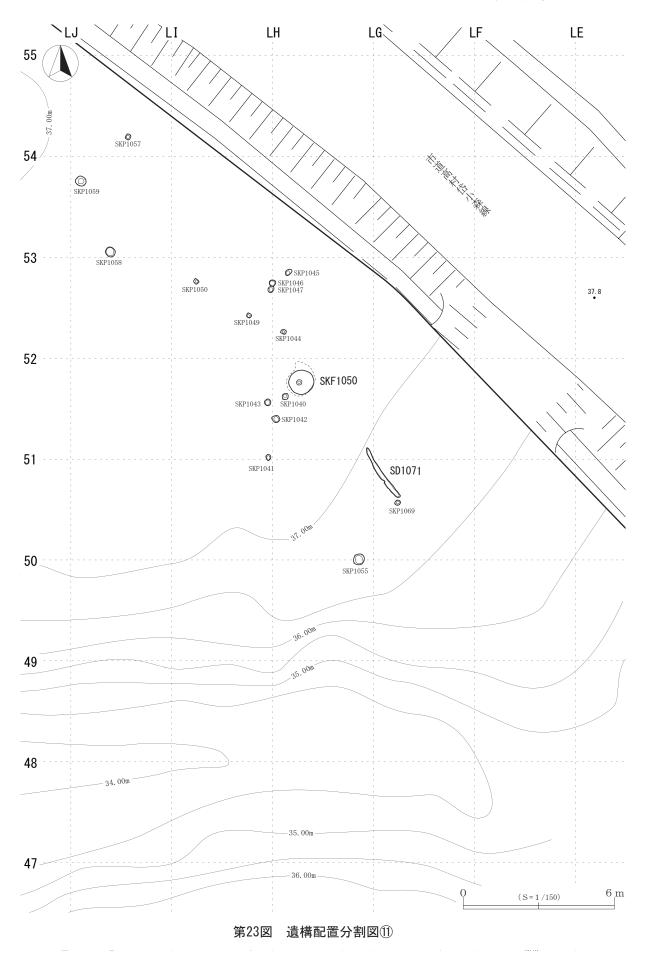


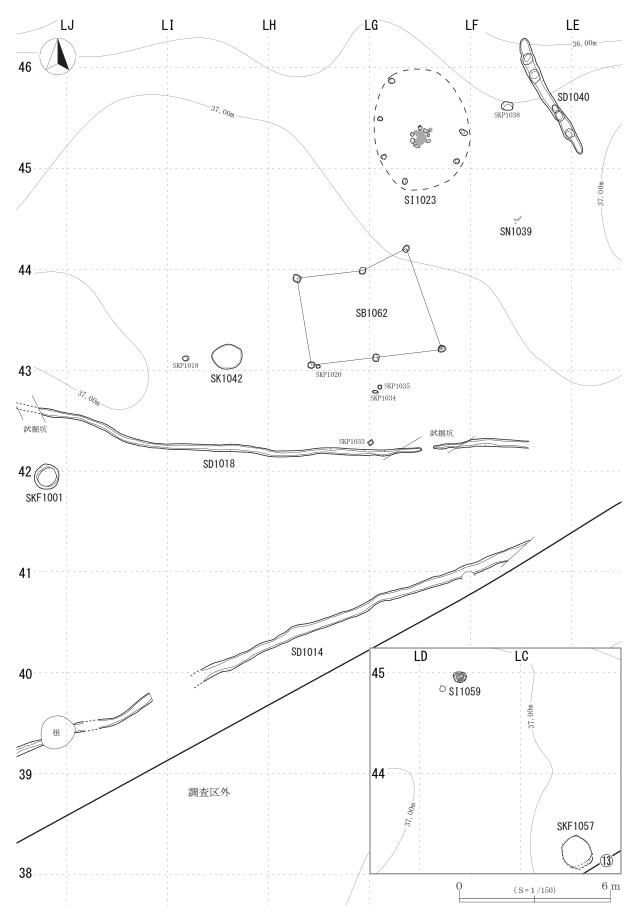


第3章 調査の方法と成果



第22図 遺構配置分割図⑩





第24図 遺構配置分割図①・①

埋土が屋外の土壌と類似し、壁や床面の層界が不明瞭な例も見受けられる。このことから、杭状の柱穴列が円形に回る遺構も、壁や床面を検出できなかったものの、本来はAIII層中に竪穴が伴っていた可能性がある。しかしながら、それらには炉が伴わず、本報告では竪穴建物跡(SI)と区別し、「円形柱穴列建物跡(SIX)」として報告する。なお、本調査区内では根による撹乱がAV層まで及んでいることから、杭状柱穴としたものの中には根による撹乱によって形成されたものがあることも否定できない。またAIII・AIV層中には、面的に遺物が広がり、土が固くしまっている箇所が確認されたが、SIXとの対応関係は捉えきれなかった。

柱穴列

本調査では、柱穴列は縄文時代と古代以降に各1条検出し、撹乱や調査区外に延びているため不明 な点も多く、掘立柱建物跡の一部の可能性もある。

フラスコ状土坑

本調査では、土坑のうち、開口部径より内部径が広い形状のものをフラスコ状土坑とした。フラスコ状土坑は、形状から貯蔵穴の可能性が指摘されており、今回の調査で検出したフラスコ状土坑も貯蔵穴の可能性がある。しかしながら、木の実が出土するなど、明確な証拠はいずれの遺構からも得られていない。

石囲炉

周囲には付随する柱穴や帰属する竪穴が認められない単独の石囲炉である。ただし黒ボク土中で検 出されたため、本来付随していた竪穴や柱穴が検出できなかった可能性も否定できない。

焼土遺構

付随する柱穴が明確ではなく、帰属する竪穴が認められない単独の焼土を焼土遺構とした。ただし 黒ボク土中で検出された焼土遺構については、竪穴や柱穴が検出できなかった可能性も否定できない。

配石土坑

土坑上面に、多数の礫が規則正しく配置された組石を伴うものを配石土坑とした。

- 2 縄文時代・弥生時代
- (1) 遺構と遺構内出土遺物

①竪穴建物跡

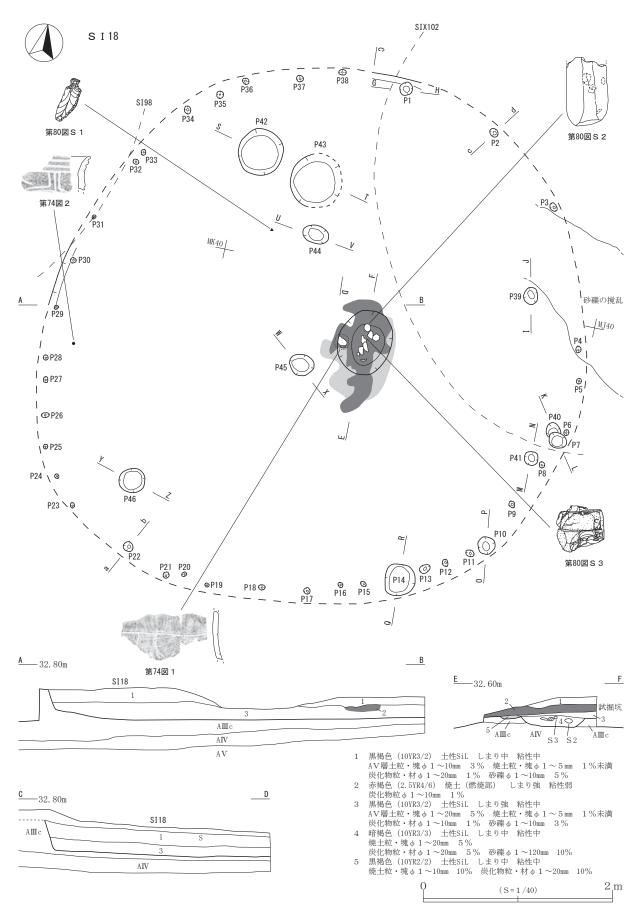
本調査区からは14棟検出した。時期別では縄文時代早期前葉から中葉1棟、後期初頭から前葉1棟、 後期前葉2棟、後期後葉6棟、晩期初頭3棟、晩期前葉から中葉1棟である。

S I 18竪穴建物跡(第18・25・26・74・80図、図版 2)

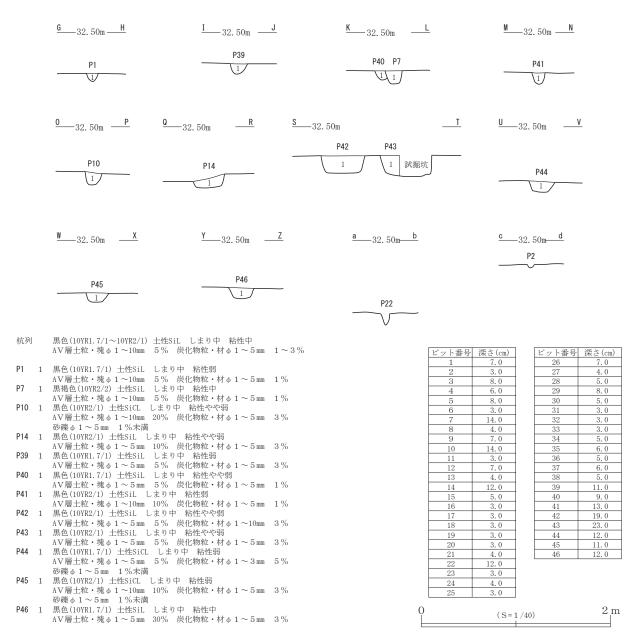
《位置・確認状況》MJ・MK39・40グリッドに位置する。周囲の堆積状況を検討するために掘削した土層観察用畦西側断面のAⅢ c 層黒褐色土中で、同一の規模を持つ2つの床面を確認した。平面形は、AV層地山土面で確認した杭状柱穴列が回る円形プランである。2つの炉は、黒ボク土中のそれぞれの床面に対応していた。

《重複》 S I 98、 S I X102と重複する。 S I 98との重複する範囲は遺構確認以前に掘り下げていたため、 S I X102は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される規模は、6.1m(推定値)×5.8m(推定値)の円形である。竪



第25図 S I 18(1)



第26図 SI18(2)

穴の掘り込みは、確認面から床面までの深さが建物跡(旧)で30cm、建物跡(新)で16cmである。わずかに残る壁は急に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。

《柱穴》円形に38基(P1~P38)の柱穴が回り、円形列から外れる建物内の8基(P39~P46)も本遺構に伴うものと判断した。円形に回る柱穴列のうち、P14は平面形34cm×33cm、深さ12cmを測るが、他の柱穴平面形は、直径が20cm以下の円形から楕円形である。断面形はV字状で、確認面からの深さは3~14cmである。これらの底面標高は、最も高いP2が32.21m、最も低いP22が31.74mで最大47cmの高低差がある。埋土は、AⅢ層土由来の黒色土を主体とする。建物内の8基(P39~P46)のうち、P39~P41は建物内東側、P42~P44は北側、P45は中央付近、P46は西側にあり、平面形は14~59cm×14~48cmの円形から楕円形で深さは9~23cmである。埋土は、AⅢ層土由来の黒色土を主体とする。《炉》炉は2基を検出した。地床炉(旧)と、その廃棄後に上面の床面を均一に造成した貼り床上に造

られた地床炉(新)である。建物の中央からわずかに東側に位置する。地床炉(旧)は、埋土(5層)の状況から、廃棄時に土坑状に掘り返され、土器や石器、礫などを投入し、廃棄したものと考えられる。 土坑状の掘り込みの平面形は56cm×68cmの楕円形で、確認面からの深さは16cmである。地床炉(新)の 焼土(2層)の平面形は64cm×124cmに広がり、不整形である。焼土の厚さは最大で8cmである。地床炉(新)は、比較的厚く被熱硬化していることから、長期間使用されたものと考える。

《埋土》5層に分けられた。1層は、AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土塊を含むことから、竪穴建物廃棄後の人為堆積土と考える。比較的大きな遺物を含む。2層は強く被熱した地床炉(新)で、3層上面を床面とする。3層は地床炉(旧)を廃棄した後で、その上に15cm程の厚さで盛土をしたものである。この上面はほぼ平坦で、しまりが強い。4層は土坑状の掘り込みの埋土であり、焼土塊や炭化材、土器、石器、礫などが混入する。壁面や底面は被熱硬化していない。5層は焼土や炭化物を多く含み、地床炉(旧)使用時の灰の掻き出しに起因すると考える。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が29点(459.1g)、石器は石匙1点(15.9g)、敲石2点(1,127.6g)、剥片7点(57.4g)が出土した。このうち土器2点(第74図1・2、図版13)、石器3点(第80図S1~S3、図版17)を図示した。1は深鉢形、2は鉢形土器である。1は掘り込みを伴う地床炉(旧)内4層から出土した。沈線で半円状に区画されたなかにLR原体の横位回転による斜縄文が充填される。2は3層上面の床面から出土した。口縁部上半では3条の平行沈線がめぐり、そこから垂下する3条の沈線のうち左右の沈線は横に延びて無文部を矩形に区画する。S1は石匙、S2・S3は敲石である。いずれも4層から出土した。S1は縦型の石匙、S3は残核を利用した敲石である。

《時期・所見》本遺構は3層下面を床面とした建物跡が、3層上面を床面とした建物跡に建て替えられている。建物跡(旧)の廃棄時期は、4層出土の土器片から、縄文時代中期後葉(大木10式)以降と考えられる。また、3層上面付近から出土した土器片が後期前葉であることから、建て替えられた竪穴建物跡の時期は後期前葉の可能性がある。本遺構の時期は、新旧の建物が連続して使用されていることから、大きな時期差は想定できず、後期初頭から後期前葉と考える。なお、地床炉(旧)より採取した炭化材(4層)の放射性炭素年代測定結果が暦年較正年代3,915±24yrBPの値を示す(第4章第2節参照)ことから、後期初頭頃の可能性があり、分析結果と出土土器からの年代観に大きな相違はない。

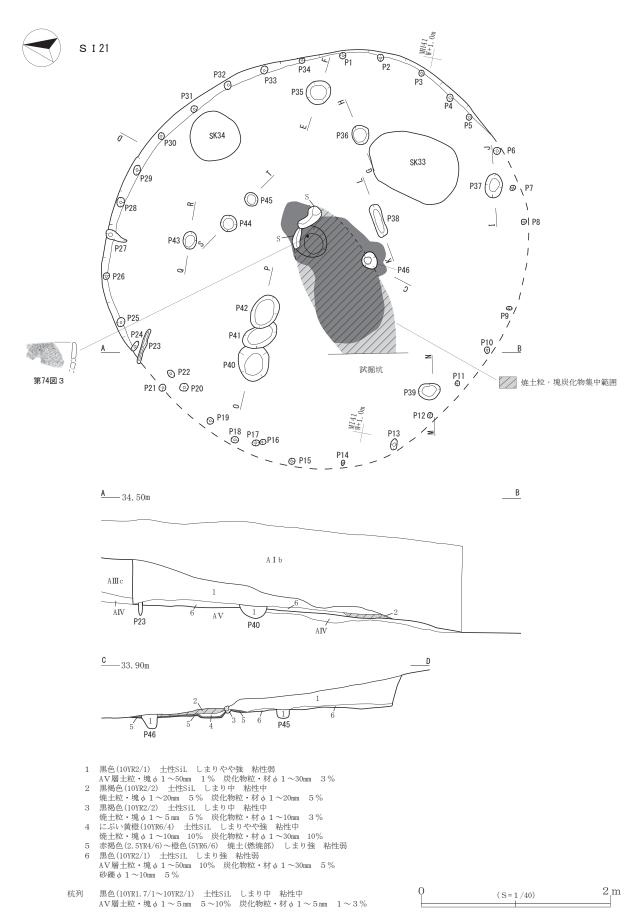
S I 21竪穴建物跡(第18・27・28・74図、図版 2)

《位置・確認状況》MH・MI40・41グリッドに位置する。試掘坑東側断面のAⅢc層黒褐色土中で竪穴建物跡の掘り込み断面を確認した。平面形は円形で、AⅢc層上面で確認した。扇形の黒色土が残り、南西側のAV層地山土面では杭状柱穴が弧状に回ることを確認した。

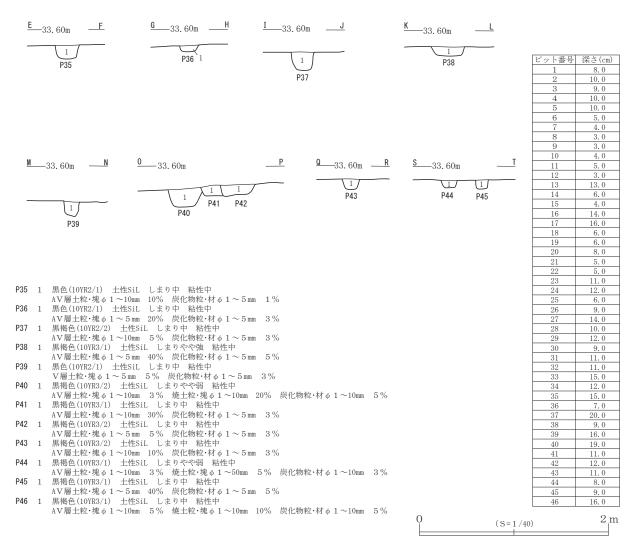
《重複》SK33・34と重複するが、新旧関係は不明である。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される規模は、4.6m(推定値)×4.4m(推定値)の円形である。北から東側ではAⅢ・AⅣ・AⅤ層土が掘り込まれ、壁を検出することができた。確認面から床面までの深さは最大で36cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦で固くしまる。

《柱穴》円形に34基(P1~P34)の柱穴が回り、円形列から外れる建物内の12基(P35~P46)も本遺構に伴うものと判断した。円形に回る柱穴列のうち、P23・P27の2基は細長い平面形状から、複数の柱穴が柱の設置や抜き取りによって結合したものと考える。他の柱穴平面形は、直径が12cm以下の円形から楕円形である。断面形はV字状で、確認面からの深さは3~16cmである。これらの底面標高



第27図 S I 21(1)



第28図 S I 21(2)

は、最も高いP 1 が33.36m、最も低いP13が32.78mで最大58cmの高低差がある。埋土は、AIII層土由来の黒色土を主体とする。建物内の12基(P35~P46)のうち、P35は建物内東側、P37・P39は南側、P40は西側、P43は北側、P38・P41・P42・P44~P46は中央付近にあり、平面形は、14~40cm×12~32cmの円形から楕円形で、深さは7~20cmである。P46は床面の地床炉から石囲炉にいたる焼土を切ることから、本遺構の機能時の一時期か、新しい柱穴である。埋土はAIII層土由来の黒色から黒褐色土を主体とする。

《炉》炉は、掘り込みを伴う地床炉(旧)と石囲炉(新)の2基を検出した。それぞれ建物のほぼ中央に位置し、石囲炉は地床炉の一部を掘り込んでいる。地床炉の焼土面は、南一北方向に164cm、東一西方向に82cmに広がり、不整楕円形である。焼土の厚さは最大で8cmである。地床炉の焼土が比較的厚く被熱硬化していることから、長期間使用されたものと考える。南西側の礫が欠失することから全体形状は不明であるが、SI52の石囲炉と同様に柱状の円礫を横にして設置している。石囲炉の円礫の内側は被熱しているが、内側には明確な焼土はなく、周囲には焼土粒・塊や炭化物が広く分布することから、灰の掻き出しによって焼土面が失われた可能性が考えられる。なお、石囲炉の構築の際の掘り込みの平面形は図示していない。

《埋土》6層に分けられた。本遺構は1層がAⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層地山粒・塊を含むことから、竪穴建物廃棄後の人為堆積土と考える。比較的大きな土器片などの遺物を含む。2層は石囲炉の内部であったと考えられ、層厚が5cmと周囲より厚く、その南西側に薄く広がる。3層は石囲炉構築の掘り込み埋土である。4層は石囲炉の石組みの下にあり、掘り込みを伴う地床炉の埋土である。5層は掘り込みを伴う地床炉の使用時に、強く被熱し硬化した焼土である。6層はAIV・AV層地山土面に薄く広がり、固くしまることから、建物機能時の生活に伴って床面に徐々に堆積した黒ボク土で、上面が建物廃棄時の床面と考える。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が29点(265.8g)、石器は剥片 7点(75.2g)が出土した。このうち土器 1点(第74図3)を図示した。3は深鉢形土器で、LR原体の横位回転による斜縄文が施される。《時期・所見》本遺構は、SI52の石囲炉と形状が類似することから、同時期の縄文時代後期後葉頃の可能性が考えられる。なお、地床炉より採取した炭化材(4層)の放射性炭素年代測定結果は、暦年較正年代3,496±23yrBPの値を示し(第4章第2節参照)、SI52炉との形状の類似から想定される時期と近い。

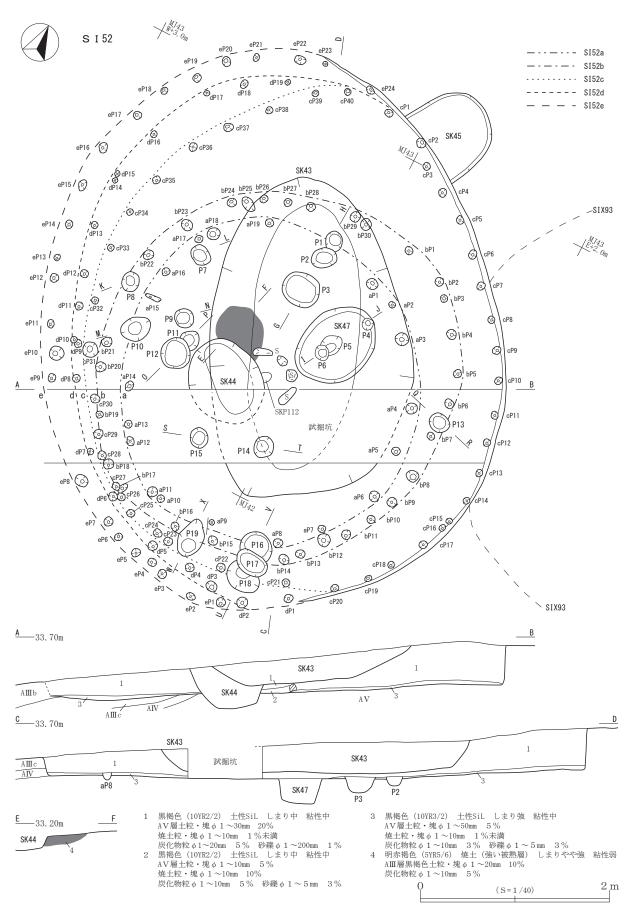
S I 52 a ~ e 竪穴建物跡(第18・29~31・74・75・80~82図、図版 2)

《位置・確認状況》 S I 52竪穴建物跡は、中央に地床炉及び石囲炉があり、柱穴が東側壁で3時期共有しながら、5 重で円形に回る。したがって、4 回の建て替えが考えられ、内側から外側にかけて、 a ~ e と呼称する。最も外側の S I 52 e はその埋土に、内側の竪穴の壁立ち上がりが見られないこと から、最も新しい竪穴と判断される。 S I 52 a ・ b は M I ・ M J 41・42 グリッドに、 S I 52 c ~ e は M I ・ M J 41~43 グリッドに位置する。試掘坑北側断面の A V 層地山土の一部がほぼ水平に掘り込まれることから、竪穴建物跡の床面の可能性が考えられた。そのため試掘坑を北東側に延長し、竪穴の 断面を観察した。その結果、北東側では竪穴が A V 層土を掘り込むことを確認できたが、南西側では A III・ A I V 層が続き、壁の立ち上がりを確認できなかった。また、平面においても、断面と同様の理 由で、北東側は輪郭を確認できたが、南西側では確認できなかった。このため、試掘坑に沿って幅約50 cmの東西畦とそれに直交する南北畦を残し、壁の立ち上がりが検出できた北東側から先行して、面的に埋土を掘り下げた。その結果、北東側で固くしまる床面を確認したことから、これに合わせて 南西側を水平に掘り下げた。 A III b ~ A V 層土上面で検出した最終的な杭状柱穴列の平面形は、 S I 52 a ・ b では円形、 S I 52 c ~ e では楕円形である。

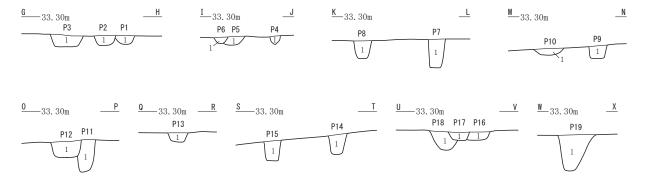
《重複》SIX93、SK43~45・47、SKP112と重複する。SI52はSKP112よりも新しい。SI52eはSK43・44よりも旧く、SI52c~eはSK45と重複すると考えられるが、新旧の判断ができなかった。SI52a~eのいずれかに伴う柱穴はSK47を切るため、SI52eより以前の構築と判断できる。また、SIX93は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》竪穴は、南一西側壁面が検出できなかったため、全体形状は不明であるものの、円形に回る杭状柱穴の配列から平面形が推定できる。規模はSI52aが3.5 $m \times 3.2m$ 、bが4.1 $m \times 3.8m$ 、cが5.6 $m \times 4.5m$ 、dが5.5 $m \times 4.5m$ 、eが5.8 $m \times 4.9m$ (いずれも推定値)である。残存する東側壁面は、柱穴列との位置関係から、 $SI52c \sim e$ に伴うものであり、柱穴列と同様に共有されていたと考える。壁面は深さが最大で44cmで、垂直に立ち上がり、竪穴建物跡の床面は平坦である。

《柱穴》柱穴は、SI52a・bがそれぞれ19基(aP1~aP19)、30基(bP1~bP30)で円形に回



第29図 S I 52(1)



SI52c

ピット番号 深

10 11

15

16

19

3.0 6.0

8. 0 5. 0

8.0 5.0 8.0 11. 0 13. 0 8.0 12.0 12.0

- P1
 1
 黒褐色 (10YR3/1)
 土性SiL
 しまり中
 粘性中

 AV層土粒・塊φ1~10mm
 10%
 炭化物粒φ1~5 mm
 3%

 P2
 1
 黒褐色 (10YR3/1)
 土性SiL
 しまり中
 粘性中

 AV層土粒・塊φ1~10mm
 5%
 炭化物粒φ1~5 mm
 1%

 井場出土
 10mm
 5%
 炭化物粒φ1~5 mm
 1%
- P3 1
- P4 1
- AV層士粒・塊φ1~10mm 5% 炭化物粒φ1~5mm 1% 土器出土 黒褐色 (10YR3/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~5mm 10% 炭化物粒φ1~10mm 1%未満 黒褐色 (10YR3/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層地山土粒・塊φ1~5mm 5% 炭化物粒φ1~10mm 1% 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~20mm 10% 焼土粒・塊φ1~10mm 5% 炭化物粒がすな1~10mm 5% 異相色 (10YR3/1) 十せSiI しまり中 粘性中 P5 1
- P6 1
- P7 1
- P8 1
- 炭化物粒・材φ1~10mm 5 % 黒褐色 (10YR3/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~5mm 10% 炭化物粒・材φ1~10mm 5 % 黒褐色 (10YR3/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~10mm 5 % 炭化物粒・材φ1~10mm 5 % 黒褐色 (10YR3/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~10mm 10% 炭化物粒・材φ1~5 mm 3 % 黒褐色 (10YR3/2) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~5 mm 5 % 炭化物粒・材φ1~5 mm 3 % 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~5 mm 5 % 炭化物粒・材φ1~5 mm 3 %
- AV層土粒・塊 ϕ 1~5mm 5% 炭化物粒・材 ϕ 1~5mm 3%

- P11 1 黒褐色 (10YR3/1) 土性SiL しまりやや弱 粘性中 AV層土粒・塊φ1~5mm 5% 焼土粒・塊φ1~10mm 1% 炭化物粒・材φ1~10mm 5%
- P12 1
- P13 1

S152	
ピット番号	深さ(cm)
1	9.0
2	10.0
3	14.0
4	9.0
5	10.0
6	7.0
7	30.0
8	20.0
9	14.0
10	7.0
11	34.0
12	17.0
13	11.0
14	22.0
15	22.0
16	9.0
17	9.0
18	20.0
19	38. 0

ピット番号	深さ(cm)
1	18.0
2	4.0
3	15.0
4	15.0
5	12.0
6 7	14.0
	11.0
8	5.0
9	5.0
10	9.0
11	15.0
12	12.0
13	14.0
14	10.0
15	10.0
16	9.0
17	9.0
18	10.0
19	11.0

31320	
ピット番号	深さ(cm)
1	13.0
2	17.0
3 4	6.0
4	14.0
5	10.0
6 7	24. 0
7	16.0
8	20.0
9	16.0
10	18.0
11	16.0
12	17.0
13	9.0
14	10.0
15	3.0
16	15.0
17	7. 0
18	14.0
19	13.0
20	17.0
21	14.0
22	8.0
23	9.0
24	12.0
25	8.0
26	10.0
27	10.0
28	15.0
29	18.0
30	22.0

	27	10.0	
	28	15. 0] [
	29	18.0	1 [
	30	22. 0] [
a杭列 黒色 (10YR1.7/1~10YR2/1) 土性SiL しまり中 AV層十粒・塊 b 1~5 mm 1~5 %	中~やや強	粘性中	
炭化物粒・材φ1~5 mm 1~3% b杭列 黒色 (10/R1.7/1~10/R2/1) 土性SiL しまり中 AV層土粒・塊φ1~10mm 1~5%	中~やや強	粘性中	
炭化物粒・材φ1~5 mm 1~3 % c杭列 黒から黒褐色 (10YR1.7/1~10YR2/2) 土性SiL AV層土粒・塊φ1~10mm 1~5 %	しまりやや	弱~中 粘	生中
AV層土粒・塊φ1~5mm 1~5%	しまりやや	弱~中 粘	生中 [
炭化物粒・材φ1~5 mm 1~5 % e 杭列 黒から黒褐色 (10YR1.7/1~10YR2/2) 土性SiL AV層土粒・塊φ1~10mm 1~5 %	しまりやや	弱~中 粘	生中

土性SiL	しまりやや弱~中	粘性中

S152d			
さ(cm)		ピット番号	深さ(cm)
6.0		1	6.0
5.0		2	6.0
4.0		3	12.0
6.0		4	11.0
6.0		5	19.0
5.0		6	10.0
6.0		7	4.0
7.0		8	10.0
6.0		9	7.0
7.0		10	13.0
5.0		11	11.0

ピット番号	深さ(cm)
1	6.0
2	6.0
	12.0
4	11.0
5	19.0
6 7	10.0
	4.0
8	10.0
9	7.0
10	13.0
11	11.0
12	10.0
13	8.0
14	8.0
15	8.0
16	7.0
17	7.0
18	4.0
19	6.0

31326			
ピット番号	深さ(cm)		
1	10.0		
2	8. 0		
3	8. 0		
4	5.0		
5	8. 0		
6	6.0		
7	8.0		
8	15.0		
9	12.0		
10	11.0		
11	8.0		
12	9.0		
13	12.0		
14	12.0		
15	13. 0		
16	9.0		
17	9.0		
18	7.0		
19	12.0		
20	8. 0		
21	7. 0		
22	10.0		
23	3. 0		
24	11.0		

SI52e

AV層土粒・塊 φ 1 ~ 10mm 1 ~ 5 % 炭化物粒・材 φ 1 ~ 5 mm 1 ~ 3 %

	30	9.0
	31	18.0
	32	12.0
	33	9.0
	34	8.0
	35	12.0
	36	11.0
	37	7.0
中	38	9.0
	39	6.0
	40	9.0
中		

 $2 \, \mathrm{m}$ (S = 1/40)

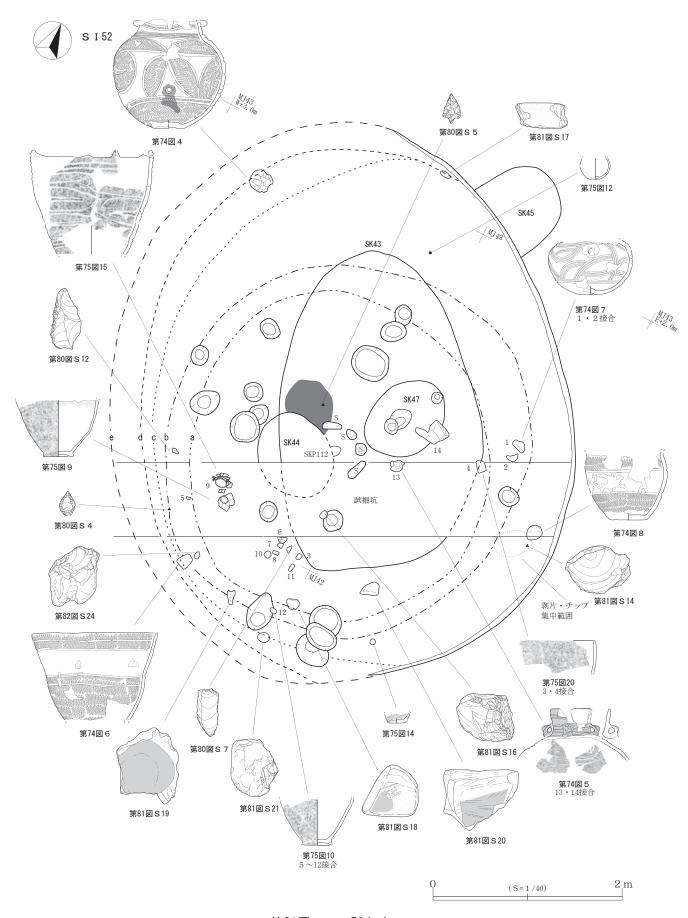
第30図 S I 52(2)

る。S I 52 c \sim e がそれぞれ40基(c P 1 \sim c P 40)、39基(c P 1 \sim c P 20・d P 1 \sim d P 19)、44基(c P 1 \sim c P 20・e P 1 \sim e P 24)で楕円形に回る。円形に回る柱穴は、確認面での平面形の直径が15cm以下で、断面形は先端が尖ったV字状を呈している。確認面からの深さは 3 \sim 24cmである。これらの底面標高は、S I 52 a の最も高い a P 2 が33.20m、最も低い a P 4 が32.90mで最大30cmの高低差がある。S I 52 b の最も高い b P 10・P 11が33.20m、最も低い b P 6 が32.90mで最大30cmの高低差がある。S I 52 c \sim e では最も高い c P 8 が33.30mで共有の杭状柱穴であり、最も低いのがそれぞれ c P 30の32.85m、d P 5 の32.85m、e P 6 の32.80mである。 c \sim e の高低差はそれぞれ最大45cm、45cm、50cmである。埋土は、S I 52 a が A III 層土由来の黒色土、S I 52 b が黒色から黒褐色土を主体とする。杭状柱穴より大きい建物内の柱穴19基(P 1 \sim P 19)のうち、S I 52 a の建物内に収まるものが P 2 \sim P 7 \sim P 9 \sim P 11 \sim P 12 \sim P 14 \sim P 15、S I 52 a の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 1 \sim P 10 \sim P 16、S I 52 b の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19、S I 52 c の円形柱穴列建物跡上にあるものが P 8 \sim P 13 \sim P 17 \sim P 19 \sim P 11 \sim P 10 \sim P 11 \sim P 10 \sim P 10

《炉》炉は、地床炉と石囲炉の2基を検出した。それぞれ建物のほぼ中央に位置し、石囲炉が地床炉よりも新しい。地床炉は、石囲炉とS K44に切られることから全体形状は不明であるが、平面形は、東一西方向に50cm、北一南方向に42cmに広がり、楕円形と推定される。焼土の厚さは最大で10cmである。石囲炉は、地床炉の上面に、 $1\sim3$ cmの黒褐色土(3 層)を挟み、掘り込まれずに構築される。S K44に南西側が切られ、欠失することから全体形状は不明であるが、平面形が68cm×36cm(残存値)で、柱状の円礫を横に設置した円形のものと推定される。石囲炉の礫は被熱しているが、炉内には明確な焼土層はない。

《埋土》 4層に分けられた。1層はAIII層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土塊を含むことから、竪穴建物廃棄後の人為堆積土と考える。比較的大きな遺物を含む。 2層は石囲炉内にあり、焼土粒・塊、炭化物が多く含まれる。石囲炉内における灰の掻き出しによって、焼土面が失われた可能性が考えられる。 3層は地山土面に薄く広がり、固くしまることから、建物機能時に生活に伴って床面に徐々に堆積した黒ボク土で、上面が建物跡廃棄時の床面と考える。 4層は強い被熱で階調的に赤変した焼土である。

《出土遺物》 1層から、縄文土器片が415点(13,279.1g)、石器は石鏃2点(4.7g)、石錐2点(41.3g)、石匙2点(22.3g)、スクレイパー6点(105.7g)、石核4点(724.1g)、半円状扁平打製石器1点(565.6g)、石皿3点(5,122.3g)、敲石4点(1,525.4g)、石剣1点(15.5g)、二次加工ある剥片28点(489.4g)、剥片・チップ577点(1,356.8g)が出土した。このうち土器21点(第74・75図4~24、図版12・13)、石器22点(第80~82図S4~S25、図版17)を図示した。4は単孔土器であるが、基本的には、頸部から最大径のある胴部上半にかけて大きく張り出し、そこから小さな底部にすぼまる壺形土器である。無文の頸部には4箇所に貼瘤があり、刻目のある隆帯が緩く弧を描きながら瘤を繋いでいる。頸部と胴部の境にはこれも刻目のある2条の隆帯がめぐる。胴部の文様は、孔の横にある円形の文様を中心として両側に入組文風の文様が1単位ずつ配される。円形の文様は三叉状の無文部を中心として、上方と左右に木の葉状文が配される。入組文風の文様は、木の葉様の文様部を中心として縄文帯が左右に延びるが、一方の縄文帯は中央部の木の葉様の文様部下部から上方の木の葉様



第31図 S I 52(3)

文様部に繋がり、もう一方は上部から下方の木の葉様文様部に繋がる。木の葉様文様部にはLR原体 とRL原体による非結束の羽状縄文が付される。この非結束の羽状縄文は胴部下半にも付される。孔 の部分の内外面にはアスファルトが付着している。5 は赤色塗彩の壺形土器である。外反する口縁部 から頸部ですぼまり、そこから大きく外反し胴部上半に最大径をもち底部にいたる器形である。口縁 部には無文帯を挟んでLR原体の横位回転による縄文が、頸部には隆帯が2段めぐっている。胴部上 半にはLR縄文帯が入組文風に表される。胴部文様帯は上半に限られ、以下は無文である。頸部には 4つの瘤が付される。外面は厚く赤色塗彩され、内面も底部まで赤色塗彩された痕跡がある。6は深 鉢形土器である。内面が削ぎ落とされて薄くなった口唇から、外反する口縁部、胴部上半で一度すぼ まり、さらに緩やかに膨らみながら底部に至る器形である。口縁部下半にある幅広の無文帯の上下に 縄文帯がめぐり、縄文はLR原体の横位回転による。7は注口土器で、丸みのある胴部から小さな径 の底部に至る器形で、無文地に3条一組の沈線で弧状文が描かれる。8は鉢形土器である。幅の広い 無文帯を挟んで上下にRL、LR原体による非結束の羽状縄文が付される。外面に赤色塗彩の痕跡が ある。9・10は台付深鉢形土器で、底端部が外側に張り出す。9は無文で内外面に縦方向の粗いケズ リが行われ、胎土の砂粒が器表面に現れている。10はLR縄文が胴部下端まで付される。11~13は壺 形土器である。11は磨消縄文により入組文風の文様が描かれ、縄文は非結束の羽状縄文が付される。 12は径の小さな底部が内側に窪んでいて、内外面に手捏の痕跡が顕著に残る。13の胴部下半の文様は 幅の狭い縄文帯が弧状に描かれ、縄文は非結束の羽状縄文が付される。14・15は深鉢形土器である。 14は胴下部にLR原体の横位回転による縄文が付され、内外面に胎土の砂粒が顕著に見られる。15の 口唇は平坦に面取りされていて、直立する口縁から胴部上半でわずかに膨らみを持つ。口唇には先端 部の鋭い突起があり、その間に低い山形の突起も付される。胴部文様は多段の入組文が施され、LR 縄文が付される。16は鉢形土器で、口唇は平坦で幅広の口縁部から丸みのある胴部に至る。口縁部上 半と下半には数条の平行沈線が引かれ、おそらくは縦方向の刻目帯が口縁部文様帯を4分割し、楕円 形の沈線内に横方向の刻目帯が1単位となるのであろう。外面に赤色塗彩の痕跡が認められる。17は 深鉢形土器である。口唇は丁寧に面取りされ、わずかに肥厚し外反する口縁部から胴部に至る器形で ある。胴部文様には、無文地に櫛歯状工具による13~15本一組の条線が間隔をおいて縦方向に施され る。18は鉢形土器で、直立する口縁部には末端が入組状に噛み合う沈線と楕円文の間に円文が描かれ、 玉抱三叉文風になる。19~22は深鉢形土器である。19は外反する口縁部が折り返しで、口唇部にはLR 縄文の側面圧痕が、胴部には同一の原体により斜縄文が付される。20は内湾する口縁部からほぼ直線 的に胴部に至る器形である。口唇部は丁寧に面取りされ、LR原体の横位から斜位回転によって縄文 が付される。21の口唇は薄く、外反する口縁部から外傾する胴部に至る器形である。LR原体の横位 回転により斜縄文が付される。22は胴部を隆帯により矩形に区画し、その中に隆帯に平行する沈線と 刺突列を施す。刺突列は隆帯上にも付され、また丸い貼瘤もある。23は壺形土器である。隆帯と沈線 による隆沈線により円形や楕円形の区画がされる。24は台付深鉢形土器で、胴部下半から底部にすぼ まり、直立する台部に繋がる。器表面は縦方向にミガキが行われる。S4・S5は石鏃、S6・S7 は石錐、S8・S9は石匙、S10~S13はスクレイパー、S14~S16は石核、S17は半円状扁平打製 石器、S18は磨石、S19・S20は石皿、S21~S24は敲石、S25は石剣である。S8・S9は縦型の 石匙である。S14と剥片・チップ437点(121.8g)が建物跡の南東端床面直上で楕円形の範囲

 $(46cm \times 28cm)$ からまとまって出土し、S14と剥片 1 点が接合した。S14から剥片が剥離される以前の母岩は球状であったものと考えられ、作業面が片面に設定され、周縁から求心的に剥離が行われ、半球状に残ったものと考える。S14と剥片・チップの形状から、同一母岩と推測される。なお、S14の自然面には無数の敲打痕があり、石核として利用される前は敲石として利用されたものと考える。《時期・所見》本遺構は、5 重に回る柱穴列が検出されたことから、少なくとも 4 回の建て替えが行われたと考えられる。それぞれの円形に回る柱穴列に切り合いはないため、柱穴列の新旧は定かではないが、建物の規模を徐々に拡張したと仮定すれば、 $a \to b \to c \to d \to e$ の順に建て替えられたものと考える。本遺構の時期は、最新のSI52 e が床面出土土器(4)から縄文時代後期後葉(十腰内IV群)である。SI52床面を確認面として検出したSK47は、埋土から本遺構 $a \sim d$ のいずれかの時期に伴う炉内の焼土や灰などの掻き出しを処理するための施設の可能性も考えられる。

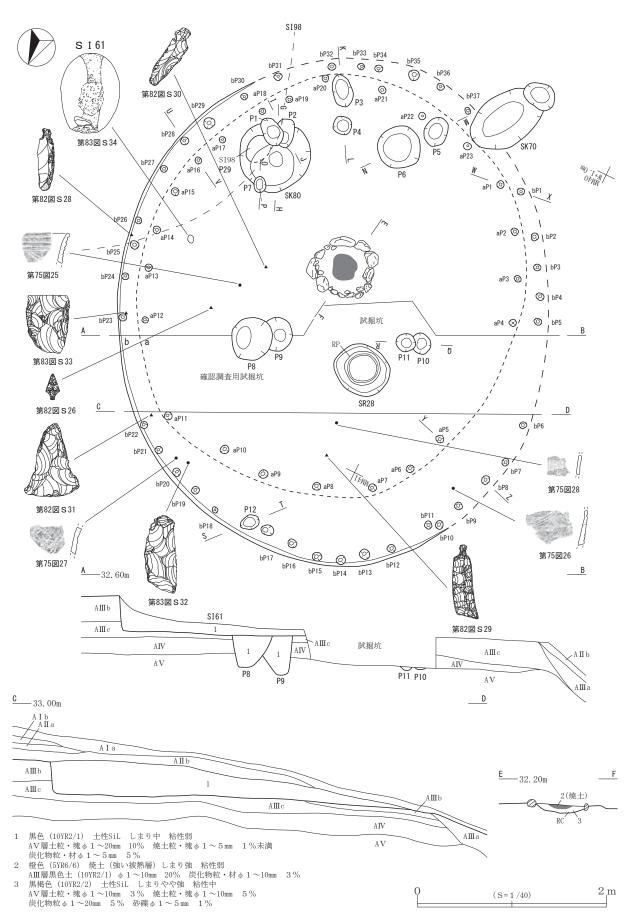
S I 61 a・b竪穴建物跡(第17・32・33・75・82・83図、図版 3)

《位置・確認状況》 $ML \cdot MM40 \cdot 41$ グリッドに位置する。試掘坑の南・北両断面の $A \coprod b \cdot A \coprod c$ 層中で不明瞭ながら竪穴建物跡の掘り込みと床面を確認したが、段丘崖に近い西側は床面近くまで掘り下げが進んでいたため確認できなかった。断面で竪穴の掘り込みが確認できた上面まで全体を下げたが、平面形は確認できなかったため、断面の掘り込みと床面から竪穴建物跡の形状を推定し、面的に試掘坑側から埋土を徐々に掘り下げた。標高32.00mで石囲炉の一部を検出した後、ほぼ同一標高の床面に杭状柱穴を確認した。床面は固くしまる。ただし西側の段丘崖に近い付近では床面を確認できず、杭状柱穴列をAV層地山土面で確認した。その過程で杭状柱穴が同一面上で2重(内側 $a\cdot h$ 0)に回ることが確認された。a1に伴う竪穴は認められないことから、a1からりに拡張されたものと考える。竪穴の掘り込みは北ー南東側では確認できたが、他では確認できなかった。

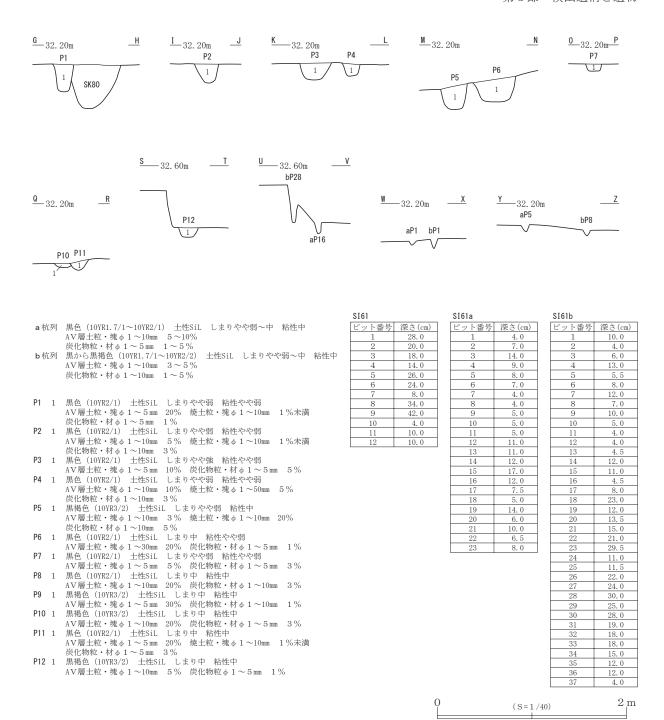
《重複》S I 98、S R 28、S K 70・80と重複し、S I 61 a・b は S R 28よりも旧い。本遺構のP 1 は S I 98 P 29よりも新しい。S I 61 a・b に伴う柱穴(P 1・P 2・P 7)はS K 80よりも新しい。また、S I 61の西側では、床面を確認できなかったため、S K 70との新旧は不明である。

《規模・形態》杭状柱穴の配列から推定される $SI61a \cdot b$ の規模はaが4.44 $m \times 4$.00m、bが $5.39<math>m \times 4$.60m(いずれも推定値)である。北-南東側の壁立ち上がりは残り、確認面から床面までの深さは最大で38cmである。壁は、垂直に立ち上がり、床面は不明な西側を除いて概ね平坦である。

《柱穴》ほぼ同一の床面を利用した2重(S I 61 a・b)の柱穴は、aが23基(a P 1~a P 23)、bが37基(b P 1~b P 37)で楕円形に回る。円形列から外れる建物内の12基(P 1~P 12)もS I 61 a・bに伴うものと判断した。楕円形に回る柱穴は、確認面での平面形の直径が14cm以下で、断面形はV字状である。確認面からの深さは4~29.5cmである。これらの底面標高は、S I 61 a の最も高い a P 11が31.970m、最も低い a P 3が31.510mで最大46cmの高低差、b が最も高い b P 16が31.941m、最も低い b P 4が31.516mで最大42.5cmの高低差がある。埋土は、S I 61 a が A III 層土由来の黒色土、S I 61 b が黒色から黒褐色土である。建物内の12基(P 1~P 12)はP 7・P 12の例外はあるが、他の10基は2基ずつセットで、S I 61 a・b の建て替えに対応する柱穴の可能性が考えられる。P 12以外のP 1~P 11は a の建物内に収まり、P 1~P 7 は建物内南側、P 8~P 11は中央付近に位置する。P 12は b の北側壁際に位置する。平面形は、18~48cm×12~46cmの円形から楕円形で、深さは 4~42cmである。埋土は、A III 層土由来の黒色土を主体とする。



第32図 SI61(1)



第33図 SI61(2)

《炉》石囲炉である。 $SI61a \cdot b$ のほぼ中央に位置する。掘り込みがないことから、石は比較的柔らかいAIII c 層に据え置かれたものと考える。平面形は、 $71cm \times 70cm$ の円形である。炉に使用された円礫は、 $Accuple 6 \sim 29cm$ で形状が様々であるが、隙間なく設置され、礫の内側から上端の一部外側まで被熱する。焼土面は、石囲炉の中央部に円形に広がり、焼土の厚さは最大でAccuple 6 cmである。建物内には他に焼土などの被熱した箇所がないことから、炉はAccuple 6 cmの対象した箇所がないことから、炉はAccuple 6 cmの建て替え時にも造り替えがなかったものと考える。

《埋土》3層に分けられた。1層はAⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層地山粒・塊を含むこと

から、竪穴建物廃棄後の人為堆積土と考える。2層は石囲炉内の焼土で、強い被熱で赤変する。3層は焼土粒・塊、炭化物が多く含まれることから、2層形成前の焼土や灰などの掻き出しや燃料材の投入による層と接するAⅢ層土が崩され、一部が炉内に堆積したものと考える。

《出土遺物》縄文土器片が1層から172点(2,062.2g)、P9から1点(64.4g)、石器は1層から石鏃 1点(1.0g)、石錐1点(81.6g)、石匙3点(29.3g)、石篦1点(53.9g)、スクレイパー2点(58.3g)、 敲石1点(420.7g)、二次加工ある剥片16点(305.7g)、剥片59点(515.9g)、3層から二次加工ある 剥片1点(8.3g)、P2から剥片1点(64.9g)が出土した。このうち土器5点(第75図25~29、図版13)、 石器9点(第82・83図S26~S34、図版18)を図示した。25~29は深鉢形土器である。25の口唇は平坦 に面取される。口縁部には平行沈線がめぐり、胴部には平行沈線が斜めに付される。26の胴部文様は 3本一組の平行沈線で無文地を円形や矩形に区画する。27は交差する貝殻腹縁文が施され、胎土は緻 密で焼成も良好である。28は幾何学的文様帯が櫛歯様工具による微隆起線の集合帯で構成される。器 厚は薄く、胎土、焼成とも良好な土器である。29は短く太い沈線を交差させて網目状燃糸文を施す。 沈線内には繊維の東状のものを押しつけたような痕跡が認められる。器厚は厚く、胎土には繊維を含 んでいる。石器は、S26が石鏃、S27が石錐、S28~S30が石匙、S31が石篦、S32・S33がスクレイパー、S34が敲石である。S26の石鏃はつまみ部に天然アスファルトが付着する。S28は縦型、 S29・30は斜型の石匙である。S31の石篦は全面が二次加工されている。

《時期・所見》本遺構からは縄文時代早期後葉、後期前葉、後期後葉の土器が出土しているが、石囲炉3層より採取された炭化材の放射性炭素年代測定結果は、暦年較正年代3,633±23yrBPの値を示し(第4章第2節参照)、本遺構が後期前葉に帰属すべきことを示唆している。石囲炉の形状もその時期の類例と矛盾しない。建て替えもその範囲の中で行われ、他の時期の土器は周辺基本土層中に包含されたものが、埋没過程で混入したものと判断される。

S I 71竪穴建物跡(第17・34・83図、図版 3)

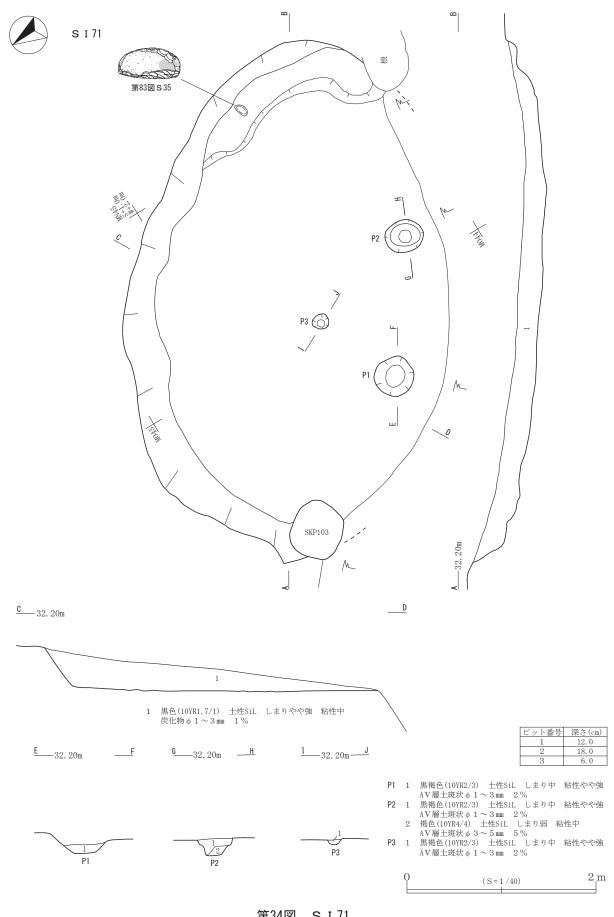
《位置・確認状況》MN・MO44・45グリッドにおいて、AV層地山土面にプランを確認した。 《重複》SKP103と重複し、それよりも旧い。

《規模・形態》平面形は $5.50 \,\mathrm{m} \times 3.40 \,\mathrm{m}$ (残存値) の長楕円形である。床面は、西に向かってやや低くなっているが、ほぼ平坦で固くしまる。段丘斜面上部にあたる北から北東側の壁は、急に立ち上がり、南東部の壁は緩やかに立ち上がって、一部はスロープ状になる。西から南側に壁は検出できなかった。《柱穴》柱穴を3 基($\mathrm{P1} \sim \mathrm{P3}$)検出した。 $\mathrm{P1} \cdot \mathrm{P2}$ は西から南端寄りに検出された。 $\mathrm{P3}$ は本遺構の中心付近から $15 \,\mathrm{cm}$ 西寄りの位置にある。 $\mathrm{P1}$ の規模は $\mathrm{E40} \,\mathrm{cm}$ のほぼ円形で、底面はやや凹凸がある。確認面からの深さは $11 \sim 12 \,\mathrm{cm}$ である。 $\mathrm{P2}$ は $46 \,\mathrm{cm} \times 26 \,\mathrm{cm}$ の楕円形で確認面からの深さは $18 \,\mathrm{cm}$ 、 $\mathrm{P3}$ は $\mathrm{E10} \,\mathrm{E10} \,\mathrm{E10}$ で、炭化物が混入する。

《炉》なし。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土で炭化物が混入する。一括して埋め戻された人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が23点(276.7g)、石器は半円状扁平打製石器1点(936.3g)、二次加工ある剥片2点(230.8g)、剥片13点(198.6g)が出土した。このうち石器1点(第83図S35、図



第34図 S I 71

版18)を図示した。S35は両面と下面に磨面を持つ半円状扁平打製石器である。土器は無文の深鉢形 土器口縁から胴部片が出土し、器形と胎土から縄文時代後期に帰属すると考える。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代後期と考えられる。炉は検出されなかったが、床面が平坦でしまり、柱穴を検出したことから竪穴建物跡と考える。西側の段丘崖に近い付近では壁の立ち上がりを検出していないが、浸食を受けて欠失した可能性がある。

S I 98竪穴建物跡(第18・35・76・83図)

《位置・確認状況》MK・ML39・40グリッドに位置する。周囲の堆積状況を検討するために残した 土層観察用畦北側断面の東側のAⅢ・AⅣ層中で、明確ではなかったが竪穴の輪郭と床面を確認した。 AV層地山土面で杭状柱穴が円形に回るプランを確認したが、それによって囲まれる部分が竪穴建物 の範囲と考えられる。

《重複》SI18・61 P1、SK80と重複する。本遺構のP29はSI61 P1、SK80よりも旧い。 SI18と重複する範囲は遺構確認以前に掘り下げていたため、新旧は不明である。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される規模は、径4.68m(推定値)の円形である。竪穴のプランは 断面と北東側の一部で確認でき、確認面から床面までの深さは最大で16cmである。断面で検出した床 面は固くしまる。

《柱穴》円形に35基(P1~P35)の柱穴が回り、円形列から外れる建物内の3基(P36~P38)も本遺構に伴うものと判断した。円形に回る柱穴列のうち、P29の規模は32cm×24cm、深さ26cm(推定値)を測る。他の柱穴は、直径が14cm以下の円形から長楕円形で、断面形はV字状で、確認面からの深さは3.5~32.0cmである。これらの底面標高は、最も高いP12が31.850m、最も低いP34が31.635mで最大21.5cmの高低差がある。埋土は、AIII層土由来の黒褐色土を主体とする。建物内の3基(P36~P38)のうち、P36・P37は東側、P38は北側に位置し、平面形は16~26cm×10~18cmの楕円形で、深さは4~10cmである。埋土は、AIII層土由来の黒褐色土を主体とする。

《炉》なし。

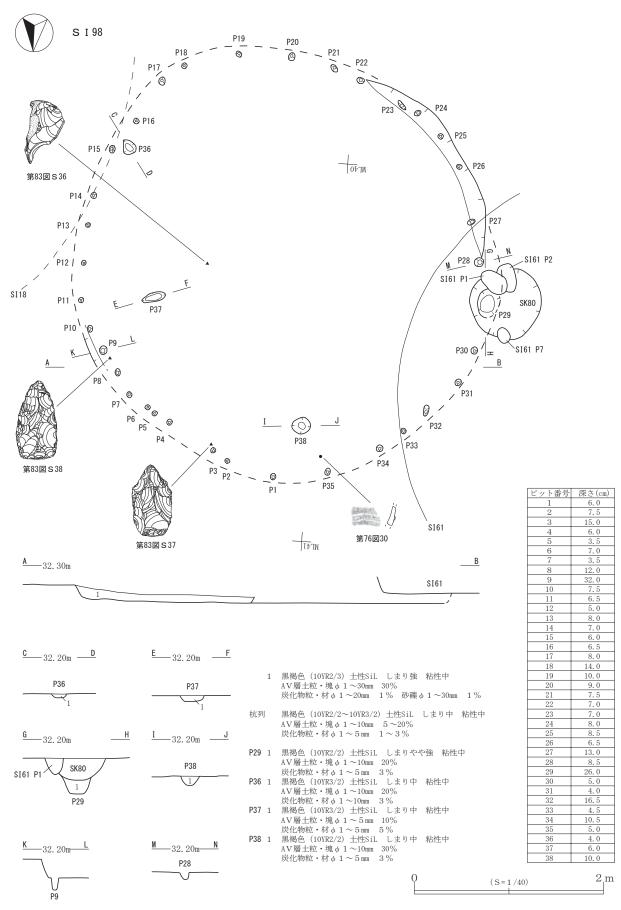
《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、建物廃棄後の人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が19点(276.8g)、石器は石錐 1点(28.3g)、石篦 2点(98.9g)、二次加工ある剥片 7点(127.1g)、剥片22点(267.0g)、P38から剥片 1点(4.3g)が出土した。この他に赤色礫 1点(162.6g)が出土した。このうち土器 1点(第76図30)、石器 3点(第83図S36~S38、図版18)を図示した。30は深鉢形土器である。隆帯上に刺突列?が付される。S36は石錐、S37・S38は石篦で、いずれも一部に摩耗痕が観察される。S37は基部側が尖頭状に尖る。なお、埋土から縄文時代中期から後期前葉までの土器片が出土しているが、建物を廃棄する際の埋土に混入したものと考える。

《時期・所見》本遺構は、遺構の切り合いから縄文時代後期前葉と推定したSI61より旧いが、出土 土器の下限は後期前葉である。本遺構の時期は、SI61とそれ程時期差がないものと考えられる。

S I 112竪穴建物跡(第17・36・76・83図、図版 3)

《位置・確認状況》ML・MM・MN42・43グリッドのA III 層中において、焼土を中心に杭状柱穴19 基を検出した。



第35図 S 198

《重複》SIX64・91・96・97、SK87・89と重複し、本遺構が切り合い関係からそれらよりも新しい。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される規模は、5.00m(推定値)×4.48mの楕円形である。底面は平坦で、東側の壁は急に立ち上がるが、西側の壁は検出できなかった。確認面から床面までの深さは0.18mである。

《柱穴》円形に回る柱穴は、 $19基(P1\sim P19)$ で、平面形は、直径が10cm以下の円形から楕円形である。断面形はV字状であったが、断面の計測をしなかったことから、深さは不明である。

《炉》遺構の中心に不整形に広がる焼土面を確認した。周囲に9個の円礫があり、そのうち赤色化した被熱痕のある4個の扁平な円礫を焼土面付近で確認した。また、西側にある径33cmの扁平な円礫には平らな面全体に、西側に離れたもう1個には部分的に被熱痕を確認した。他の2個は焼土の東側にあり、焼土に面した側の礫の表面の一部に被熱痕をそれぞれ確認した。さらに周囲に5個の円礫を確認したことから、石囲炉が崩れた跡と判断した。

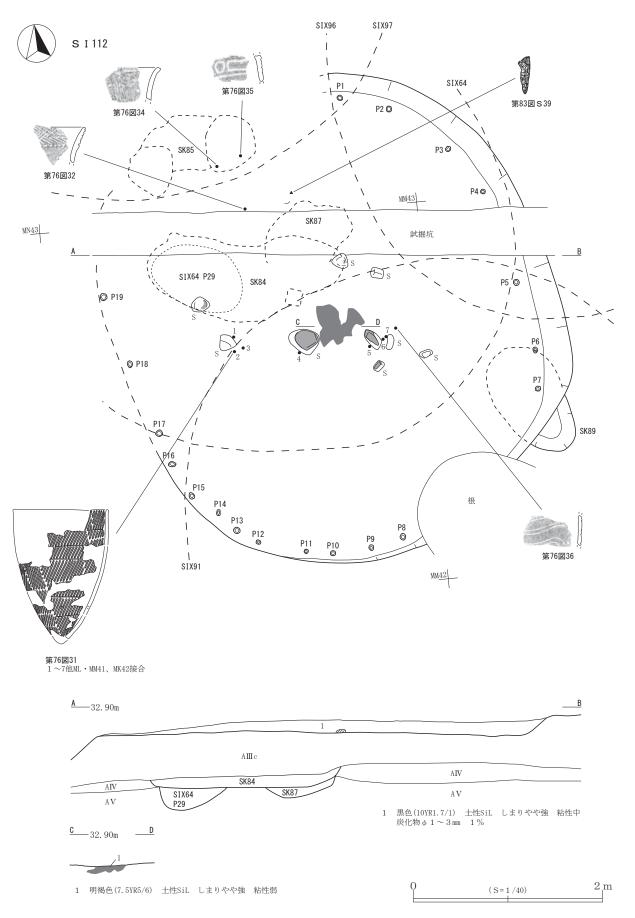
《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土に炭化物が混入する。

《出土遺物》埋土から、縄文土器が244点(4,373.2g)、石器は石錐1点(1.5g)、二次加工ある剥片 1点(64.2g)、剥片11点(160.4g)が出土した。このうち土器6点(第76図31~36、図版13)、石器 1点(第83回S39、図版18)を図示した。31は尖底深鉢形土器で、直立する口縁部から尖底部に至る器 形である。末端結縛のLR原体の横位回転により縄文が付される。結縛には繊維束が用いられている。 同一原体により口唇上にも縄文が回転施文されている。胎土には繊維を含む。32も尖底深鉢形土器で あろう。口唇は平坦で、外反する口縁部からわずかに膨らむ胴部に至る器形と考えられ、低い波状口 縁になるものと思われる。口縁部には矢羽状に貝殻腹縁圧痕文が施され、胴部との境を示す隆帯状の 盛り上がりに1条の刺突列が施される。胎土、焼成とも良好である。33は深鉢形土器で、SІ61出土 土器28と同様な文様構成である。幾何学的な文様はヘラ状工具により器面がわずかに削り取られるこ とにより、隆起線の集合帯が浮き出たように見える。内面にも横位の条痕が認められ28と同一個体か。 34は深鉢形土器である。口唇端部は丸みを帯び外反し、R 撚糸文が縦位に施される。MK42・ML41・ MM42グリッド出土の口縁から胴部破片と接合した。35はSI52の23と同一個体の壺形土器である。 36も壺形土器で、無文地に2本一組の平行沈線によって波状文が描かれる。床面付近を含め埋土から、 縄文時代早期から後期前半の遺物が出土したが、建物を廃棄する際の埋土に混入したものと考える。 《時期・所見》本遺構の時期は、縄文時代後期末葉を含むAⅢc層を切っていることから後期末葉と 考えられる。なお、本遺構の西側の壁は検出できなかったが、段丘崖が西に迫っていることから、崩 落や浸食で欠失した可能性がある。

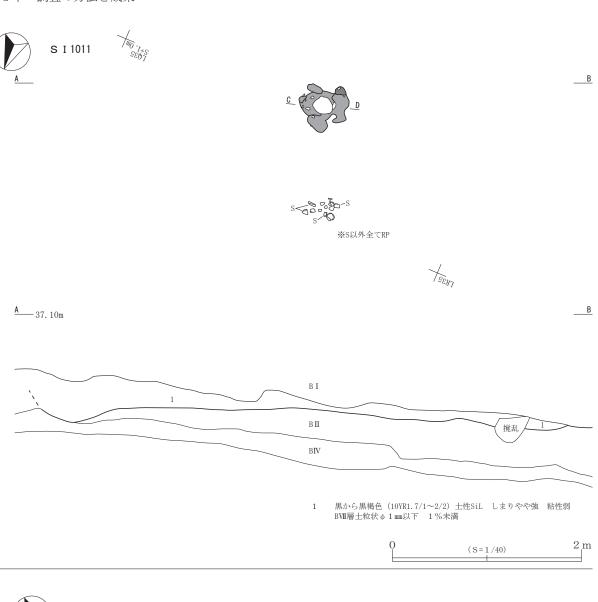
S I 1011竪穴建物跡(第21・37・76図、図版 3)

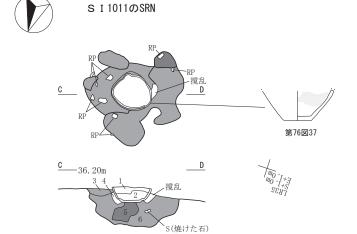
《位置・確認状況》 LQ・LR34・35グリッドに位置する。段丘縁辺部の斜面 B II ②層黒色土中で、埋められた土器と、その周囲に焼土を確認したことから土器埋設炉と判断した。これより竪穴の存在を想定し周囲を調査したが、炉と同じ高さまで B II 層を掘り下げていたため明確な掘り込みは確認できなかった。その後、土器埋設炉の南にある、調査区外と接する壁の土層断面を精査した結果、竪穴建物と考えられる掘り込みを確認した。

《重複》なし。



第36図 S I 112





- \$11011の土器埋設炉(C-D)

 1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性弱
 BVI層土粒状φ1 mm以下 1 %未満
 2 暗褐色 (10YR3/4) 土性SiL しまりやや弱 粘性弱
 BVI層土粒状φ1 ~ 2 mm 3 %
 明赤褐色焼土粒φ1 mm以下 1 %未満
 3 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性中
 4 (かなり弱い被熱)
 黒褐色 (10YR2/2) 土性SiCL しまり強 粘性中
 5 (強い被熱)
 褐色 (7.4YR4/6) 土性SiCL しまり強 粘性中
 褐色土塊状φ5 mm 1 %未満
 6 (弱い被熱)
 暗褐色 (10YR3/3) 土性SiCL しまり強 粘性中
 小焼鰈φ30mm 1 個 黒色土斑状30%
 褐色焼土粒φ1以下~1 mm 1 %
 炭化物粒状φ1 mm以下 1 %未満

 $1 \, \mathrm{m}$ (S = 1/20)

第37図 S I 1011

《規模・形態》南側は調査区外であり、北側は欠失しているため、竪穴の規模は不明である。土層断面と出土遺物の広がりから想定すると、径 6 m (推定値)の円形であると考えられる。また土層断面の観察から、確認面から床面までの深さは最大で14cmである。

《柱穴》周囲に柱穴は検出されていない。

《炉》土器埋設炉である。深鉢形土器底部が、正位に埋設されていた。焼土の被熱範囲は54cm×42cm の不整形で、焼土の厚さは最大で16cmである。土器埋設部の掘方は22cm×20cmの隅丸方形で、掘り込みから床面までの深さは8cmである。埋土は6層に分けられた。焼土も含めた埋土は、基本的にBII層土由来の黒色土である。5・6層は焼土で、土器を埋設する以前に地床炉として使用していた痕跡と考えられる。5層は強く熱を、6層はその周辺に広がる弱く熱を受けた層である。4層は土器を埋設する際の掘方で、5・6層を掘り上げ裏込め土として充填したものと推測され、微量に炭化物を含む。3層は黒色土であるが、熱を受け硬化している。土器埋設炉として機能していた際の、被熱痕と思われるが、変色しておらず、使用期間は短かったものと考えられる。1・2層はそれぞれBIV層土粒及び炭化物を含み、2層はさらに焼土粒を含むことから、埋設の際に土器内部に入れられた土と考える。

《埋土》BⅡ層土由来の黒から黒褐色土の単一層である。沢状の地形であり、上部は流出したものと推測する。

《出土遺物》 炉体土器 1 点(537.5 g)の他、その周辺及び焼土上面から縄文土器片が47点(1,121.3 g)、石器は二次加工ある剥片 3 点(148.3 g)、剥片 1 点(9.4 g)が出土した。このうち土器 2 点(第76図37・38)を図示した。37は炉体土器で、粗製の深鉢形土器である。内面には煤状炭化物が付着している。38は高台部である。胴部底面外側に煤状炭化物が付着している。

《時期・所見》本遺構の時期は、炉体土器及びその周辺の土器片から、縄文時代後期後葉と考えられる。

S I 1019竪穴建物跡(第21・38~40・76・77・83~85図、図版 4)

《位置・確認状況》 LR・LS・LT35・36グリッドに位置する。段丘縁辺の緩斜面でBⅡ②層土中及びBⅥ層地山土面で黒色土プランを確認した。

《重複》SKP1051・1052と重複し、それらよりも新しい。

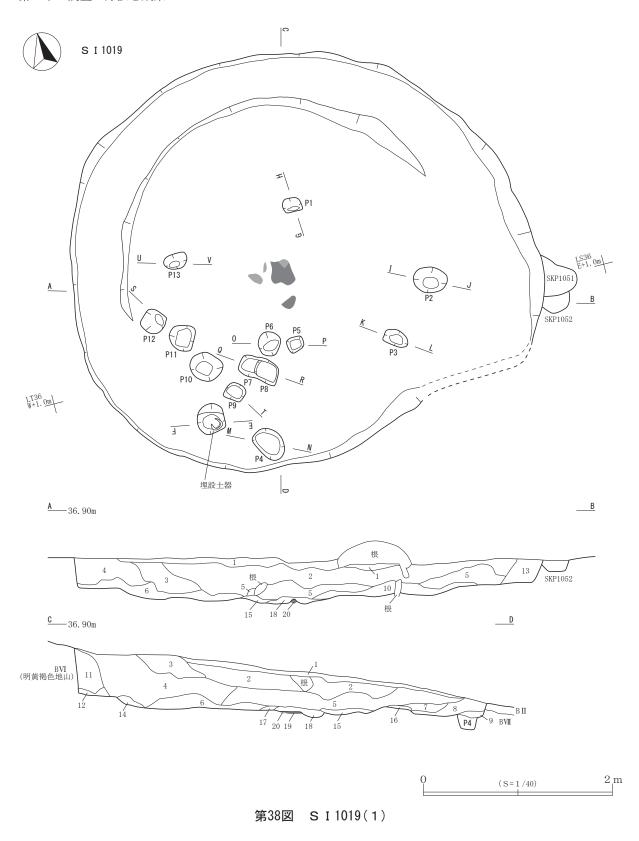
《規模・形態》平面形は、5.10m×4.59mの不整円形である。確認面から床面までの深さは16~56cm である。壁は急に立ち上がる。床面は全体的に平坦であるが、南側に向かって緩やかに傾斜する。また北側の壁際では、床面は三日月状に掘り残され、最大で12cmの高低差のあるテラス状(ベッド状)であるが、南側に向かうにつれ床面の高さと差がなくなる。

《柱穴》柱穴は、床面から全部で13基を検出した。竪穴建物の南西に集中している。いずれも埋土は、BⅢ層土由来の黒色土もしくは黒褐色土にBⅥ層土由来の黄褐色土粒や炭化物の混入する単一層である。平面形は、楕円形及び隅丸方形で、16~37cm×15~29cm、確認面からの深さは8~32cmである。

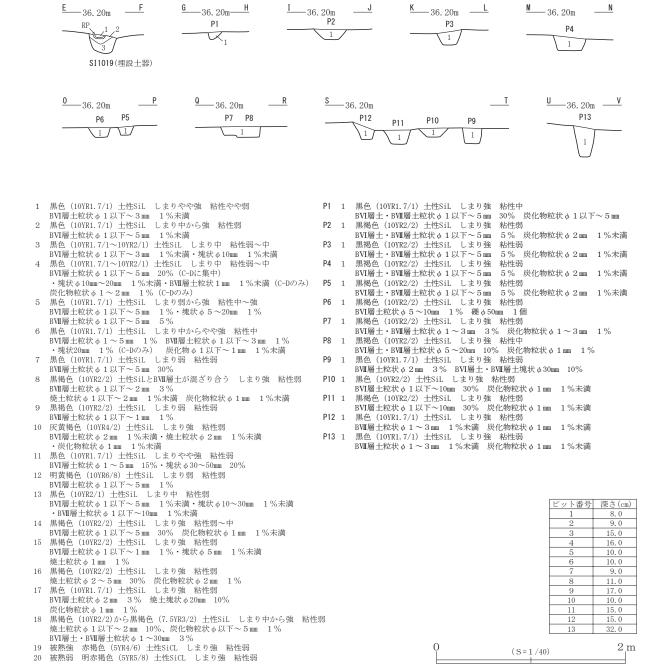
《炉》地床炉である。住居の中央に焼土面を確認した。焼土は、長軸約0.90mの不整形で床面からの厚さは最大で5cmである。燃焼部の周りに焼土粒・塊や炭化物が広がっていた。

《埋設土器》竪穴建物の床面南西端に位置する。34cm×30cmの不整円形の掘り込みに、口縁部から胴

第3章 調査の方法と成果



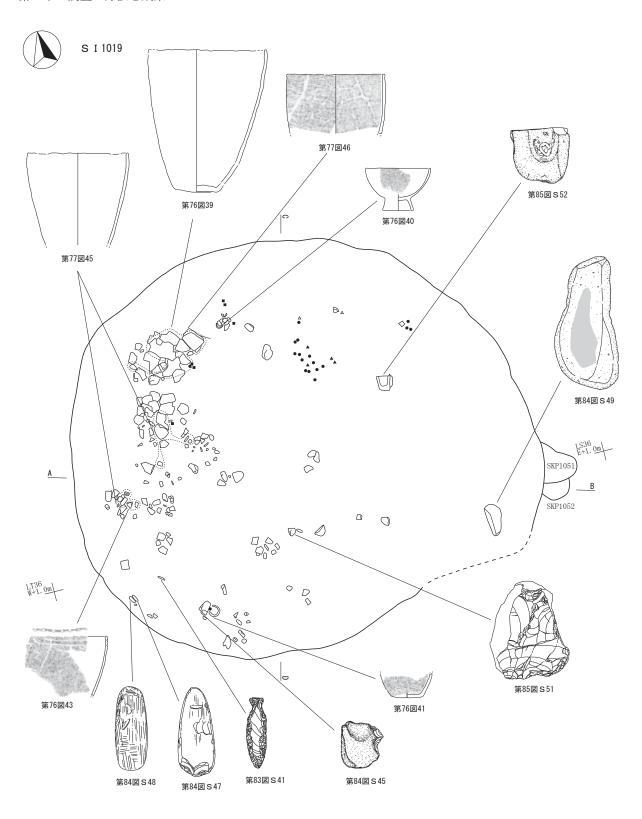
部を欠損した粗製の深鉢形土器底部が正位に埋設され、床面からの掘り込みの深さは、 $21 \, \mathrm{cm}$ である。 埋土は $3 \, \mathrm{層}$ に分けられた。いずれも $\mathrm{B} \, \mathrm{II} \, \mathrm{Ø}$ 居土由来の黒色土もしくは黒褐色土で $\mathrm{B} \, \mathrm{VI} \cdot \mathrm{B} \, \mathrm{VII} \, \mathrm{Ø}$ 地山土由来の黄褐色土・白色土塊を含んでいる。 $2 \cdot 3 \, \mathrm{Ø}$ は、土器を固定するための裏込土である。 $1 \, \mathrm{Ø}$ 器内埋土である。 $1 \cdot 2 \, \mathrm{Ø}$ に機量に焼土粒を含んでいるが、 $1 \cdot 2 \, \mathrm{Ø}$ 上には炉床としての被熱面が

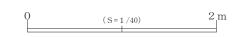


第39図 S I 1019(2)

なく、土器埋設炉としての使用はなかったものと考えられる。そのため焼土粒は、竪穴建物内の地床 炉に起因するものと考えられる。

《埋土》地床炉の焼土も含め20層に分けられた。BVI層地山土由来の黄褐色土を基調とする12層及び焼土の被熱である19・20層を除き、他はBII層土由来の黒色土を基調とする。1・2層は流入土と考えられる。BVI層土粒を微量に含む。3~10層はBVI層土粒などが混入することやしまりが弱いことから竪穴建物廃絶に関する人為堆積土と推定される。11~13層は壁際の土である。11・13層は黒色土にBVI・BVII層土由来の地山土粒や比較的大きな塊を含む。12層はBVI層土でありこれも人為堆積土と考えられる。壁の崩落がないことから、地山土は周辺から流入したものと推測される。17・18層は





第40図 S I 1019(3)

地床炉に由来する焼土や炭化物を多く含む。18層は地床炉の被熱痕を掘り込むように凹むことから、 灰や炭化物を掻き出した痕跡と考えられる。19・20層は地床炉の被熱層であり、19層は強く熱を受け 赤褐色であり、20層は弱い熱で、明赤褐色に発色している。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が836点(16,930.5g)、石器は石鏃1点(3.2g)、 石匙4点(60.2g)、石核2点(1,006.3g)、磨製石斧3点(248.1g)、石皿1点(4,864.3g)、敲石 2点(1,252.3g)、凹石1点(2,826.8g)、二次加工ある剥片16点(239.4g)、剥片108点(1,321.8g) が出土した。このうち、土器 8点(第76・77図39~46、図版14)、石器13点(第83~85図 S40~52、 図版18)を図示した。39は深鉢形土器で、わずかに内湾する口縁部から底部に向かって直線的にすぼ まる器形である。内外面に粗いケズリが行われる。40は台付鉢形土器で、口唇は平坦、わずかに内湾 する口縁部から丸みのある胴部にかけてLR原体の横位回転により縄文が付される。台部は胴部に比 べて大振りで、端部も平坦に面取りされていて安定感がある。41は深鉢形土器である。胴部下半には 短いLR原体の縦位回転により横位に縄文が施され、胴部下端には指頭圧痕が認められる。42は埋土 から出土した鉢形土器で、外反する口縁部からわずかにすぼまって膨らみのある胴部に至る器形であ る。口唇部には胴部に使用される原体の側面圧痕が付され、口縁部上端からLR原体の横位回転によ る斜縄文が付される。縄文施文後、3条の平行沈線が引かれ、その下に鋸歯文が描かれる。3条の平 行沈線は、変形工字文風の文様構成となる可能性がある。43は深鉢形土器で、内湾する口縁部からわ ずかに膨らみのある胴部に至る。口唇には間隔を置いた刻みがあり、口縁部上端からLR原体の横位 回転による斜縄文が付され、口縁部上端には玉抱三叉文がめぐる。44は鉢形土器で、外反する口縁部 から膨らみのある胴部に至る。口縁部上半で列点文を挟んで沈線がめぐる。胴部にはLR縄文が斜位 に付される。胎土、焼成、内外面の調整とも良好である。45・46は無文の深鉢形土器で、45は内湾す る口縁部から直線的に底部に至る。内外面とも横位、縦位の粗いケズリが行われ胎土の砂粒が器表面 に表れている。46は直立する口縁部から直線的に底部に至る。内外面に横位に施されるケズリの痕跡 が顕著である。42以外は床面直上から出土した。S40は石鏃、S41~S44は石匙、S45・S46は石核、 S47·S48は磨製石斧、S49は石皿、S50·S51は敲石、S52は凹石である。S41·S42は縦型、S43· S44は横型の石匙である。S47は刃部に使用剥離痕、基部に敲打剥離痕が、S48は基部に敲打剥離痕 がある。以上の遺物は、床面直上で多量に出土した。床面直上及び、その上に堆積した一括埋め戻し 土からの出土が比較的多く、竪穴建物廃絶に際し、土とともに埋められたものと考える。また、埋土 から黒曜石の二次加工ある剥片 1 点(3.4g)と剥片 1 点(0.7g)が出土し、産地推定の結果(第4章 第5節参照)、これらが男鹿産であることが判明した。

《時期・所見》本遺構の時期は、床面直上で出土土器の下限から縄文時代晩期初頭と推測される。また、本遺構内で検出された柱穴群は、 $P1\sim P3\cdot P5\cdot P6\cdot P13$ が地床炉を囲むように位置することから、主柱が据えられ上屋を支えていたものと推測される。その他の柱穴である $P4\cdot P7\sim P12$ は南側に集中していることから、出入り口など他の機能に関連するものと考えられる。

S I 1023竪穴建物跡(第24・41・42・77・85図、図版 4)

《位置・確認状況》 LF44・45グリッドに位置する。 B II 層黒色土中に石囲炉を確認した。その周囲は他よりも遺物が多く出土したことから、竪穴建物跡を想定し検出作業を行ったが、竪穴の掘り込みは確認できなかった。その後 B VI 層地山土面まで掘り下げたところ、石囲炉を中心に柱穴 6 基を確認

した。遺物分布状況と柱穴に囲まれた範囲がほぼ一致することから、石囲炉は竪穴建物に伴う炉であった可能性が高い。

《重複》なし。

《規模・形態》北東側は雨裂の落ち込みのため失われている。掘り込みも確認できないため正確な規模は不明である。柱穴の配列から想定される平面形は4.6m(推定値)×3.6m(推定値)の楕円形である。 《柱穴》柱穴は、石囲炉を中心に6基検出し、地山面から12~20cm程掘り込まれている。石囲炉のある床面からの深さは、59~66cmである。埋土はBII層土由来の黒色土の単一層である。

《炉》 B II 層土中を炉床としている。石組の平面形は直径0.80mの円形で、現存する礫は長軸12~27cmの円礫や角礫8 個である。そのうち北側の1 個は、掘り込みからずれた位置にある。また、南側には礫の掘り込みが存在することから、本来は9 個の礫で囲まれていたと推測する。埋土は石組の掘り込みの黒色土と焼土の2 層に分けられた。いずれも根による撹乱を受けている。

《埋土》石囲炉を検出した時点で周囲は掘り下げており、建物の埋土は不明である。床はBⅡ層土を 上面としている。

《出土遺物》石囲炉とほぼ同一面上から、縄文土器片が476点(5,813.6g)、石器はスクレイパー2点(21.8g)、敲石1点(381.3g)、磨石3点(2,317.7g)、二次加工ある剥片2点(81.0g)、剥片93点(674.4g)が出土した。このうち土器6点(第77図47~52、図版14)、石器6点(第85図 S53~58、図版18)を図示した。47は注口土器である。頸部と胴部の境には載痕列が1条めぐり、貼瘤が付される。胴部上半には連続する弧状文と載痕列が施される。48は深鉢形土器で、外反する口縁部から直線的に胴部に至る。尖った山形状の口縁で、口縁部上端からLR原体の横位回転による縄文が付される。口縁部の山形頂部下に竹管状工具による円形刺突が上下に2個付され、上の刺突からは口縁に沿って八の字状の沈線が2条引かれる。下の刺突からは2条一組の沈線の末端が刺突を巻き込むように施される。49・50は鉢形土器である。49は口唇には刻目が付され、頸部には羊歯状文がめぐる。50も口唇に刻みが付され、口縁部には太い沈線で入組三叉文が描かれる。胴部にはLR縄文が斜位から横位に付される。51は深鉢形土器で、内湾する口縁部から上半に最大径があり丸みのある胴部に至る。LR縄文が斜位から横位に付されている。52は鉢形土器か壺形土器であろう。胴部下端には調整時の指頭圧痕が顕著に残り、底部外面には笹葉状圧痕が認められる。S53・S54はスクレイパー、S55は敲石、S56~S58は磨石である。S55は敲打痕の他に片面に凹みがある。

《時期・所見》本遺構の時期は、晩期前半と考えられる。本建物跡に伴う出土遺物は、いずれも炉と同じ高さから出土することから、本建物跡は竪穴建物ではなく、平地式建物の可能性も考えられる。

S I 1041竪穴建物跡(第21・43図)

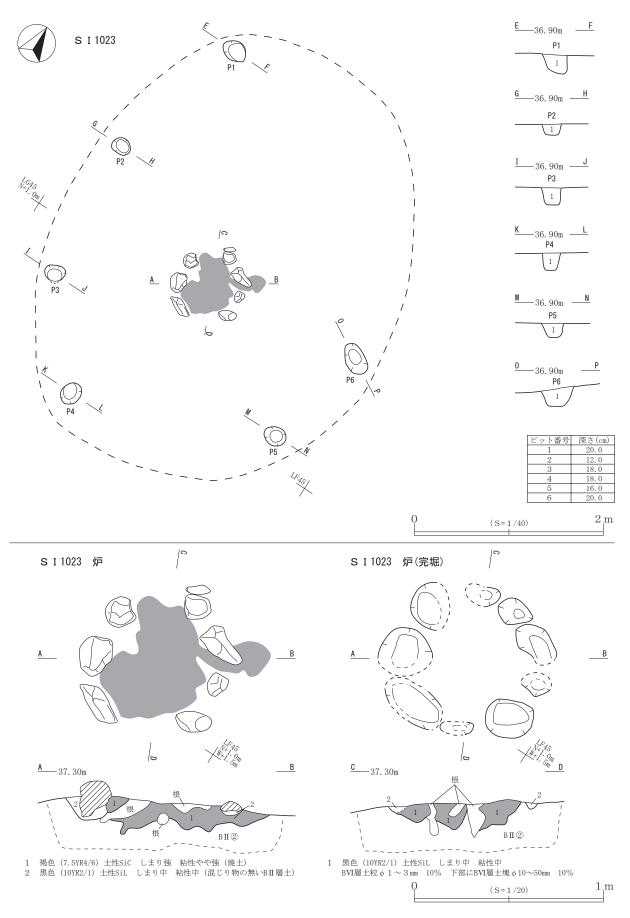
《位置・確認状況》 LR36グリッドに位置する。SI1043の北西肩部付近のBVI層地山土面で、焼土面を確認した。

《重複》SI1043と重複し、それよりも旧い。

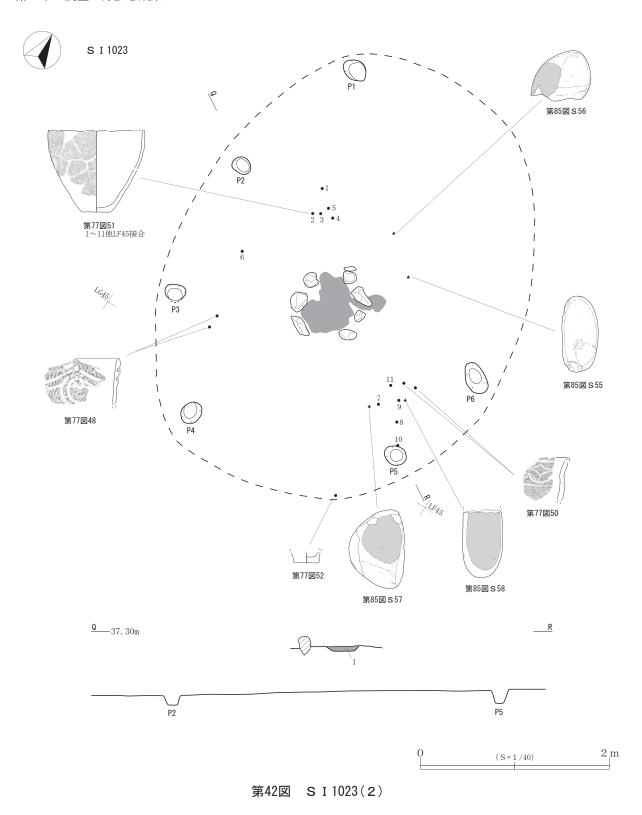
《規模・形態》焼土は、 $32 \text{cm} \times 16 \text{cm}$ (残存値)の楕円形で、確認面からの厚さは最大で7 cmである。 《炉》地床炉と考えられる。

《埋土》焼土は橙色の強い被熱面を中心とし、その周囲はにぶい黄橙色の弱い被熱である。

《出土遺物》BII層黒色土掘り下げ時に本遺構付近から、土器が比較的多く出土しており、本遺構に



第41図 S I 1023(1)



伴う遺物と推定されるが、周辺の遺物と合わせて取り上げたため、本遺構に伴う遺物として抽出できなかった。

《時期・所見》縄文時代晩期初頭と推測されるSI1043に切られているため、同時期かそれ以前のものと推測される。本遺構検出時、竪穴建物の存在を想定せず、上位の黒色土を掘り下げた。また本遺構はBVI層土面上で検出されたことから、一定程度掘り込まれた面に焼土が形成されたものと考えら

れる。その他、本遺構の周囲には、地床炉を伴う竪穴建物跡であるSI1019・1043の2棟が検出されている。以上のことから、本遺構は竪穴建物に伴う地床炉の可能性が高いと判断した。

S I 1043竪穴建物跡(第21・43図)

《位置・確認状況》 LQ・LR36グリッドに位置する。 B II ②層黒色土掘り下げ中、B VI 層地山土を掘り込んだ形跡を確認した。その掘り込みの中心を調査したところ、B VI 層直上で焼土面を確認した。このことから竪穴建物跡と判断した。 南側は、試掘坑により失われている。

《重複》SI1041と重複し、それよりも新しい。

《規模・形態》北から南へ緩やかに下る斜面に位置する。壁は地形が高い北半のみ確認した。平面形は2.84m(残存値)×1.52m(残存値)の楕円形と推測する。確認面からの深さは30cmである。北壁は急に立ち上がる。床面は平坦に近いが、南に向かって徐々に下がっていく。確認できた床面の高低差は9cmである。南半は床面がB II ②層土中に形成されていたと考えられる。

《柱穴》周囲に柱穴は検出されていない。

《炉》床面の中央付近で、地床炉を確認した。54cm×34cmの不整楕円形で、厚さは最大で4cmのわずかに残る被熱範囲を確認した。西側に強い被熱面が確認でき、それ以外の被熱は弱い。

《埋土》本遺構確認時には、すでに埋土が残存していなかったため、詳細は不明である。 B II 層土掘り下げ時に同時に掘削してしまったことから、 B II 層土由来の黒色土であったと推測される。

《出土遺物》BII 層土掘り下げ時に本遺構付近から、土器が比較的多く出土しており、本遺構に伴う遺物と推定されるが、周辺の遺物と合わせて取り上げたため、本遺構に伴う遺物は抽出できなかった。《時期・所見》本遺構の西に隣接するSI1019と、形態や構築位置が類似することから、本遺構の時期は縄文時代晩期初頭と推測される。

S I 1059竪穴建物跡(第24・43・77・85~86図、図版 4)

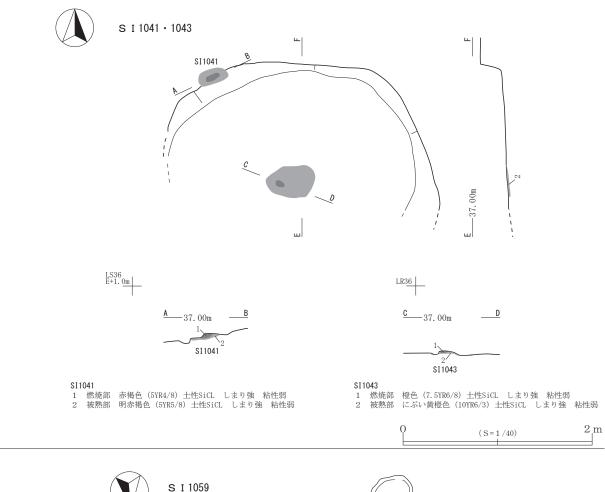
《位置・確認状況》 L C 44・45グリッドに位置する。 B II ②層黒色土掘り下げ中に、 B VI 層地山土面で埋設された深鉢形土器と、その周りを囲む被熱した石組を確認した。

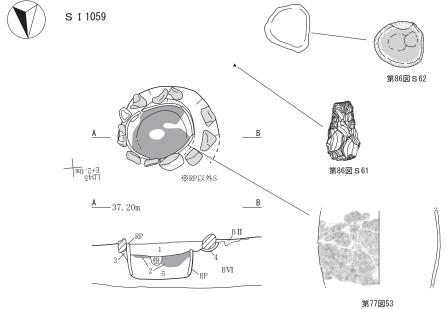
《重複》なし。

《規模・形態》炉のみを検出したため、建物の規模・形態は不明である。

《炉》環状に礫を立て並べ、その中心に土器を埋設する土器埋設石囲炉である。石囲部分は57cm×43cm、長軸7~13cmの円礫が10点使用される。礫には、被熱痕が観察できた。本遺構は、土器埋設後に、土器上端の周辺をさらに掘り込んで礫を配置したものと考えられる。炉体土器は口縁と底部が欠損した深鉢形土器で、正位に埋め込まれていた。掘り込みの平面形は41.5cm×32cm(残存値)の楕円形で、確認面からの深さは22cmである。一方、石囲の掘り込みの平面形は59cm(残存値)×45cm(残存値)の不整円形で、確認面からの深さは8cmである。埋土は5層に分けられた。1・3・4層はBII層土由来の黒色土である。1層は廃棄時の埋め戻し土である。3層は土器埋設の際の裏込め土で、その上に礫が置かれている。4層は3層と同様裏込め土と考えられるが、しまりが強い。礫を固定するため押し込んだためか、礫の重みで硬化した可能性が考えられる。2層は焼土面である。被熱の程度は弱く、使用期間が短かったものと推測する。5層はBVI層土由来の地山土を土器埋設後に、土器の内側へ埋めたものである。

《埋土》炉の石組周辺の堆積土から、BⅡ層土由来の黒色土であったと考えられる。





- 黒褐色 (10YR2/2) 土性SiL しまりやや強 粘性中 BVI層土粒状 ϕ 1 \sim 20mm 5%
- BVI層土粒状 φ 1 ~ 20mm 5 % 弱い被熱 黒色から黒褐色 (7.5YR2/1~10YR2/2) 土性SiL しまり強 粘性やや強 BVI層土粒状 φ 1 以下~ 1 mm 1 %未満 黒褐色 (10YR2/2) 土性SiL しまり弱 粘性中 BVI層土粒状 φ 1 以下~ 1 mm 15 % 黒褐色 (10YR3/2) 土性SiL しまり強 粘性弱 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 土性SiL しまりやや弱 粘性やや弱 BII層土塊状 φ 1 ~ 30mm 30 %

1 m (S = 1/20)

第43図 S I 1041 · 1043 · 1059

《出土遺物》炉体土器 1 点(1,360.0g)の他、土器埋設石囲炉の 1 層及び竪穴建物跡の埋土であった可能性がある L D 42 グリッド B II 層から、縄文土器片が64点(1,715.6g)、石器は石箆 2 点(125.6g)、打製石斧 1 点(413.3g)、石皿 1 点(7,800.0g)、二次加工ある剥片 1 点(22.5g)、剥片51点(287.2g)が出土した。このうち土器 1 点(第77図53、図版14)、石器 4 点(第85~86図 S 59~ S 62、図版19)を図示した。53は深鉢形土器で、胴部の最大径の部分を再利用した炉体土器である。 L R 縄文が斜位から横位に施されている。 S 59・S 60は石篦、 S 61は打製石斧、 S 62は石皿である。 S 60は刃部に使用剥離痕、基部に敲打痕を持つ石篦である。 S 61は稜の一部に摩耗痕がある。 S 62は炉の南西側から出土し、最大幅25cmの扁平な磨面の他に凹みもある。

《時期・所見》本遺構の時期は、炉体土器から縄文時代後期と考えられる。炉の周辺を精査する際、竪穴建物跡の掘り込みを確認するように努めたが、埋土がB II 層土由来の黒色土である可能性が高く、見分けが付かず掘り下げたものと考えている。しかし、土器埋設石囲炉はB VI 層土面上で検出されたことから、一定程度掘り込まれた面に構築されたものと考えられる。周辺のB VI 層上面が竪穴建物の床面である可能性が考えられる。

S I 1063竪穴建物跡(第20・44・45・77・86~87図、図版 4)

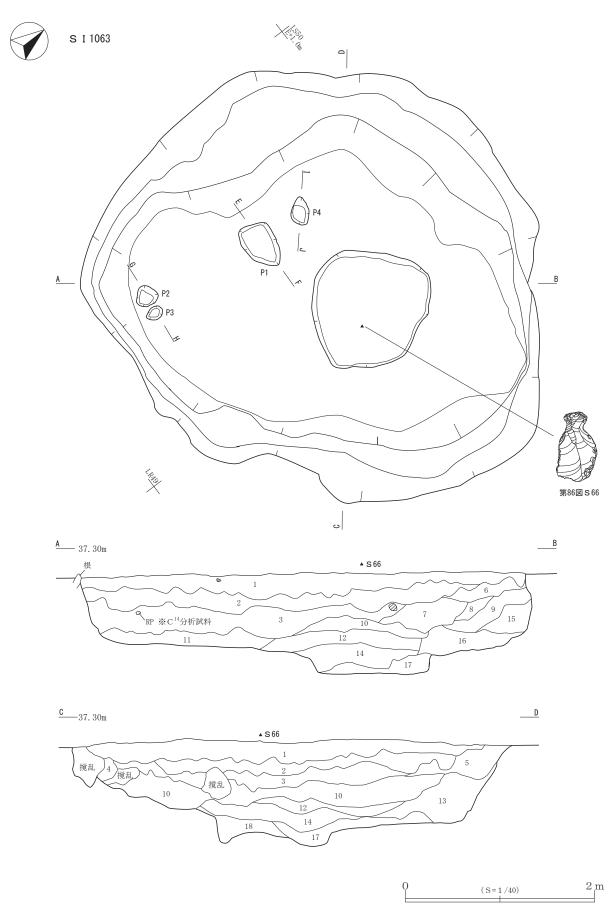
《位置・確認状況》 LQ・LR49・50グリッドに位置し、BVI層地山土面で黒色土プランを確認した。 《重複》切り合う遺構はないが、南西側で略楕円形の地割れ地形と考えられる自然地形を切る。

《規模・形態》平面形は4.76m×4.52mの略円形で、確認面から床面までの深さは0.84mである。竪穴はBVI層土を大きく掘り込んでおり、床面はほぼ平坦である。壁は急な角度で立ち上がり、開口部付近でやや外傾する。西から北側は最大幅約0.67m、床面からの高さが約0.3mのテラス状(ベッド状)の段が認められる。ただし南側の壁は比較的緩やかに立ち上がる。床面中央の掘り込みは、1.24m×1.22mの不整な隅丸方形で、床面からの深さが0.22mである。

《柱穴》床面で4基の柱穴を確認した。中央部掘り込みの西側に隣接して2基(P1・P4)、床面南西側に2基(P2・P3)が位置する。埋土は単一層で、にぶい黄褐色土に橙色土塊が混入する。 《炉》なし。

《埋土》18層に分けられた。 $1 \cdot 2$ 層はB Π 層土由来の黒色から黒褐色土を主体とし、 1 層は均質な 黒ボク土で混入物がほとんど認められず自然堆積土と考える。 2 層は 3 層との層界が漸移的であることから、 3 層堆積後に黒ボクが形成されていく過程で徐々に堆積したと考えられる。 $3 \sim 18$ 層は B Π 層土由来の暗褐色土から灰黄褐色土を主体とし、埋土下位の $12 \cdot 14 \cdot 17$ 層には砂層が帯状に混入する。 3 層以下は B Π 層地山土を塊状あるいは粒状に含むことから、建物廃棄直後の人為的な埋め戻しと考える。

《出土遺物》 $1 \sim 3$ 層から、縄文土器片が98点 (750.2g)、石器は石錐 2 点 (6.6g)、石匙 4 点 (74.8g)、トランシェ様石器 1 点 (31.3g)、スクレイパー10点 (180.2g)、石錘 1 点 (300.5g)、二次加工ある剥片12点 (353.0g)、剥片24点 (288.1g)が出土した。遺物の多くは埋土 1 層上位に集中する。確認面から深さ約40cmの 3 層より炭化物付着の縄文土器片が出土したが、4 層以下からは見つかっていない。このうち土器 1 点 (第77図54、図版14)、石器18点 $($86\sim87図S63\sim S80、図版19)$ を図示した。54は 1 層から出土した深鉢形土器胴部下半で、丸底の底部付近の破片と考えられ、0 段多条のLR縄文が付される。内面は無文で、胎土に繊維を含んでいる。 $S63 \cdot S64$ は石錐、 $S65\sim S68$ は石匙、S69は

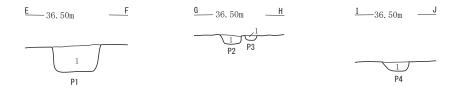


第44図 S I 1063(1)

- 1 黒色(10YR1.7/1) 土性SiL しまりやや弱 粘性やや弱
- BVI層土粒 ϕ 2 \sim 8 mm 1 % 黒褐色 (10YR2/2) 土性SiL しまりやや弱 粘性中
- BVI層土粒 φ 2 ~ 5 mm 2 % パミス φ 1 ~ 2 mm 1 % 暗褐色 (10 YR3/3) 土性SiL しまり中 粘性中 BVI層土粒 φ 2 ~ 10 mm 3 % パミス φ 1 ~ 2 mm 2 %
- 炭化物 ϕ 10mm 2% 暗褐色(10YR3/4) 土性SiL しまり中 粘性中 BVI層土粒 φ 1~20mm 3% パミス φ 1~2 mm 2% 炭化物 φ 3~5 mm 1 % 褐色 (7.5YR4/6) 土性SiL しまり中 粘性中 BVI層土塊 φ 5~50mm 5 %
- 明赤褐色から橙色土塊(2.5YR5/6~6/6)φ25mm 2%
- パミスφ1~2 mm 2% 褐色(10/rR4/4) 土性Sil しまり強 粘性中 BVI層土粒φ2~5 mm 2% パミスφ1~2 mm 灰黄褐色(10/rR4/2) 土性Sil しまり中 粘性中 BVI層土粒φ5~15 mm 5% パミスφ1~2 mm
- 褐色(10YR4/4) 十件SiL しまりやや強 粘性やや弱
- にぶい黄褐色(10YR4/3) 土性SiL しまりやや強 粘性 BVI層土塊 φ 5 ~ 25mm 5 % パミス φ 1 ~ 2 mm 3 % 粘性中

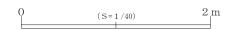
- 11 褐色(10YR4/6) 土性SiL しまりやや強 粘性中

- 11 褐色(10YR4/6) 土性SiL しまりやや強 粘性中
 BVI層土粒φ3~10mm 5% パミスφ1~2mm 3%
 12 にぶい褐色(7.5YR5/4) 土性SiL しまり中 粘性中
 BVI層土粒φ5~10mm 8% パミスφ1~2mm 5%
 13 橙色(7.5YR6/6) 土性SiL しまりやや強 粘性やや弱
 BVI層土粒φ2~5 mm 2% 橙色土塊(7.5Y6/8)φ15~30mm 15%
 バミスφ1~2 mm 2%
 14 にぶい黄褐色(10YR5/4) 土性SiL~8 しまりやや弱 粘性やや弱
- 帯状の砂(厚さ30~50mm)
- BVI層土塊 φ 5 ~ 30mm 10% パミス φ 1 ~ 2% 構 15 黄褐色(10YR5/6) 土性SiL しまり中 粘性やや弱
- 帯状の砂(厚さ30mm)
- 15 黄褐色(107Rs/6) 土性SiL しまり中 粘性やや弱
 BVI層土粒 43~5mm 3% バミス 41~2mm 1%
 16 明黄褐色(107Rs/8) 土性SiL しまり強からやや強 粘性やや弱
 BVI層土粒 42~10mm 10% バミス 41~2mm 2% 帯状の砂(厚さ30m
 17 黄褐色(107Rs/6~5/8) 土性SiL しまりや砂強 粘性やや弱
 BVI層土塊 42~10mm 10% バミス 41~2mm 2%
 18 明黄褐色から橙色(107Rs/6~7.5Y6/8) 土性SiL しまり中 粘性やや弱
 BVI層土粒 42~10mm 5% バミス 41~2mm 3% 砂 3%



- P1 1 にぶい黄褐色(10YR5/4) 土性SiL しまり中 粘性中 橙色土粒(7.5Y6/8) φ 5 ~15mm 5 %
- 位と工程(1.5 16/8) φ 3 ~ 15mm 3 %
 P2 1 にぶい黄褐色(10YR5/4) 土性SiL しまりやや弱から中 橙色土粒(7.5 Y6/8) φ 2 ~ 10mm 5 % 黒色土粒φ 5 mm 2 % 白パミスφ 1 ~ 2 mm 2 % 砂が下面厚さ約20mm帯状に堆積する
 P3 1 にぶい黄褐色(10YR5/4) 土性SiL しまり中 粘性中 橙色土粒(7.5 Y6/8) φ 2 ~ 5 mm 3 % 白パミスφ 1 ~ 2 mm 2 the state of the
- P4 1 黄褐色(10YR5/6) 土性SiL しまりやや強 粘性やや弱 橙色土粒(7.5Y6/8) φ 5 ~15mm 5 %

ピット番号	深さ(cm)
1	28. 0
2	9.0
3	5. 0
4	9. 0



第45図 S I 1063(2)

トランシェ様石器、S70~S79はスクレイパー、S80は石錘である。S65~S67は縦型、S68は斜型 の石匙である。S66は遺構確認面より上位で出土しているが、遺構内遺物として扱った。なお、本遺 構周辺からは尖底土器や貝殻腹縁文の土器が出土した。

《時期・所見》本遺構は、南西側に延びる地割れ地形を利用して構築された可能性がある。今回の調 査区北側に隣接する昭和55年度調査区では、円筒下層b式期の竪穴建物跡を6棟検出しているが、そ の埋土から縄文時代前期中葉の土器が出土し、黒ボク土の発達が確認できる。本遺構の3層以下では、 その黒ボク土以前に形成されたBW層土由来の暗褐色から灰黄褐色土を主体とすることから、本遺構 は前期中葉以前に埋没した可能性が高いと考えられる。なお、建物廃棄直後に堆積した3層で検出し た土器付着炭化物の放射性炭素年代測定値は、暦年較正年代9,095±31vrBPを示す(第4章第2節参照) ことから、廃棄時は縄文時代早期前葉から中葉頃の可能性が考えられる。

②円形柱穴列建物跡

本調査区のA区段丘斜面で9棟検出した。本遺構の時期は、近接して検出した杭状柱穴列が円形に 回るSI竪穴建物跡と類似する建物跡として、同時期の縄文時代後期と比定した。また、本遺構の埋 土は確認できず、遺構内出土遺物が不明な遺構も多いが、A区から出土した土器総重量は7,899点

(125, 207. 4kg)で、その内訳を時期ごとに示すと、縄文時代早期178点(約2. 8kg)、前期16点(約3. 3kg)、中期83点(約3. 2kg)、後期7, 693点(約113. 5kg)、晩期48点(約3. 5kg)、弥生時代1点(約0. 04kg)である。全体に占める各時期の土器片の割合を出土点数比/重量比の順で比較すると、早期2. 22/2. 25%、前期0. 20/2. 59%、中期1. 04/2. 56%、後期95. 93/89. 77%、晩期0. 60/2. 80%、弥生土器0. 01/0. 03%である。後期以外の土器の比率は低く、後期の占める割合が圧倒的に多いことから出土遺物の下限として本遺構の時期決定の資料とした。なお、A区からは縄文時代晩期と弥生時代の土器も少量出土しているが、本遺構の床面と想定される杭状柱穴列内の範囲以外からの出土である。

SIX64円形柱穴列建物跡(第17・46・87~88図)

《位置・確認状況》 $ML\sim MN42\cdot 43$ グリッドに位置する。AV層地山土面で杭状柱穴が回るプランを確認した。

《重複》SIX91・96・97・99、SK84・85・87、SKP99と重複する。本遺構P27・28は、SK85よりも新しい。他は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。SI112は本遺構の上面に構築される。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される平面形は、5.0m (推定値)×4.4m (推定値)の楕円形である。 《柱穴》円形に回る柱穴は26基(P1~P26)で、確認面での平面形は、直径が12cm以下の円形から長楕円形である。断面形はV字状の杭状で、確認面からの深さが2.5~19cmである。これらの底面標高は、最も高いP17が31.700m、最も低いP3が31.425mで最大27.5cmの高低差がある。埋土は、すべて単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土で、炭化物粒・材が混入している。建物内の中央付近と北東側に柱穴を6基(P27~P32)検出した。それらの平面形は21~99cm×16~68cmの楕円形または不整円形である。確認面からの深さは10~27cmである。

《埋土》建物跡の埋土は確認できなかった。

《出土遺物》柱穴列内の黒褐色土から、石器は石鏃1点(0.7g)、石錐1点(7.0g)、石匙3点(61.5g)、石篦4点(102.3g)、スクレイパー6点(200.6g)、石核1点(38.4g)、二次加工ある剥片30点(1,034.0g)、剥片130点(1,892.7g)が出土した。この他に赤色礫1点(162.6g)が出土した。また、P29から剥片1点(26.3g)が出土した。このうち石器15点(第87~88図S81~S95、図版20)を図示した。S81は石鏃、S82は石錐、S83~S85は石匙、S86~S89は石篦、S90~S94はスクレイパー、S95は石核である。S83・S84は縦型、S85は斜型の石匙である。

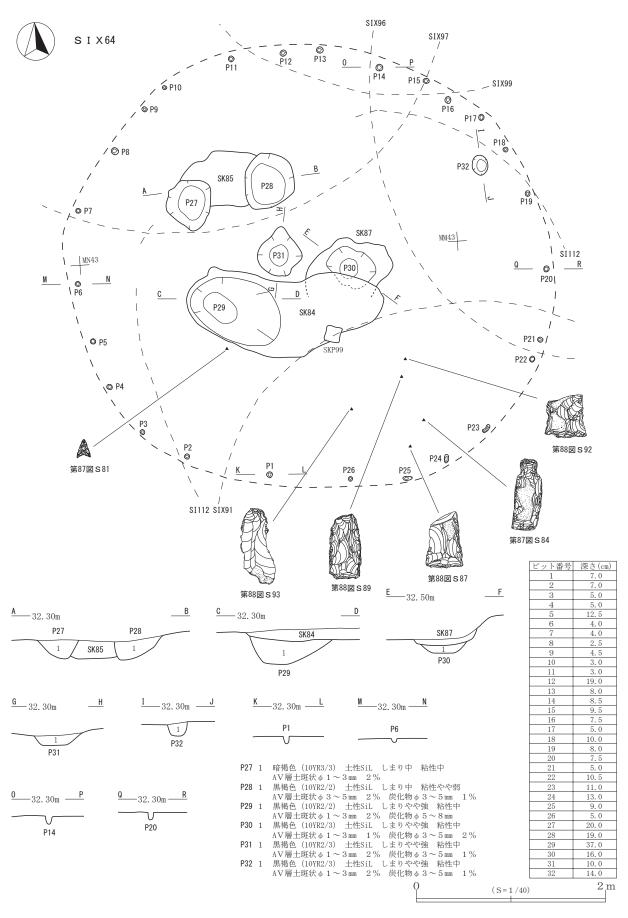
《時期・所見》本遺構の位置するグリッド内出土土器片のうち、縄文時代早期から中期土器片はわずかに20点で、下限である縄文時代後期の土器が多くを占めた。本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

S I X91円形柱穴列建物跡(第17・47図)

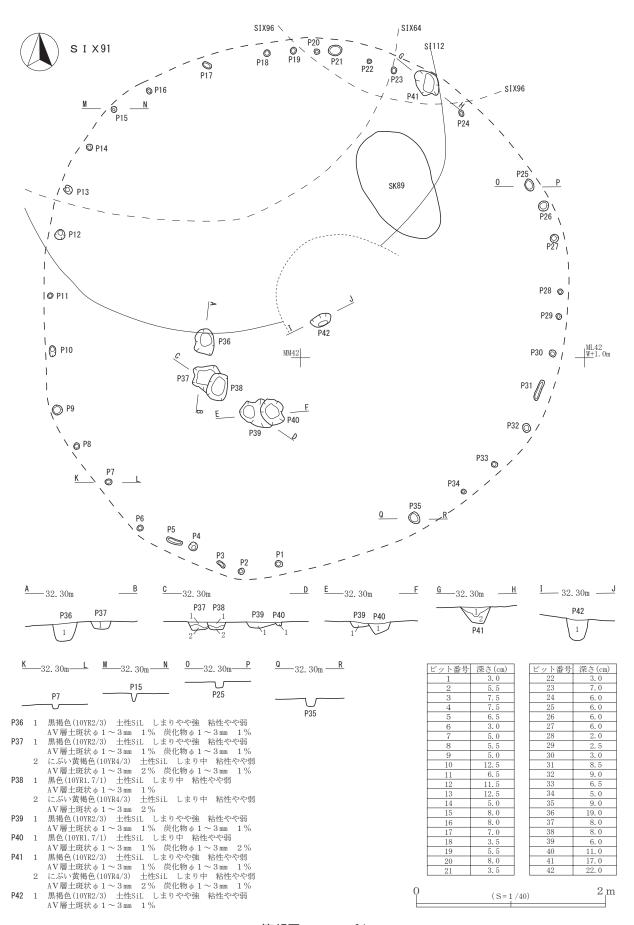
《位置・確認状況》ML・MM41・42グリッドに位置する。AV層地山土面で杭状柱穴が回るプランを確認した。

《重複》S I 112・S I X64・96、S K89と重複し、S I 112は本遺構よりも新しい。他は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される平面形は、5.8m(推定値)×5.6m(推定値)の略円形である。 《柱穴》円形に回る柱穴は35基($P1\sim P35$)で、確認面での平面形は、直径が24cm以下の円形から長



第46図 SIX64



第47図 SIX91

楕円形である。断面形はV字状の杭状で、確認面からの深さが $2\sim12.5$ cmである。これらの底面標高は、最も高いP26が31.670m、最も低いP6が31.395mで最大27.5cmの高低差がある。埋土は、すべて単一層でAIII層土由来の黒褐色土である。さらに建物内の南西側に $28\sim30$ cm× $20\sim28$ cmの柱穴が5基(P36 \sim P40)、同じく北東側に34cm×22cmの柱穴1基(P41)、中央から東寄りに24cm×12cmの柱穴1基(P42)がある。P36 \sim P40は、底面が平坦、壁は緩やかに立ち上がる。P42は底面が平坦で、壁は南側でほぼ垂直に立ち上がる。

《埋土》建物跡の埋土は確認できなかった。

《出土遺物》当該グリッドの黒及び黒褐色土中からは、縄文時代後期以前の土器や石器が出土した。 《時期・所見》本遺構の位置するグリッド内出土土器片のうち、縄文時代早期から中期土器片はわず かに23点で、下限である縄文時代後期の土器が多くを占めた。本遺構の時期は縄文時代後期と考えら れる。

SIX93円形柱穴列建物跡(第18・48図、図版4)

《位置・確認状況》MH・MI42・43グリッドに位置する。AV層地山土面で杭状柱穴が回るプランを確認した。

《重複》S I 52 c \sim e 、S K 26 · 29 · 30 · 37 、S K F 25 と重複する。本遺構 P 24 は、S K 37 よりも旧い。他は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》西側の柱穴が確認できなかったため、全体形状は不明であるが、柱穴の配列から想定される平面形は、4.8m(推定値)×4.0m(推定値)の楕円形である。

《柱穴》円形に回る柱穴は29基(P1~P29)で、円形列から外れる建物内の5基(P30~P34)も本遺構に伴うものと判断した。円形に回る柱穴列のうち、P26は細長い平面形状から複数の柱穴が柱の設置や抜き取りによって結合したものと考える。他は確認面での平面形は、直径が19cm以下の円形から長楕円形である。断面形はV字状で、確認面からの深さが3.5~20cmである。これらの底面標高は、最も高いP11が32.095m、最も低いP28が31.320mで最大77.5cmの高低差がある。埋土は、AIII層土由来の黒色から黒褐色土を主体とする。建物内の5基は全て南側にあり、南側の円形の杭状柱穴列から、P30が約1.8m、P31が約1.6m、P32が約1.4m、P33・P34が約1m内側に位置し、平面形は20~40cm×12~30cmの楕円形で、深さは8~22cmである。埋土は、AIII層土由来の黒褐色土を主体とする。

《埋土》建物跡の埋土は確認できなかった。

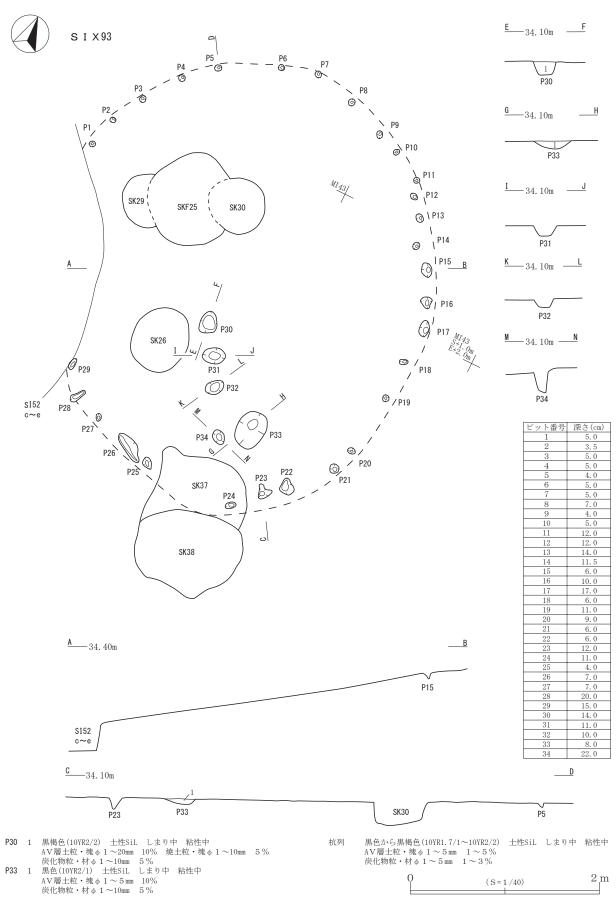
《出土遺物》当該グリッドの黒及び黒褐色土中からは、縄文時代後期以前の土器や石器が出土した。 《時期・所見》本遺構の位置するグリッド内出土土器片のうち、縄文時代早期から中期土器片はわず かに1点で、下限である縄文時代後期の土器が多くを占めた。本遺構の時期は縄文時代後期と考えら れる。

SIX96円形柱穴列建物跡(第17・18・49図)

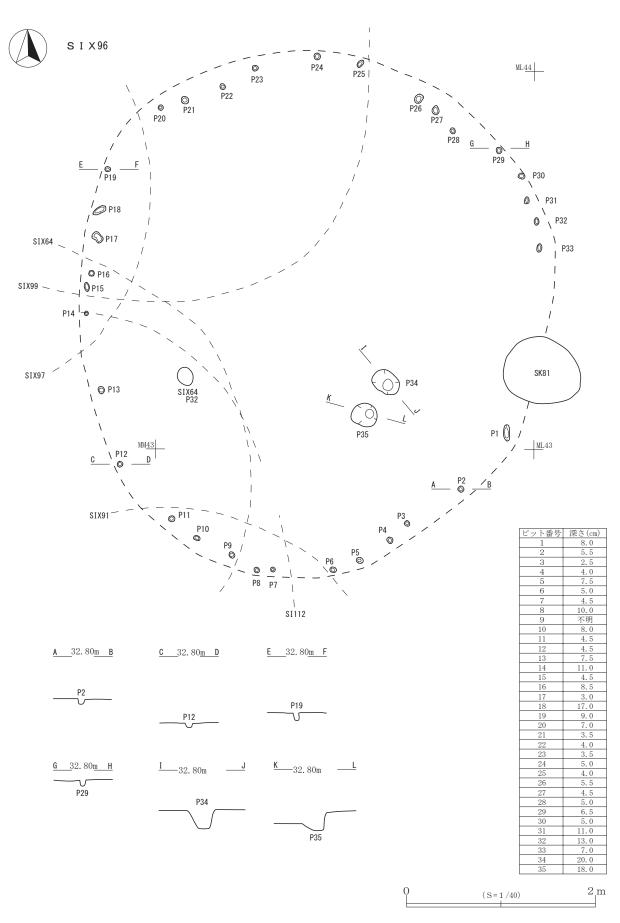
《位置・確認状況》MK43、 $ML42\sim44$ 、 $MM42\cdot43$ グリッドに位置する。AV層地山土面で杭状柱 穴が回るプランを確認した。

《重複》確認面では、SI112・SIX64・91・97・99、SK81と重複し、SI112は本遺構よりも新しい。他は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される平面形は、5.6m(推定値)×5.2m(推定値)の楕円形である。



第48図 SIX93



第49図 SIX96

《柱穴》円形に回る柱穴は33基($P1\sim P33$)で、確認面での平面形は、直径が18cm以下の円形から長楕円形である。断面形はV字状で、確認面からの深さが2.5~17cmである。これらの底面標高は最も高いP30が32.215m、最も低いP12が31.595mで最大62cmの高低差がある。埋土は、すべて単一層でAIII層土由来の黒褐色土である。さらに建物内の南東側に32cm×24cm(P34)、28cm×28cm(P35)の2基の柱穴を検出した。 $P34 \cdot P35$ は、底面が平坦で、壁は急に立ち上がる。なお、本遺構とSIX64との重複する位置にSIX64P32を検出した。その柱穴が本遺構に伴っていた可能性がある。

《埋土》建物跡の埋土は確認できなかった。

《出土遺物》当該グリッドの黒及び黒褐色土中からは、縄文時代後期以前の土器や石器が出土した。 《時期・所見》本遺構の位置するグリッド内出土土器片のうち、縄文時代早期から中期土器片はわず かに20点で、下限である縄文時代後期の土器が多くを占めた。本遺構の時期は縄文時代後期と考えら れる

S I X97円形柱穴列建物跡(第17・50図)

《位置・確認状況》MM・MN43・44グリッドに位置する。AV層地山土面で杭状柱穴が回るプランを確認した。

《重複》S I 112、S I X64・96・99、S K85と重複し、S I 112は本遺構よりも新しい。他は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される平面形は、5.2m (推定値) $\times 4.8m$ (推定値) の楕円形である。 《柱穴》円形に回る柱穴は27基($P1\sim P27$)で、確認面での平面形は、直径が20cm以下の円形から長楕円形である。断面形はV字状で、確認面からの深さが $2.5\sim 14cm$ である。これらの底面標高は最も高いP19が31.865m、最も低いP6が31.415mで最大45cmの高低差がある。埋土は、すべて単一層でAIII層土由来の黒褐色土である。なお、本遺構とSIX64との重複する位置にSIX64P27・P28を検出していることから、その柱穴が本遺構に伴っていた可能性がある。

《埋土》建物跡の埋土は確認できなかった。

《出土遺物》当該グリッドの黒及び黒褐色土中からは、縄文時代後期以前の土器や石器が出土した。 《時期・所見》本遺構の位置するグリッド内出土土器片のうち、縄文時代早期から中期土器片はわず かに20点で、下限である縄文時代後期の土器が多くを占めた。本遺構の時期は縄文時代後期と考えら れる。

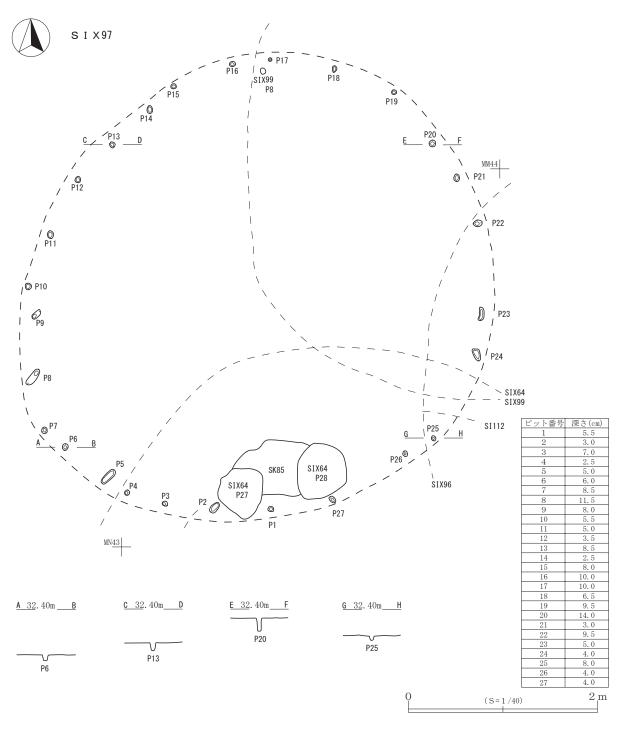
SIX99円形柱穴列建物跡(第17・51図)

《位置・確認状況》ML・MM43・44グリッドに位置する。AV層地山土面で杭状柱穴が回るプランを確認した。

《重複》SIX64・96・97と重複するが、地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される平面形は、5.2m(推定値)×5.0m(推定値)の楕円形である。 《柱穴》円形に回る柱穴は27基(P1~P27)で、確認面での平面形は、直径が16cm以下の円形から楕円形である。断面形はV字状で、確認面からの深さが2~14cmである。これらの底面標高は、最も高いP16が32.290m、最も低いP3が31.540mで最大75cmの高低差がある。埋土は、すべて単一層でAⅢ層土由来の黒褐色土である。

《埋土》建物跡の埋土は確認できなかった。

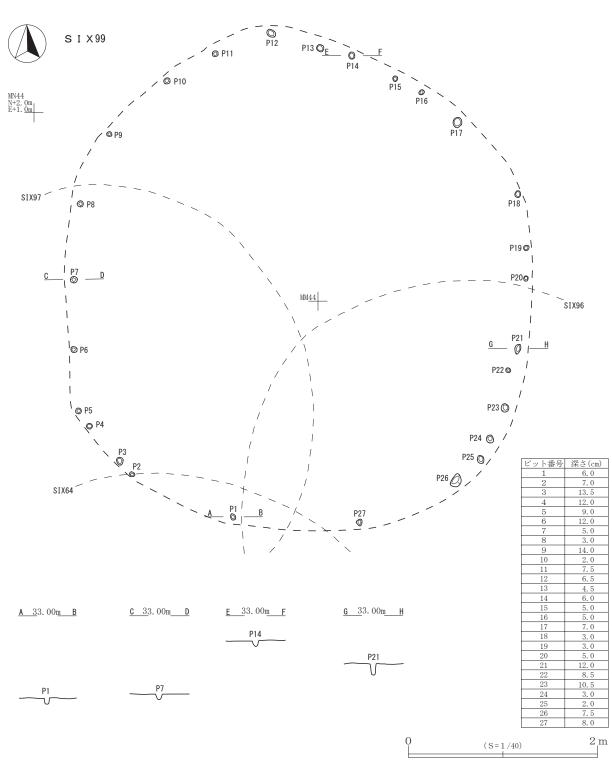


第50図 SIX97

《出土遺物》当該グリッドの黒及び黒褐色土中からは、縄文時代後期以前の土器や石器が出土した。 《時期・所見》本遺構の位置するグリッド内出土土器片のうち、縄文時代早期から中期土器片はわず かに15点で、下限である縄文時代後期の土器が多くを占めた。本遺構の時期は縄文時代後期と考えら れる。

SIX100円形柱穴列建物跡(第18・52図)

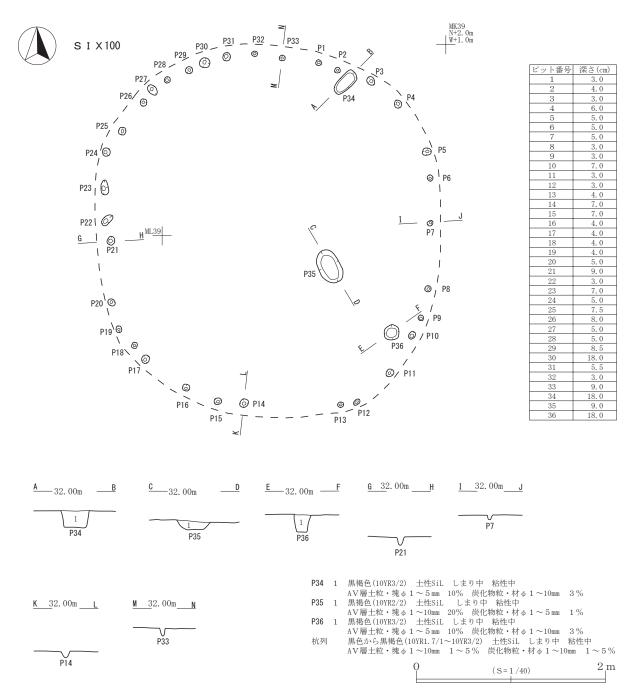
《位置・確認状況》 $MK \cdot ML38 \cdot 39$ グリッドに位置する。AV層地山土面で杭状柱穴が回るプランを確認した。



第51図 SIX99

《重複》なし。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される平面形は、 $4.0 \,\mathrm{m}$ (推定値) $\times 3.7 \,\mathrm{m}$ (推定値) の円形である。 《柱穴》円形に回る柱穴は33基($\mathrm{P}\,1 \sim \mathrm{P}\,33$)で、円形列から外れる建物内の3 基($\mathrm{P}\,34 \sim \mathrm{P}\,36$) も本遺構に伴うものと判断した。円形に回る柱穴は、確認面での平面形は、直径が $16 \,\mathrm{cm}$ 以下の円形から長楕円形である。断面形は $\mathrm{V}\,$ 字状で、確認面からの深さが $3 \sim 18 \,\mathrm{cm}$ である。これらの底面標高は、最も高



第52図 SIX100

いP 1 が31.765m、最も低いP14が31.485mで最大28cmの高低差がある。埋土はA III層土由来の黒色から黒褐色土を主体とする。建物内の3基は、P34が北側、P36が東側のいずれも円形の杭状柱穴列に近接し、P35は東側の中央よりに位置する。平面形は16~36cm×14~22cmの円形から楕円形で、深さは9~18cmである。埋土はA III層土由来の黒褐色土を主体とする。

《埋土》建物跡の埋土は確認できなかった。

《出土遺物》当該グリッドの黒及び黒褐色土中からは、縄文時代後期以前の土器や石器が出土した。 《時期・所見》本遺構の位置するグリッド内出土土器片のうち、縄文時代早期から中期土器片はわず かに43点で、下限である縄文時代後期の土器が多くを占めた。本遺構の時期は縄文時代後期と考えら れる。

SIX102円形柱穴列建物跡(第18・53図)

《位置・確認状況》M I ・M J 39~41グリッドに位置する。A V 層地山土面で杭状柱穴が回るプランを確認した。

《重複》SI18、SKF31、SN27と重複するが、地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。 SN27は本遺構のほぼ中央に位置する。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される平面形は、6.0m (推定値)×5.0m (推定値)の楕円形である。《柱穴》円形に回る柱穴は33基(P1~P33)で、円形列から外れる建物内の3基(P34~P36)も本遺構に伴うものと判断した。また、SI18P1・P7・P39・P40も本遺構の柱穴の可能性がある。円形に回る柱穴列のうち、P14の確認面での平面形は、20cm×16cmの楕円形で、深さは13cmである。埋土はAIII層土由来の黒色土を主体とする。なお、SI18P7も円形に回る柱穴列に位置する。P14・SI18P7以外の確認面での平面形は、直径が16cm以下の円形から長楕円形である。断面形はV字状で、確認面からの深さが3~11.5cmである。埋土はAIII層土由来の黒色土を主体とする。建物内の7基は、P34・P35が北側、SI18P39が南側の、いずれも円形の杭状柱穴列からわずかに内側に、P36がほぼ中央に位置する。P34~P36の平面形は16~24cm×12~24cmの円形から楕円形で、深さは6~18cmである。これらの底面標高は、最も高いP3が32.625m、最も低いP20が31.895mで最大73cmの高低差がある。埋土は、AIII層土由来の黒色から黒褐色土を主体とする。

《埋土》建物跡の埋土は確認できなかった。

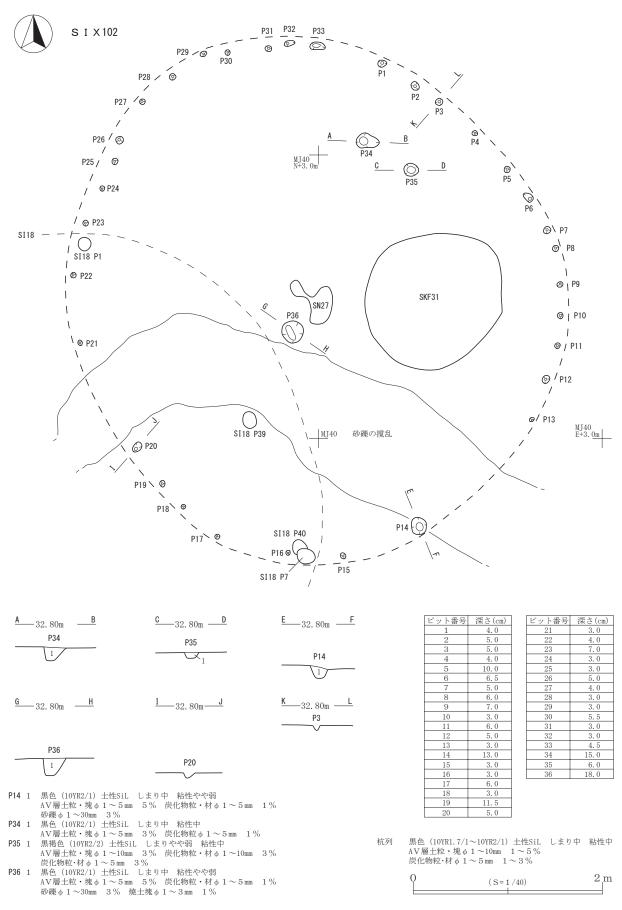
《出土遺物》当該グリッドの黒及び黒褐色土中からは、縄文時代後期以前の土器や石器が出土した。 《時期・所見》本遺構の位置するグリッド内出土土器片のうち、縄文時代早期から中期土器片はわず かに41点で、下限である縄文時代後期の土器が多くを占めた。本遺構の時期は縄文時代後期と考えら れる。SN27は本遺構中央付近に位置し、焼土内や周辺の同一面から出土した土器片の時期は十腰内 I・Ⅱ群相当であるので、SN27が本遺構に伴う地床炉の可能性がある。

SIX106円形柱穴列建物跡(第18・54図)

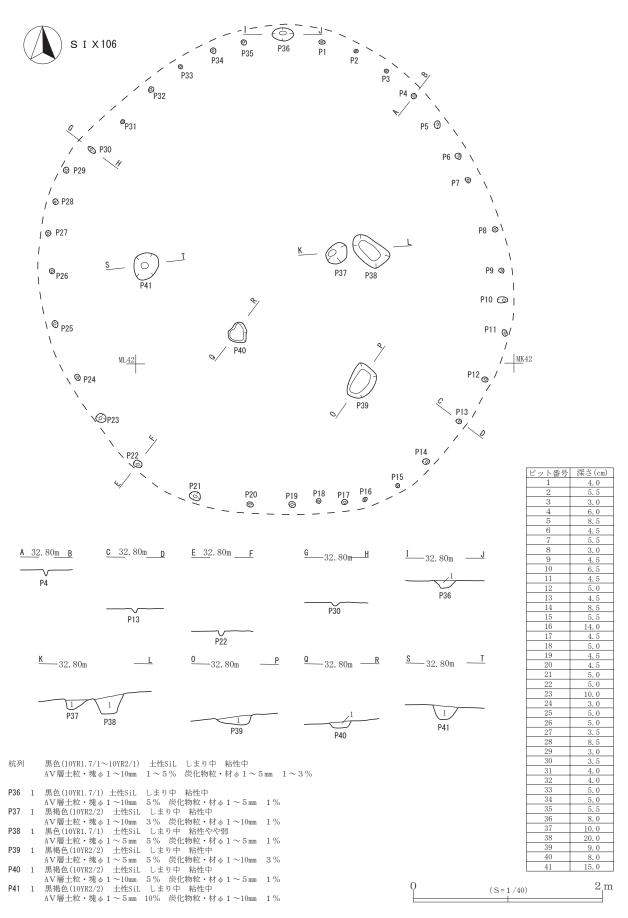
《位置・確認状況》MK・ML41・42グリッドに位置する。AV層地山土面で杭状柱穴が回るプランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》柱穴の配列から想定される平面形は、5.2m(推定値)×5.0m(推定値)の円形である。 《柱穴》円形に回る柱穴は36基(P1~P36)で、円形列から外れる建物内の5基(P37~P41)も本遺構に伴うものと判断した。円形に回る柱穴列のうち、P36の確認面での平面形は23cm×14cmの楕円形で、深さは8cmである。埋土はAⅢ層土由来の黒色土を主体とする。P36を除く他の平面形は、直径が13cm以下の円形から長楕円形である。断面形はV字状で、確認面からの深さは3~14cmである。これらの底面標高は、最も高いP4が32.590m、最も低いP22が31.955mで最大63.5cmの高低差がある。埋土はAⅢ層土由来の黒色土を主体とする。建物内の5基(P37~P41)は柱穴の円形列から1~2m内側に位置する。平面形は、22~42cm×10~27cmの不整円形から長楕円形で、深さは8~20cmである。埋土はAⅢ層土由来の黒色から黒褐色土を主体とする。



第53図 SIX102



第54図 SIX106

《埋土》建物跡の埋土の確認はできなかった。

《出土遺物》柱穴列内側の黒及び黒褐色土中からは、縄文時代後期以前の土器や石器が出土した。

《時期・所見》本遺構の位置するグリッド内出土土器片のうち、縄文時代早期から中期土器片はわずかに30点で、下限である縄文時代後期の土器が多くを占めた。本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

③掘立柱建物跡

本調査区からは3棟検出した。1棟は4本柱の方形の平面形である。他の2棟は調査区外に延びる可能性がある。遺構の時期は縄文時代後期前半1棟、不明2棟である。

SB12掘立柱建物跡(第15・55図)

《位置・確認状況》ML58、MM57・58グリッドに位置する。AⅢ層中において黒色土の柱穴群を確認し、そのうち5基を掘立柱建物跡の柱穴と判断した。

《重複》SB13と重複するが、直接の切り合いがないため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》柱穴(P1~P5)は、T字状に並ぶ。柱穴の平面形は、27~39cm×21~33cmの円形から長楕円形で、確認面からの深さは11~18cmである。P1・P2の底面はほぼ平坦で壁は急に立ち上がる。P3の底面は西側が平坦であるが、東側がやや窪み、壁は急に立ち上がる。P4の底面は中央部にやや盛り上がりがあり、壁は急に立ち上がる。P5の底面は平坦であるが、南側が低く、壁は急に立ち上がる。柱穴間の距離はP1-P2間が1.90m、P2-P3間が2.20m、P2-P4間が2.00m、P4-P5間が1.70mである。

《埋土》単一層である。主にAⅢ層土由来の黒色土でAV層土由来のにぶい黄褐色土が混入する。混入の割合は、多少異なるが、廃絶後一括して埋め戻された人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。柱穴間の距離が等しく、5基の柱穴が整然と並んでいたことから掘立柱建物跡と判断した。しかし本遺構は調査区が狭隘で遺構の続きが調査区外へ続いている可能性があり、詳細は不明である。

SB13掘立柱建物跡(第15・55図)

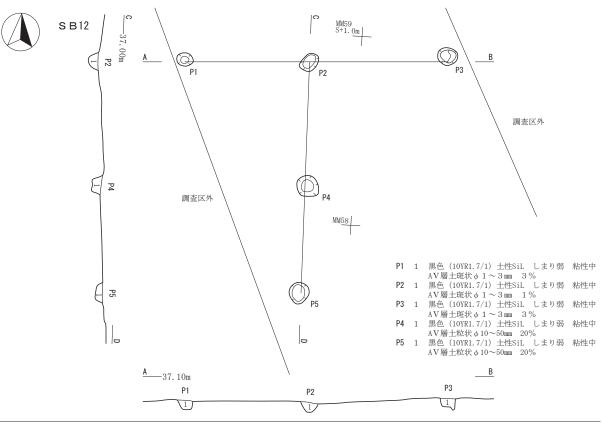
《位置・確認状況》ML57・58、MM58グリッドに位置する。AⅢ層中に黒色土の柱穴群を確認し、 そのうち4基を本建物跡の柱穴と判断した。

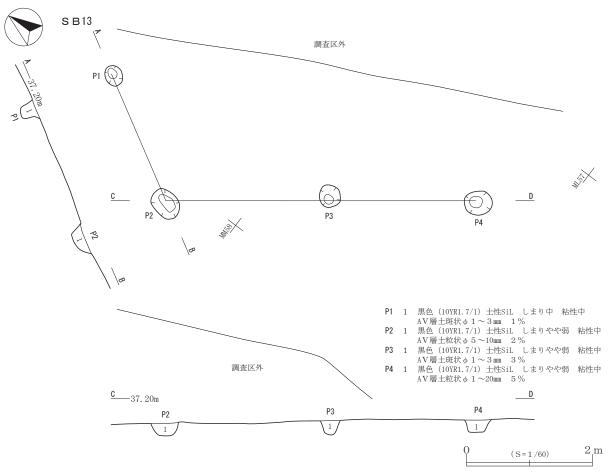
《重複》SB12と重複するが、直接の切り合いがないため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》柱穴は、直線上に並ぶ 3 基 $(P2\sim P4)$ とその直線上からやや離れた位置に検出した 1 基(P1) のやや開いたL字状に並ぶ。柱穴の平面形は、 $33\sim51$ cm $\times27\sim36$ cmの円形から長楕円形で、確認面からの深さは $19\sim25$ cmである。 $P1\cdot P2\cdot P4$ の底面はほぼ平坦で、P3 の底面はやや丸みがある。柱穴間の距離は $P1\sim P2$ 間が2.20m、 $P2\sim P3$ 間が2.60m、 $P3\sim P4$ 間が2.30mである。

《埋土》単一層である。埋土はAⅢ層土由来の黒色土で、AV層地山土由来のにぶい黄褐色土が混入する。AV層土の含まれる割合はそれぞれで異なるが、廃絶後に一括して埋め戻されたと考える。 《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。4基の柱穴のうち3基が直線上に並ぶことから





第55図 SB12·13

掘立柱建物跡の一部と判断した。本遺構は調査区外へ広がっており、詳細は不明である。

SB1045掘立柱建物跡(第21・56・77図、図版 4)

《位置・確認状況》 L Q37・38グリッドに位置する。 B VI 層地山土面において黒色土の柱穴群を検出し、そのうち4 基を本建物跡の柱穴と判断した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は 4 本柱の方形である。柱穴 $(P1\sim P4)$ の平面形は、 $21\sim 33$ cm× $21\sim 24$ cmの円形から楕円形で、確認面からの深さは $21\sim 34$ cmである。P1-P2 間の柱穴間の距離は1.84 m、P3-P4 間1.98 m、P1-P3 間2.32 m、P2-P4 間2.36 m、主軸方向はN-12° -W である。 《埋土》単一層である。B II 層土由来の黒色土を主体とする。B VI 層土粒が多量に混入することから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》P2の埋土上位では長軸約20cm×短軸10cm×厚さ5cmの扁平な角礫が斜位に埋納され、この角礫の周囲や上方で縄文時代後期の土器片が16点(1,146.0g)が集中して出土した。このうち土器1点(第77図55、図版14)を図示した。55は深鉢形土器で、外傾する口縁部から直線的に底部に至る。口唇は平坦で、口縁部上端から底部下半までR撚糸文が付され、内外面とも比較的丁寧に調整されている。

《時期・所見》本遺構の時期は、P2出土土器から縄文時代後期前半と推定される。P2からは扁平な角礫と同一個体の土器片がまとまって出土している。

4柱穴列

本調査区からは1列検出された。遺構の時期は縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

SA11柱穴列(第15・56図)

《位置・確認状況》ML・MM57グリッドに位置する。AⅢ層中において、黒色土の柱穴群を確認し、そのうち3基を柱穴列と判断した。

《重複》なし。

《規模・形態》柱穴(P1~P3)は、直線上に3基並ぶ。柱穴の平面形は、柱穴P1が27cm×24cmの不整円形、P2が26cm×22cmの不整円形、P3が26cm×22cmの長楕円形である。確認面からの深さはP1が14cm、P2が10cm、P3が6cmである。柱穴間の距離はP1-P2間が1.90m、P2-P3間が2.40mで、直線方向はN-70°-Wである。

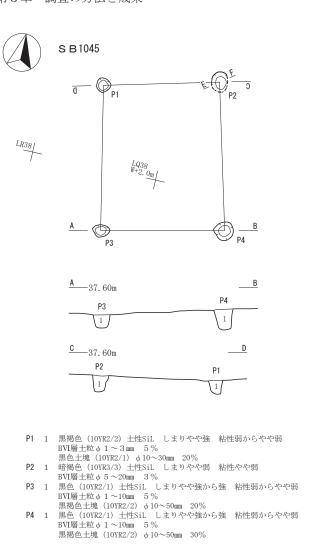
《埋土》単一層である。埋土は、AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層地山土由来のにぶい黄褐色土が塊状に混入する。廃絶後に一括して埋め戻された人為堆積土である。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は出土遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、AⅢ層は縄文時代の遺構検出 面であることから、同時代と考えられる。本遺構の南側は、側溝工事や植林された根による撹乱を受 けていることと、東西方向に調査区が狭隘であることから、調査区外へ遺構が広がる可能性がある。

⑤土坑

本調査区からは48基検出した。このうち17基は、埋土の遺物や縄文時代の遺構の切り合い関係から 縄文時代に帰属する。詳細は、縄文時代早期前葉から中葉1基、後期後葉以前1基、後期以前3基、 後期前半1基、後期後葉4基、後期後半1基、後期4基、後期後葉以降1基、後期以降1基である。

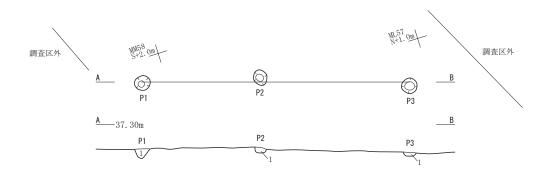


第77図55 SB1045 P2 ※S以外はRP ___F E___37.60m $1 \, \mathrm{m}$ (S = 1/20)

 $2 \, \mathrm{m}$ (S = 1/60)



S A 11



 P1
 1
 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性やや弱AV層土斑状φ1~3mm 2%

 P2
 1
 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性やや弱AV層土粒状φ1~5mm 2%

 P3
 1
 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性やや弱AV層土斑状φ1~3mm 2%

 $2_{\rm m}$ (S = 1/60)

第56図 SB1045、SA11

この他の31基についても、段丘上で検出された他の縄文時代の遺構と埋土が類似することから縄文時代に帰属すると考えられる。

SK02土坑(第16·57図、図版5)

《位置・確認状況》MI46・47グリッドに位置する。AV層地山土面でSKF03と重複する暗褐色土プランを確認した。

《重複》SKF03と重複し、それよりも新しい。

《規模・形態》平面形は $1.06m \times 0.98m$ の円形で、確認面からの深さは0.58mである。壁はやや急に立ち上がり、底面は丸みがある。

《埋土》2層に分けられた。両層ともAⅢ層土由来の暗褐色土を主体とし、AV層土由来の明黄褐色土粒・塊を含むことから、一括の人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられるSKF03より新しく、縄文時代後期 以降と考えられる。

SK04土坑(第18·57図、図版5)

《位置・確認状況》MH45グリッドに位置する。AV層地山土面で黒褐色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は1.04m×0.90mの楕円形で、確認面からの深さは0.16mである。壁は短く急に立ち上がり、底面は丸みがある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来の明黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》縄文土器底部片が1点(108.8g)が出土した。小片であるが、縄文時代後期の可能性が考えられる。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代後期と考えられる。

SK09土坑(第15・57図)

《位置・確認状況》MN61・62グリッドに位置する。調査区境界東側断面でAⅢ b・ c 層中から掘り込む黒色土の断面を確認した。

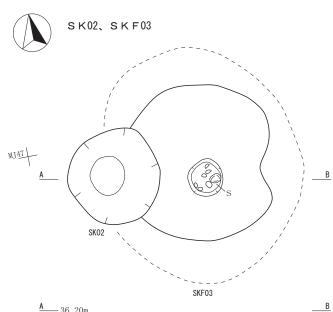
《重複》なし。

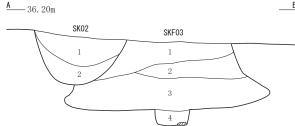
《規模・形態》一部が調査区外に続いているため、規模は不明である。確認可能な最長部分は 0.90m、確認面からの深さは0.22mである。壁はやや急に立ち上がり、底面は凹凸があるが全体的に は丸みがある。

《埋土》AV層地山土の混入の割合やその形状で、2層に分けられた。1層はAⅢ層土由来の黒色土で、AV層土由来のにぶい黄褐色土が粒状に、2層では同じ黒色土中にAV層土由来で径5cm前後の塊状の黄褐色土の混入が認められた。2層は掘削時にAV層上面の一部が削られて塊が落ちたもので、1層はその後一括して人為的に埋め戻されたものと考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構の詳細な時期は不明であるが、AⅢ層は縄文時代の遺構検出面であることから、同時代と考えられる。





SK02

- 暗褐色 (10YR3/3) 土性SiL しまり中 粘性やや弱
- 1 暗物色 (101K3/3) 主性SiL しまり中 粘性やや弱 AV層土粒・塊φ1~30mm 30% 炭化物粒・材φ1~5 mm 1% 2 暗褐色 (10YR3/3) 土性SiL しまりやや弱 粘性やや弱 AV層土粒・塊φ1~100mm 40% 炭化物粒・材φ1~10mm 1%

SKF03

- KF03

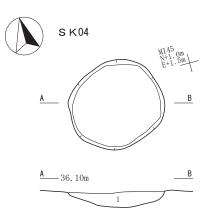
 1 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~10mm 5% 炭化物粒・材φ1~5 mm 1%

 2 暗褐色 (10YR3/3) 土性SiL しまりやや弱 粘性やや弱 AV層土粒・塊φ1~100mm 40% 炭化物粒・材φ1~5 mm 1%

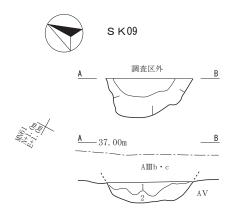
 3 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまりやや弱 粘性中 AV層土粒・塊φ1~50mm 20% 炭化物粒・材φ1~5 mm 1%

 4 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり弱 粘性中 AV層土粒・塊φ1~20mm 1%

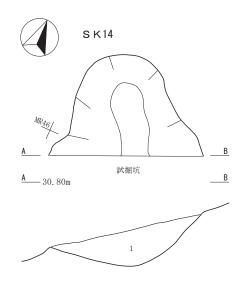
 4 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり弱 粘性中 AV層土粒・塊φ1~20mm 10% 炭化物粒・材φ1~5 mm 1%



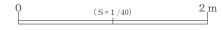
黒褐色 (10YR2/2) 土性SiL しまりやや弱 粘性中 AV層土粒・塊φ1~40mm 30% 炭化物粒・材φ1~10mm 1%



- 1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまりやや弱 粘性中 AV層土塊状よ10~50mm 5 % 2 黒褐色 (10YR3/1) 土性SiL しまり弱 粘性中 AV層土斑状 4 1~3 mm 5 %



1 暗褐色 (10YR3/3) 土性SiL しまりやや弱 粘性中 AV層土斑状 ϕ 3 \sim 5 mm 3 % 炭化物 ϕ 3 \sim 5 mm 1 %



第57図 SK02·04·09·14、SKF03

SK14土坑(第17·57図)

《位置・確認状況》MQ45・46グリッドに位置する。範囲確認調査時の試掘坑北側断面で、AⅢ a 層暗褐色土を掘り込む黒褐色土の立ち上がりを確認した。南東側が試掘坑により掘削されて欠失しているが、長軸がほぼ南北方向を指す。

《重複》なし。

《規模・形態》遺構の南東側が欠失しているため、全体形状は不明である。確認できる平面形は楕円形を短軸で半分にした形で、1.10m(残存値)×1.65mである。確認面からの深さは0.40mで、壁は緩やかに立ち上がり底部はやや丸みがある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土に炭化物が混入する。一括して埋め戻された人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構の時期は、AⅢ a 層土を掘り込んで構築されていることから、縄文時代の遺構と推定される。

SK24土坑(第16・58・88図)

《位置・確認状況》ML50グリッドに位置する。AV層地山土面で黒色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は2.16m×0.70mの隅丸長方形である。確認面からの深さは0.30mで、壁は急に立ち上がる。底面は北と南側がやや高く、中央はほぼ平坦である。

《埋土》AV層土由来のにぶい黄褐色土の混入割合で2層に分けられた。1・2層とも、AⅢ層土由来の黒色土にAV層土が塊状に混入することから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、石器は石篦 1 点(53.6g)、二次加工ある剥片 2 点(25.2g)、剥片 2 点(119.3g)が出土した。このうち石器 1 点(第88図 S 96、図版20)を図示した。

《時期・所見》本遺構は、直上にスギの根による撹乱があったことから、黒色土中で平面精査ができなかった。しかし、壁が低いことから、本来はAⅢ層中から掘り込まれていた可能性が高い。AⅢ層は縄文時代の遺構検出面であることから、同時期と考えられる。

S K 26土坑(第18・58図、図版 5)

《位置・確認状況》MI42グリッドに位置する。AV層地山土面で黒褐色土プランを確認した。

《重複》SIX93と重複するが、地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は $0.70m \times 0.60m$ の楕円形で、確認面からの深さは0.26mである。壁は東側がやや急に、他は急に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK29土坑(第18·58図、図版5)

《位置・確認状況》MI42グリッドに位置する。SKF25の精査中に壁面に黒褐色土の掘り込みを確認した。平面形はAV層地山土面で確認した。

《重複》SIX93、SKF25と重複する。SKF25の完掘後に確認したため、本遺構との新旧関係は不明である。SIX93は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は0.56m×0.38m(推定値)の楕円形と推定する。確認面からの深さは0.28mである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。土坑としたが、底面に径0.21mの円形のごく浅い窪みがあり、柱当たりと推定すれば柱穴の可能性もある。

SK30土坑(第18·58図、図版5)

《位置・確認状況》MI42グリッドに位置する。AV層地山土面でSKF25の精査中に同遺構と重複する黒褐色土プランを確認した。

《重複》SIX93、SKF25と重複し、SKF25よりも新しい。SIX93は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は0.62m×0.48m(推定値)の楕円形と推定する。確認面からの深さは0.40mである。壁は西側でほぼ垂直に、他は急に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《埋土》2層に分けられた。1層はAⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含む。2層はAV層土のにぶい黄褐色土粒・塊を主体とし、AⅢ層黒褐色土を含む。 1・2層の土質は類似し、一括の人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、SKF25との新旧関係から縄文時代後期後葉以降である。詳細な時期が不明である。

SK33土坑(第18·58図、図版5)

《位置・確認状況》MH40・41グリッドに位置する。SI21の床面で黒色土プランを確認した。

《重複》SI21と重複するが、新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は1.00m×0.66mの楕円形で、確認面からの深さは0.21mである。壁は北側がやや緩やかで、他は急に立ち上がる。底面は北側がわずかに高く、中央部にかけて緩やかに傾斜する。南側はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層地山土由来のにぶい黄褐色土粒・塊、焼土粒・塊、炭化物を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構の時期は、SI21の床面で検出したのでSI21と同時期の縄文時代後期か、それ以前と考えられる。埋土に焼土粒・塊や炭化物を含み、SI21の地床炉や石囲炉に隣接することから、SI21に伴う施設の可能性も考慮されるが、ここでは別遺構とした。

SK34土坑(第18·58図、図版5)

《位置・確認状況》MH41グリッドに位置する。SI21の床面で黒色土プランを確認した。

《重複》SI21と重複するが、新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は $0.56m \times 0.54m$ の円形で、確認面からの深さは0.12mである。壁は西側がほぼ垂直で、他は急に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層地山土由来の明黄褐色土粒・塊、焼土粒・塊、炭化物を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構の時期は、SI21の床面で検出したのでSI21と同時期の縄文時代後期か、それ以前と考えられる。埋土に焼土粒・塊や炭化物を含み、SI21の地床炉や石囲炉の周辺に位置することから、SI21に伴う施設の可能性も考慮されるが、ここでは別遺構とした。

SK36土坑(第16·58図、図版5)

《位置・確認状況》MK47グリッドに位置する。AV層地山土面に暗褐色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $1.00m \times 0.84m$ の楕円形で、確認面からの深さは0.15mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は緩やかに丸みがある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の暗褐色土にAV層土由来の黄褐色土粒が混入しており、炭化物も見られる。一括して埋め戻された人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK37土坑(第18・59図)

《位置・確認状況》MH・MI41・42グリッドに位置する。AV層地山土面でSIX93・SK38と重複する暗褐色土プランを確認した。

《重複》SIX93、SK38と重複し、SK38よりも旧い。SIX93は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》 S K 38に切られるため、全体形状は不明であるが、平面形は1.16m×0.74m (推定値) の楕円形と推定する。確認面からの深さは0.34mである。壁は西側がやや急で、他は緩やかに立ち上がる。底面には凹凸がある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の暗褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

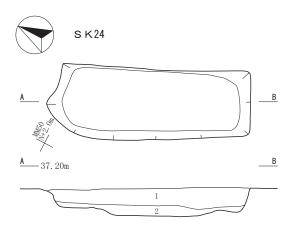
SK38土坑(第18·59図)

《位置・確認状況》MH・MI41・42グリッドに位置する。AV層地山土面でSK37・SIX93と重複する黒褐色土プランを確認した。

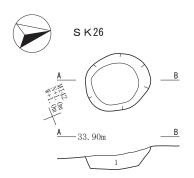
《重複》SIX93、SK37と重複し、SK37よりも新しい。SIX93は地山土面で確認したため、新 旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は1.14m×0.98mの不整円形で、確認面からの深さは0.33mである。壁は西側がやや急で、他は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸がある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊

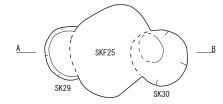


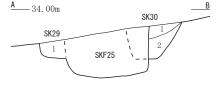
- 1 黒色(10YR1.7/1)土性SiL しまりやや弱 粘性やや弱 AV層土塊状φ10~80m 3% 2 黒色(10YR1.7/1)土性SiL しまりやや弱 粘性やや弱 AV層土塊状φ5~40m 10%



1 黒褐色 (10YR3/2) 土性SiL しまりやや強 粘性弱 AVI層土粒・塊 ϕ 1 \sim 20m ϕ 20% 炭化物粒 ϕ 1 \sim 5 m ϕ 1 %



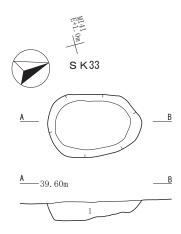




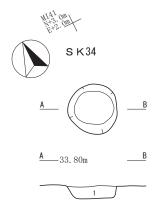
SK29

3723 1 黒褐色 (10YR3/2) 土性SiL しまり中 粘性弱 AV層土粒・塊φ1~70mm 30% 炭化物粒・材φ1~10mm 2%

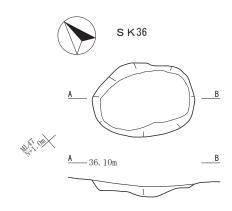
- SK30
 1 黒褐色 (10YR3/2) 土性SiL しまり中 粘性弱 AV層地山土粒・塊φ1~50mm 40% 炭化物粒・材φ1~5 mm 1%
 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土性SiCL しまり強 粘性中 AIII 層黒褐色土粒・塊斑状 20% 炭化物粒φ1~5 mm 1%未満



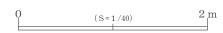
1 黒色(10YR2/1) 土性SiC しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~30mm 30% 焼土粒・塊φ1~5mm 5% 炭化物粒・材φ1~20mm 5% 砂礫φ1~20mm 3%



1 黒色(10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~20mm 10% 焼土粒・塊φ1~10mm 1% 炭化物粒・材φ1~10mm 5% 砂礫φ1~10mm 1%



1 暗褐色(10YR3/4)土性SiL しまり中 粘性中 AV層土斑状 ϕ 1 \sim 3 mm 3 % 炭化物 ϕ 1 \sim 3 mm 1 %



第58図 SK24·26·29·30·33·34·36

を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK40土坑(第18·59図)

《位置・確認状況》MJ44グリッドに位置する。AV層地山土面でSK108と重複する黒色土プランを確認した。

《重複》SK108と重複し、それよりも旧い。

《規模・形態》 S K 108に切られるため、全体形状は不明であるが、平面形は $0.88 \,\mathrm{m}$ (推定値) × $0.74 \,\mathrm{m}$ の楕円形と推定する。確認面からの深さは $0.28 \,\mathrm{m}$ である。壁はやや急に立ち上がり、底面は丸みがある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK43土坑(第18·59·77図)

《位置・確認状況》MI・MJ42グリッドに位置する。試掘坑北側断面で掘り込みを確認し、平面形はAII層掘削後にAIII b層上面で黒色ナプランを確認した。

《重複》SI52e、SK44と重複し、それらよりも新しい。

《規模・形態》平面形は3.34m×2.06mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.34mである。壁は東側が緩やかに、他はやや急に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が15点(292.7g)、石器は二次加工ある剥片2点(69.4g)、剥片9点(63.2g)が出土した。このうち土器1点(第77図56、図版15)を図示した。56は深鉢形土器か鉢形土器である。山形の口縁部分で、頂部から口縁部に沿って磨消縄文により縄文帯が八の字に延び、中央にもおそらく矩形に画す縄文帯が垂下する。胎土、焼成とも良好である。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代後期後葉と考える。

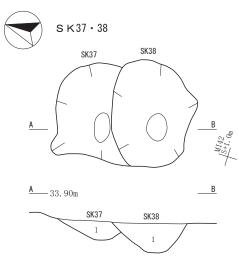
SK44土坑(第18·60図)

《位置・確認状況》MJ42グリッドに位置する。試掘坑北側断面で掘り込みを確認し、平面形はAII層掘削後にSI52e1層上面でSK43と重複した黒褐色土プランを確認した。

《重複》SI52e、SK43、SKP112と重複する。SI52e、SKP112よりも新しく、SK43よりも旧い。

《規模・形態》南東側の半分が試掘坑で掘削されたため、全体形状は不明であるが、平面形は0.94m×0.78m(推定値)の楕円形と推定する。確認面からの深さは0.46mである。壁は西側が緩やかに、他は急に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

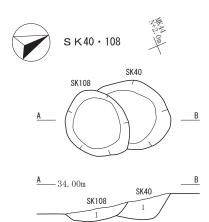
《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。



 SK37

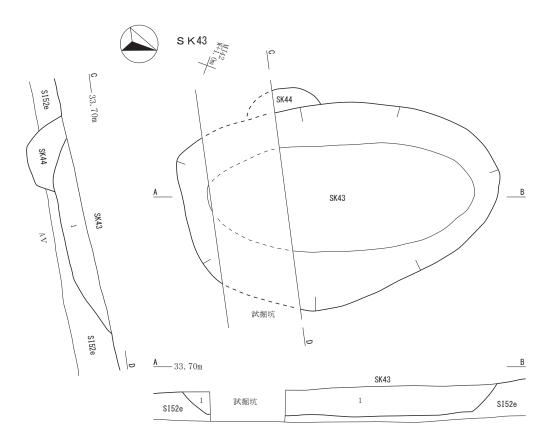
 1
 暗褐色 (10YR3/3) 土性SiL しまり強 粘性中 AV層土粒・塊φ1~200mm 炭化物粒φ1~5 mm 1 %

SK38 1 黒褐色 (10YR3/2) 土性SiL しまり強 粘性中 AV層土粒・塊φ1~50mm 10% 炭化物粒φ1~5 mm 1%

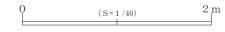


SK40

1 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり強 粘性やや弱 AV層土粒・塊φ1~30mm 20% 炭化物粒・材φ1~10mm 1%



黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊 ϕ 1 \sim 20mm 10% 焼土粒・塊 ϕ 1 \sim 10mm 1%未満 炭化物粒 ϕ 1 \sim 20mm 3% 砂碟 ϕ 1 \sim 10mm 1%



第59図 SK37・38・40・43・108

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構の時期は、SI52eとSK43との新旧関係から後期後葉と考えられる。

SK45土坑(第18・60図)

《位置・確認状況》 M I 42・43、 M J 43グリッドに位置する。 A V 層地山土面で S I 52 c \sim e と重複する黒褐色土プランを確認した。

《重複》SI52c~eと重複するが、埋土による新旧関係は確認できなかった。

《規模・形態》平面形は $0.88m \times 0.68m$ の半円形で、確認面からの深さは0.20mである。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、粗製の縄文土器片4点(65.1g)が出土した。

《時期・所見》本遺構はSI52の北側、段丘面の高位側で接し、SI52に伴う施設の可能性も考慮されるが、新旧関係を確認できなかったため、別遺構と判断した。SI52eと埋土が類似することから同時期の縄文時代後期後葉と考えられる。

SK47土坑(第18·60図、図版2)

《位置・確認状況》 M I ・ M J 42 グリッドに位置する。 S I 52 の床面で黒色土プランを確認した。 《重複》 S I 52 a ~ e と重複する。本遺構は S I 52 P 4 ・ P 5 ・ P 6 に切られることから、 S I 52 e

よりも旧い。

《規模・形態》平面形は $0.94m \times 0.72m$ の楕円形で、確認面からの深さは0.29mである。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土であると考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、埋土に焼土粒・塊や炭化物を含み、SI52の地床炉や石囲炉周辺に位置することから、SI52a~dのいずれかに伴う施設の可能性も考慮されるが、ここでは別遺構とした。本遺構の時期は、SI52との新旧関係から同時期の縄文時代後期後葉か、それ以前と考えられる。

SK49土坑(第16·60図)

《位置・確認状況》MN46・47グリッドに位置する。SR10の周辺を精査している際に、その南側のAⅢ層中で黒色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》確認できた平面形は0.90m×0.68mの不整円形で、確認面からの深さは0.25mである。 壁は緩やかに立ち上がり、底面は緩やかに丸みがある。遺構北側の一部が試掘坑により失われている。 《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土にAV層土由来のにぶい黄褐色土粒が混入する。一括 して埋め戻された人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構の詳細な時期は不明であるが、AⅢ層は縄文時代の遺構検出面であることから同時代と考えられる。

SK51土坑(第16·60図、図版5)

《位置・確認状況》 $MK \cdot ML46 \cdot 47$ グリッドに位置する。AV層地山土面で黒褐色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は1.30mの不整円形で、確認面からの深さは0.40mである。壁は西側が急に立ち上がり、東側は開口部に向かって急に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土に、AV層土由来のにぶい黄褐色土が粒状に混入する。一括して埋め戻された人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK54土坑(第18·60図)

《位置・確認状況》MK44グリッドに位置する。AV層地山土面でSK92と重複する黒褐色土プランを確認した。

《重複》SK92と重複し、それよりも新しい。

《規模・形態》平面形は $1.06m \times 0.70m$ で不整楕円形で、確認面からの深さは0.20mである。壁はやや急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK55土坑(第17·61図、図版6)

《位置・確認状況》ML45グリッドに位置する。AV層地山土面で黒褐色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $1.04m \times 0.96m$ の楕円形で、確認面からの深さは0.23mである。壁は急に立ち上がり、底面はやや凹凸があるものの緩やかに丸みがある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土、炭化物が全体に混入する。一括して埋め戻された人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

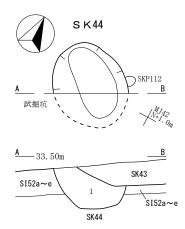
SK65土坑(第14·61図)

《位置・確認状況》 MS73・74グリッドに位置する。 A III b ・ c 層黒色土中において、黒褐色土プランを確認した。

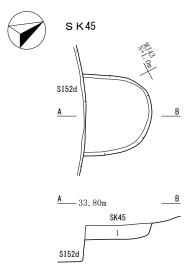
《重複》なし。

《規模・形態》本遺構は、調査区外へ続くため、全体形状は不明である。確認できる平面形は、0.69m(推定値)×0.50m(推定値)の楕円形と推定される。確認面からの深さは0.62mである。壁は急に立ち上がり、底面は中央に向かってすぼまる。

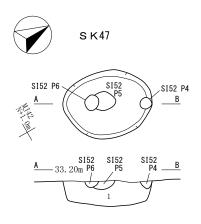
《埋土》3層に分けられた。いずれもAⅢ層土由来の黒から褐色土を主体とし、AV層土由来土が粒



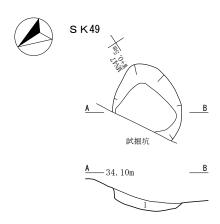
1 黒褐色 (10YR3/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~20mm 20% 焼土粒・塊φ1~5mm 1% 炭化物粒・材φ1~10mm 3%



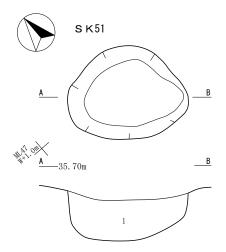
1 黒褐色 (10YR2/2) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~30mm 20% 焼土粒・塊φ1~5mm 1 %未満 炭化物粒・材φ1~10mm 3 %



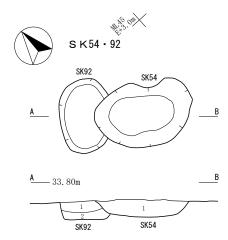
1 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~20mm 10% 焼土粒・塊φ1~10mm 1%未満 炭化物粒φ1~20mm 3% 砂碟φ1~10mm 1%



1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまりやや弱 粘性やや強 AV層土粒 $\it o$ 3 \sim 5 mm $\,$ 5 %



1 黒褐色(10YR3/2) 土性SiL しまり強 粘性弱 AV層土粒状 φ 10~30mm 2 %



SK54

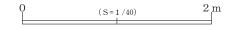
3004 1 黒褐色(10YR3/2) 土性SiL しまりやや強 粘性中 AV層地山土粒・塊φ1~50mm 30% 炭化物粒・材φ1~5mm 2%

SK92

- SK92

 1 黒褐色 (10YR3/2) 土性SiL しまり中 粘性中
 AV層土粒・塊φ1~30mm 10% 焼土粒・塊φ1~5 mm 1%
 炭化物粒φ1~5 mm 1%

 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土性SiCL しまり強 粘性やや強
 AII層黒褐色土粒・塊φ1~10mm 10% 炭化物粒φ1~5 mm 1%



第60図 SK44・45・47・49・51・54・92

状に混入する。開口部に流入した自然堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構の時期は、十和田 a 火山灰が混入する A II 層下の A III 層が掘り込み面であることから、縄文時代と考えられる。

SK66土坑(第14·61図)

《位置・確認状況》MT75グリッドに位置する。AIII b · c 層黒色土上面で黒褐色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》本遺構は、調査外へ続くため、全体形状は不明である。確認できた最長部分は2.00mで、確認面からの深さは0.62mある。壁は急に立ち上がり、底部はやや丸みがある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土が主体で、AV層土由来のにぶい黄褐色土が斑状に混入する。一括して埋め戻された人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、石器は二次加工ある剥片1点(18.2g)、剥片1点(3.0g)が出土した。

《時期・所見》本遺構の時期は、十和田 a 火山灰が混入する A Ⅱ 層下の A Ⅲ 層が掘り込み面であることから、縄文時代と考えられる。

SK67土坑(第17·61図)

《位置・確認状況》MP・MQ45グリッドに位置する。試掘坑南側の断面のAⅢ a 層黒色土中で黒褐色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》遺構の北側は試掘坑、南東側は根による撹乱を受けて欠失しているが、残存部分より 平面形は円形または楕円形と考えられる。遺構の最長部分は1.66mで、確認面からの深さは0.30mで ある。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土で、炭化物が混入する。また、径4~31cmの円礫や 亜角礫が56個混入していたことから、一括して埋め戻された人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、石器は剥片1点(15.7g)が出土した。

《時期・所見》本遺構の時期は、十和田 a 火山灰が混入する A Ⅱ 層下の A Ⅲ a 層が掘り込み面であることから、縄文時代と考えられる。

SK70土坑(第17・61図)

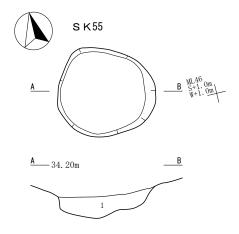
《位置・確認状況》ML・MM39・40グリッドに位置する。AV層地山土面でSI61・SKP63と重複する黒褐色土プランを確認した。

《重複》SI61、SKP63と重複し、SKP63よりも旧い。SI61の西側の床面が確認できなかったため、新旧関係は不明である。

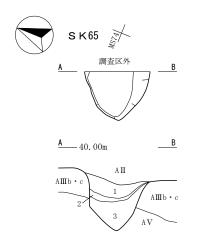
《規模・形態》平面形は0.82m(推定値)×0.54mの楕円形で、確認面からの深さは0.46mである。壁は南西側が緩やかに、他はほぼ垂直で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

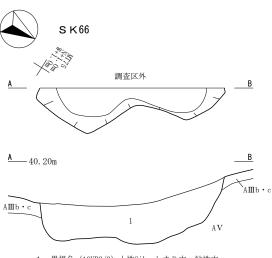
《出土遺物》なし。



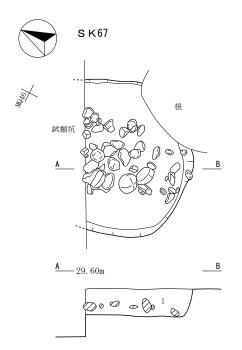
黒褐色(10YR2/3) 土性SiL しまり弱 粘性中 AV層土斑状 $_0$ $1\sim3\,\mathrm{mm}$ $_1$ % 炭化物 $_0$ $1\sim3\,\mathrm{mm}$ $_1$ %



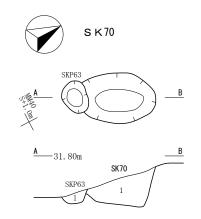
- 黒褐色 (10YR2/3) 土性SiL しまりやや弱 粘性やや弱 AV層土粒状φ10-30mm 2%
 褐色 (10YR4/4) 土性SiL しまり中 粘性やや強 AV層土粒状φ10~20mm 1%
 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまりやや弱 粘性強 AV層土粒状φ10~20mm 2%



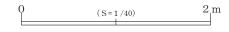
1 黒褐色(10YR2/3)土性SiL しまり中 粘性中 AV層土斑状 ϕ 1 \sim 3 mm $\,$ 3 %



1 黒褐色(10YR2/2)土性SiL しまりやや弱 粘性やや強 炭化物 ϕ 1 \sim 3 mm $\,$ 1 %



1 黒褐色 (10YR2/2) 土性SiL しまり中 粘性やや弱 AV層土粒・塊φ1~30mm 30% 炭化物粒・材φ1~5 mm 1%



第61図 SK55·65~67·70

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。土坑としたが、本遺構の底面は固くしまることから、柱当たりと推定すれば柱穴の可能性がある。

SK80土坑(第17·62·88図、図版6)

《位置・確認状況》ML40グリッドに位置する。SI61の床面で黒色土プランを確認した。

《重複》SI61・98と重複する。SI98のP29よりも新しく、SI61P1・P2・P7よりも旧い。

《規模・形態》平面形は $0.76m \times 0.74m$ (推定値)の円形で、確認面からの深さは0.46mである。壁は 急に立ち上がり、底面は丸みがある。

《埋土》2層に分けられた。1層はAⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色 土粒を少量含み、固くしまることから、SI61竪穴建物跡機能時に本遺構の上面が窪み、生活に伴っ て堆積したと考える。2層はAⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・ 塊を多く含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が3点(20.9g)、石器はスクレイパー1点(2.6g)、石核1点(125.7g)が出土した。このうち石器1点(第88図S97、図版20)を図示した。土器は、胴部小片のため、詳細な時期は特定できない。

《時期・所見》本遺構の時期は、縄文時代後期後葉と考えられるSI61より旧く、同じく後期後葉と考えられるSI98より新しいことから、同時期と考えられる。土坑としたが、本遺構の底面は固くしまることから、柱当たりと推定すると柱穴の可能性がある。

SK81土坑(第18・62図)

《位置・確認状況》MK・ML43グリッドに位置する。AV層地山土面で黒色土プランを確認した。 《重複》SIX96と重複するが、地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は0.84m×0.70mの楕円形で、確認面からの深さは0.32mである。壁は東側がやや急に、他は急に立ち上がる。底面は西側が高く中央部に傾斜するが、他はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が1点(6.4g)が出土した。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代と考えられる。

SK82土坑(第16·62·89図、図版6)

《位置・確認状況》ML47グリッドに位置する。AV層地山土面で黒色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は、0.90m×0.88mの略円形で、確認面からの深さは0.22mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸で丸みがある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、石器はスクレイパー 1 点(35.4g)、剥片 5 点(71.4g)が出土した。このうちスクレイパー 1 点(第89図 S 98、図版20)を図示した。S 98は、右側縁に外湾する刃部に使用剥離痕が確認できる。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK84土坑(第17·62·89図)

《位置・確認状況》MM42グリッドに位置する。AIV層漸移層土上面に黒色土プランを確認した。

《重複》SIX64、SK87、SKP99と重複する。SIX64P29とSK87よりも新しく、SKP99よりも旧い。直接の切り合いはないが、上面にSI112がある。

《規模・形態》平面形は2.08m×0.84mの不整形で、中心部がやや南側寄りに湾曲している。確認面からの深さは0.16mである。壁は緩やかに立ち上がり、底部はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片 7点(40.4g)、石器はスクレイパー 1点(3.9g)、二次加工ある剥片 2点(14.8g)、剥片18点(131.6g)が出土した。このうちスクレイパー 1点(第89図S99)、図版20)を図示した。

《時期・所見》本遺構の時期は、縄文時代後期と推定しているSIX64より新しく、後期末葉と推定しているSI112より旧いことから、後期と考えられる。

SK85土坑(第17·62図、図版 6)

《位置・確認状況》MM43グリッドに位置する。AV層地山土面に黒褐色土プランを確認した。

《重複》SIX64P27・P28と重複し、それよりも旧い。

《規模・形態》西側がSIX64P27に、東側がSK86に切られるため、全体形状は不明であるが、残存部分より0.90m(推定値) $\times 0.56m$ の長楕円形と推定する。確認面からの深さは0.20mである。壁は北側で緩やかに、南側で急に立ち上がり、底面は平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。底部に礫を3点確認した。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片 2点(16.7g)、石器は二次加工ある剥片 1点(34.8g)、剥片 2点(10.1g)が出土した。

《時期・所見》本遺構の時期は、縄文時代後期と推定するSIX64の柱穴より旧いことから、縄文時代後期以前と考えられる。

SK87土坑(第17·62図)

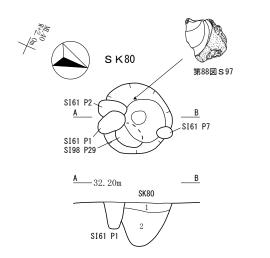
《位置・確認状況》MM42・43グリッドに位置する。S K 84の断面下位に黒褐色土プランを確認した。 《重複》S I X 64、S K 84と重複する。 S I X 64 P 30よりも新しく、S K 84よりも旧い。

《規模・形態》平面形は、SK84に切られるため、全体形状は不明であるが、残存部が北側と東側で少し窪んだ不整円形である。壁は東側が急に、西側が緩やかに立ち上がる。底部は丸みがあり、深さはSK84の底面から0.12mである。

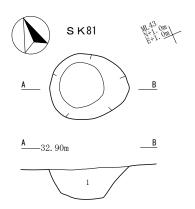
《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土が斑状に含むことから、一括埋め戻しによる人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

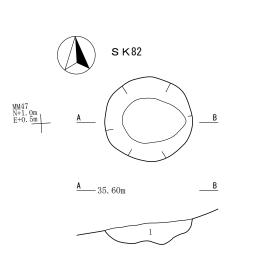
《時期・所見》本遺構の時期は、いずれも縄文時代後期と推定するSIX64とSK84との新旧関係から、縄文時代後期と考えられる。



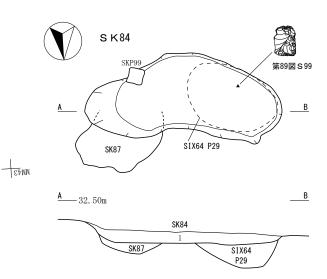
- 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒φ1~3mm 5% 焼土粒・塊φ1~5mm 1%未満 炭化物粒・材φ1~10mm 5%
 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性弱 AV層土粒・塊φ1~10mm 30% 炭化物粒・材φ1~5mm 5%



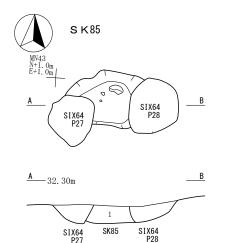
1 黒色(10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性弱 AV層土粒・塊 φ 1 \sim 20mm 5 % 炭化物粒・材 φ 1 \sim 10mm 5 %



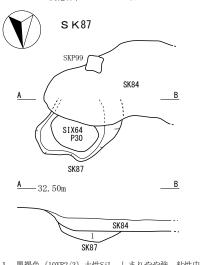
1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり弱 粘性やや弱 AV層土粒・塊φ1~30mm 3% 炭化物φ3~5mm 2%



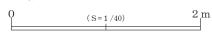
1 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊 ϕ 1 \sim 20mm 3 % 炭化物 ϕ 3 \sim 5 mm 2 %



黒褐色(10YR2/2) 土性SiL しまり中 粘性やや弱 AV層土斑状 6 3 \sim 5 mm $\,$ 1 % 炭化物 ϕ 1 \sim 5 mm $\,$ 3 %



1 黒褐色 (10YR2/3) 土性SiL しまりやや強 粘性中 AV層土斑状 $_0$ 1 $_0$ 3 $_0$ 1 $_0$ 炭化物 $_0$ 3 $_0$ 5 $_0$ 1 $_0$



第62図 SK80~82·84·85·87

- EFWW

SK89土坑(第17·63図)

《位置・確認状況》ML42グリッドにおいてSIX91を精査中、AV層地山土面に黒色土プランを確認した。

《重複》SIX91と重複するが、地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は $1.20m \times 0.70m$ の長楕円形で、確認面からの深さは0.32mである。壁は急に立ち上がり、底面はやや傾斜していて凹凸がある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒を含むことから、一括埋め戻しによる人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、粗製の縄文土器片 4 点 (49.6g)、石器は二次加工ある剥片 1 点 (46.9g)、剥片 5 点 (11.1g) が出土した。

《時期・所見》本遺構は、出土遺物から縄文時代である。

SK92土坑(第18·60図)

《位置・確認状況》MK44グリッドに位置する。AV層地山土面でSK54と重複する黒褐色土プランを確認した。

《重複》SK54と重複し、それよりも旧い。

《規模・形態》平面形は $0.80 \text{m} \times 0.56 \text{m}$ (推定値) の楕円形と推定する。確認面からの深さは0.20 mである。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《埋土》2層に分けられた。1層はAⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を、2層はにぶい黄褐色土を主体とし、黒褐色土を含むことから、人為堆積土と考える。 《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

S K95土坑(第18・63図)

《位置・確認状況》MJ40グリッドに位置する。周囲の堆積状況を検討するために掘削した土層観察 用畦断面のAⅢc層黒褐色土中で不明瞭な黒褐色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》西側と東側が試掘坑によって削平され、全体形状は不明であるが、平面形は0.90m×0.80m(推定値)の楕円形と推定する。確認面からの深さは0.30mである。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK104土坑(第18·63図)

《位置・確認状況》 M I 40グリッドに位置する。 A V 層地山土面で黒褐色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $0.60 \text{m} \times 0.56 \text{m}$ の円形で、確認面からの深さは0.32 mである。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK108土坑(第18·59図)

《位置・確認状況》M J 44グリッドに位置する。A V 層地山土面でS K 40と重複する黒色土プランを確認した。

《重複》SK40と重複し、それよりも新しい。

《規模・形態》平面形は $0.78m \times 0.64m$ の楕円形で、確認面からの深さは0.21mである。壁はやや急に立ち上がり、底面は丸みがある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK110土坑(第18・63図)

《位置・確認状況》MK41グリッドに位置する。AV層地山土面で黒褐色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は0.66m×0.58mの楕円形で、確認面からの深さは0.22mである。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK1003土坑(第21·63図、図版6)

《位置・確認状況》 L T 36グリッドに位置する。 B VI層地山土面で黒褐色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は0.76m×0.74mの円形で、確認面からの深さは0.18mである。壁は北から北東側では急に立ち上がり、他は緩やかに立ち上がる。底面は多少の凹凸はあるが比較的平坦である。

《埋土》BⅡ層土由来の黒色土による単一層である。全体にBⅥ層土塊を含むことから、人為堆積土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片3点(46.1g)が出土した。

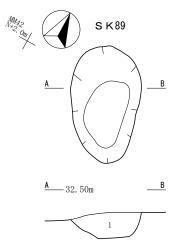
《時期・所見》本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

SK1017土坑(第22·64·77·78図、図版6)

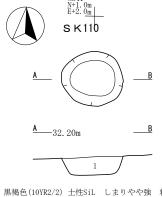
《位置・確認状況》 L L 43グリッドに位置し、B II ②層黒色土中位面で土器片が集中して出土した。 周辺を精査すると、土器片集中部の下位で黒色土プランを確認した。

《重複》なし。

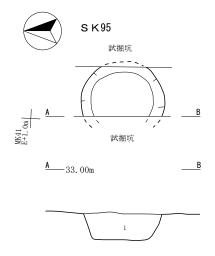
《規模・形態》平面形は1.06m×0.72mの楕円形で、確認面からの深さは0.14mである。壁は緩やか



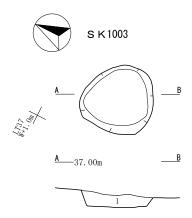
1 黒色(10YR1.7/1)土性SiL しまりやや強 粘性中 AV層土粒状 ϕ 10~30mm 5 % 炭化物 ϕ 1~3 mm 1 %



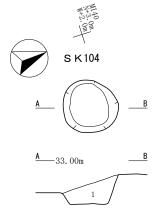
1 黒褐色(10YR2/2) 土性SiL しまりやや強 粘性やや弱 AV層土粒・塊φ1~20mm 10% 炭化物粒・材φ1~10mm 1%



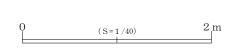
1 黒褐色(10YR2/2) 土性SiL しまり中 粘性やや弱 AV層土粒・塊 ϕ 1 \sim 30mm 30% 炭化物粒・材 ϕ 1 \sim 5 mm 1%



1 黒褐色 (10YR2/2) 土性SiL しまり弱 粘性弱 BVI層土塊状 2 \sim 30mm 3 %



1 黒褐色(10YR2/2) 土性SiL しまり中 粘性やや弱 AV層土粒・塊φ1~30mm 20% 炭化物粒・材φ1~10mm 3%



第63図 SK89・95・104・110・1003

に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《埋土》単一層である。BⅡ層土由来の均質な黒色土で、開口部全体に土器片が楕円状に集中していることから、人為堆積土と考える。また、埋土上位の中央付近で径約10cmの円礫を3個検出した。

《出土遺物》本遺構構築面上位から、縄文土器片が41点(4,556.8g)が出土した。このうち土器3点(第77・78図57~59、図版15)を図示した。57~59は深鉢形土器である。57は大きく外反する口縁部から一度すぼんで底部に至る。口唇は丁寧に面取りされ、口縁部上端から胴部下半までRL縄文が斜位に付される。外面の胴部下半と内面もミガキが丁寧に行われていて、胎土、焼成とも良好である。58は無文で縦方向のミガキが顕著である。59の口縁部は外反し、頸部で一度わずかにすぼまって丸みのある胴部から底部に至る。LR縄文が斜位に付される。

《時期・所見》三個体分の土器片が開口部全体に楕円状に集中していることから、意図的に土器片を埋納した可能性が考えられる。本遺構を検出したBII②層は、近世期の撹乱を受けておらず縄文時代の遺物が主体を占める。出土土器から縄文時代後期前半と考える。

SK1026土坑(第22·64図、図版6)

《位置・確認状況》 L L 39・40グリッドに位置する。 B VI 層地山土面で黒色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は0.89m×0.72mの楕円形で、確認面からの深さは0.61mである。壁は急に直線的に立ち上がる。底面は凹凸があり、若干北側に低く傾斜している。

《埋土》BVI層地山土塊混入の割合から3層に分けられたが、基本はBII層土由来の黒色から黒褐色土である。2・3層は塊状のBVI層地山土を多量に含む。いずれも地山土を含むことから、一括の人為堆積土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器小片4点(21.6g)、石器は剥片1点(5.3g)が出土した。土器は小片のため、詳細な時期は特定できなかった。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代である。

SK1029土坑(第22·64図、図版6)

《位置・確認状況》 L K 43 グリッドに位置する。 B VI 層地山土面で黒色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $0.56m \times 0.52m$ の円形で、確認面からの深さは0.12mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《埋土》 2 層に分けられた。 1 層は B II 層土由来の黒色土、 2 層は B IV 層土由来の黒褐色土である。 どちらも B VI 層地山土粒を含むことから、一括の人為堆積土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、石器は剥片1点(0.7g)が出土した。

《時期・所見》時期を特定ができる遺物がなく、詳細な時期は不明である。近世の溝跡SD1018に隣接しているが、埋土の光沢具合やパミス粒の有無が異なることから、同時期である可能性は低い。隣接するSK1017に類似するBII層土由来の黒色の埋土から、縄文時代に帰属すると推定した。

SK1036土坑(第22・64図、図版7)

《位置・確認状況》LK42グリッドに位置する。BVI層地山土面で、倒木痕を確認するため試掘坑を掘ったところ、土坑の掘り込みを断面で確認した。平面的には撹乱が多く判然とせず、形状は底面と

壁で判断した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $0.92m \times 0.86m$ の円形で、確認面からの深さは0.18mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《埋土》根による撹乱を受けているが、BVI層土由来の灰黄褐色土の単一層である。BVI層土粒を含むことから、一括の人為堆積土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、石器は剥片 4 点(24.8g)が出土した。埋土内の中央に径14cm×6 cm程の礫を 検出した。

《時期・所見》時期を特定ができる遺物がなく、類似する埋土の遺構も周囲にないが、黄褐色土を主体とする埋土の遺構には、縄文時代早期前葉から中葉頃と推定されるSI1063があり、同時期の可能性が考えられる。

SK1042土坑(第24・64図、図版7)

《位置・確認状況》 LH43グリッドに位置する。 BVI層地山土面で黒褐色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $1.20m \times 0.98m$ の楕円形で、確認面からの深さは0.12mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸はあるが概ね平坦である。

《埋土》単一層である。BIV層土由来の黒褐色土にBVI層土粒が混入するので人為堆積土と考える。 《出土遺物》埋土から、石器は剥片1点(10.7g)が出土した。

《時期・所見》本遺構は、詳細な時期が不明である。

SK1044土坑(第22・65・78図、図版7)

《位置・確認状況》 LK45グリッドの沢の南肩部に位置する。BVI層地山土面で黒色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $0.70 \text{m} \times 0.56 \text{m}$ (推定値) の楕円形と推定する。確認面からの深さは0.34 m である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや中央が膨らんでいる。

《埋土》2層に分けられた。1層はBⅡ層土由来の黒色土にBⅥ層地山土粒を含む人為堆積、2層は 開口時にBⅣ層土由来の黒褐色土が壁沿いと底部に流れ込んだ自然堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が1点(13.0g)が出土した。このうち土器1点(第78図60、図版15) を図示した。60は深鉢形土器の胴部片で、櫛歯状工具による条線が縦走する。

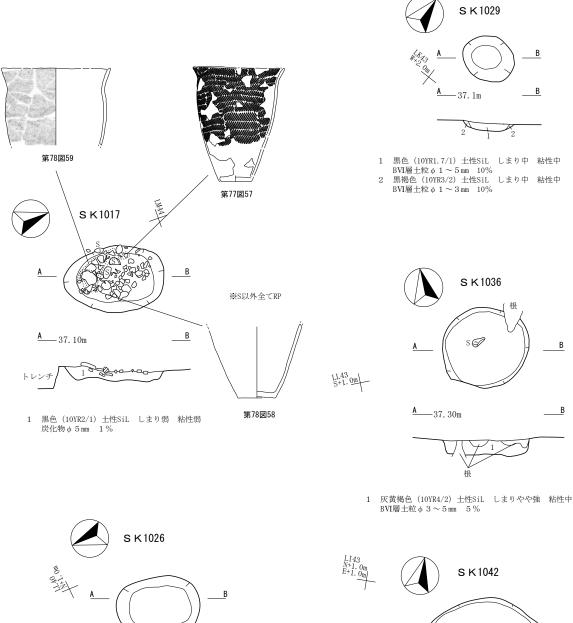
《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代後期後半と考えられる。

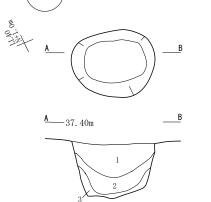
SK1047土坑(第21·65図、図版7)

《位置・確認状況》LS・LT39グリッドに位置する。斜面精査中のBVI層地山土面で黒色土プランを確認した。現在の地形は、断崖の先端に位置するが、これは重機により掘削されたものであり、当時は段丘縁辺部に当たる緩斜面の落ち際にあったと考えられる。

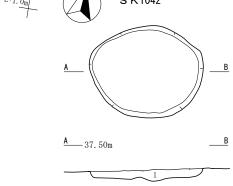
《重複》なし。

《規模・形態》平面形は、 $0.91m \times 0.70m$ の楕円形で、確認面からの深さは0.69mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凹凸があり、西側で一部深くなっている。

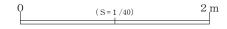




- 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性中 BVI層土粒 ϕ 1 \sim 3 mm 2 % パミス粒 ϕ 1 mm 1 % 黒褐色 (10YR3/1) 土性SiL BVI層土塊 ϕ 5 \sim 30mm 10% 黒褐色 (10YR3/2) 土性SiL しまり中 粘性中 BVI層土塊 ϕ 5 \sim 30mm 50%



黒褐色 (10YR2/3) 土性SiL しまり中 粘性中 BVI層土粒 ϕ 1 \sim 10mm 10%



第64図 SK1017・1026・1029・1036・1042

《埋土》 5 層に分けられた。いずれの層もBⅡ層土由来の黒色土を基調とする。BⅥ層土由来の地山 土粒が混ざることから、人為堆積土と推測される。

《出土遺物》埋土から、縄文土器小片が1点(4.1g)が出土した。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代である。段丘縁辺部にある本遺構の周囲には、フラスコ状土坑が6基確認できることから、本遺構は、それらのフラスコ状土坑同様に貯蔵穴として使用されていた可能性がある。

SK1060土坑(第19・65・7図)

《位置・確認状況》MB53・54グリッドのSD1074へ下る北肩部に位置する。BVI層地山土面で黒色 土プランを確認した。

《重複》SD1074と重複し、それよりも旧い。

《規模・形態》根による撹乱を受けるため、全体の形状は不明瞭であるが、平面形は1.00m×0.96m (推定値)の円形と推定する。確認面からの深さは0.51mで、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みがありやや南東に傾斜する。

《埋土》2層に分けられた。1層はBⅡ層土由来の黒色土を主体とし、BⅥ層地山土粒を含む。2層はBⅡ層土由来の黒色土を主体とし、壁沿いと底部に砂礫が混入する。いずれも人為堆積土と考える。確認面の地山は粘土質のBⅥ層であるが、底部においては砂礫質のBⅧ層を掘り込んでいるため、2層には砂礫が混入したものと考えられる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が4点(41.9g)が出土した。土器が小片のため詳細な時期は不明である。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代の遺構である。

SK1061土坑(第19·65図、図版7)

《位置・確認状況》MD53グリッドに位置する。BVI層地山土面で黒色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は1.10m×0.91mの楕円形で、確認面からの深さは0.36mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は球状に中央が窪む。

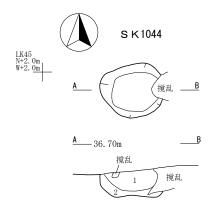
《埋土》地山土塊の混入量により2層に分けられたが、基本的にはBVI層土塊を含むBII層土由来の 黒色土の埋土のため、一括の人為堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

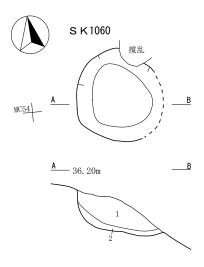
《時期・所見》時代を特定できる遺物がなく、詳細な時期は不明である。同じ段丘面に隣接する S K 1060と、B VI 層地山土塊を含む B II 層土由来の黒色土を基調とする埋土の様子や規模、底部形状 が類似することから、同時期の縄文時代の遺構であると考えられる。

⑥フラスコ状土坑

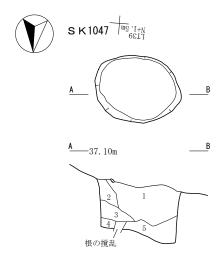
本調査区では17基検出した。そのうち、底部の中央に小穴を伴うもの3基を検出した。時期別では縄文時代中期前半2基、後期初頭2基、後期後葉1基、後期後半2基、晩期前葉3基、また、詳細な時期は不明であるが、段丘上で検出された他の縄文時代の遺構と埋土が類似し、縄文時代に帰属すると考えられるものが7基である。



- 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性中 BVI層土粒 ϕ 1 \sim 5 mm 7 % 黒褐色 (10YR2/3) 土性SiL しまり中 粘性中 BVI層土粒 ϕ 1 \sim 5 mm 30% 塊 ϕ 5 \sim 10 mm 3 %

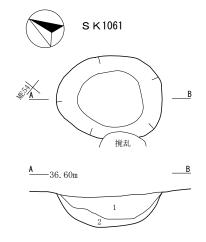


- 1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性中 BVI層土塊よ5~30mm 3% 2 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性中 BVII層土粒よ1~5 mm 3% 小砂礫 10%

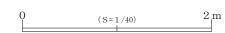


- 1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり弱 粘性やや強 BVI層土粒状φ1以下~1mm 1% 小礫φ20mm 1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性強 BVI層土粒状φ1~5mm 10% 場色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり弱 粘性強 BVI層土塊状・帯状20~50mm 30% 4 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり強 粘性中 DVI層土塊状・帯状20~50mm 30% 4 またりまながより、10 エース 200~1地域よ20~50mm 30% 4 またりまりな 4 20~50mm 30% 4 200~1地域よ20~50mm 30% 4 20~50mm 30% 4 200~1地域よ20~50mm 30% 4 200

- BVI層土粒状 6 1 以下~ 2 mm 30%・塊状 6 30mm 1 % 黒色 (10YR2/1) 土性SiL しまり弱 粘性強 BVI層土粒状 6 1 以下~ 2 mm 20%



- 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性中
- BVI層土粒 ϕ 1 \sim 5 mm 1 % 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性中 BVI層土粒 ϕ 1 \sim 5 mm 30%・塊 ϕ 10 \sim 30mm



第65図 SK1044 - 1047 - 1060 - 1061

SKF03フラスコ状土坑(第16・57・89図、図版5)

《位置・確認状況》MI46・47グリッドに位置する。AV層地山土面で、SK02と重複する黒色土 プランを確認した。

《重複》SK02と重複し、それよりも旧い。

《規模・形態》平面形は1.66m×1.50m(推定値)の楕円形と推定する。確認面からの深さは0.88mで ある。壁は全体的にオーバーハングし、底面はほぼ平坦で、底面付近で最大径となる。最大径で平面 形は2.54m×2.12mの楕円形である。底面のほぼ中央に小穴があり、平面形は40cm×36cmの円形で ある。土坑底面からの深さは16cmあり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。小穴底面には8個の扁平な円礫 径 $4\sim$ 12cmが疎らに置かれる。

《埋土》4層に分けられた。いずれの層もAⅢ層土由来の黒色または暗褐色土を主体とし、AV層土由来の明黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が2点(13.0g)、石器は石核1点(24.6g)、剥片10点(49.2g)出土した。このうち石器1点(第89図S100、図版20)を図示した。S100は石核である。土器は、粗製の胴部小片である。

《時期・所見》出土遺物から詳細な時期は不明であるが、本遺構と同様に底面に小穴を伴い、形態も類似するSKF1021と同時期と推定すると、縄文時代後期初頭の可能性が考えられる。本遺構は国道が敷設される際に削平を受け、遺構上部は欠失していると推測される。

SKF20フラスコ状土坑(第16・66図、図版7)

《位置・確認状況》MJ・MK47グリッドに位置するAV層地山土面で黒褐色土プランを確認した。 西側の一部は重機による撹乱を受けている。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は1.80m×1.28mの不整形で、確認面からの深さは0.45mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、ややオーバーハングしている。底面は丸みがある。

《埋土》単一層である。AⅢ層土由来の黒褐色土が主体で、AV層土由来の粒状のにぶい黄褐色土が薄く混入する。一括して埋め戻された人為堆積土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、石器は剥片1点(3.6g)が出土した。

《時期・所見》本調査区で検出したフラスコ状土坑のうち時期が推定できるものは、すべて縄文時代であることから、同時代の遺構であると考えられる。

SKF25フラスコ状土坑(第18・66・78図、図版5・7)

《位置・確認状況》MI42グリッドに位置する。AIV層地山漸移層下位面で黒色土プランを確認した。 《重複》SIX93、SK29・30と重複する。SK30よりも旧いが、SK29は本遺構完掘後に確認した ため、新旧関係は不明である。SIX93は地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は $1.02m \times 0.88m$ (推定値)の円形と推定する。確認面からの深さは0.50mである。壁は北側と西側がオーバーハングし、他はほぼ垂直で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《埋土》2層に分けられた。1層は、土器内埋土で2層と類似する。2層は、AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AⅢ層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊を含むことから、人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、ほぼ完形の深鉢形土器 1 点(2886.0 g)と土器内からは土器片が 5 点(90.7 g)が出土した。このうち土器 1 点(第78図61、図版15)を図示した。61は土坑のほぼ中央の底面から約6 cm上面で口縁部を下にして、東側に傾く斜位の状態で出土した。十腰内IV群に属する完形の土器である。内湾する口縁部から最大径のある胴部上半、底部に至る。口唇の面取りはやや雑で、緩やかに波打っている。内外面とも粗いミガキが行われる。胴部上半外面には煤状炭化物が付着するが、下半は二次的な加熱のため橙から白色に変色している。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代後期後葉である。深鉢形土器の在り方や土坑内と土器内の土壌分析から、土坑墓と考えられる(第4章第4節参照)。

SKF31フラスコ状土坑(第18・66・78・89図、図版8)

《位置・確認状況》MI40グリッドに位置する。AⅢc層黒褐色土中で土器片や石器、円礫などを多く含む不明瞭な黒色土プランを確認した。

《重複》SIX102と重複するが、地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は $1.58m \times 1.42m$ の円形で、確認面からの深さは0.50mである。壁は西-北-東側でオーバーハングする。底面はわずかに凹凸があり、底面付近で最大径となる。最大径の平面形は $1.68m \times 1.44m$ の円形である。なお、本遺構は、確認面より上位に柱状に残した遺物と埋土の観察から、これらの遺物は本遺構に伴うものと考えられる。

《埋土》AV層土由来のにぶい黄褐色土の混入状況で、2層に分けられた。1・2層ともAⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土粒・塊、炭化物粒・塊を含む。一括の人為堆積土と考える。

《出土遺物》縄文土器片は、1層から22点(869.2g)、2層から7点(109.2g)、石器は1層から石鏃1点(1.7g)、石核2点(777.0g)、敲石1点(560.8g)、磨石1点(310.7g)、二次加工ある剥片2点(63.3g)、剥片6点(32.8g)、2層から二次加工ある剥片1点(2.3g)、剥片4点(17.5g)が出土した。このうち土器5点(第78図62~66、図版15)、石器6点(第89図S101~106、図版20)を図示した。62~64は深鉢形土器である。62は胴部下半にはRL原体の斜位回転により縦位に縄文が付される。胴部下端と底部外縁は粗いケズリが施される。胎土、焼成とも良好である。63の肥厚する口唇は丁寧に面取りされ平坦である。内湾する口縁部から胴部に至る器形で、口縁部上端からLR縄文が斜位に付される。64にはLRとRL原体で非結束の羽状縄文が横位に付される。65はおそらくは台付鉢形土器の台部であろう。台部上半は無文で沈線を境にして下半にはLRとRL原体で非結束の羽状縄文を横位に付す。台部下端には指頭圧痕が残る。66は深鉢形土器で、外反する口縁部からわずかにすぼまって直線的に底部に至る器形である。口唇部は薄く作られ、口縁部上端からLR縄文が斜位に付される。胎土、焼成も良好である。S101は石鏃、S102・S103は石核、S104は敲石、S105は磨石、S106は二次加工ある剥片である。S104の石質は石英で被熱を受けている。S105の磨石は棒状の珪化木の一端を使用している。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代後期後半と考える。他の土坑・フラスコ土坑 に比べ、遺物や比較的大きな礫が多く出土した。

SKF32フラスコ状土坑(第16・66図、図版8)

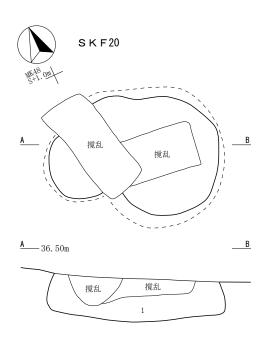
《位置・確認状況》ML49グリッドに位置する。AV層地山土面で黒色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は0.88m×0.80mの円形で、確認面からの深さは0.36mである。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北東部分の壁に底面より0.16m高い段が存在し、北東側を除く部分がオーバーハングする。底面は平坦である。

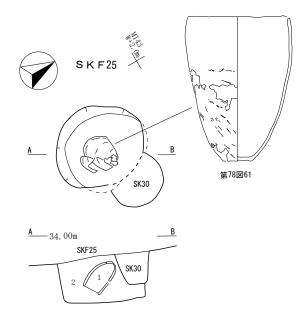
《埋土》2層に分けられた。1・2層とも、AⅢ層土由来の黒色土を主体とし、AV層土由来のにぶい黄褐色土が塊状に混入する。一括の人為堆積土と考える。

《出土遺物》1層から、縄文土器片1点(2.6g)、石器は剥片1点(4.1g)が出土した。

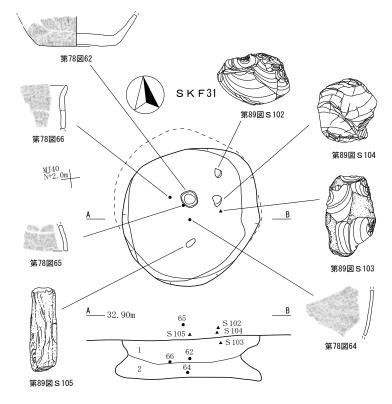
《時期・所見》本調査区で検出したフラスコ状土坑のうち時期が推定できるものは、すべて縄文時代



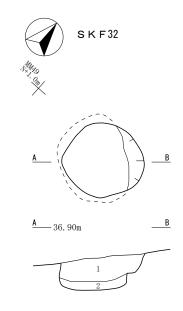
1 黒褐色 (10YR3/2) 土性SiL しまり中 粘性やや弱 AV層土斑状 ϕ 3 \sim 5 mm $\,$ 10%



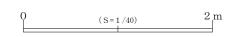
黒色(10YR2/1) 土性SiL しまりやや弱 粘性弱 AV層土粒・塊φ1~5 mm 3 % 炭化物粒・材φ1~10mm 3 % 黒色(10YR2/1) 土性SiL しまり中 粘性弱 AV層土粒・塊φ1~20mm 5 % 炭化物粒・材φ1~10mm 3 %



- 1 黒色(10YR2/1) 土性SiCL しまり中 粘性中 AV層土粒・塊φ1~10mm 5% 炭化物粒・材φ1~20mm 3% 石器・円礫φ80~760mm 3% 2 黒色(10YR2/1) 土性SiCL しまりやや弱 粘性中 AV層土粒・塊φ1~3mm 10% 炭化物粒・材φ1~5mm 1%



- 1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり弱 粘性中 AV層土斑状 ϕ 1 \sim 3 mm 1 % 2 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり弱 粘性中 AV層土斑状 ϕ 1 \sim 10mm 3 %



第66図 SKF20・25・31・32

であることから、同時代の遺構であると考えられる。

SKF1001フラスコ状土坑(第24・67図、図版8)

《位置・確認状況》 L J 41・42グリッドに位置する。 B VI層地山土面で黒褐色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は1.04m×0.96mの円形で、確認面からの深さは0.84mである。壁は底面から中位までやや内湾したのち中位からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で外傾する。底面は平坦である。《埋土》2層に分けられた。BⅡ層土由来の黒褐色土を主体とする。1層は混入物が認められないことから自然堆積、2層はBⅥ層土塊の堆積が壁側に多く認められることから、壁の崩落土を含む堆積土の可能性が考えられる。

《出土遺物》南西端の1層上位から、縄文土器小片が4点(25.7g)、石器は二次加工ある剥片1点(16.9g)、剥片2点(35.4g)、1層下位から、縄文土器小片2点(4.8g)、石器は二次加工ある剥片1点(36.6g)、剥片3点(30.1g)、2層から、石器は剥片3点(20.3g)が出土した。

《時期・所見》本遺構周辺は、近世期の耕作による撹乱がBVI層土まで及んでいることから、詳細な時期は不明である。本調査区で検出したフラスコ状土坑のうち時期が推定できるものは、すべて縄文時代であることから、同時代の遺構であると考えられる。

SKF1021フラスコ状土坑(第21・67・78図、図版8)

《位置・確認状況》 L S 38 グリッドに位置する。 S N 1004の断面を観察するために S N 1004 a 断面の位置に試掘坑を掘削したところ、 S N 1004直下で B II ②層中から掘り込まれる黒色土プランの一部を確認した。 S N 1004の調査後、 B II 層中で遺構の検出を試みたが、明確なプランを確認できず、最終的に B VI 層土面で確認した。

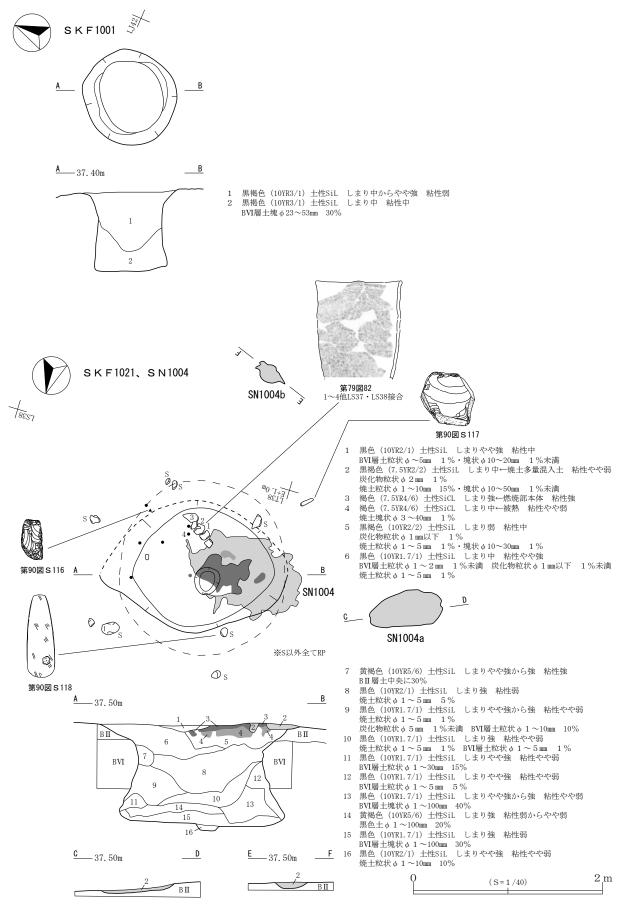
《重複》SN1004、SB1075・1076と重複する。これらは、本遺構より新しいが、SB1075・1076は 古代以降と考えられる。

《規模・形態》平面形は $2.09m \times 0.59m$ (残存値)の不整楕円形で、確認面から最深部までの深さは 1.15mである。最大径は $1.86m \times 1.67m$ で、壁は底部からオーバーハングし、確認面から $16 \sim 26cm$ の ところで、向きを変え緩やかに立ち上がる。底面は平坦で軟らかい。また、底面中央付近に、 $29cm \times 27cm$ 、底面からの深さ8cmの小穴が設けられていた。

《埋土》上面に位置する、SN1004焼土遺構を含め、16層に分けられた。 $1\sim4$ 層は、SN1004に関連する層位で、 $5\sim16$ 層が、本遺構に関連する埋土である。 $7\cdot14$ 層はBVI層土由来の黄褐色土で、壁の崩落であり、他はBII 層土由来の黒色から黒褐色土に、BVI層土粒や塊が混入していることから、人為的な堆積と考えられる。 $5\cdot6\cdot8\sim10\cdot16$ 層はそれぞれ焼土粒を微量に含んでいる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が6点(71.6g)、石器は剥片7点(89.9g)が出土した。このうち土器2点(第78図67・68、図版15)を図示した。67は深鉢形土器で、肥厚した折り返し口縁部が外反し、胴部のLR原体の側面圧痕が口唇部を跨ぐように付される。68は深鉢形土器で細い2条の平行沈線が無文地に施される。67は円筒上層a式土器と考えられる。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代中期前半と考えられる。また、本遺構の5・6・8~10・16層には焼土を含むことから、廃棄時には周囲に焼土が存在していたものと考えられる。



第67図 SKF1001·1021、SN1004

SKF1022フラスコ状土坑(第21・68図、図版8)

《位置・確認状況》 L T 38 グリッドに位置する。B II ②・B VI 層地山土面で黒色土プランを確認した。 《重複》 S K P 1016 と重複し、それよりも新しい。

《規模・形態》平面形は $0.59m \times 0.55m$ の円形で、確認面からの深さは0.79mである。壁は全体的にオーバーハングしている。南側では内湾しながら直線的に立ち上がるが、他では底部から約15cmまで外側へ急に立ち上がり、その後開口部まで直線的に内側へ急に立ち上がる。底面から約15cm上位が最大径で、平面形は $0.72m \times 0.72m$ の円形である。底面は平坦で軟らかい。

《埋土》 8層に分けられた。 B Π 層土由来の地山土塊である 7層を除き、他の層は B Π 層土由来の黒色から黒褐色土である。 $1\cdot 3\cdot 5\cdot 6\cdot 8$ 層は B Π 層土由来の黄褐色土粒・塊を含むため、人為的な堆積と推測する。 $4\cdot 7$ 層は、埋め立ての際に、地山の壁が崩落して入り込んだものと推測される。 《出土遺物》埋土から、縄文土器片が 2 点(10.5 g)、石器は剥片 2 点(42.1 g)が出土した。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代に属すると考えられるが、詳細な時期は不明である。

SKF1033フラスコ状土坑(第21・68・78図、図版8)

《位置・確認状況》LT38グリッドに位置する。BII②層黒色土・BVI層地山土面で黒色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $0.90m \times 0.78m$ の不整楕円形で、確認面からの深さは0.25mである。壁は全体的に急に立ち上がるが、南西・南東側では底面よりすぐにオーバーハングして立ち上がる。底面は平坦で、平面形は $0.90m \times 0.85m$ の不定円形である。

《埋土》3層に分けられた。すべてBⅡ層土由来の黒色から黒褐色土で、BⅥ層土由来の黄褐色土粒が微量に混入することから、人為堆積土と推測される。

《出土遺物》埋土から、同一固体と思われる縄文時代中期の土器片(円筒上層 a 式)が3点(60.9g)が出土した。このうち土器1点(第78図69、図版15)を図示した。69は深鉢形土器の山形状口縁部で、口縁部に沿って八の字状に隆帯が延びその上にL撚糸の圧痕が付される。また山形の頂部から垂下する隆帯にはLR原体の側面圧痕文が施され、頂部には深い刻みが入れられる。胎土に白色砂粒を含むが、焼成は良好である。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代中期前半と考えられる。

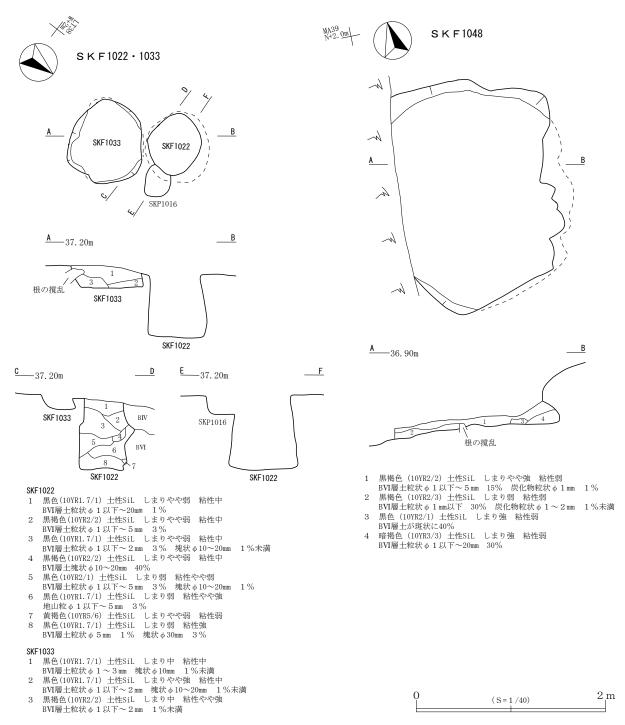
SKF1048フラスコ状土坑(第21・68・89図、図版8)

《位置・確認状況》 L T38・39グリッドに位置する。段丘先端の B VI 層地山土面で、全体の1/3を欠いた黒色土プランを確認した。西側は重機によりほぼ垂直に削られ失われている。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は2.48m×1.60m(残存値)の不整円形と推測され、確認面からの深さは0.24mである。壁は北側や南東側では、急に立ち上がる。東から南側にかけては全体的にオーバーハングし、内湾して立ち上がる。底面で最大径になるものと推測され、平面形は2.00m×1.84m(推定値)の不整円形である。底面は平坦で軟らかい。

《埋土》4層に分けられた。いずれもBⅡ層土由来の黒から暗褐色土で、BⅥ層土由来の黄褐色



第68図 SKF1022·1033·1048

土粒・塊を含むことから、人為堆積土と推測される。3・4層は、BVI層土由来の黄褐色土の混入する比率が、他の層より高い。壁際にあるため、本遺構を埋め立てる際、壁が崩落して混入したものと考えられる。なお、1層の上部は、表土に覆われていた。段丘西側が重機により掘削された際、本遺構西側の壁も合わせて損失し、埋土が流出、その上に表土が堆積したものと推測される。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片 4 点(100.8 g)、石器は石鏃 1 点(1.1 g)、剥片 2 点(63.4 g)が出土した。このうち石器 1 点(第89図 S107、図版20)を図示した。S107は石鏃である。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代と考えられる。

SKF1049フラスコ状土坑(第21・69・78・89図)

《位置・確認状況》 LT39グリッドに位置する。段丘先端のBVI層地山土面で黒色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $1.12m \times 0.91m$ の不整円形で、確認面からの深さは0.81mである。壁は、底部から $12 \sim 14cm$ まで緩やかに立ち上がり、ここで最大径となる。その後、確認面から約15cmの深さまでオーバーハングして、再び緩やかに外傾して開口部に達する。最大径部分の平面形は $1.68m \times 1.52m$ の不整円形である。底面は平坦で軟らかい。

《埋土》 5層に分けられた。 2層は、B VI層土由来の黄褐色土塊であり、壁の崩落土と考えられる。 他は B II 層土由来の黒色土に B IV 層土粒が混入することから、人為堆積土と考えられる。 ただし、これらの地山土は 1 層を除き混入の比率が高いことから、埋め立て時の壁の崩落に由来するものも含まれているものと推測される。 1 層には少量の B VI 層地山土粒・塊とともに、 S N 1004 由来と判断される焼土粒が微量に含んでいる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片が62点(1,210.0g)、石器は石核1点(203.0g)、剥片2点(36.0g)が出土した。このうち土器4点(第78図70~73、図版15)、石器1点(第89図S108、図版20)を図示した。70は5層西側底面直上出土の深鉢形土器で、胴部にL網目状撚糸文が施される。胎土、焼成とも良好な土器である。71は無文の鉢形土器で、平坦に面取された口唇には山形状の突起が付き、突起頂部は窪んでいる。外反する口縁部は一度すぼまって、上半に最大径のある胴部に至る。内外面とも横位のミガキが行われ、胎土、焼成とも良好である。72・73は深鉢形土器である。72の口唇は平坦で、外反する高さのない口縁部から胴部上半でわずかに膨らむ。胴部との境には2条の太い沈線がめぐり、胴部には条間のあくLR縄文が斜位に付される。内外面とも横位のミガキが行われ、胎土には細かな砂粒を含むが、焼成は良好である。73の口唇はしっかりと面取りされて平坦である。口縁部上端からLR縄文が付される。S108は石核である。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代後期後半と考えられる。

SKF1050フラスコ状土坑(第23・69・89図、図版8)

《位置・確認状況》 LG51グリッドに位置し、BVI層地山土面で黒褐色土プランを確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $1.00 \,\mathrm{m} \times 0.96 \,\mathrm{m}$ の円形で、確認面からの深さは $0.82 \,\mathrm{m}$ である。壁は全体的にオーバーハングし、底面付近で最大径 $1.30 \,\mathrm{m} \times 1.04 \,\mathrm{m}$ となる。底面は平坦で、中央付近に径 $0.22 \,\mathrm{m}$ で底面からの深さが $4 \,\mathrm{cm}$ の小穴が掘り込まれていた。

《埋土》 2層に分けられた。 1層は、B Π 層土由来の黒色土を主体とし、B Π 層地山土由来の黄褐色土粒が混入することから、一括の人為堆積土と考える。埋土中位から下位では湧水が認められ、グライ化が進んでいる。 2層は、湧水層に対応し水平方向に複数回堆積し、互層をなしていることから、一定の開口期間に水成堆積したものと考える。また、2層の湧水層とオーバーハングの範囲が整合し、2-2・5・7層は壁のB Π 関地山土と同様であることから、湧水により壁が崩落しオーバーハングした可能性が考えられる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器片 1 点 (4.8g)、石器は石匙 1 点 (27.9g)、剥片 1 点 (0.9g) が出土した。このうち石器 1 点 (第89図 S109、図版20) を図示した。S109は 1 層下位より出土した斜型の石

匙で、右側縁の一部に摩耗痕が観察できる。

《時期・所見》出土遺物から詳細な時期は不明であるが、本遺構と同様に底面に小穴を伴い、形態も類似するSKF1021と同時期と推定すると、縄文時代後期初頭の可能性が考えられる。

SKF1054フラスコ状土坑(第21・69図)

《位置・確認状況》MA36・37グリッドに位置する。段丘先端で、BVI層地山土面で、重機により掘削され、一部西側が失われている黒色土プラン及びその断面を確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》西側が削平を受けているが、平面形は、0.99m×0.70mの楕円形と推測される。確認面からの深さは0.53mである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、北から北東側では、底面から約10cmでオーバーハングし、確認面から0.20mの深さで、角度を変えて、直立気味に開口部に達する。その他の残存している南東側の壁は、底面から急に立ち上がった後、底面から0.22mの位置でさらに外反して開き、開口部に達する。底面は平坦である。

《埋土》2層に分けられた。いずれもBⅡ層土由来の黒色土に、BⅥ・BⅦ層地山由来の黄褐色土が 混入することから、人為堆積土と推測される。特に2層は比較的大きい地山土塊を含むことから、一 部、壁の崩落も含まれると考えられる。

《出土遺物》なし。

《時期・所見》本調査区で検出したフラスコ状土坑のうち、時期が推定できるものはすべて縄文時代であることから、同時代の遺構であると考えられる。

SKF1057フラスコ状土坑(第24・70図)

《位置・確認状況》 LB43グリッドに位置する。BVI層地山土面で、BII層土由来の黒色土プランを確認した。その後、断面精査により、BII②層中から掘り込まれていることを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》確認面は南東側で高く、北西側で低く、全体形状は不明であるが、平面形は1.30m (残存値)×1.20m (残存値)の円形であったと推測される。確認面からの深さは0.40mである。壁は、北側がほぼ垂直に、他はオーバーハングする。南側では壁の残りが良好で、オーバーハングした後に、上に向かって外反する状況が確認できる。底面は平坦である。

《埋土》3層に分けられた。1・2層は、BⅢ層土由来の黒色土で、3層は、BⅥ層地山土由来の黄褐色土である。1層は、BⅥ層地山土由来の黄褐色土が少量混入するが、レンズ状に堆積することから人為堆積土ではなく、流入土の可能性も考えられる。2・3層は、BⅥ層地山土由来の黄褐色土を多く含むため、人為堆積土と推測される。

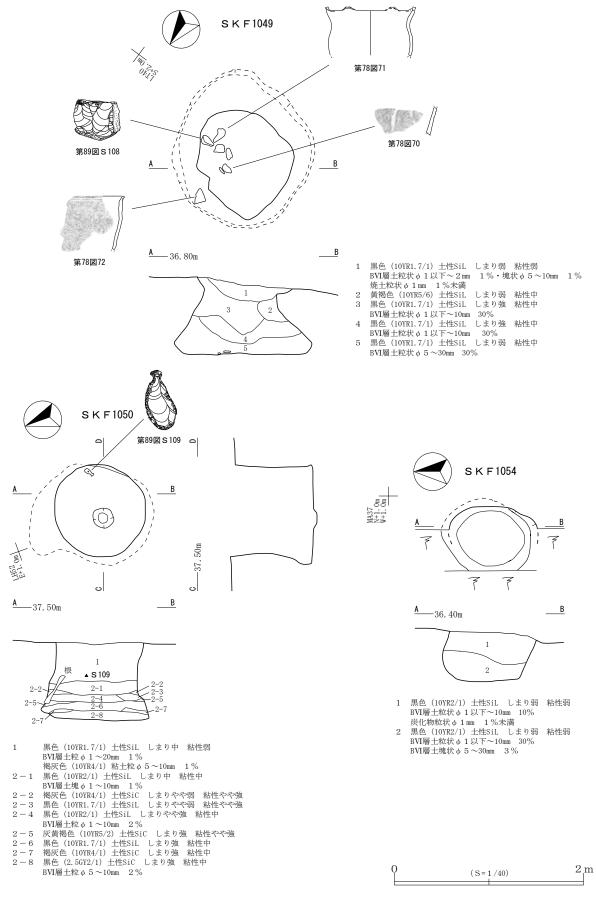
《出土遺物》なし。

《時期・所見》本調査区で検出したフラスコ状土坑のうち時期が推定できるものは、すべて縄文時代であることから、同時代の遺構であると考えられる。

SKF1068フラスコ状土坑(第20・70図、図版8)

《位置・確認状況》 LS48グリッドに位置する。 BVI層地山土面でBII 層土由来の黒色土プランを確認した。

《重複》重複する遺構はないが、自然地形を検討するために掘削した試掘坑に西側を切られる。



第69図 SKF1049·1050·1054

《規模・形態》平面形は径0.66m(推定値)の円形と推定する。確認面からの深さは0.68mである。壁は全体的に大きくオーバーハングしており、底面付近で最大径1.52mとなる。底面は平坦である。

《埋土》単一層である。BⅡ層土由来の黒色土を主体とし、BⅥ層土粒が混入することから、一括の 人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土から、縄文時代晩期の土器片が4点(23.2g)が出土した。

《時期・所見》本遺構の時期は、近接するSKF1069と埋土が類似することから縄文時代晩期前葉と推定される。

SKF1069フラスコ状土坑(第20・70・78図)

《位置・確認状況》 L T 48グリッドに位置し、B VI 層地山土面で B II 層土由来の黒色土プランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は $0.78m \times 0.61m$ の楕円形で、確認面からの深さは0.60mである。壁は全体的にオーバーハングし、底面付近で最大21.08mとなる。北側の壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《埋土》単一層である。BⅡ層土由来の黒色土を主体とし、BⅥ層地山土粒が混入することから一括の人為堆積土と考える。

《出土遺物》埋土中位から下位で、縄文時代晩期前葉の土器片が7点(75.0g)が出土した。このうち土器1点(第78図74、図版15)を図示した。74は鉢形土器である。口唇にはB突起、口縁部には羊歯状文と沈線がめぐり、胴部にはLR縄文が付される。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代晩期前葉と推定される。

SKF1070フラスコ状土坑(第20・70・79図、図版9)

《位置・確認状況》 LS47・48グリッドに位置し、BVI層地山土面でBII層土由来の黒色土プランを確認した。

《重複》なし。

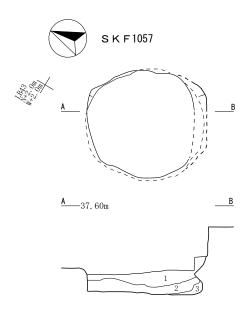
《規模・形態》開口部の平面形は $0.76m \times 0.60m$ の略円形で、確認面からの深さは0.54mである。壁は全体的にオーバーハングしており、底面付近で最大径 $0.90m \times 0.76m$ となる。底面は平坦である。《埋土》 3 層に分けられた。 $1 \sim 2$ 層は、B Π 層土由来の黒色土を主体とし、堆積土の大半を占め、B Π 層地山土粒が混入することから一括の人為堆積土と考える。 3 層は、B Π 層土と同様であることから、壁の崩落によるものと考える。

《出土遺物》 1 層下位及び 2 層から、縄文土器片が 9 点(140.7 g)、石器は剥片 2 点(68.5 g)が出土した。このうち土器 1 点(第79図75、図版15)を図示した。75は深鉢形土器である。平底の底部から大きく外側に開く器形である。外面には貝殻条痕文が胴部下端まで施文され、内面にはミガキが行われる。胎土には白色の砂粒も含むが焼成は良好である。

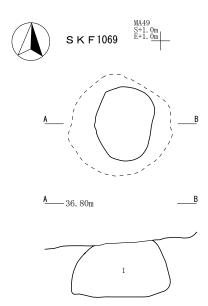
《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代晩期前葉と推定される。

⑦石囲炉

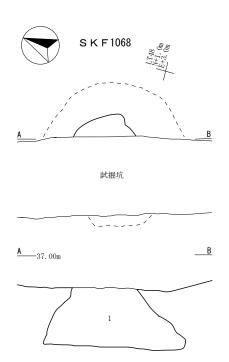
本調査区からは1基検出した。本遺構の時期は、縄文時代後期末葉以降と推定される。



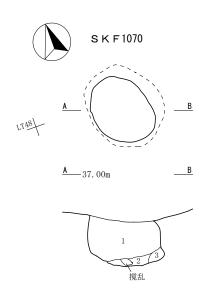
- 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり弱からやや弱 粘性強 BVI層土粒状φ1以下~3 mm 3%・塊状φ20mm 1%未満 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまりやや弱 粘性強 BVI層土粒状φ1以下~3 mm 15%・塊状φ15~20 mm 5% 黄橙色 (10YR7/8) 土性SiL しまり弱 粘性強 BII層黒色土粒状φ1 mm以下 40%



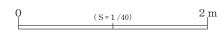
1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性中からやや弱 BVI層土塊 ϕ 2 \sim 50mm 3 %



1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中 粘性やや弱 BVI層土粒 ϕ 1 $\sim\!20\mathrm{mm}$ 3 %



- 1 黒色 (10YR1.7/1) 土性SiL しまり中からやや弱 粘性中からやや弱
- BVI層土粒φ5~15mm 5 % 2 黒色 (107R1.7/1) 土性SiL しまり中からやや弱 粘性中 BVI層土塊φ50mm 30% 3 にぶい黄褐色 (107R5/4) 土性SiL しまり弱 粘性弱



第70図 SKF1057·1068~1070

SQN56石囲炉(第18・71・79図、図版 9)

《位置・確認状況》MK41グリッドに位置する。AIII b 層黒色土中で上面が被熱し、表面の一部が被熱刺離した円礫を確認した。その被熱した側の周囲からも表面の一部が被熱し、小さく破砕した数点の円礫を確認した。本調査区からは、建物跡に伴う同様の石囲炉を複数検出したことから、石囲炉と判断した。

《重複》SN59と重複し、それよりも新しい。

《規模・形態》33cm×21cmの楕円形の掘り込みを持ち、長さ33cm×幅9cm×厚さ6cmの柱状の亜円礫を横に設置する。亜円礫の被熱範囲は上端(標高32.57m)から5.0cmの範囲で、下端の被熱痕は水平に残る。被熱する小礫が周囲にもあることから、本来は石囲炉の一部だったものと考える。石囲炉の礫に水平に残る被熱範囲と同一標高面には焼土層は残存しない。周囲に、被熱し破砕した小礫や焼土粒・塊、炭化物が散乱することから、石囲炉を構成していた他の礫や焼土は撹乱されたものと考える。

《埋土》単一層である。石囲炉構築の際の裏込め土である。本遺構は下位にあるSN59を切り、構築されていることから、掘り込みの際に掘り返されたSN59の焼土などを、再度裏込め土として利用したものと考える。

《出土遺物》本遺構の周辺で、礫に水平に残る被熱痕と同一標高から、縄文土器片が39点(1,406.0g)、石器は剥片1点(0.8g)が出土した。このうち土器1点(第79図76、図版16)を図示した。76は無文の深鉢形土器である。口唇は平坦で、外反する口縁部から一度緩くすぼまって膨らみのある胴部に至る。内外面ともミガキが行われる。

《時期・所見》本遺構の時期は、SN59との新旧関係から縄文時代後期末葉以降と考える。本遺構が確認された周辺の同一面からは遺物や炭化物が多く出土し、遺跡内の竪穴建物跡には石囲炉を伴うものがあることから推測すると、柱穴や竪穴の掘り込みは確認できなかったが、建物跡に付随する石囲炉の可能性が考えられる。

⑧焼土遺構

本調査区からは6基検出した。時期別では縄文時代後期前半以降1基、後期前葉1基、後期末葉2基、後期末葉以降1基、縄文時代に帰属すると推定されるが、詳細な時期の不明なものが1基である。

SN22焼土遺構(第18・71図、図版9)

《位置・確認状況》MI39グリッドに位置する。AⅢc層黒褐色土中に焼土面を確認した。 《重複》なし。

《規模・形態》平面形は0.50m×0.40mの不整形である。焼土面の標高は32.70mで、厚さは確認面から最大で10cmである。掘り込みはなく、2層に分けられた。1層は強く被熱した橙色の焼土である。2層はAⅢc層土由来の黒褐色土を主体とし、焼土粒・塊、炭化物を含む。1層形成前の焼土や灰などの掻き出しや燃料材の投入による地床炉と接するAⅢ層土が掻き混ぜられ、一部が残ったことに起因すると考える。

《出土遺物》焼土面付近から、縄文土器片が1点(10.9g)、石器は二次加工ある剥片1点(15.1g)が出土した。

《時期・所見》本遺構は、北西側約3 mにあるS N 27と同様に焼土形成面が A Ⅲ c 層土内にあり、標高が近いことから、縄文時代後期と推定される。

SN27焼土遺構(第18・71・79図、図版9)

《位置・確認状況》MI・MJ40グリッドに位置する。AⅢc層黒褐色土中に焼土面を確認した。 《重複》SIX102と重複するが、地山土面で確認したため、新旧関係は不明である。本遺構は、 SIX102の建物内の中央部に位置する。

《規模・形態》平面形は0.52m×0.40mの不整形である。焼土面の標高は32.76mで、厚さは確認面から最大で8cmである。掘り込みはない。本遺構の周囲には焼土粒や炭化物が広く分布する。

《出土遺物》焼土面付近から、縄文土器片が31点(741.5g)、石器は二次加工ある剥片2点(101.0g)が出土した。このうち土器2点(第79図77・78、図版16)を図示した。77は深鉢形土器で、外反する波状口縁部の頂部には刻目があり、この刻目から頂部を取り囲むように3条の沈線がV字状に引かれ、その下には4条の太い平行沈線がLR縄文施文後に施される。78は鉢形土器である。丁寧な面取が行われ丸みのある口唇、わずかに外傾する口縁部から膨らみのある胴部に至る。口縁部は隆沈文が描く横長の長方形内に沈線文が施され、胴部には数条の沈線によって文様が描かれるものと思われる。内外面はミガキが行われ、胎土、焼成とも良好である。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代後期前葉と考える。

SN59焼土遺構(第18・71・79・90図、図版 9)

《位置・確認状況》MK41グリッドに位置する。試掘坑南側断面のAⅢ b層黒色土中で焼土層を確認した。平面形はSQN56精査中に確認した。

《重複》SQN56と重複し、それよりも旧い。SN60が北西側0.88mに位置する。

《規模・形態》北側の一部が試掘坑で掘削されているため、全体形状は不明である。平面形は0.96m×0.54m(残存値)の不整形である。焼土面の標高は32.49mで、厚さは確認面から最大で11cmである。掘り込みはない。

《出土遺物》焼土面付近から、縄文土器片が94点(1,218.6g)、石器はスクレイパー2点(26.6g)、石核1点(120.1g)、二次加工ある剥片4点(75.6g)、剥片19点(56.2g)が出土した。このうち土器3点(第79図79~81、図版16)、石器2点(第90図S110・S111、図版20)を図示した。79・80は深鉢形土器である。79は磨消により入組文が施され、LRとRLの非結東羽状縄文が付される。内外面ともミガキが行われる。80は隆帯で矩形に区画し、隆帯上にはRL原体により側面圧痕が付され、隆帯のコーナーには丸い貼瘤が施される。胎土、焼土とも良好である。81は無文の壺形土器で、丸みのある胴部から比較的径の大きい底部に至る。内外面ともミガキが行われ、胎土、焼成とも良好である。S110はスクレイパー(25.9g)、S111は石核で、縁辺から求心的に剥片剥離が表裏の全面に及び、断面形が菱形である。

《時期・所見》本遺構の時期は、出土土器から縄文時代後期末葉と考える。本遺構が確認された周辺の同一面からは、遺物や炭化物が多く出土する。また、SN60とほぼ同一面上にあり、焼土の被熱度合いや周囲の土壌の混入物が類似することから、同一の地床炉の可能性も考えられる。

SN60焼土遺構(第18・71・90図)

《位置・確認状況》MK41グリッドに位置する。試掘坑北側断面のAⅢ b 層黒色土中で確認した。 《重複》SN59が南東側0.88mに位置する。

《規模・形態》南側の一部が試掘坑で掘削されているため、全体形状は不明であるが、平面形は

 $0.90 \,\mathrm{m} \times 0.34 \,\mathrm{m}$ (残存値) の半円形である。焼土面の標高は32.60 mで、厚さは確認面から最大で18 cm である。掘り込みはない。

《出土遺物》焼土面付近から、縄文土器片が 3点(42.8g)、石器は石錐 2点(9.0g)、スクレイパー 1点(29.7g)、二次加工ある剥片 3点(81.7g)、剥片16点(82.3g)が出土した。このうち石器 3点(第90図S112~S114、図版20)を図示した。 $S112 \cdot S113$ は石錐、S114はスクレイパーである。

《時期・所見》本遺構は、南東側0.88mに位置するSN59とほぼ同一面上にあり、焼土化の程度や周囲の土壌の混入物が類似することから、同一の地床炉の可能性が考えられる。本遺構の時期は、縄文時代後期末葉と推測する。

SN1004焼土遺構(第21・67・79・90図、図版 9)

《位置・確認状況》 LS37・38、LT38グリッドに位置する。BⅡ②層黒色土中を精査中に、BⅡ② 層下位上面で、焼土面及び焼土塊の広がりを確認した。

《重複》SKF1021と重複し、それよりも新しい。

《規模・形態平面形は》本遺構は1.36m×0.98mの不整形である。焼土面の標高は37.30mで、厚さは確認面から15cmである。このうち強く熱を受け範囲は0.60m×0.40mの広がりを持つ。これと関連する焼土塊が西側(SN1004a)と南側(SN1004b)に存在する。SN1004aは0.76m×0.39mの不整形で、厚さは9cmである。SN1004bは0.35m×0.20mの不整形で、厚さは7cmである。

《出土遺物》本遺構周辺からは、炭化したクリ子葉片が多数出土した(第4章第1節参照)。その他、SN1004a・bを含む本遺構周辺では、縄文土器片が40点(1,058.8g)、石器は石篦1点(44.8g)、スクレイパー1点(10.2g)、石核1点(565.5g)、磨製石斧1点(246.0g)、剥片3点(15.4g)が出土した。このうち土器1点(第79図82、図版16)、石器4点(第90図S115~S118、図版20)を図示した。82は深鉢形土器である。口唇は丁寧に面取され丸みを帯び、口縁部から胴部上半でわずかに膨らみ底部に至る。外反する口縁部はおそらく4か所で低い山形となり、頂部から沈線による向かい合う弧状文が3個縦に描かれ、これが胴部文様帯を4分割しているのであろう。それぞれの弧状文からは2条一組の沈線が左右斜めに走る。内外面ともミガキが顕著に施され、胎土、焼成とも良好である。S115は石篦、S116はスクレイパー、S117は石核、S118は磨製石斧である。

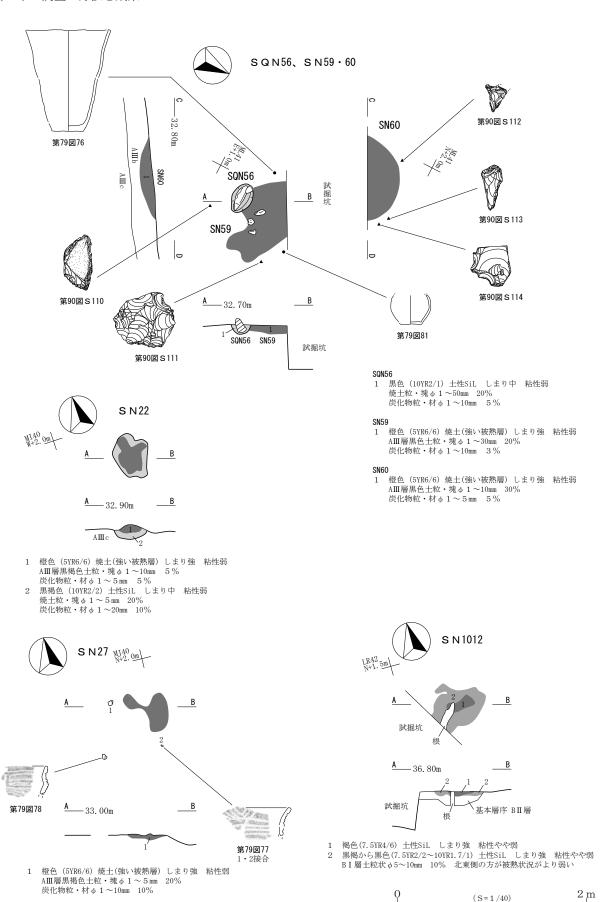
《時期・所見》本遺構の時期は、周辺の出土遺物から、縄文時代後期前半と推定される。炭化材及び炭化クリ子葉片の放射性炭素年代測定結果は、それぞれの暦年較正年代は3,665±26yrBPと3,670±25yrBPの近値を示す(第4章第2節参照)。縄文時代後期前葉頃に想定され、出土遺物からみた年代観と大きな相違はない。周辺では、炭化したクリ子葉片がいくつか出土したことから、食料を調理するための野外炉の可能性がある。

SN1012焼土遺構(第21・71図、図版9)

《位置・確認状況》B区南側平坦面の雨裂内、LQ42グリッドに位置する。雨裂に堆積したBⅡ層黒色土を掘削中にBⅡ層黒色土中で焼土面を確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》南西部分は、試掘坑により失われている。残存部の平面形は54cm×52cmの不整形である。焼土面の標高は36.56mで、厚さは最大で5cm程度である。1層は、最も強く熱を受け中心付近で、2層はその周辺で焼土化の程度は弱い。



第71図 SQN56、SN22·27·59·60·1012

《出土遺物》周囲のBⅡ層黒色土中から縄文時代の遺物が出土したが、本遺構は雨裂内に位置することから、周囲から流れ込んでいる可能性が高い。このため本遺構に伴う遺物は抽出できない。

《時期・所見》出土遺物がなく時期は定かではないが、本遺構の上位に堆積する B II 層黒色土からは縄文時代の遺物が出土することや、近接する縄文時代のSQX1007より低い位置に本遺構が形成されていることから、本遺構は縄文時代と考えられる。周囲には付随する柱穴や竪穴は確認できなかったものの、本遺構はB II 層黒色土中に形成されているため、竪穴や柱穴が検出できなかった可能性も否定できない。

9土器埋設遺構

本調査区からは3基検出した。帰属時期は縄文時代後期後葉1基、後期2基である。性格の詳細は 不明であるが、墓の可能性が考えられる。

SR10土器埋設遺構(第16・72・79図、図版 9)

《位置・確認状況》MN47グリッドに位置する。試掘坑内のAⅢ層黒褐色土中に深鉢形土器が出土し、確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》掘方の平面形は径約0.30mの円形で、確認面からの深さは0.11mである。壁は急に立ち上がり、底面は丸みがある。掘方内には口縁部と胴部上半を欠損した正位の深鉢形土器が南西側に傾けて埋設される。

《埋土》 1 層は土器内埋土でAⅢ層土由来の黒褐色土で、A V 層地山土由来のにぶい黄褐色土が混入する。 2 層は埋設土器の裏込め土で、AⅢ層土由来の黒色土にA V 層土が混入する。一括して埋め戻された人為堆積土と考える。

《出土遺物》縄文土器の埋設土器 1 点(297.0g)が出土(第79図83、図版16)し、図示した。83は深鉢形土器である。内外面に縦方向のケズリが顕著で、胎土中の砂粒が表面に表れている。

底部の外面端部はリング状になり、中央は上げ底になる。

《時期・所見》本遺構の時期は、埋設土器から縄文時代後期と考えられる。

SR28土器埋設遺構(第17・72・79図、図版 9)

《位置・確認状況》ML40グリッドに位置する。試掘坑断面のAⅢb層黒色土中で確認した。

《重複》本遺構は、SI61の石囲炉(礫)の最高位より16.0cm高い面で確認されたことから、SI61よりも新しい。

《規模・形態》埋設土器は、底部が欠損する深鉢形土器である。逆位の状態で、西側にわずかに傾けて設置される。掘方の平面形は0.60m×0.54mの円形で、確認面の標高は32.18mである。

《埋土》 2層に分けられた。 1層は土器内埋土、 2層は裏込め土である。いずれもA III 層土由来の黒色土を主体とし、A V 層土由来の明黄褐色土、炭化物を含む。両層には同一個体の土器片が含まれる。《出土遺物》縄文土器の埋設土器 1 点 $(4,422.0\,\mathrm{g})$ 、他に、縄文土器片が、 1 層から28 点 $(646.4\,\mathrm{g})$ 、2層から71 点 $(1,064.6\,\mathrm{g})$ 、石器は 1 層から二次加工ある剥片 1 点 $(9.3\,\mathrm{g})$ 、剥片 2 点 $(23.9\,\mathrm{g})$ 、2層から剥片 4 点 $(39.0\,\mathrm{g})$ が出土した。また、 1 層から径1.5 cm程の球状のアスファルト塊が出土した。このうち土器 2 点 (第79回84.85、回版16) を図示した。 84 は埋設された深鉢形土器で、内湾する口縁部からわずかに膨らむ胴部上半、さらに直線的に底部に至る。口唇は平坦でミガキが行われ、口縁部

上端から1 cm程は無文で、胴部上半とは1条の沈線で画される。胴部にはLR縄文が斜位に付される。 胎土、焼成とも良好である。内外面に煤状炭化物が付着することから煮沸具から転用された可能性が ある。85は1層出土の鉢形土器である。胴部の最大径の部分に3条一組の沈線をめぐらし、それを中 心として上下に弧状や斜位の3条一組の沈線文が施される。内外面ともミガキが行われ、胎土、焼成 とも良好である。

《時期・所見》本遺構の時期は、埋設土器から縄文時代後期後葉(十腰内IV群)と考える。土器内や周囲の土は焼土化していない。

SR1005土器埋設遺構(第21・72・79図、図版10)

《位置・確認状況》LQ39グリッドに位置する。BIV層上面で確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》掘方の平面形は0.32m×0.28m(推定値)の円形と推測される。確認面からの深さは 0.13mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸みがある。土器は正位の状態で、若干北に傾いて 出土した。土器の残存状況は悪く、底部以外は土器の内側に崩れた状態で散乱していた。

《埋土》土器の裏込め土、土器内の埋土もBII層土由来の黒色土である。

《出土遺物》縄文土器の埋設土器 4 点(425.0g)が出土し、このうち 1 点(第79図86)を図示した。 86は深鉢形土器で、胴部下半まで L R 縄文が斜位に付される。胎土には砂粒が含まれるが、焼成は良好である。

《時期・所見》残存部分が粗製土器の底部のみのため、詳細な時期は判断できなかった。土器の器厚や胎土の様子が調査区で出土する縄文時代後期後葉の土器と類似することから、後期の遺構である可能性が高い。

⑩配石土坑

本調査区からは1基を検出した。帰属時期は縄文時代後期初頭と推定される。

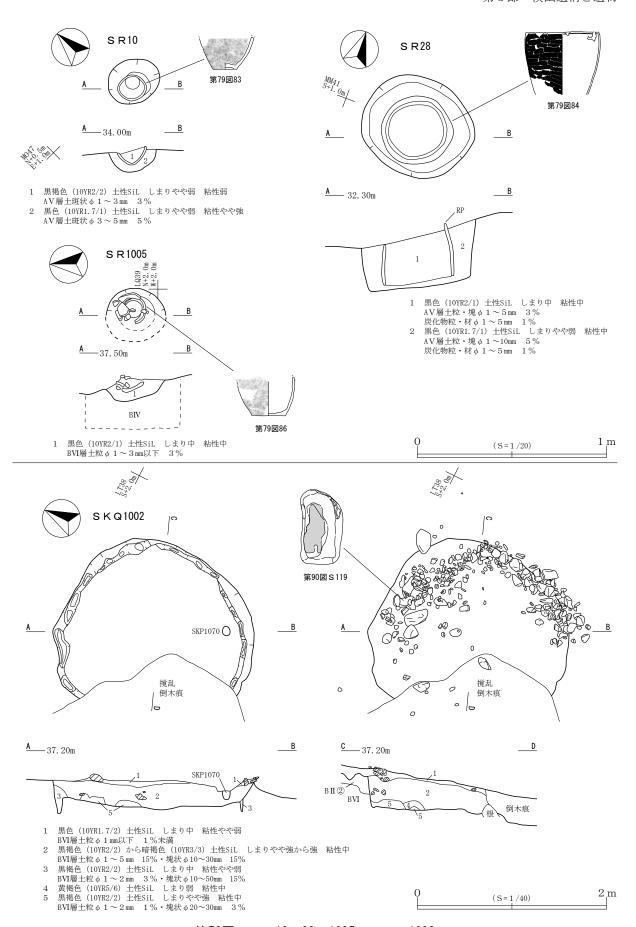
SKQ1002配石土坑(第21・72・90図、図版10)

《位置・確認状況》 L T 36・37グリッドに位置する。 B Ⅱ②層上面で弧状に礫が配された状態を確認し、配石遺構としていたが、下部に土坑を伴うことから配石土坑に変更した。北西側の半分近くは、倒木痕により失われている。

《重複》SKP1070と重複し、それよりも旧い。

《規模・形態》上面に配される組石は、約230個の大小様々な円礫で構成される。礫の大きさは 15cm×26cm~2 cm×3 cm程で、打ち欠かれているものも多々ある。北東が角張る弧状に礫が数段重ねられて配置されていた。配石の最大幅は2.21mである。下部土坑の平面形は2.14m×1.33mで、不整円形と推測され、底部壁際には溝がめぐる。確認面からの深さは、最深部で0.35mで、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南西側はやや緩やかに開く。底面は凹凸があるが、比較的平坦である。底部をめぐる溝の幅は3~13cm、床面からの深さは15cmである。

《埋土》 5 層に分けられた。 B VI 層地山土由来の黄褐色土塊である 4 層を除いて、すべて B II 層土由来の黒色土を基調とする。 1 層は組石を並べた後、自然に堆積したものと考えられる。 B II 層土と見分けがつかない。 $2\cdot 3\cdot 5$ 層は B VI 層土由来の黄褐色土粒・塊が混入、 4 層は黄褐色土が主体であることから、人為堆積土であると考えられる。



第72図 SR10·28·1005、SKQ1002

《出土遺物》配石中で、縄文土器片が18点(169.1g)、石器は石皿1点(1,608.0g)、二次加工ある剥片 1点(130.5g)、剥片 2点(165.8g)が出土した。このうち石器 1点(\$90図S119、図版20)を図示した。S119は石皿で、自然の窪みの一部に磨面がある。

《時期・所見》配石は、土坑埋め戻し土である2層中で確認できることから、埋め戻しをしながら礫を配したものと推定される。また土坑の上部の1層にも礫が配置されることから、土坑が完全に埋められた後も、その上部に連続して礫を積み上げたものと考えられる。配石中で出土した土器片は、小片のため時期を特定することは困難であった。本遺構北西側に重複する倒木痕の黒色土は、木が倒れた際に本遺構の埋土が流れ込んだ可能性がある。そこから後期初頭の土器片が出土したことから、本遺構は縄文時代後期初頭に構築されたと考えられる。また、土坑底部をめぐる溝は他の竪穴建物の壁溝に類似する。本来竪穴建物で、竪穴建物の廃棄に伴って配石を施し、竪穴建物の廃棄に伴い、墓に作り替えられた可能性が推測される。

⑪配石遺構

本調査区からは1基検出した。帰属時期は縄文時代と考えられる。性格は不明である。

SQ69配石遺構(第17・73図、図版10)

《位置・確認状況》MQ46グリッドに位置する。AⅢb層暗褐色土中で確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》約0.80m×約0.60mの範囲に、径7.0~19.5cmの円礫や亜角礫が不整形に広がる。 《出土遺物》なし。

《時期・所見》本遺構の時期はAⅢ b層中で検出したことから、縄文時代と推測する。礫の底面標高がほぼ同じであることから、掘り込みは伴わず、地表面に直接礫を設置したものと考える。また、使用される礫は扁平な形をしたものが多く、意図的に集石された可能性が高い。

⑫石器製作関連遺構

本調査区からは2基検出した。

SQX1007石器製作関連遺構(第21・73・91図、図版10)

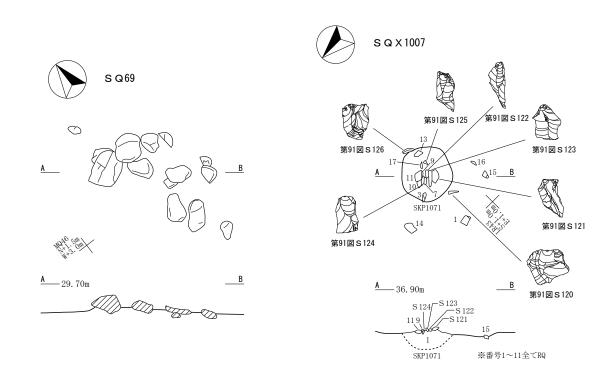
《位置・確認状況》 L Q42グリッドに位置し、B Ⅱ②層中位面で剥片が集中して出土した。

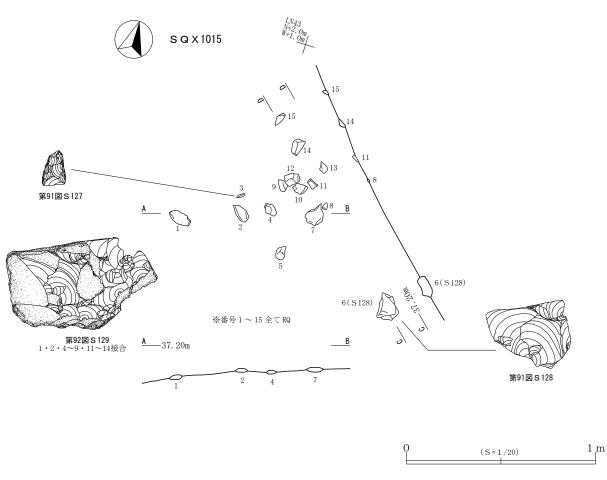
《重複》剥片が集中している面でSKP1071の平面形プランを確認したが、直接の切り合いはない。

《規模・形態》同一面上の1.5m程の円形の範囲に頁岩の剥片が散布していた。

《出土遺物》 SKP1071の上面から頁岩の剥片が集中して13点(142.4g)、その周囲から同質の剥片 31点(465.5g)が分かれて出土した。このうち石器 7点 $(第91図 S120 \sim 126$ 、図版21)を図示した。 $S120 \cdot S126$ は接合資料で、S120は周辺の剥片 2点が接合、S126はSKP1071の上面の剥片 1点と その周辺の剥片 1点が接合した。なお、周囲から出土した剥片のうち26点については、LQ42グリッド BII 層剥片集中部として取り上げているため、詳細な位置を記録していない。

《時期・所見》石鏃や石匙などの材料となる剥片が集中し、その同一面上の周囲にも剥片が分かれて出土したことから、当地区で母岩を分割したもので直接SKP1071とは関わらないと考える。土器が出土していないため詳細な時期は不明であるが、本遺構を検出したBII②層は近世の撹乱を受けておらず縄文時代の遺物が主体を占めることから、構築時期は縄文時代と考える。





第73図 SQ69、SQX1007·1015

SQX1015石器製作関連遺構(第22・73・91・92図、図版10)

《位置・確認状況》LN43グリッドに位置する。BIV層地山土面で石核を含む頁岩の剥片の広がりを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》同一面上の南東側に頁岩の石核が、その北西側に、同質のトランシェ様石器、二次加工ある剥片、剥片が1.2m×0.8m程の範囲に分かれ、出土した。

《出土遺物》床面よりトランシェ様石器 1 点 (31.6g)、石核 1 点 (964.0g)、二次加工ある剥片 1 点 (118.5g)、剥片22点 (1258.5g)が範囲内から出土した。このうち石器 3 点 (第91・92図 S 127~S 129、図版21)を図示した。S 127はトランシェ様石器、S 128は石核 (残核)で、剥片21点と接合 (S 129)した。 なお、接合した剥片のうち、10点については詳細な位置を記録していない。S 129の接合資料から推測すると、母岩は直方体で、剥片剥離作業を大きく分けて 2 つの工程で行っている。初めは母岩正面の片面だけを打面として設定し、RQ 5 →LN43①→LN43②→RQ 4 →RQ13 →RQ 7 →LM43①→RQ11→RQ10→LN43③→RQ12→RQ 9 →LN43④→RQ14の順で大小様々な剥片を剥離している。 2 度目は残存する母岩の正面 (1 度目の打面)を作業面として、RQ15→RQ 2 →LN43⑤→LN43⑥→LN43⑦→LM43②→LN43⑧の順で剥片を剥離している。RQ13・7 の主要剥離面側と RQ10・11・12、LM43①、LN43③の背面側の間、RQ2・4・5・15、LN43①の主要剥離面側と、S 128 (残核)の剥離面・LN43⑥の背面側の間に接合する剥片が無く隙間ができていることから、剥片が遺跡外に持ち出された可能性がある。S 128 (残核)に残る剥離面の推測から、持ち出されたのは横長剥片だったことが分かる。S 127は横長剥片を素材としたトランシェ様石器で、微化石や色調・比重などが他の剥片と類似し、大きさや形もS 129 (接合して復元された母岩)の隙間に収まる。S 127は、母岩 (S 129) から剥がされた剥片を利用して製作されたものと考える。

《時期・所見》当該グリッド出土の土器は、縄文時代後期後葉を主体としているが、周辺からは縄文時代早期以降の土器も出土しているため、帰属時期の詳細は不明である。縄文時代の石器製作の場であったと考える。

(3)柱穴様ピット(第13~24図)

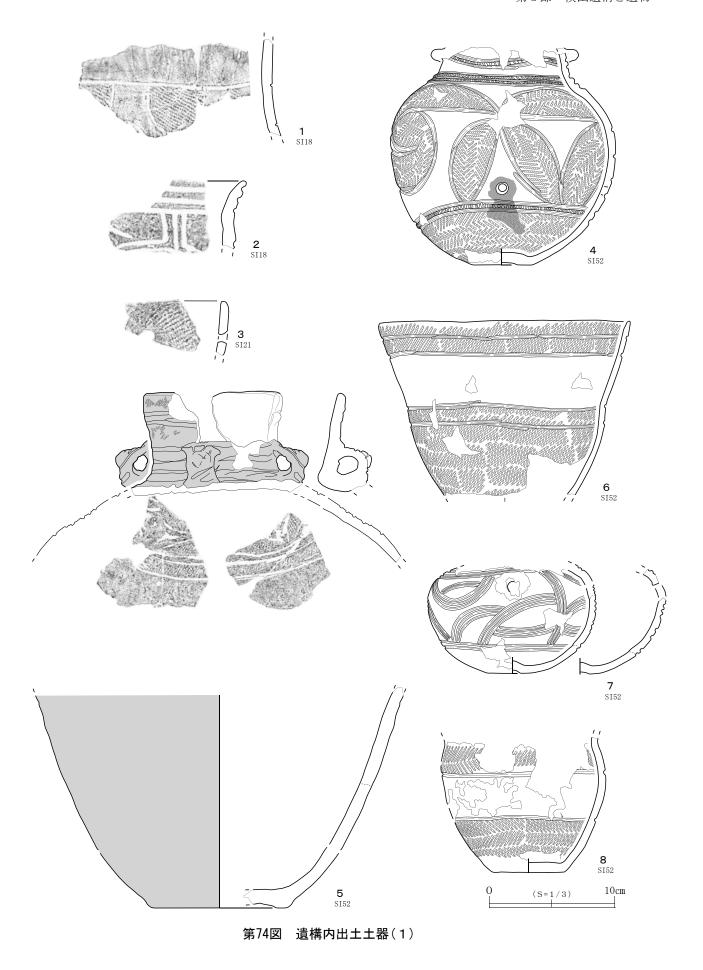
縄文時代の柱穴様ピットは、A区を中心に116基検出した。1基を除いて、他のすべて地山面 (AV層、BVI層)で検出した。平面形は円形から楕円形がほとんどで、埋土はAIII・BII層土由来の 黒色から黒褐色土が主体である。いずれも柱痕は確認できなかった。ピット個々の規模、出土遺物などについては第2・3表縄文時代柱穴様ピット一覧(1・2)に掲載した。なお、遺物のうち、SKP105 から出土した土器2点(第79図87・88、図版16)を図示した。87・88は深鉢形土器である。87ではRL 縄文施文後に磨消を行い、無文帯としている。88は平行沈線間にRL縄文を斜位に施した縄文帯や無文帯が設けられる。

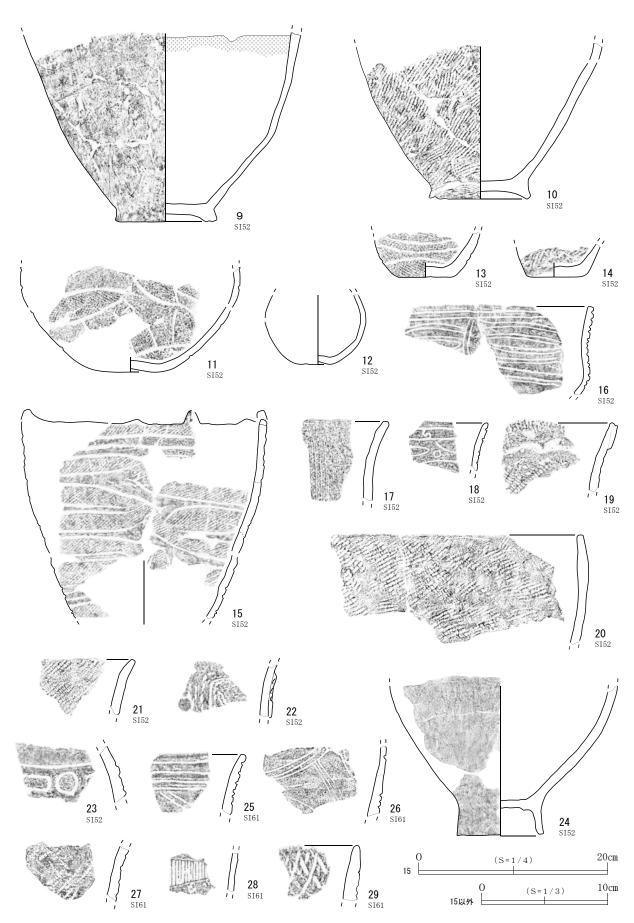
第2表 縄文時代柱穴様ピット一覧(1)

					क्र ८ १	_ ,,,		マイエノてい		兄(!/	
SKP 番号	区	位 置	検出 層位	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	埋土	時期	備考
1	Α	MQ68	ΑV	円形	20	20	19	36. 41	AⅢ層由来	縄文	
2	Α	MQ67	ΑV	楕円形	26	20	6	36. 63	AⅢ層由来	縄文	
7	Α	ML57	ΑV	不整形	40	28	13	36. 69	AⅢ層由来	縄文	
8	Α	ML56	ΑV	隅丸方形	26	18	21	36. 79	AⅢ層由来	縄文	
9	Α	ML56	ΑV	円形	28	24	9	36. 93	AⅢ層由来	縄文	
10	Α	ML56	ΑV	方形	22	22	24	36. 75	AⅢ層由来	縄文	
11	Α	MQ68	ΑV	楕円形	30	26	21	36. 48	AⅢ層由来	縄文	剥片が 1 点 (12. 7g) 出土
12	Α	MQ68	ΑV	円形	18	14	15	36. 40	AⅢ層由来	縄文	
13	Α	MR69	ΑV	円形	22	22	20	36. 67	AⅢ層由来	縄文	
14	Α	MR69	ΑV	円形	20	18	19	36. 62	AⅢ層由来	縄文	
15	Α	MQ69	ΑV	不整形	21	20	7	36. 62	AⅢ層由来	縄文	
16	Α	MR • MQ69	ΑV	円形	24	24	17	36. 56	AⅢ層由来	縄文	
17	Α	MQ68	ΑV	楕円形	30	24	26	36. 35	AⅢ層由来	縄文	
18	Α	MP66	ΑV	楕円形	50	36	42	36. 47	AⅢ層由来	縄文	
19	Α	MP66	ΑV	円形	27	25	7	36. 91	AⅢ層由来	縄文	
20	A	MP65 • 66	ΑV	円形	20	19	14	36.84	AⅢ層由来	縄文	
22	A	MK54	ΑV	不整形	24	22	16	36. 92	AⅢ層由来	縄文	
23	A	MK54	AV	方形	22	16	14	36.93	AⅢ層由来	縄文	
24	A	MK53	AV	不整形	24	23	29	36.71	AⅢ層由来	縄文	
25	A	ML52	AV	円形	20	20	18	36.88	AⅢ層由来	縄文	
26	Α	ML·MM56	ΑV	隅丸方形	20	18	17	36. 79	AⅢ層由来	縄文	
28	A	MJ52	AV	不整形	22	21	21	36. 59	AⅢ層由来	縄文	
29	A	MK53	AV	方形	28	22	24	36. 76	AⅢ層由来	縄文	
30	A	МЈ50	AV	方形	25	22	14	36. 51	AⅢ層由来	縄文	
33	A	MI42 • 43	AV	円形	24	23	10	36.87	AⅢ層由来	縄文	
40	A	MK45	AV	円形	25	24	_	_	AⅢ層由来	縄文	
41	A	MH41	AV	楕円形	18	12	15	33. 73	AⅢ層由来	縄文	
45	A	MI41 • 42	AV	楕円形	26	20	16	33.31	AⅢ層由来	縄文	
46	A	MI41	AV	楕円形	22	16	16	33. 23	AⅢ層由来	縄文	
47	A	MI41	AV	円形	31	30	16	33. 23	AⅢ層由来	縄文	
48	A	MJ41	AV	円形	44	41	23	32. 47	AⅢ層由来	縄文	
49	A	MJ41	AV	円形	30	26	28	32. 11	AⅢ層由来	縄文	
50	A	MJ41	ΑV	円形	47	38	27	32.39	AⅢ層由来	縄文	
51	A	MJ41	AV	円形	42	28	23	32. 29	AⅢ層由来	縄文	
61	A	мЈ38	AV	円形	20	19	11	31.67	AⅢ層由来	縄文	
63	A	MM · ML39	AV	楕円形	34	26	40	31.32	AⅢ層由来	縄文	SK70よりも新しい
71	A	MN44	AV	楕円形	34	28	25	31.77	AⅢ層由来	縄文	5.000 5 6.501 6 1
72	A	MN44	AV	不整形	34	28	12	32. 05	AⅢ層由来	縄文	
80	A	MN46	AV	円形	18	16	14	33. 28	AⅢ層由来	縄文	
81	A	MN45	AV	不整形	28	22	28	32.54	AⅢ層由来	縄文	
82	A	MM44	AV	不整形	28	20	62	32. 27	AⅢ層由来	縄文	 二次加工ある剥片 1 点(144.6g)出土
84	A	ML45	AV	楕円形	20	16	26	33. 11	AⅢ層由来	縄文	
85	A	ML43	AV	不整形	54	44	23	32. 97	AⅢ層由来	縄文	
86	A	MK41	AV	円形	21	21	14	31.99	AⅢ層由来	縄文	土器片 1 点(34.7g)出土
88	A	MK40 • 41	AV	円形	26	24	31	31.76	AⅢ層由来	縄文	工地/1.17///(27.18/日工
94	A	ML46	AV	不整形	31	22	29	32. 37	AⅢ層由来	縄文	
96	A	MK48	AV	不整形	36	24	29	36. 54	AⅢ層由来	縄文	
99	A	MM42	AV	方形	18	14	20	31.93	AⅢ層由来	縄文	SK84よりも新しい
103	A	MO44	AV	円形	62	60	40	31. 19	AⅢ層由来	縄文	SI71よりも新しい
											石篦1点(78.5g)、土器片3点(61.5g)出土
105	A	MK41	AV	楕円形	28	24	10	31.80	AⅢ層由来	縄文	(第79図87・88、図版16)
112	Α	MJ42	ΑV	楕円形	(14)	10	10	32.98	AⅢ層由来	縄文	SI52・SK44よりも旧い
118	Α	ML50	ΑV	円形	26	24	26	36.72	AⅢ層由来	縄文	
119	Α	ML50	ΑV	楕円形	20	15	14	36.84	AⅢ層由来	縄文	
120	Α	ML50	ΑV	円形	23	21	19	37. 05	AⅢ層由来	縄文	
121	Α	ML50	ΑV	円形	30	28	10	36. 91	AⅢ層由来	縄文	
122	Α	ML49 • 50	ΑV	円形	24	22	20	36. 76	AⅢ層由来	縄文	
123	Α	ML49 • 50	ΑV	円形	29	26	24	36.60	AⅢ層由来	縄文	
124	Α	ML49	ΑV	不整形	38	26	26	36.60	AⅢ層由来	縄文	

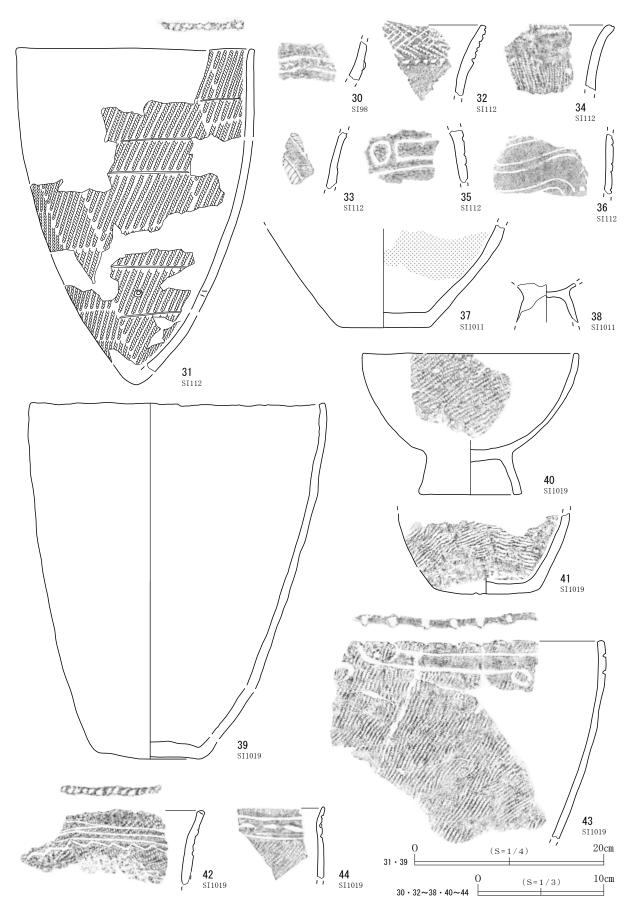
第3表 縄文時代柱穴様ピット一覧(2)

					ある?	- 4-6		V1-7 V12	ドロット	JU (— /	
SKP 番号	区	位 置	検出 層位	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	埋 土	時 期	備考
127	Α	MK43	ΑV	円形	18	17	10	32.72	AⅢ層由来	縄文	
128	Α	MK43	ΑV	円形	14	14	8	32.84	AⅢ層由来	縄文	
129	Α	MK43	ΑV	楕円形	14	10	5	33. 25	AⅢ層由来	縄文	
130	Α	MK43	ΑV	円形	8	8	5	33. 29	AⅢ層由来	縄文	
131	Α	MK43	ΑV	円形	10	10	17	32.65	AⅢ層由来	縄文	
132	Α	MK43	ΑV	楕円形	34	23	12	32.60	AⅢ層由来	縄文	
133	Α	MK43	ΑV	不整形	16	12	9	32. 54	AⅢ層由来	縄文	
134	A	MK43	ΑV	円形	22	18	9	32. 54	AⅢ層由来	縄文	
135	A	MK43	AV	円形	12	12	18	32. 50	AⅢ層由来	縄文	
136	A	MK43	AV	楕円形	24	18	9	33. 27	AⅢ層由来	縄文	
137	A	MK43	AV	円形	18	18	37	32. 94	AⅢ層由来	縄文	
138	A	MK43	AV	不整形	(18)	6	6	33. 22	AⅢ層由来	縄文	
139	A	MK43	AV	円形	20	(18)	8	33. 15	AⅢ層由来	縄文	
140	Α	MK43	AV	円形	11	10	7	33. 18	AⅢ層由来	縄文	
141	Α	MK43	ΑV	楕円形	16	12	5	33. 05	AⅢ層由来	縄文	
142	Α	MK43	AV	楕円形	27	19	10	32. 90	AⅢ層由来	縄文	
143	Α	MK43	AV	円形	22	21	18	32. 58	AⅢ層由来	縄文	SKP144よりも新しい
144	Α	MK43	ΑV	不整形	30	(18)	6	32. 91	AⅢ層由来	縄文	SKP143よりも旧い
145	Α	MK • MJ43	ΑV	円形	14	14	6	33.11	AⅢ層由来	縄文	
146	Α	MK43	ΑV	楕円形	(37)	30	30	32. 46	AⅢ層由来	縄文	
147	Α	MK43	ΑV	楕円形	28	17	11	32. 76	AⅢ層由来	縄文	
148	Α	MJ43	ΑV	円形	11	11	8	33. 33	AⅢ層由来	縄文	
149	Α	MJ43	ΑV	円形	21	20	10	33. 24	AⅢ層由来	縄文	
150	Α	MJ43	ΑV	円形	14	12	4	33. 35	AⅢ層由来	縄文	
151	Α	MJ43	ΑV	円形	12	12	5	33. 39	AⅢ層由来	縄文	
152	Α	MJ43	ΑV	円形	14	14	4	33. 40	AⅢ層由来	縄文	
153	Α	MJ43	ΑV	円形	12	12	7	33. 34	AⅢ層由来	縄文	
154	Α	MJ43	ΑV	楕円形	20	14	9	33. 37	AⅢ層由来	縄文	
155	Α	MJ43	ΑV	不整形	18	10	5	33. 32	AⅢ層由来	縄文	
156	Α	MJ43	ΑV	楕円形	28	14	8	33. 45	AⅢ層由来	縄文	
157	Α	MJ43	ΑV	円形	20	20	11	33.90	AⅢ層由来	縄文	
158	Α	MJ43	ΑV	楕円形	26	(20)	7	33. 03	AⅢ層由来	縄文	
159	A	MJ43	AV	楕円形	26	18	5	33. 03	AⅢ層由来	縄文	
160	A	MJ43	AV	楕円形	34	23	12	33. 02	AⅢ層由来	縄文	
161	A	мј43	AV	円形	24	24	7	33. 09	AⅢ層由来	縄文	
162		MJ43	AV	円形	17	16	6	33.04		縄文	
	A								AⅢ層由来		
163	A	MJ43	AV	円形	16	16	8	33. 15	AⅢ層由来	縄文	
164	A	MJ43	AV	不整形	22	22	14	33. 14	AⅢ層由来	縄文	
165	A	MJ43	AV	円形	16	16	6	33. 20	AⅢ層由来	縄文	
166	A	MJ43	AV	不整形	28	19	8	33. 29	AⅢ層由来	縄文	
167	A	MJ43	AV	不整形	14	12	5	33.40	AⅢ層由来	縄文	ormano I la diffe i
168	A	MJ43	AV	楕円形	22	18	10	33.50	AⅢ層由来	縄文	SKP169よりも新しい
169	Α	MJ43	AV	楕円形	20	(14)	12	33. 45	AⅢ層由来	縄文	SKP168よりも旧い
170	Α	MI41	ΑV	楕円形	27	18		_	AⅢ層由来	縄文	
171	Α	MJ42	ΑV	楕円形	24	15	9	32.84	AⅢ層由来	縄文	
172	Α	MJ42	ΑV	楕円形	30	20	7	32.80	AⅢ層由来	縄文	
173	Α	MJ42	ΑV	楕円形	26	20	7	32. 79	AⅢ層由来	縄文	
174	Α	MH40	ΑV	不整形	22	12	9	32.77	AⅢ層由来	縄文	
175	Α	MH40	ΑV	楕円形	18	14	7	32.82	AⅢ層由来	縄文	
176	Α	MH40	ΑV	円形	20	20	7	32. 82	AⅢ層由来	縄文	
177	Α	MI39	ΑV	円形	23	22	12	32. 11	AⅢ層由来	縄文	
178	Α	MI41	ΑV	円形	25	20	12	32. 59	AⅢ層由来	縄文	
179	Α	MK40	ΑV	円形	18	14	6	31.93	AⅢ層由来	縄文	
1016	В	LT38	BVI	楕円形	(36)	26	0	36. 79	ВⅡ層由来	縄文	SKF1022よりも旧い
											SI1019よりも旧い SKP1052よりも新しい
1051	В	LR36 • 35	BVI	楕円形	(44)	32	32	36. 18	ВⅡ層由来	縄文	剥片1点(25.7g)出土
1052	В	LR35	BVI	円形	(34)	(34)	14	36. 25	ВⅡ層由来	縄文	SI1019、SKP1051よりも用い
1070	В	LT37	BVI	円形	10	8	9	36. 49	BⅡ層由来	縄文	SKQ1002よりも新しい
1071	В	LQ42	В II ②	円形	29	27	11	36.70	BⅡ層由来	縄文	上面にSQX1007

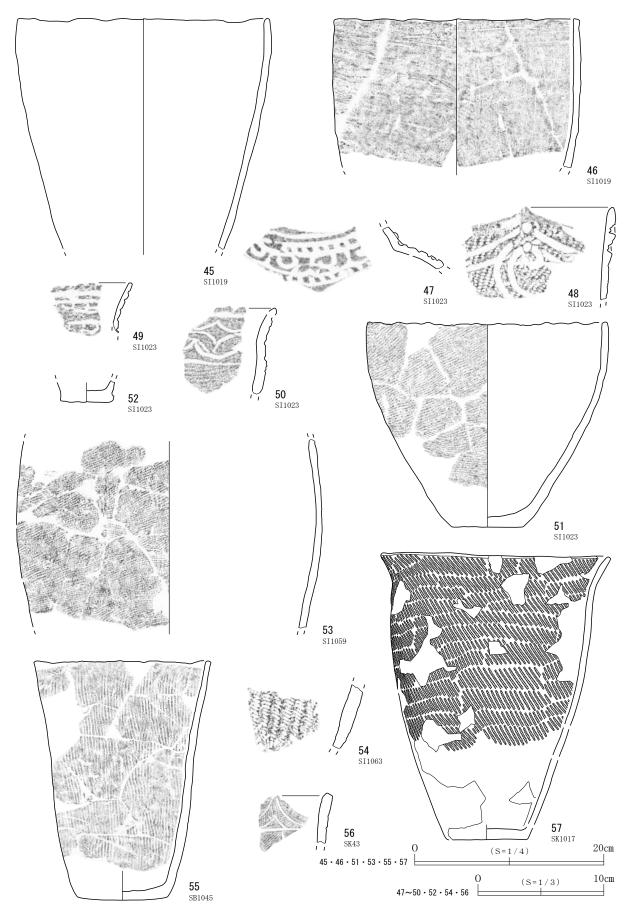




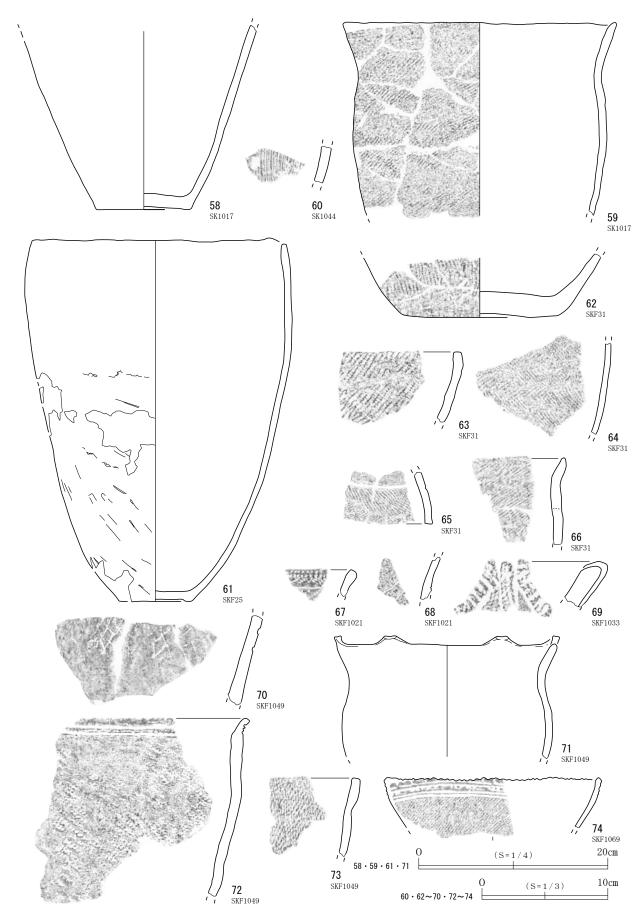
第75図 遺構内出土土器(2)



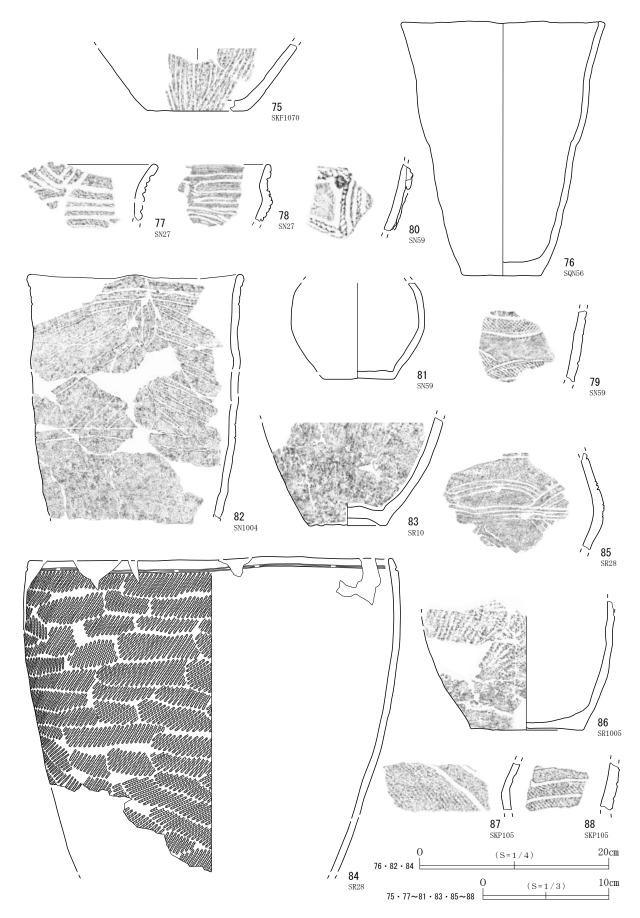
第76図 遺構内出土土器(3)



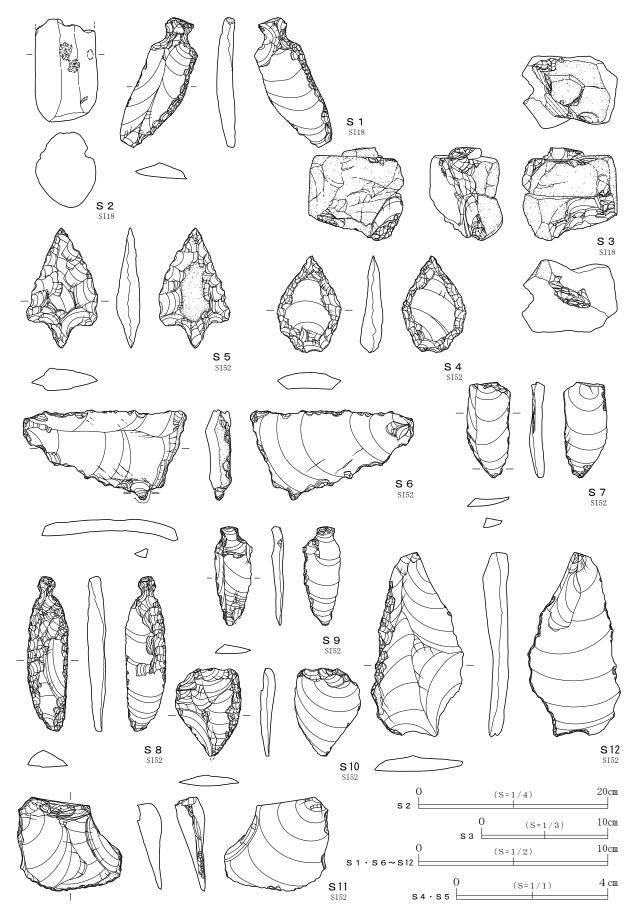
第77図 遺構内出土土器(4)



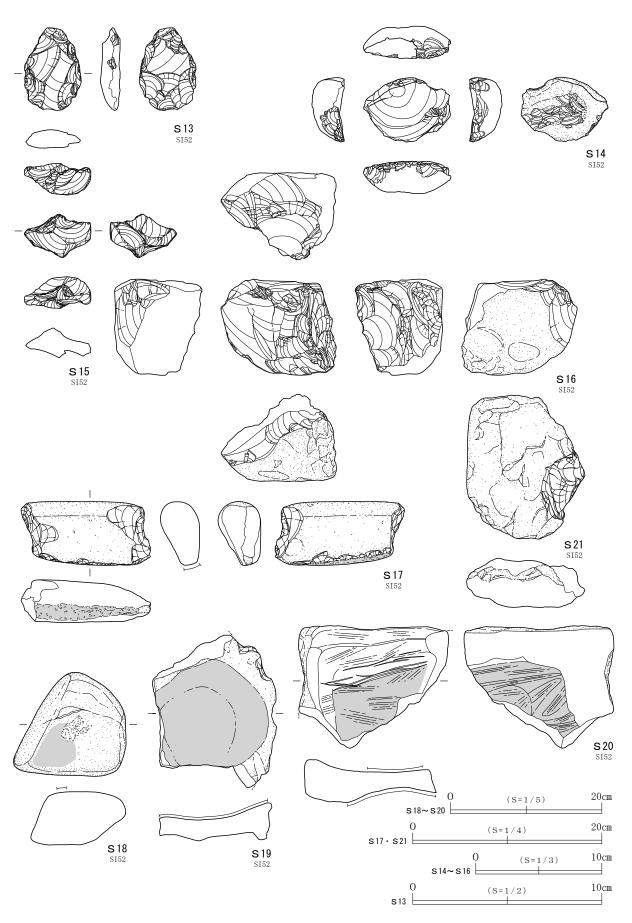
第78図 遺構内出土土器(5)



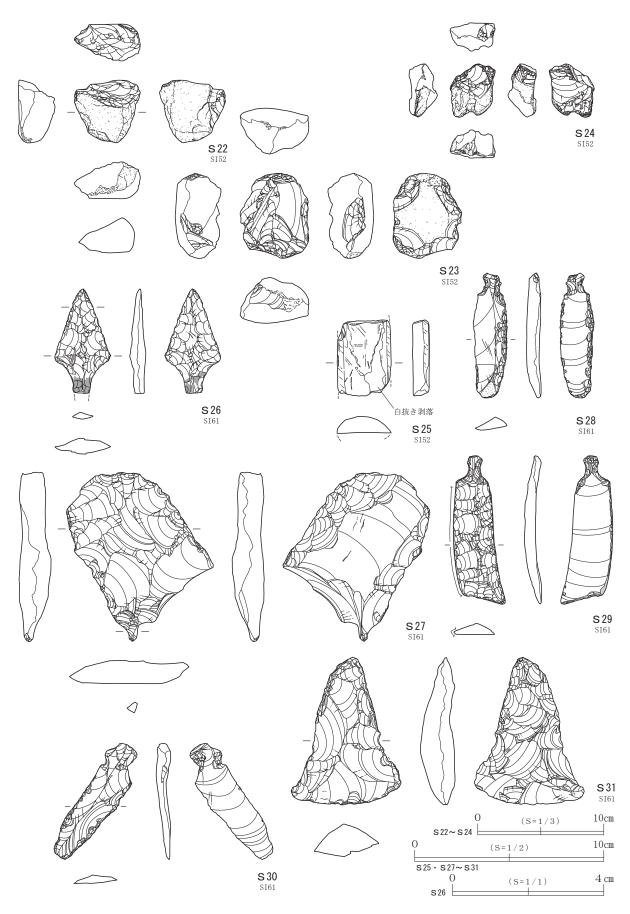
第79図 遺構内出土土器(6)



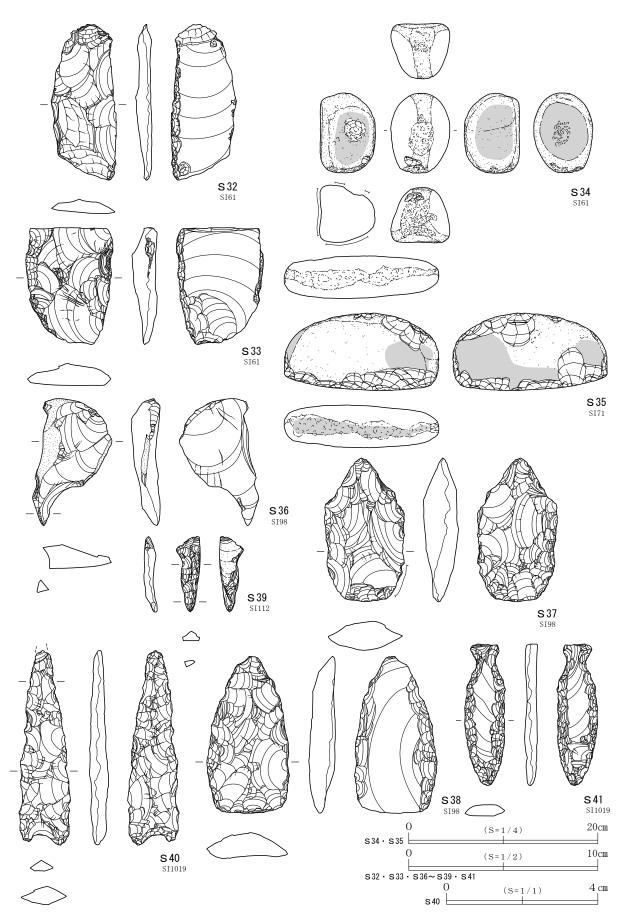
第80図 遺構内出土石器(1)



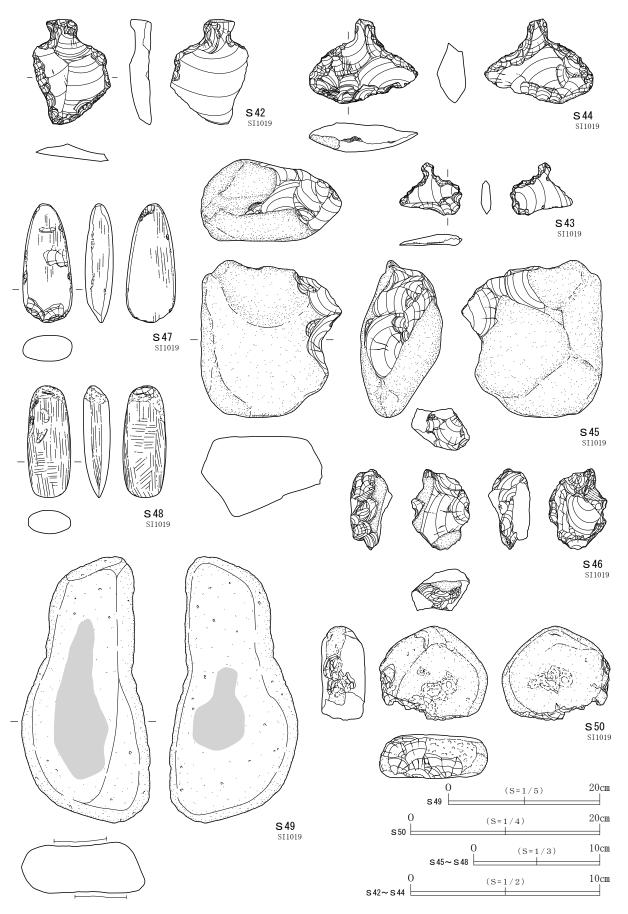
第81図 遺構内出土石器(2)



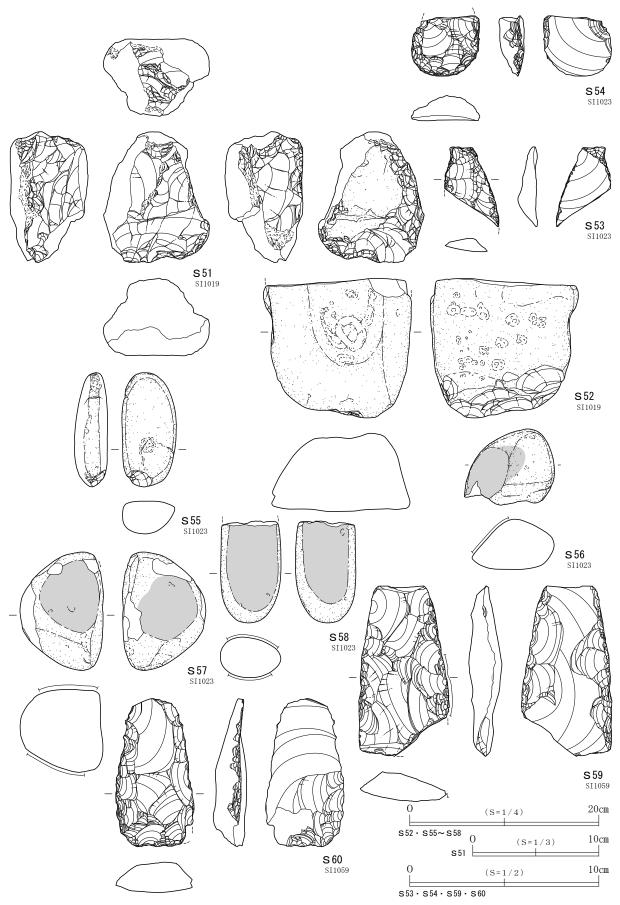
第82図 遺構内出土石器(3)・石製品



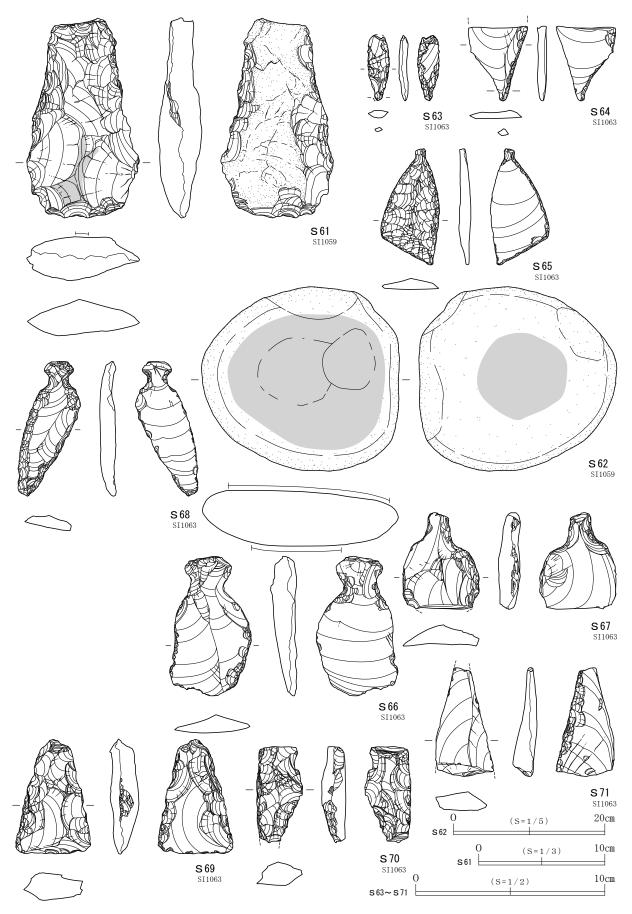
第83図 遺構内出土石器(4)



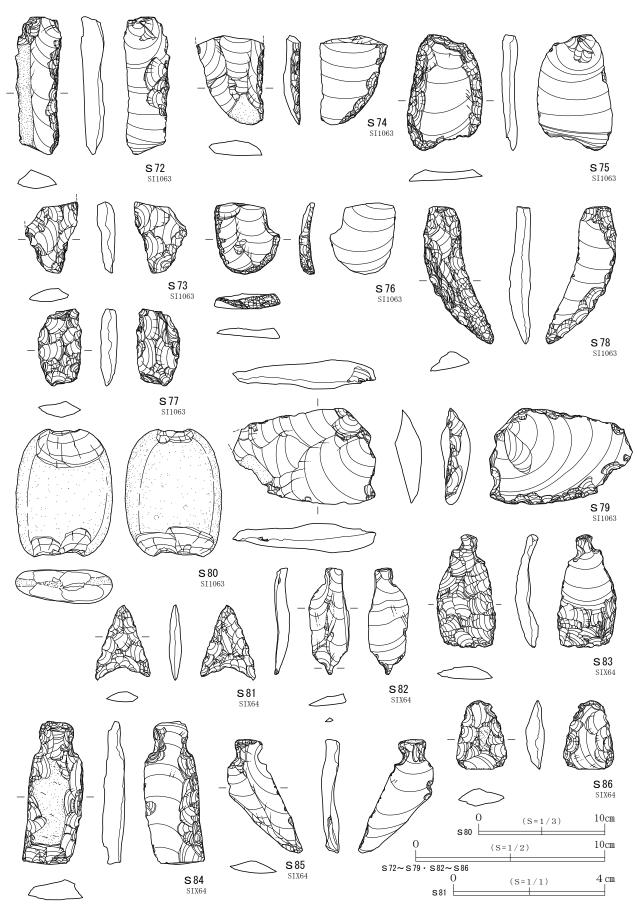
第84図 遺構内出土石器(5)



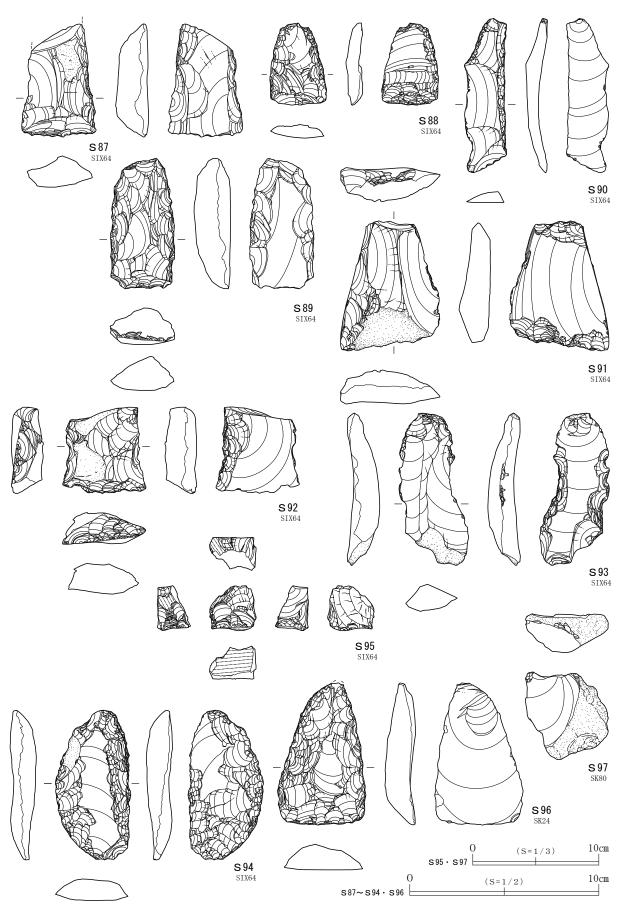
第85図 遺構内出土石器(6)



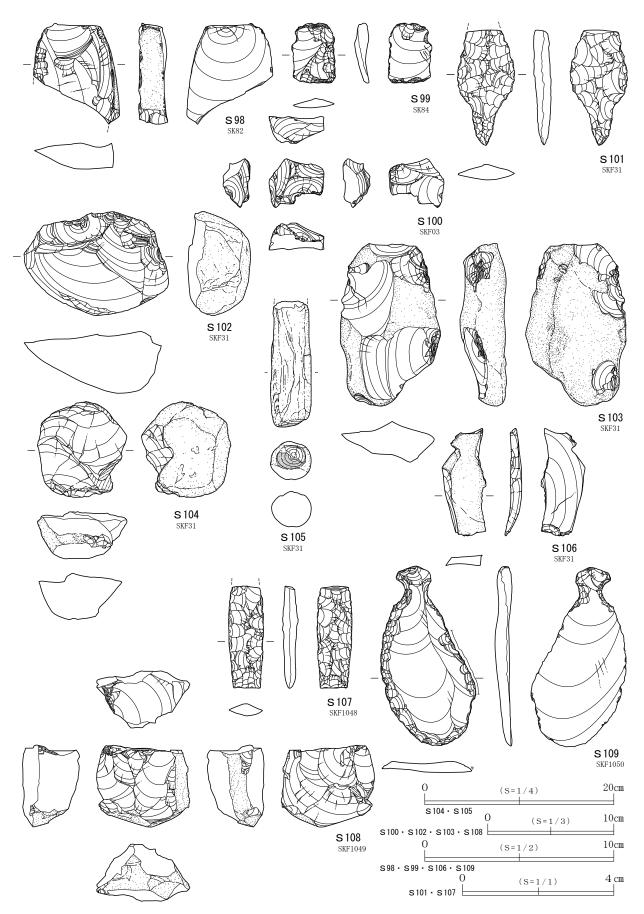
第86図 遺構内出土石器(7)



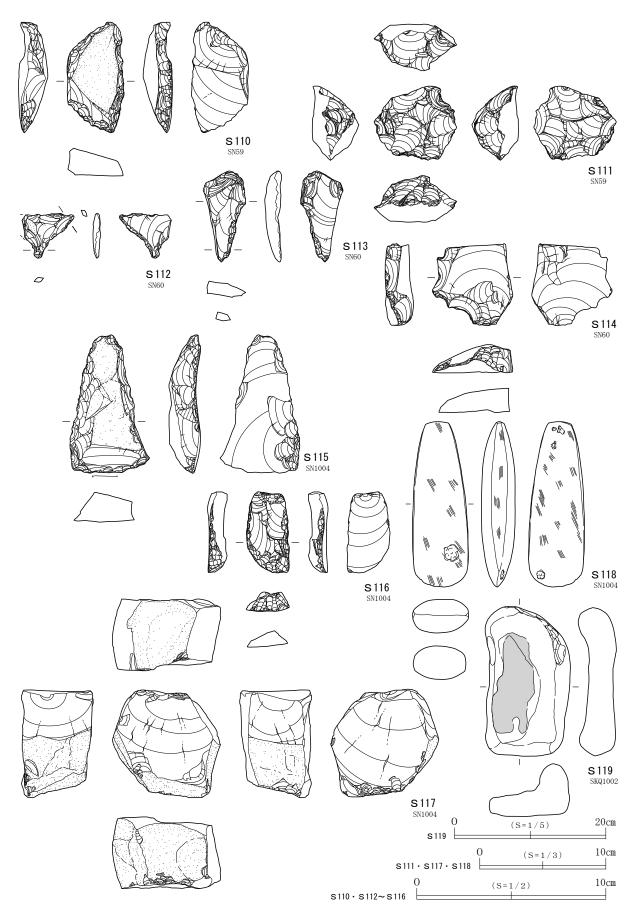
第87図 遺構内出土石器(8)



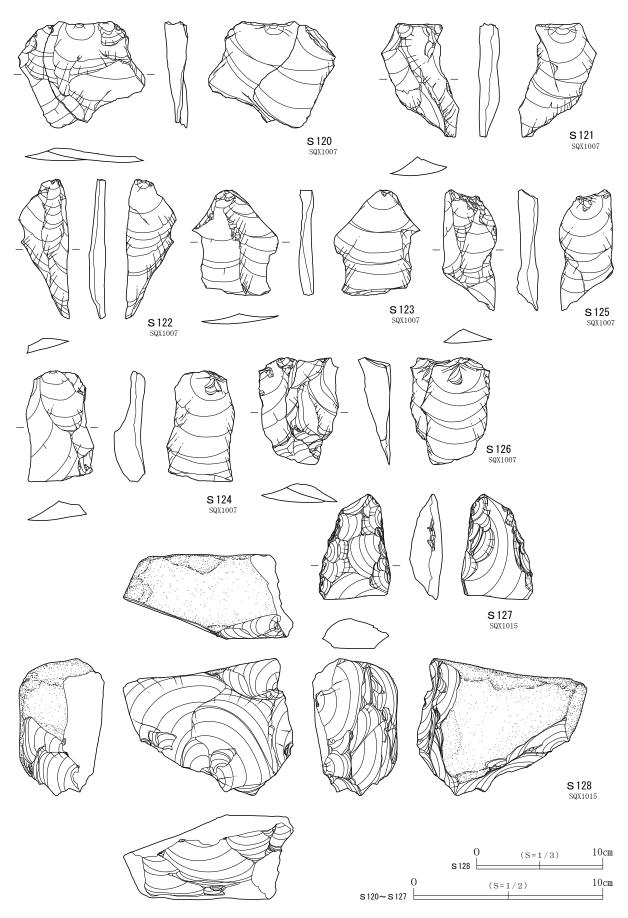
第88図 遺構内出土石器(9)



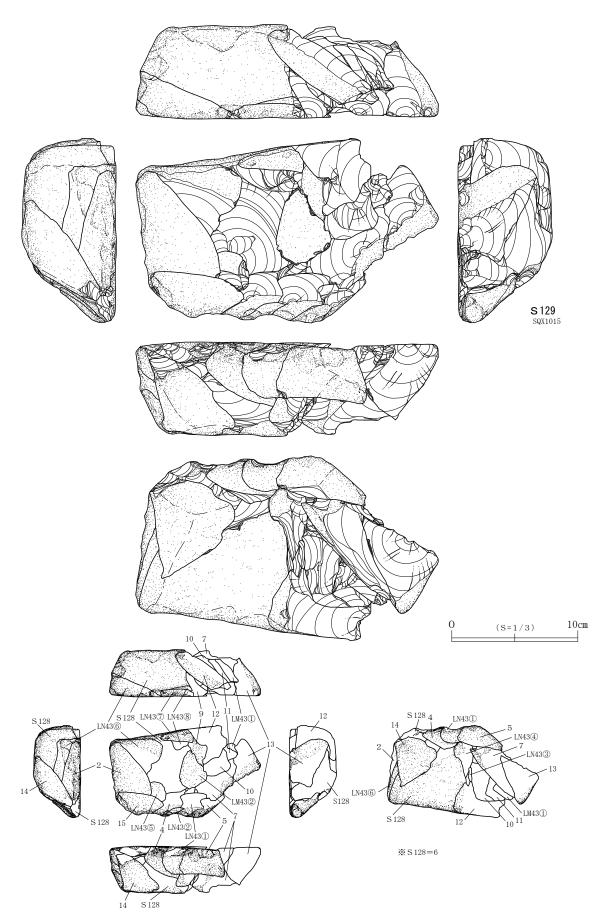
第89図 遺構内出土石器(10)



第90図 遺構内出土石器(11)



第91図 遺構内出土石器(12)



第92図 遺構内出土石器(13)

(2)出土遺物

縄文土器は約23,724点(348,388.8g)が遺構内・外から出土し、このうち遺構外出土は20,490点(268,866.7g)である。弥生土器は遺構内出土1点(48.4g)、遺構外出土222点(2,888.1g)、土製品はすべて遺構外出土で約21点(319.9g)である。石器・石製品は遺構内・遺構外から合わせて約10,664点(311,516.5g)が出土し、このうち遺構外出土は9,060点(251,966.7g)である。

(1) 土器

土器は、縄文時代から弥生時代までを対象として時期毎に大分類を行い、文様を主体として既存の 土器型式を参考にして細分類を行った。本来であれば縄文時代から弥生時代までの土器については層 位的な出土状態を考慮して土器分類を行うべきであるが、遺物の出土頻度の高いA区の東西でMH~ MNライン、南北で38~46ラインのおよそ300㎡については大まかな層区分しかできず各時期の土器 が基本層位AⅢ層に集中する傾向があった。そのため分類は文様を中心とする操作にとどまる。

第 I 群土器(第93・94図 図版22)

縄文時代早期中葉から後葉の土器である。

1類(92~100):貝殻腹縁文が付される土器で、口唇が92のように丸みを持つか、薄く平坦な94がある。底部資料として99があり、器面の丁寧なミガキや胎土から本類に含めたが、 $2 \cdot 3$ 類に含まれる可能性もある。100のように矢羽状文の下と口縁部の内面、口唇部にも貝殻腹縁文が施され、 $93 \cdot 97 \cdot 98$ では内面にも貝殻による条痕がある。96では貝殻腹縁文下に刺突列がめぐる。胎土は緻密で焼成も良好である。S I 61027、S I 112032もこれに含まれる。

本類土器は、早期中頃の鳥木沢式に並行する土器である。

2類(101・102): 微隆起線による幾何学的な文様が施される土器である。 2点を示しているが、他に同一個体の小片が30点ほど出土している。薄く平坦な口唇、わずかに外傾し波状となる口縁部を有する深鉢形土器であるが、底部形態は不明である。器面に横方向のナデを行った後、極めて細い粘土紐(以下微隆起線)で幾何学的な文様を構成し、細長く区画された中にさらに梯子状に微隆起線を貼り付ける。内面には横方向の条痕がある。全体の文様構成が明らかではないが、口縁直下に1条の微隆起線をめぐらせ、それと大きく間隔を開けて貼り付けた微隆起線で作られる横長の三角形の区画内により小さな三角形や、幅1cm前後の空間に梯子状に貼り付けている。胎土には白色の砂粒も含むが緻密で、焼成も良好である。器厚は6mm前後である。SI61の28、SI112の33もこれに含まれる。

本類土器は、秋田県内では大館市の上ノ山 I 遺跡にも出土例があるが、青森県売場遺跡の第VI群土器D1類やムシリ 1 式に並行する土器である。

3 a 類(103~115):表裏縄文土器である。103の口唇は平坦で厚く胴部と同じ縄文が付され、口縁部はわずかに外傾し、底部は115では丸底に近くなる。縄文は0段多条の単節縄文が多く、104~106では表裏とも条が横走する。器厚は108や109では15mmと厚くなり、内面の調整のオサエの痕跡が明瞭に残り、胎土には多量の繊維を含む。

3 b 類(116~121):胎土には 3 a 類と同様多量の繊維を含む。口唇は平坦で、口縁部がわずかに外傾する。0 段多条の単節縄文が116・121では縦位に、117の胴部上半では横位 \rightarrow 斜位と重ねて付され、117・121では口唇にも胴部と同一原体による縄文が回転施文される。119では縄文原体の側面圧痕が付され、118・120の口唇にはスリット状の刻みが施される。S I 1063の54もこれに含まれる。

3 c 類(122~126):縦走する単節縄文が付された後に波状や同心円状の沈線文が施される土器である。124の内面には条痕が横走する。胎土には繊維を多量に含むが、a 類よりも器厚は薄い。

本類土器は、早期末葉の赤御堂式や早稲田5類土器に並行する土器である。

第Ⅱ群土器(第95図 図版22 · 23)

縄文時代前期の土器である。

1 a 類(127~131):ループ文の施される土器である。口縁部はわずかに外傾し、胴部から直線的に 丸味のある底部にいたるものである。底部はそれほど鋭角的に尖ることなく、どちらかというと砲弾 形よりも丸底に近い形に小さな乳房状の突起が付くであろう。原体の一端を輪にして回転施文するこ とでループ文を施すが、128ではこの原体の幅が2cmほどで、127・130・131では2cm未満である。 129・130の口唇は平坦で面取りされ、半裁竹管状工具の先端を斜め方向から刺突することで馬蹄形の 刻目を施す。器厚は127・128・131では13mm、129・130では7mm前後である。内面にはオサエの痕跡 が残るものの縦方向のナデで平滑に調整される。胎土には繊維を含むが、含有率は第 I 群 3 類よりも 低い。S I 112の31もこれに含まれる。

1 b 類(132・133): 口縁部に縄文原体の側面圧痕を付し、胴部上半には絡条体により条間のあいた 燃糸文が、下半には格子目状の撚糸文が施される。133は口唇にも縄文原体の側面圧痕が付される。 胎土には5mm程度の砂粒が顕著で繊維も含まれ、内外面の調整は粗い。口縁部に最大径のある深鉢形 土器と考えられるが、底部の状況は不明である。S I 61の29はこの類に含まれる。

1 a 類土器のループ文の特徴は表館第 X V 群 (早稲田 6 類並行) と同じであるが、口縁部が波状にはならず平縁となる特徴がある。また器形的には第 X V 群の尖底に対し大きく外傾し、次の第 X VI 群 (表館式) に近い。 1 b 類は資料的に少なく全体の器形など不明な点が多いものの、円筒下層式土器の直前型式の土器と思われる。

2類(134~138):絡条体の側面圧痕文や羽状縄文が施される土器である。134は口唇部が丸く、直立する口縁から胴部上半でわずかに膨らむ土器である。口唇にはLR原体による縄文が回転施文され、口縁部文様帯には絡条体の側面圧痕により重菱文が表され、胴部には結束第1種の原体LR+RLにより、羽状縄文が施される。胴部と口縁部文様帯の境には刺突のある隆帯がめぐる。胎土には繊維をそれほど含まず、砂粒が含まれる。136~138の口縁部は、口縁波頂部から垂下する隆帯上と口縁部外面に絡条体の側面圧痕が施される。137の隆帯上にはボタン状の粘土粒が貼り付けられる。135は口縁部から胴部まで撚糸文が斜位に施されるが、回転施文が浅く詳細はわからない。

2類土器は、前期前葉の円筒下層 d 式と考える。

第Ⅲ群土器(第96図 図版23)

縄文時代中期の土器で、円筒上層式、萱刈沢b3類の土器を1類、大木式の土器を2類とする。

1 a 類(139~149):口縁部が肥厚して大ぶりの山形となり、山形の頂部から幅の広い隆帯上には縄文原体の側面圧痕文が、口縁部にも側面圧痕文が施される。149の胴部にはLR結節縄文が付される。139は胴部に縄文原体を 3 本一組にしてクランク状に押圧したものである。本類土器には繊維は含まれないが、139や149の胎土には大きいもので 5 mmほどの砂粒を多く含む。 S K F 1021の67, S K F 1033の69もこれに含まれる。

1 b類(150~153):波状口縁に粘土紐による1~3条の隆帯を貼り付ける土器で、150では波状の口

縁に沿って弧状の隆帯があり、その上にLR縄文の側面圧痕が施される。151では口縁部の折返部分に波状の隆帯が、また口縁部文様帯にも2条の隆帯が貼り付けられる。152の胴部にはLRとRLの結節羽状縄文が付される。151~153の内面の調整はミガキが丁寧に行われる。

1 a 類土器は中期前葉の円筒上層 a 式で、1 b 類は中期後葉の萱刈沢 b 3 類土器である。

2類(154):平坦に面取された口唇、外傾する口縁の深鉢形土器である。胴部にはL撚糸文が付され、 磨消縄文により末端の噛み合うJ字状文が施される。SI18の1、SI112の34もこれに含まれる。

2類土器は、中期後葉の大木10式土器である。

第Ⅳ群土器(第97~104図 図版23~25)

縄文時代後期の土器で、調査では最も多く出土した土器群である。

I a 類(155・156):155は深鉢形土器で、口縁部の広い無文部の下に 1 条の隆帯がめぐり、その下の胴部上半には爪形文が多段(6~7段)に施され、以下には短い原体のR L 縄文が付される。156では隆帯に胴部と同じ L R 縄文が付される。156の文様構成は次の b 類の159や160と同じだが、胎土が緻密で、器面調整として丁寧なミガキが行われ、焼成が極めて堅緻である点が他の土器と比較し際立っている。155・156の色調は橙色から黄白色である。

1 b 類(157~164):主に隆帯上に刺突を行い、波状口縁を持つ深鉢形土器である。157では渦巻状の隆帯の上に短いスリットの刻みを連続して施すもので、口縁部には低い角状の突起が一対で付される。158は緩い波状口縁の波頂部から断面三角形の隆帯を垂下させ、上に細かな円形刺突を施す。隆帯は口縁部の無文帯と胴部を画す。胴部には縦方向の葉脈状文が施される。159では縦位の隆帯上及び胴部にLR縄文が付される。160では刻みのある口縁の山形突起を挟んだ隆帯に刺突が施され、隆帯間にはV字状の沈線が数条描かれる。164では円形に区画する沈線の内側に沿って刺突が行われ、円形区画の中にはL撚糸文が付される。SI52の22、SN59の80もこれに含まれる。

1 c 類(165~177): 焼成の点で極めて1 a 類と似ており、粗製の深鉢形土器を一括して1 c 類として扱う。165~167・169は縦位の撚糸文が施され、167は折返気味の口縁部となる。168は平坦な口唇端部が外側に張り出し、0 段多条のR L 縄文が縦位に付される。170・172~174は折返口縁で、173・174・177では0 段多条のL R 縄文が付される。176は大きく外傾する口縁部に2条の平行沈線がめぐり、以下は無文となるが、器面調整や焼成が極めて155と似ており、その口縁部とも考えられる。

1 類土器は後期初頭の土器群で、1 a 類は爪形文を特徴とし三十稲場式、1 b 類は門前式や韮窪式に並行する土器と考えられる。

2 a 類(178~188):縄文を地文に、沈線で渦巻文や入組状文、連鎖状文などが施される深鉢形土器である。178・179は平坦な口唇の折返口縁で、口縁上端にはLR縄文、胴部にはRL縄文が、179では口縁上端からLR縄文が付される。縄文施文後には平行沈線で弧状文が描かれる。181では波頂部下に大きな孔があり、184では緩い波状口縁の波頂部が鶏冠状になる。187は頸部で一度すぼまり、膨らみのある胴部上半から底部にいたる器形を呈する。全面にR縄文が付され、その後沈線で大ぶりな曲線文が描かれ、部分的に磨消が行われる。188は波状口縁の深鉢形土器である。RL縄文を地文とし頸部・胴部中央・胴部下端に2条一組の沈線をめぐらし、縦位の連鎖状沈線による区画内に大きな波状文を施す。

2 b 類(189~208): 沈線で入組文を描く土器である。189~192は壺形土器の胴部文様帯と胴部下半

の無文部とを画す隆帯上に円形刺突を施す。文様帯には先端が入り組む沈線文が施される。194~199・202・205にも同様な文様が施される。193は深鉢形土器の口縁部で、平坦に面取された口唇、わずかに外傾する口縁部の文様帯は広く、平行沈線で縦位や横位に弧状文が施される。208の壺形土器も同じ文様構成である。204・207ではLR縄文を地文に沈線で多段の入組文が施される。SI52出土の11・13・16・18、SI61出土の25・26、SI112の36、SKF1021の68、SN1004の82、SR28の85もこれに含まれる。

2 c類(209~213):縄文地に太い平行沈線に画された縄文帯が描かれる土器である。209・210・213はクランク状に、211・212では入組文が描かれる。SI18出土の2はこれに含まれる。

2 d 類(214~223): 隆沈文が描かれる土器である。216・217の深鉢形土器は波状口縁の波頂部から 捻りを加えた隆帯が垂下し、隆帯は左右に分かれ口縁部と胴部上半とを区画する。215・218~223は 壺形土器や鉢形土器であるが、狭い口縁部文様帯を縦位の隆帯で区画し、区画された中に長方形や楕 円形の沈線が施される。218の胴部には2 b 類の沈線文が縦位に描かれる。S I 52の23、S I 98の30、 S I 112の35、S N27の77、S N27の78、S N59の79、S K P 105の87・88もこれに含まれる。

2類土器は後期前葉の十腰内 I 式に並行する土器である。

3類(224~256):磨消縄文により平行する縄文帯や入組文が施される土器である。224~226・250では平行する縄文帯が施されるが、226・250は縄文帯を縦位の連鎖状の沈線で繋ぐ。229~242・246~249・251~253は磨消縄文により大ぶりな入組文が描かれる。241・242の浅鉢形土器では胴部下端まで入組文が施される。243~245は深鉢形土器の口縁部の山形突起部分で、243は擬宝珠形の先端部下に入組状文が描かれ、沈線に沿って刺突が加えられる。244では捻りを加えた円形の突起部で、平行する縄文帯が施される。SK43の56、SKF31の65もこれに含まれる。

3類土器は後期中葉の十腰内Ⅱ・Ⅲ式である。

4類(257~261):257・258では平行する縄文帯に小さな瘤を貼り付けるが、259・260では刻目帯に円形の小さな瘤が付く。SI52出土の4~8もこれに含まれる。

4類はいわゆる後期後葉の瘤付土器群である。

5 a 類(262~265): 三叉状の入組文が施される土器である。262では口縁部に環状の粘土紐が貼り付けられる。 $264 \cdot 265$ の深鉢形土器では波状口縁に玉抱三叉文が施される。

5 b 類(266~269): T字形の突起が付く波状口縁に広い文様帯のある深鉢形土器で、多段に入組文が施される。

5 c 類 (270~278):無文の台付皿 (270・271)・皿 (272)・壺形土器 (273・274)、注口土器 (275・277・278)、鉢形土器 (276)である。270・271の内外面ともにミガキが丁寧に行われ、272は胴部に縄文が付されるが器形から本類に入れた。274の小型壺形土器は手捏ねの土器である。275の注口部は胴部中ほどで上向きとなり、注口の付け根には瘤が 2 個付く。276は鉢形土器の、277・278は注口土器の口縁部でいずれも丁寧なミガキが行われる精製土器である。SI52出土の12・15・24、SI1011の38、SKF1049の71、SN59の81もこれに含まれる。

5類土器は後期末葉の土器群である。

6類(279~305):6類は後期の粗製土器を一括した。281~283は口縁部の上端で平行沈線を逆向きのC字文で繋ぐものである。器面調整は丁寧なミガキが行われ、焼成も堅緻である。284~286は網目

状燃糸文が、287~299・302・305は単節縄文が付される深鉢形土器である。300~304の底部では端部が高くなって、300や302では底端部が外に張り出す。303~305の底部外面には簾状圧痕がある。 SI21の3、SI52の9・10・14・17・19~21、SI1011の37、SI1019の39~41、SB1045の55、 SK1017の57・58、SK1044の60、SKF31の62~64・66、SKF25の61、SKF1049の70・72・73、 SQN56の76、SR10の83、SR28の84、SR1005の86、SD1074の89・90もこれに含まれる。

第 V 群土器 (第105・106図 図版25・26)

縄文時代晩期の土器である。

- 1 a 類 $(306\sim310)$: 文様は口縁部文様帯に限られ入組文が描かれる。いずれも口唇に刻目が施される鉢形土器で、狭い口縁部文様帯には307のようにC字状の沈線が連続するものや $308\cdot309$ のように短沈線による入組文が描かれる。SI1019の43、SI1023の50もこれに含まれる。
- 1 b 類(311~322):317·318·321は浅鉢形土器で磨消による文様が描かれ、鉢形土器314·315·320の口縁部では羊歯状文が発達する。316·319はB 突起の付く口唇に無文の口縁部のある鉢形土器である。S I 1019の44、S I 1023の47、S I 1023の49、S K F 1069の74もこれに含まれる。
 - 1 a 類土器は大洞B式、1 b 類土器は大洞BC式土器である。
- 2類(323~329): 晩期の粗製土器を一括した。325はLRとRL原体による羽状縄文が付される鉢形土器である。326は外面にRL縄文が内面には横位の条痕が施され、328の外面にも明瞭な条痕がある。326・329の深鉢形土器は口唇が内側に削がれる特徴がある。SI1019の45・46、SI1023の51・52、SI1059の53、SK1017の59、SKF1070の75もこれに含まれる。

第Ⅵ群土器(第107図 図版26)

弥生時代の土器である。

- 1 a 類(347):変形工字文が描かれる土器である。高杯形土器の口縁部であろうか。
- 1 b 類(348・349):同一個体の土器で、口唇部には2個一対の低い山形状突起が付き、口縁部は棒状工具を斜めに押し当て小波状口縁となる。口縁部は無文で胴部を画する3条の沈線は押し引きで引かれ、胴部にはLR縄文が縦位に付される。口縁内面にも同じ原体による斜縄文が付される。胎土は緻密で焼成も堅緻である。S I 1019の42もこれに含まれる。
- 1 c 類(350~354):沈線文が施される土器で、口唇部は平坦に面取され、緩い波状口縁から胴部にかけて弧状の平行沈線が施される。内面調整はミガキが行われ、器厚は4mm程度、胎土は緻密で焼成も堅緻である。
- 1 d類(355~360): 撚糸文の施される356~359、短い原体による斜縄文が施される355・360がある。 358・359の底部端部は外側に張り出す。
- 1 a 類は新間・平鹿遺跡出土土器、1 b 類は県内では湯ノ沢A・横長根A遺跡出土土器、1 c 類は 宇津ノ台式土器に並行すると考えられる。

②土製品(第107図 図版26)

- **土偶**(330・331):330は縄文時代後期前葉の板状土偶で乳房と臍は粘土粒を貼り付け表現し、他は円形刺突が行われる。331は晩期前葉の遮光器土偶の脚部である。左右どちらかは判断できないが、つま先には5本の指の表現がある。
 - **キノコ形土製品(332):傘の一部と石突き部分は根元から欠損する。傘の部分は深く、粗いミガキが**

行われる。

三角形土製品(333):後期前葉で、上部は中央で内側に窪む。表面には2列の刺突列が外形に沿ってあり、中央には円形の深い刺突がある。

円盤状土製品(334~346):いずれも縄文時代後期の土器片を利用したもので、334~338は後期前半の土器片を、346は土器の底部を利用したものである。

③石器·石製品

遺構内出土石器も含めて記述する。出土器種及び掲載率などは第10表石器・石製品の分類別出土点数、第11表石器・石製品の器種別出土点数・重量及び掲載点数・率に記載した。縮尺は器種に応じて異なるため、各図ごとに縮尺を記載した。掲載した石器の法量などは第12~15表石器・石製品観察表(1~4)に記載した。未掲載の器種の分かる石器についても、すべて分類を行った。詳細は、第10表に記載した。なお、礫石器については石皿・敲石・凹石・磨石の器種順とし、複合して他の用途でも使用されている場合は第12~15表の備考欄に示した。

第12~15表に掲載した法量値は、図面上で計測した値である。遺物を正位置の状態に置いた場合の、 上端と下端の平行線間の距離を「長さ」とし、それに直交する左右の最大値を「幅」とした。欠損した遺物は「()」内に残存値を表記した。

分類は、個体の持つ形態や技法上の特徴から、大分類(アルファベット大文字)と小分類(アルファベット小文字)を行ったが、さらに分類項目が必要な場合は、ローマ数字を用いた。なお、分類の典型例を実測図(第80~92・108~124・135図)と写真図版(図版17~21・27~32)に掲載するために、遺構内出土石器に典型例のないものを遺構外出土石器から抽出した。石皿・敲石・凹石・磨石の一部には、上述したように一義的な器種以外の他の器種名も示した。例えば、凹石のB類の典型例の掲載遺物はS34(敲石)である(第12表参照)。また、石核については、紙面の都合上、掲載された遺構内出土の敲石に石核の分類例がある場合は、石核の典型例としても掲載した。例えば、石核のBaの典型例として掲載された遺物はS51(敲石)である(第12表参照)。また、遺構内出土石器の掲載を優先したため、分類ごとの掲載割合に不均衡が生じている器種もある。なお、スクレイパーとしたものの中には、石匙などの折損した製品が含まれているものと考える。また、数が少なく、製作技法上の相違点がほとんどない器種については、細分をしていない。

石鏃(図版17S4・S5、図版18S26・S40、図版19S81、図版20S101・S107、図版27S132~S147) 石鏃は51点出土し、うち23点を図示した。 A類は茎部が作出されないもの(無茎)、B類は茎部が作 出されるもの(有茎)、C類は器体が木葉状もしくは柳葉状のものである。尖頭器と区別するのに、5 cm 未満のものを対象とした。

A類

- a 類: 基部が凹状(凹基)のもの(第83図S40、第87図S81、第108図S132~134)。
- b類:基部がほぼ水平(平基)のもの(第89図S107、第108図S135)。
- c類:基部が凸状(凸基)のもの(第80図S4、第108図S136)。

Β類

- a類: 茎部以外の基部が凹状(凹基)のもの(第108図S137)。
- b類: 茎部以外の基部がほぼ水平(平基)のもの(第80図S5、第108図S138・S139)。

c 類: 茎部以外の基部が凸状(凸基)のもの(第82図S26、第108図S140~S142)。

C類

- a類:基部がほぼ水平のもの(第108図S143~S145)。
- b類:基部が丸みを帯びるもの(第109図S146・S147)。
- D類 全体(茎部・基部)形状の判別不可能な破損品。

尖頭器(図版27S148~152)

扁平で両端もしくは一端が尖り、最大幅断面が菱形状を呈する石器である。8点出土し、うち5点を図示した。A類は木葉形状(有茎も含む)のもの(第109図S148~S150)、B類は長軸が最大短軸の4倍以上ある細長い柳葉状のもの(第109図S151・S152)である。石鏃と区別するのに、5cm以上のものを対象とした。

石錐(図版17 S 6 ・ S 7、図版18 S 27 ・ S 36 ・ S 39、図版19 S 63 ・ S 64 ・ S 82、図版20 S 112 ・ S 113、図版27 S 153 ~ S 161)

断面が菱形や三角形状の尖頭部を持つ石器である。43点出土し、うち19点を図示した。

- A類 基部と錐部の境が明確なもののうち、調整により基部が作出されるもの。
 - a類:基部が左右対称で、錐部は先細りの棒状のもの(第109図S153)。
 - b類:基部が非左右対称で、錐部が基部の長さの1/2以上のもの(第109図S154)。
 - c 類: 基部が非左右対称で、錐部が基部の長さの1/2未満のもの(第80図 S 6 、第82図 S 27、第90図 S 112、第109図 S 155・ S 156)。
- B類 基部と錐部の境が不明瞭なもの。
 - a類:基部全面に調整を施すもの(第109図S157)。
 - b 類: 基部の一部に調整を施すもの(第80図S7、第83図S39、第86図S63・S64、第90図S113、 第109図S158)。
 - c類:基部に調整を施さないもの(第109図S159・S160)。
- C類 基部と錐部の境が明確なもののうち、基部の調整が粗雑もしくは調整を施さないもの(第83図 S36、第87図 S82、第109図 S161)。
- **石匙**(図版17S1・S8・S9、図版18S28~S30・S41~S44、図版19S65~S68・S83~S85、図版20S109、図版28S162~S178)

つまみ部を持つ石器である。85点出土し、うち35点を図示した。つまみ部を縦にしたときの、つまみ中軸線と器体の長軸との在り方により、A類は縦位方向(縦型)、B類は斜位方向(斜型)、C類は横位方向(横型)に分類した。さらに刃部形状と全体の平面形態や調整方法から細分した。

A類

- a類:先端が円刃状を呈するもの(第82図S28、第110図S162)。
- b 類: 先端が尖るもの(第80図 S 8 · S 9 、第83図 S 41、第84図 S 42、第86図 S 65、第110図 S 163 · S 164)。
- c類: 先端が直刃状を呈するもの(第86図S66、第87図S83、第110図S165・S166)。
- d類: 先端が円刃状を呈し、両側縁に調整を施さないもの(第110図S167)。
- e類:先端部形状の判別不可能な破損品(第86図S67)。

B類

- a類:先端が円刃状を呈するもの(第89図S109、第110図S168)。
- b類:先端が尖るもの(第82図S29、第86図S68、第110図S169・S170)。
- c類:先端が直刃状を呈するもの(第80図S1、第82図S30、第87図S84、第110・111図S171~ S173)。
- d類:先端が錐状の突起を呈するもの(第111図S174・S175)。
- e類:先端が尖るものの、一側縁に調整を施すもの(第87図S85、第111図S176)。
- f 類: 先端部形状の判別不可能な破損品。

C類

- a類:左右の先端は一方が円刃状で他方が尖るもの(第84図S43・S44)。
- b類:左右の先端が尖るもの(第111図S177)。
- c類:左右の先端が直刃状を呈するもの(第111図S178)。
- d類: 先端部形状の判別不可能な破損品。

本年度調査で出土した石匙は85点である。この平面形態は縦型32点、斜型47点、横型6点で、横型石匙の出土が極めて少なく、全体に占める比率は7%弱である。昭和55年度調査では、162点出土した石匙のうち、横型の比率は35.8%である(昭和55年度調査報告書の石匙の分類には斜型はないが、実測図から推測すると、本書分類基準の縦型または斜型に含まれていると考えられる)。

トランシェ様石器(図版19 S 69、図版21 S 127、図版28 S 179~ S 187)

刃部に自然面もしくは一次剥離面を残す撥形の石器である。38点出土し、うち11点を図示した。 A類は刃部と基部に自然面もしくは一時剥離面を残すもの、B類は刃部に自然面もしくは一時剥離面 を残す。さらに基部の形状で細分した。

A類

- a類:基部が円いもの(第111図S179・S180)。
- b類:基部が直線的なのもの(第111図S181、第112図S182)。
- c類:基部が尖るもの(第91図S127、第112図S183・S184)。
- d類:基部形状の判別不可能な破損品。

B類

- a類:基部が円いもの(第112図S185)。
- b類:基部が直線的なもの(第112図S186)。
- c類:基部が尖るもの(第86図S69、第112図S187)。
- d 類: 基部形状の判別不可能な破損品。
- **石箆**(図版18 S 31・S 37・S 38、図版19 S 59・S 60、図版20 S 86~S 89・S 96・S 115、図版29 S 188~S 214)

撥形あるいは長方形状のいわゆる篦状を呈した石器である。138点出土し、うち38点を図示した。 A類は刃部が円刃状を、B類は刃部が直刃状を呈するものに分類し、さらに基部の形状で細分した。 A類

a類:最大幅は刃部で、基部にかけてすぼまり、基部が円いもの(第87図S86、第112図S188・

S 189)

- b類:最大幅は刃部で、基部にかけてすぼまり、基部が直線的なもの(第85図S59・S60、第113 図S190・S191)。
- c類:最大幅は刃部で、基部にかけてすぼまり、基部が尖るもの(第88図S96、第90図S115、第113 図S192~S195)。
- d類:最大幅は長軸中央部で、基部が円いもの(第113図S196、第114図S197)。
- e類:最大幅は長軸中央部で、基部が尖るもの(第83図S37・S38)。
- f 類: 側縁が内湾し、刃部が幅広になるもの(第82図S31、第114図S198~S200)。
- g類:縁辺に抉りが付けられたもの(第114図S201)。
- h類:基部形状の判別不可能な破損品(第88図S87)。

B類

- a 類: 最大幅は刃部で、基部にかけてすぼまり、基部が円いもの(第114図 S 202・S 203)。
- b類:最大幅は刃部で、基部にかけてすぼまり、基部が直線的なもの(第114図S204、第115図S205)。
- c類:最大幅は刃部で、基部にかけてすぼまり、基部が尖るもの(第88図S88、第115図S206・207)。
- d類:最大幅は長軸中央部で、基部が円いもの(第88図S89、第115図S208)。
- e類:最大幅は長軸中央部で、基部が尖るもの(第115図S209)。
- f 類:側縁が内湾し、刃部が幅広になるもの(第115図S210・S211)。
- g類:縁辺に抉りが付けられたもの(第115図S212、第116図S213)。
- h類:基部形状の判別不可能な破損品(第116図S214)。
- C類:全体形状の判別不可能な破損品。
- スクレイパー(図版17S10~13、図版18S32・S33・S53・S54、図版19S70~S79、図版20S90~S94・S98・S99・S110・S114・S116、図版30S215~S244)
- 上記の定型的な石器の他、縁辺の一部にあるいは全周にわたって連続的な調整加工により刃部が形成された製品である。C類は残核を転用したものである。207点出土し、うち58点を図示した。
- A類: 縁辺の一部に刃部が形成されたもの。
 - a 類:一縁辺に直線的な刃部が形成されたもの(第83図S32、第86図S71、第88図S90、第116図 S215・S216)。
 - b類:一縁辺に外湾する刃部が形成されたもの(第80図S10、第89図S98、第116図S217・S218)。
 - c類:一縁辺に内湾する刃部が形成されたもの(第87図S72、第116図S219)。
 - d 類: 二縁辺に直線的な刃部が形成されたもの(第86図 S 70、第87図 S 73、第88図 S 91、第89図 S 99、 第116図 S 220・S 221)。
 - e 類:縁辺に直線的な刃部と外湾する刃部が形成されたもの(第80図 S 11、第83図 S 33、第85図 S 53・S 54、第87図 S 74~S 76、第90図 S 116、第116図 S 222、第117図 S 223)。
 - f 類: 両側縁に外湾する刃部、一端部にも刃部が形成されたもの(第87図S77、第90図S110、第117 図S224・S225)。
 - g類:縁辺に外湾する刃部と内湾する刃部が形成されたもの(第80図S12、第87図S78、第88図S92・S93、第117図S226・S227)。

- h類: 縁辺に急角度の抉りが付けられたもの(第90図S114、第117図S228・S229)。
- B類:ほぼ全周に刃部が形成されたもの。
 - a類:縁辺に直線的な刃部が形成されたもの(第117図S230)。
 - b類:縁辺に直線的な刃部と外湾する刃部が形成されたもの(第88図S94、第117図S231・S232)。
 - c類:両側縁に外湾する刃部が形成され、先端が尖るもの(第117図S233・S234)。
 - d 類: 両側縁に外湾する刃部が形成され、先端が丸みを帯びるもの(第81図 S 13、第118図 S 235・S 236)。
 - e類:縁辺に外湾する刃部と内湾する刃部が形成されたもの(第118図S237)。
 - f 類: 縁辺に直線的な刃部、外湾する刃部、内湾する刃部が形成されたもの(第118図S238・S239)。
 - g類:縁辺に急角度の抉りが付けられたもの(第87図S79、第118図S240・S241)。
- C類 残核を転用し、縁辺に刃部を作出したもの。
 - a類:一縁辺に直線的な刃部が形成されたもの(第118図S242)。
 - b類:一縁辺に外湾する刃部が形成されたもの(第119図S243)。
 - c類: 二縁辺に直線的な刃部が形成されたもの(第119図S244)。
- **石核**(図版17S14~16、図版18S45・S46、図版20S95・S97・S100・S102・S103・S108・S111・S117、図版21S128~S130)

剥片素材を得るための母材のうち、最終段階を示す石器である。118点出土し、うち16点(接合資料1点を含む)を図示した。また、この他に他器種と重複する10点も図示した。

- A類 作業面が概ね片面に設定され、剥片剥離のなされたもの(第81図S14、第88図S97・第89図S102、第91図S128、第92図S129)。
- B類 作業面が概ね表裏両面に設定され、周縁から求心的に剥片剥離のなされたもの。
 - a類:交互剥離によるため、チョッピング・トゥール状を呈するもの(第85図S51)。
 - b類:剥片剥離が表裏の全面に及ばないもの(第84図S45、第89図S103)。
 - c類:剥片剥離が表裏の全面に及ぶもの(第90図 S111・S117)。
- C類 複数の作業面・打面から剥片剥離がなされ、全体の形状が多面体となるもの(第81図S15・S16、第84図S46、第88図S95、第89図S100・S108、第135図S130)。
- 打製石斧(図版19 S 61、図版31 S 245~ S 247)

平面形は甲高で、刃部が丸みを帯びた撥状を呈した斧形のうち、完成品が打製の手法による石器である。8点出土し、うち4点(第86図S61、第119図S245~S247)を図示した。

磨製石斧(図版18 S 47・S 48、図版20 S 118、図版31 S 248~S 254)

擦り切り技法で製作された痕跡が明確に残る1点(S254)を除いて、両凸刃で円刃の定角式磨製石斧と考えられる。同器種の長軸長と重量の関係を比較すると、同器種は長軸6.7~8.7cm、重さ41.3~109.1g間に空白領域がある。空白領域より大きいものをA類、小さいものをB類とした。22点出土し、うち10点を図示した。

A類

- a類:最大幅は刃部と側縁の境にあり、基端部の境界が不明瞭なもの(第84図 S 47、第120図 S 248)。
- b類:最大幅は刃部と側縁の境にあり、基端部の境界が明瞭なもの(第84図S48、第90図S118、第120

図S249)。

- c類:最大幅は中央付近にあり、基端部の境界が不明瞭なもの(第120図S250)。
- d類:基部形状の判別不可能な破損品。

B類

- a類:最大幅は刃部と側縁の境にあり、基端部の境界が明瞭なもの(第120図S251)。
- b類:最大幅は中央付近にあり、基端部の境界が明瞭なもの(第120図S252・S253)。
- c類:基部形状の判別不可能な破損品(第120図S254)。
- C類:全体形状の判別不可能な破損品。

S254は表裏の両面から擦り切り技法を用い、V字状の溝の切り込みを入れた後に折り取り、右側縁を作出しようとしたが、基部側が切り込みに沿って折れず、不規則に折れる。その後、不規則な段状に残った右側縁を、さらに研磨した痕跡が残る。刃部付近の左右の厚さが均一でないことから推測すると、磨製石斧の刃部付近の破損品を再利用したものと考えられる。

礫器(図版31S255)

礫の一部を調整した石器である。1点(第120図S255)が出土し、図示した。

半円状扁平打製石器(図版17S17、図版18S35、図版31S256~S258)

下辺(底縁)に刃部があり、側縁に調整を持つ石器である。6点出土し、うち5点を図示した。

A類:上辺が弧状を呈するもの(第83図S35、第120図S256)。

B類:上辺が直線状を呈するもの(第81図S17、第120図S257)。

C類:上辺の中央部が高く、山形状を呈するもの(第121図S258)。

石錘(図版19S80、図版31S259・S260)

扁平な礫や板状の礫に紐を絡むための抉りを持つ石器である。8点出土し、うち3点を図示した。 A類:長軸方向の両端中央に粗い抉りがあるもの(第87図S80、第121図S259)。

B類:長軸方向の両側縁中央に粗い抉りがあるもの(第121図S260)。

石皿(図版17S19・S20、図版18S49、図版19S62、図版20S119、図版31S261~S266)

平坦な礫を用いて幅広の平坦面を形成する石器である。明確に作り出された縁が認められる場合、 それを外縁と呼び、側縁と区別して用いる。 I 類は外縁がなく、磨面のあるもの、II 類は外縁があり、 磨面のあるものとする。また、A類は磨面が片側のみのもの、B類は磨面が両側(二面)のものとした。 15点出土し、うち11点を図示した。なお、磨面が特に顕著な箇所に網掛けをした。なお、凹石や磨石 としても使用されている場合は観察表の備考の欄にそれぞれの分類基準を示した。

IA類

- a類:磨面が平坦なもの(第90図S119)。
- b類:磨面が窪むもの(第81図S19、第121図S261)。

IB類

- a類:両側の磨面が平坦なもの(第84図S49、第86図S62)。
- b類:両側の磨面が窪むもの(第81図S20)。
- c類:片側は磨面が窪み、反対側は凹凸があるもの(第121図S262)。

ⅡA類

- a類:磨面と外縁の境が屈曲し、磨面が平坦なもの(第121図S263)。
- b類:全体形状の判別不可能な破損品。

ⅡB類

- a類: 片側は磨面と外縁の境が屈曲し、反対側は外縁がなく磨面が平坦なもの(第121図S264)。
- b類:片側は磨面と外縁の境が屈曲し、反対側は外縁がなく磨面が窪むもの(第122図S265)。
- c類:片側は磨面の中央部が島状に高く、外縁との境が緩やかで、反対側は外縁がなく磨面が窪み、 台脚が付くもの(第122図S266)。

S261は片側を石皿として利用した後、蜂の巣状の凹石として、反対側は磨面を作らず蜂の巣状の凹石としてのみ利用している。凹みが重なり合っていることから、火きり臼の可能性が考えられる。 **敲石**(図版17S2・S3・S21~S24、図版18S34・S50・S51・S55、図版20S104、図版32S267~S271)

礫の端部や側縁に敲打痕のある石器である。A類は円礫を使用したもの、B類は剥片石器の残核を 転用したものである。43点出土し、うち16点を図示した。なお、凹石や磨石としても使用されている 場合は観察表の備考の欄にそれぞれの分類基準を示した。

A類

- a 類:長軸の一端に敲打痕あるもの(第80図S2、第122図S267)。
- b類:長軸の両端に敲打痕あるもの(第85図S55)。
- c類:長軸の一端と短軸の一端に敲打痕あるもの(第81図S21、第84図S50)。
- d類:長軸の両端と短軸の一端に敲打痕あるもの(第83図S34)。
- e類:長軸の両端と短軸の両端に敲打痕あるもの(第122図S268)。
- f 類: 礫面や縁辺に3か所以上の敲打痕あるもの(第122図S269)。
- g類:球状のほぼ全面に敲打痕あるもの(第122図S270)。

B類

- a類:長軸の一端に敲打痕あるもの(第82図S22)。
- b類:長軸の両端に敲打痕あるもの(第82図S23、第89図S104)。
- c類: 礫面や縁辺に3か所以上の敲打痕あるもの(第80図S3、第82図S24、第85図S51)。
- d類:球状のほぼ全面に敲打痕あるもの(第122図S271)。

凹石(図版18S34・S52、図版32S272・S273)

礫の平坦面や側面に、意図的な凹みを持つ石器である。10点出土し、うち3点を図示した。また、この他に他器種と重複する4点も図示した。なお、磨石としても使用されている場合は観察表の備考の欄に分類基準を示した。

A類:片側に凹みがあるもの(第123図S272)。

B類:片側と一側縁に凹みがあるもの(第83図S34)。

- C類:両面に凹みがあるもの(第85図S52)。
- D類:両面と二側縁に凹みがあるもの(第123図S273)。

S272は石質が柔らかいことと孔の形状から火きり臼が考えられる。 周縁が摩耗していることから、

第3章 調査の方法と成果

石皿の破損品の一部の可能性がある。

磨石(図版17S18、図版18S56~S58、図版20S105、図版32S274)

礫の一部もしくは大部分に、平坦な磨面を持つ石器である。18点出土し、うち6点を図示した。また、この他に他器種と重複する2点も図示した。

A類:片側に磨面があるもの(第81図S18、第85図S56、第123図S274)。

B類:両側に磨面があるもの(第85図S57・S58)。

C類:両側と一側縁に磨面があるもの(第122図S268)。

D類:ほぼ全面に磨面があるもの(第123図S273)。

E類:棒状の礫の一端に磨面があるもの(第89図S105)。

砥石(図版21S131、図版32S275~S279)

平坦な礫を用いた研磨するための石器である。 6 点出土し、図示した。なお、磨面が特に顕著な箇所に網掛けをした。

A類:平坦な砥面を持つもの。

- a類:砥面が片側にあるもの(第135図S131)。
- b類:砥面が片側にあり、砥面にU字形の溝状の痕跡があるもの(第123図S275)。
- c類:砥面が両側にあり、砥面にU字形の溝状の痕跡があるもの(第123図S276)。
- d類:砥面が両側にあり、片側と一側縁にV字状の溝状の痕跡があるもの(第123図S277)。
- B類:湾曲する砥面を持つもの。
 - a類:砥面が両側と一側縁にあるもの(第123図S278)。
 - b類: 砥面が両側と長軸の一端にあり、砥面の一部は浅い幅広の溝状であるもの(第123図S279)。 S276は約17m離れた位置で出土した2点が接合した。

三脚石器(図版32 S 280・ S 281)

三叉状の脚と平坦な台部からなる石器である。調査区南西側の段丘縁辺端から 2 点(第123図 S 280・S 281)が出土し、図示した。

石剣(図版17S25、図版32S282)

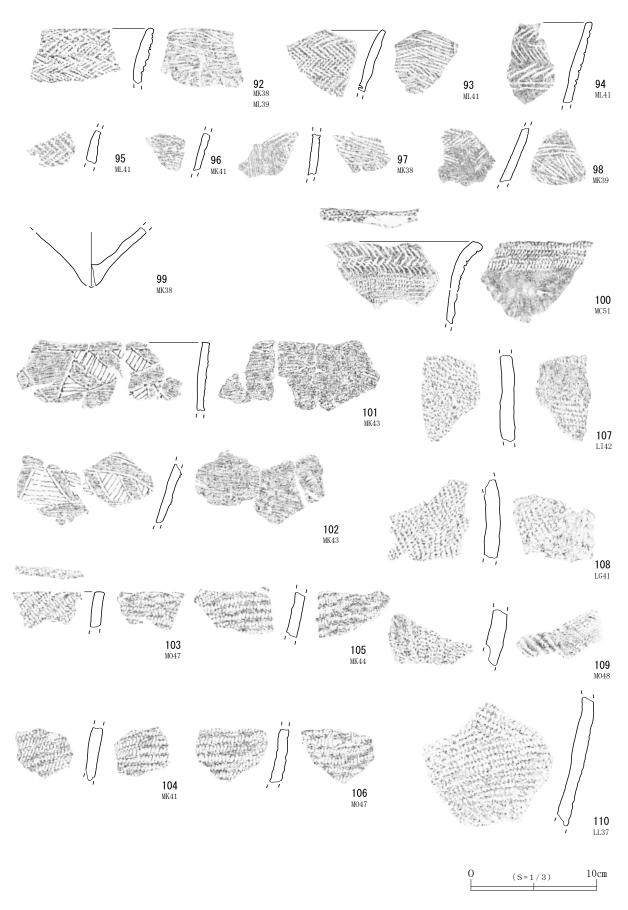
身部が両側縁に沿って剥離し、半身が欠損した破片が遺構内・外から各1点(第82図S25、第124図S282)が出土し、図示した。

石刀(図版32S283)

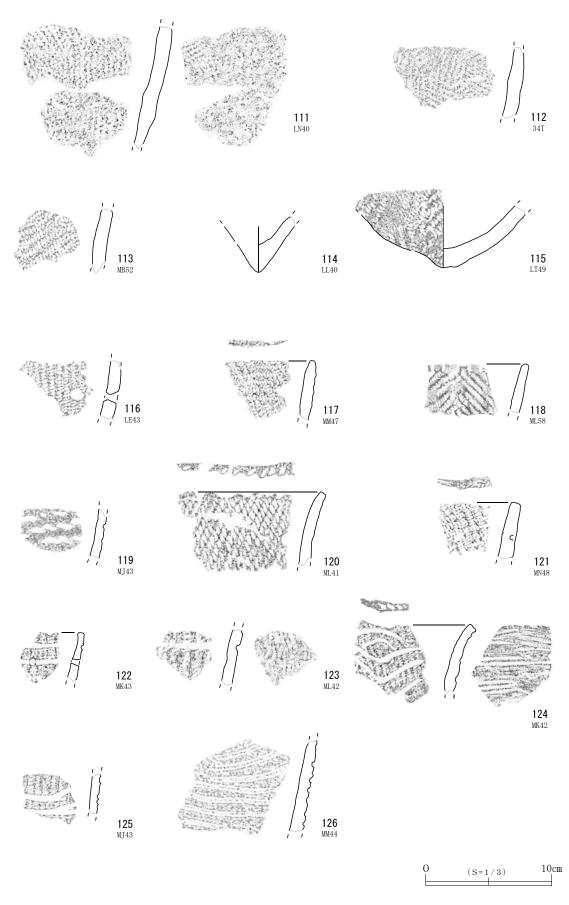
身部先端の破片が1点(第124図S283)が出土し、図示した。

その他の石製品(図版32S284~S287)

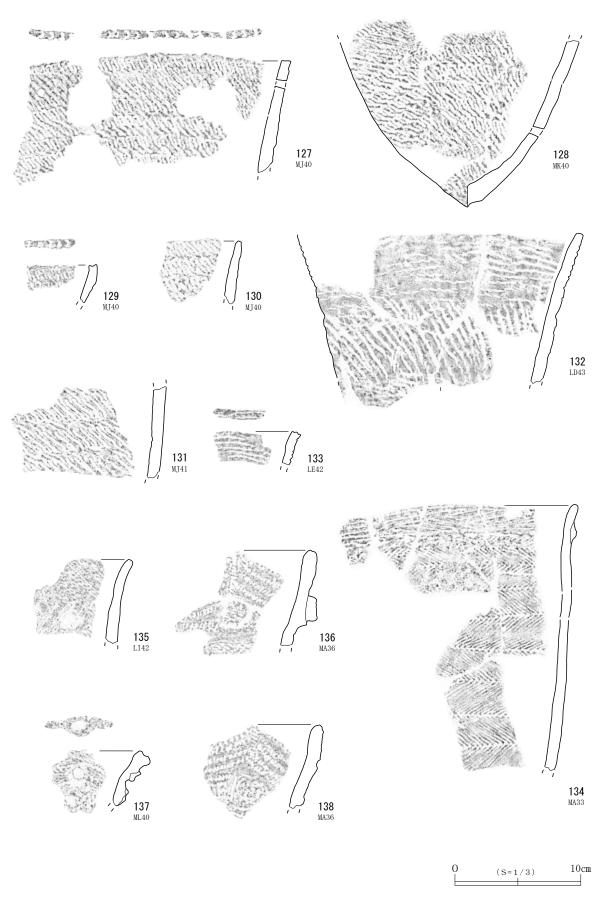
棒状石製品が2点(第124図S284・S285)、円形状の石製品が2点(第124図S286・S287)、遺構外から出土し、図示した。



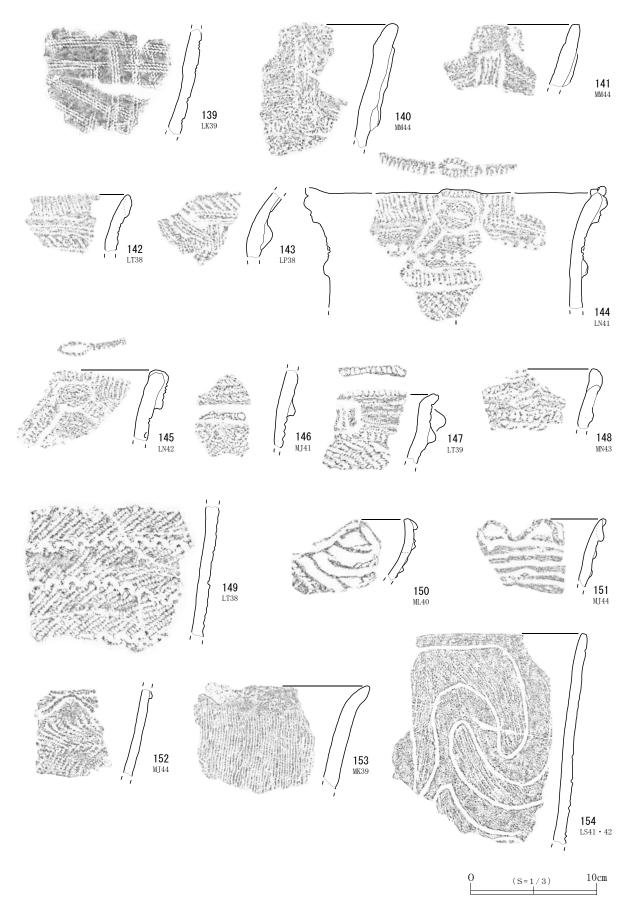
第93図 遺構外出土土器(1)



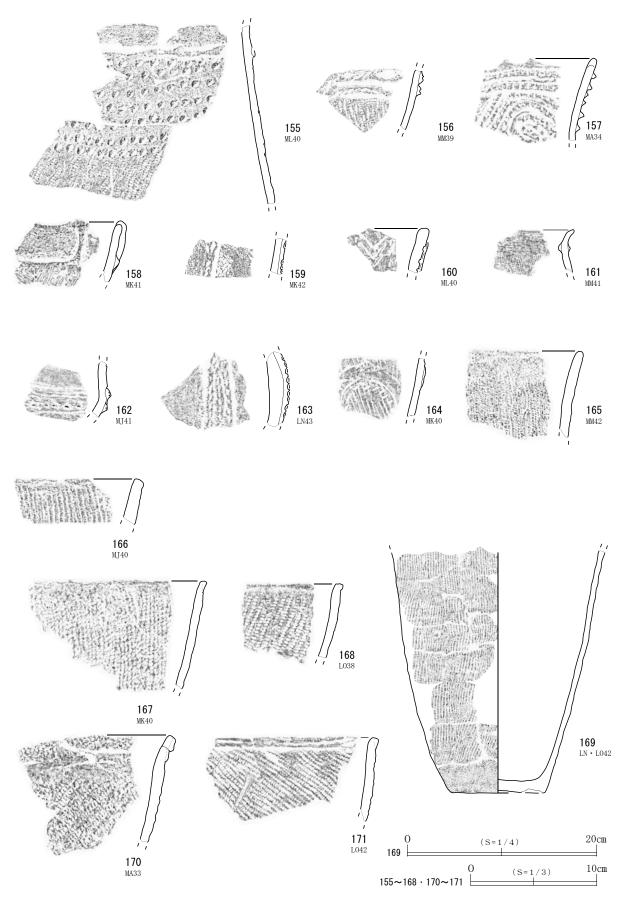
第94図 遺構外出土土器(2)



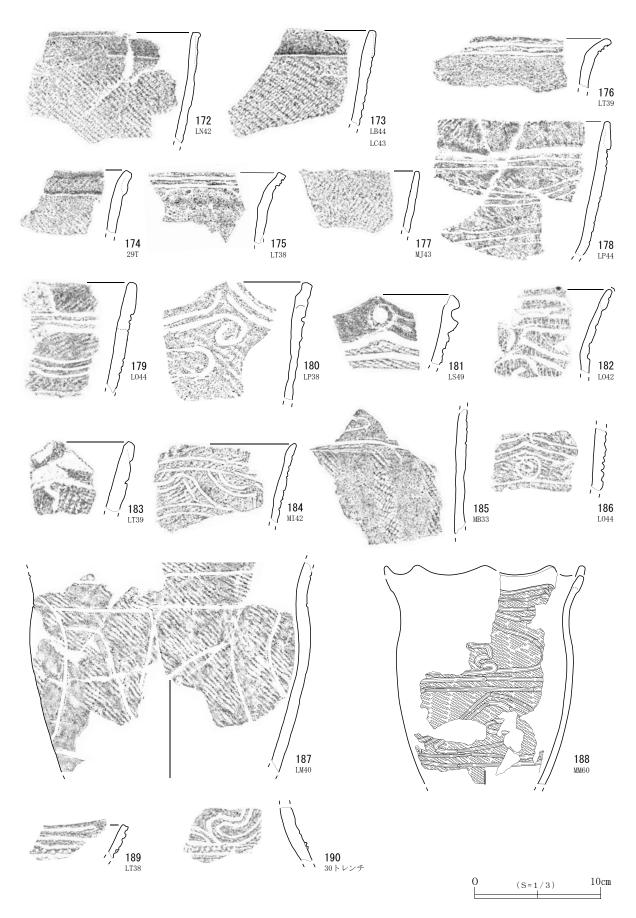
第95図 遺構外出土土器(3)



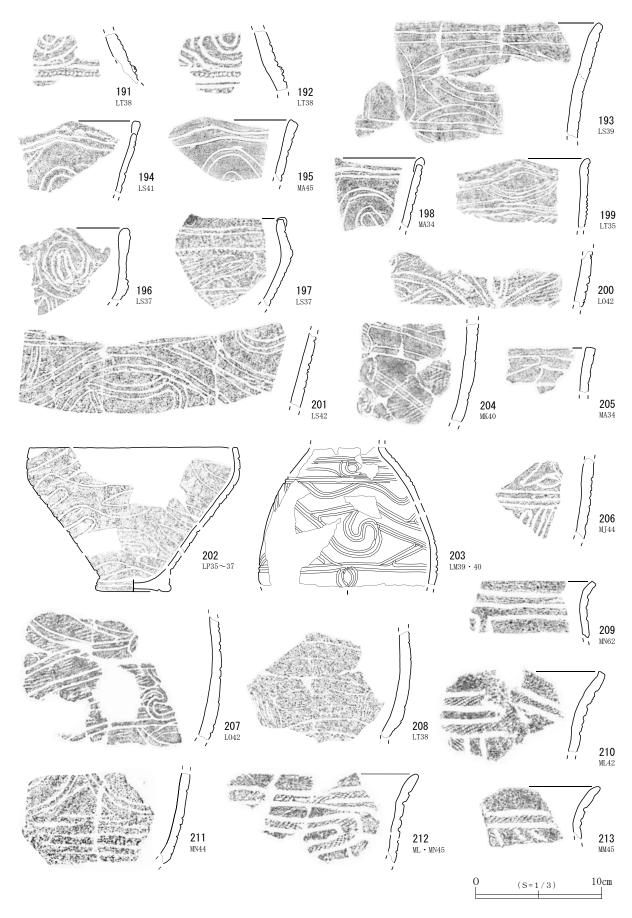
第96図 遺構外出土土器(4)



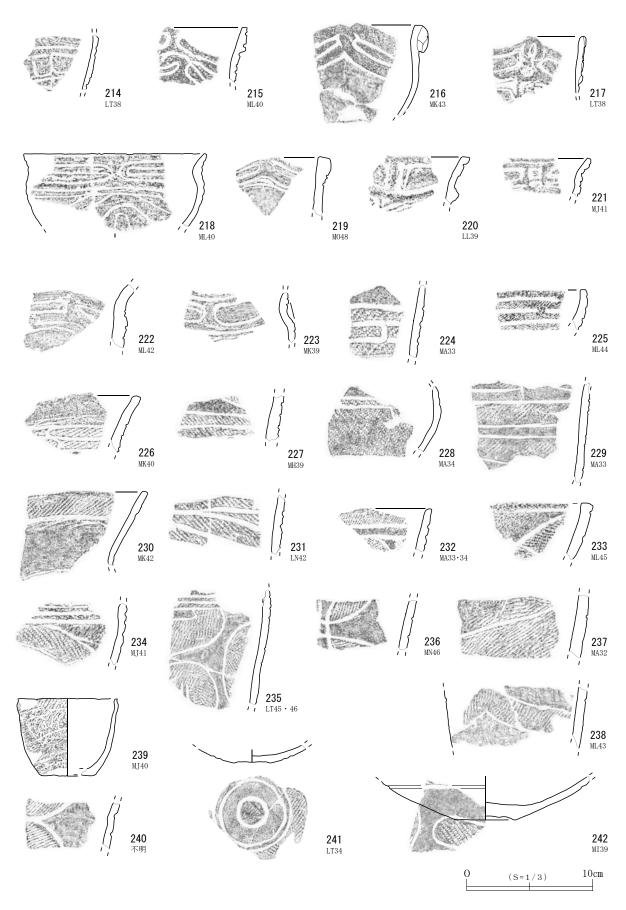
第97図 遺構外出土土器(5)



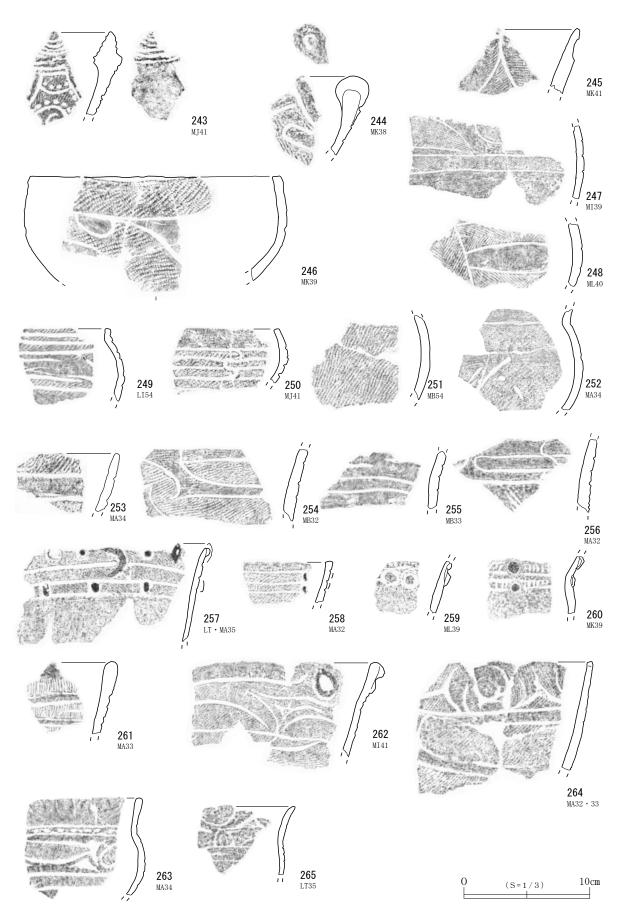
第98図 遺構外出土土器(6)



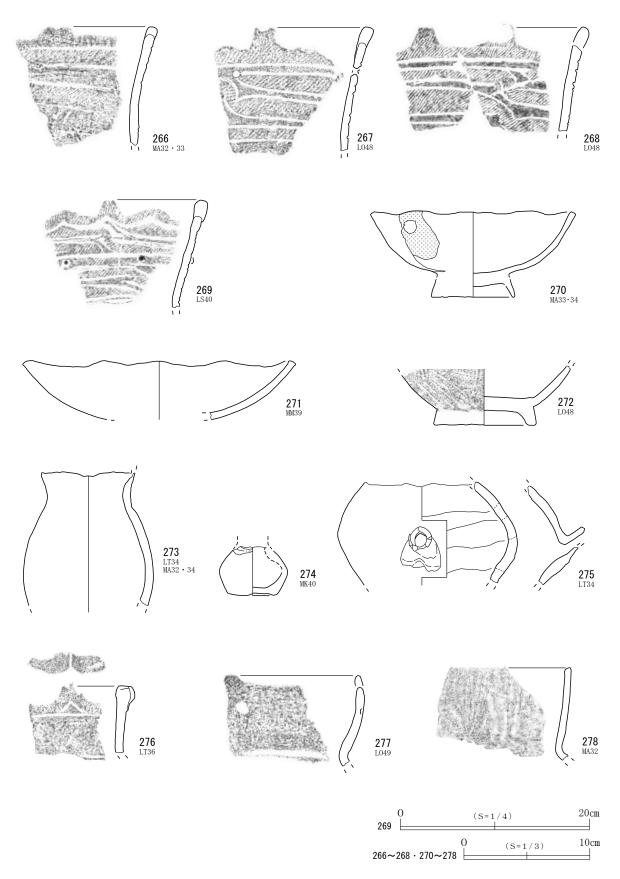
第99図 遺構外出土土器(7)



第100図 遺構外出土土器(8)



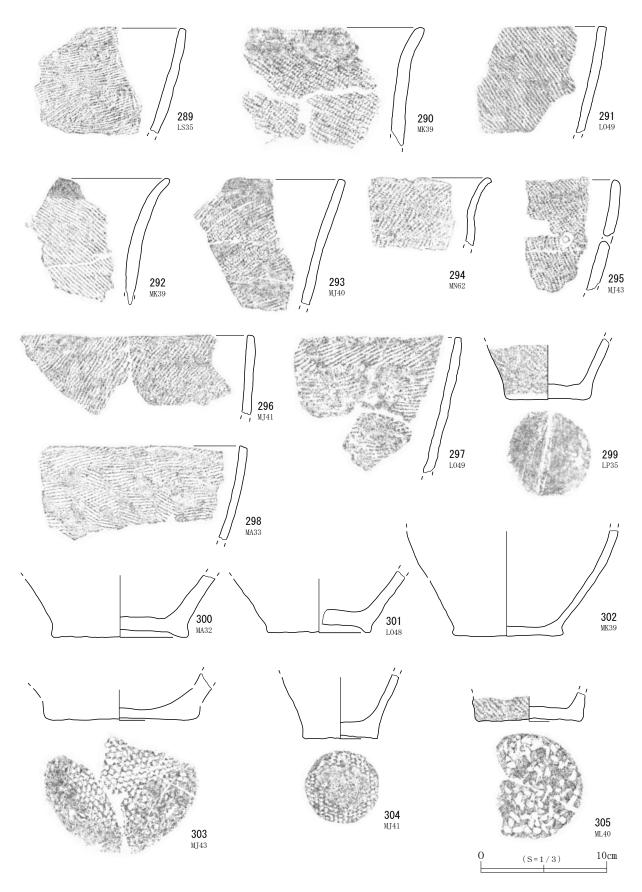
第101図 遺構外出土土器(9)



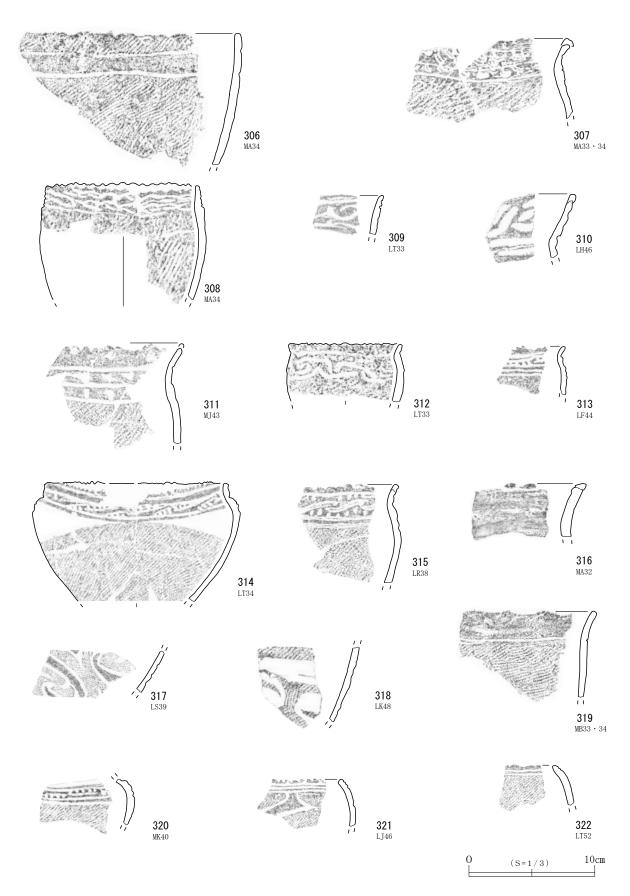
第102図 遺構外出土土器(10)



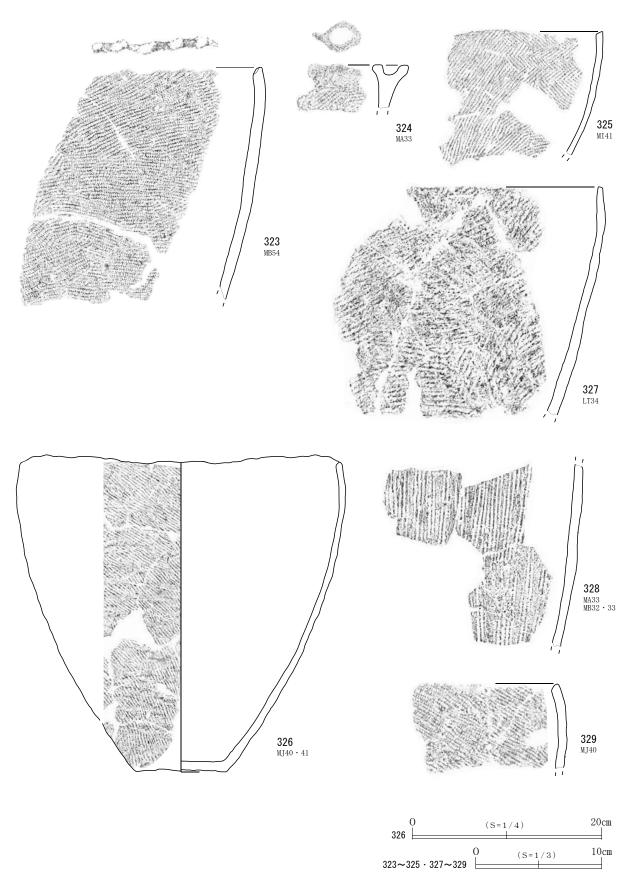
第103図 遺構外出土土器(11)



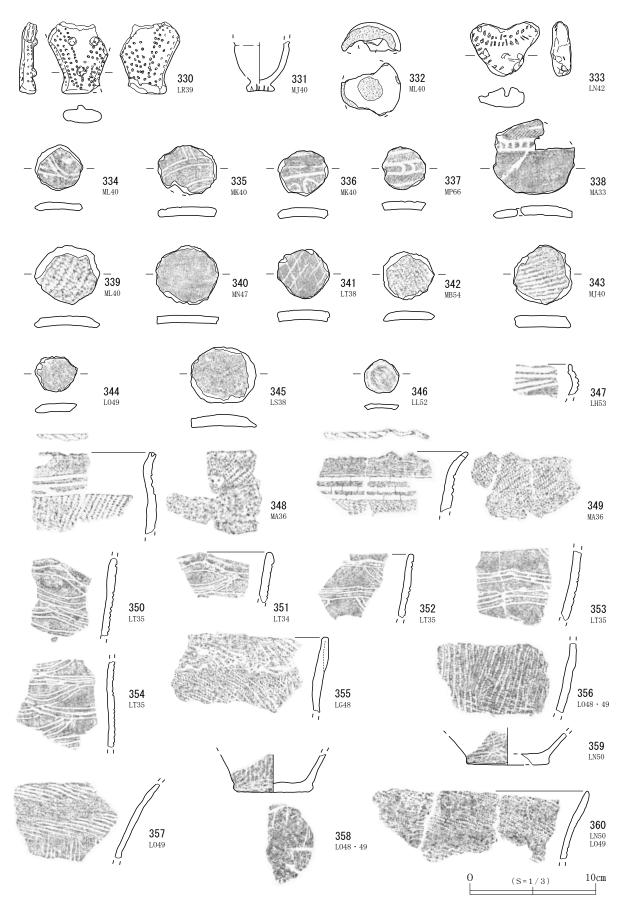
第104図 遺構外出土土器(12)



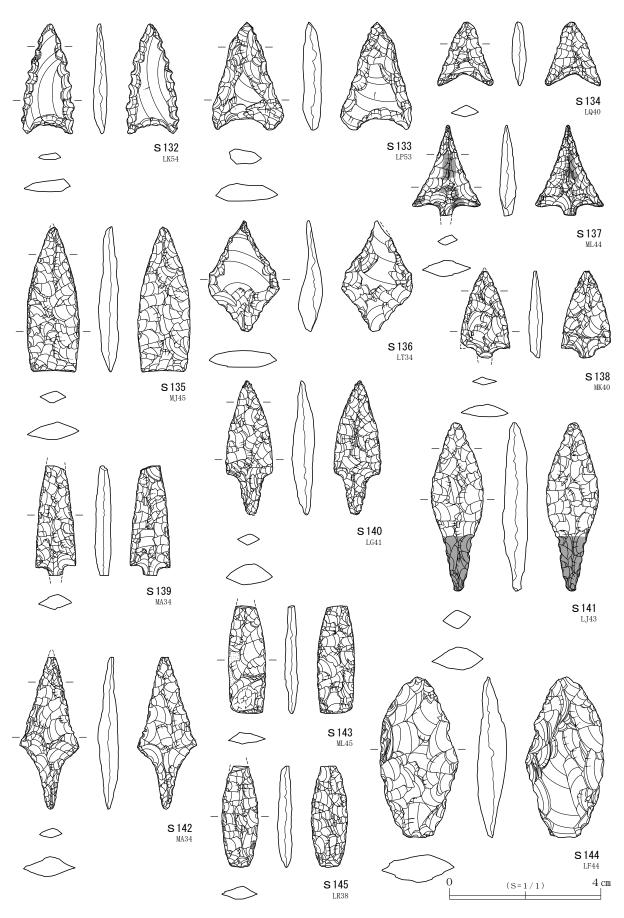
第105図 遺構外出土土器(13)



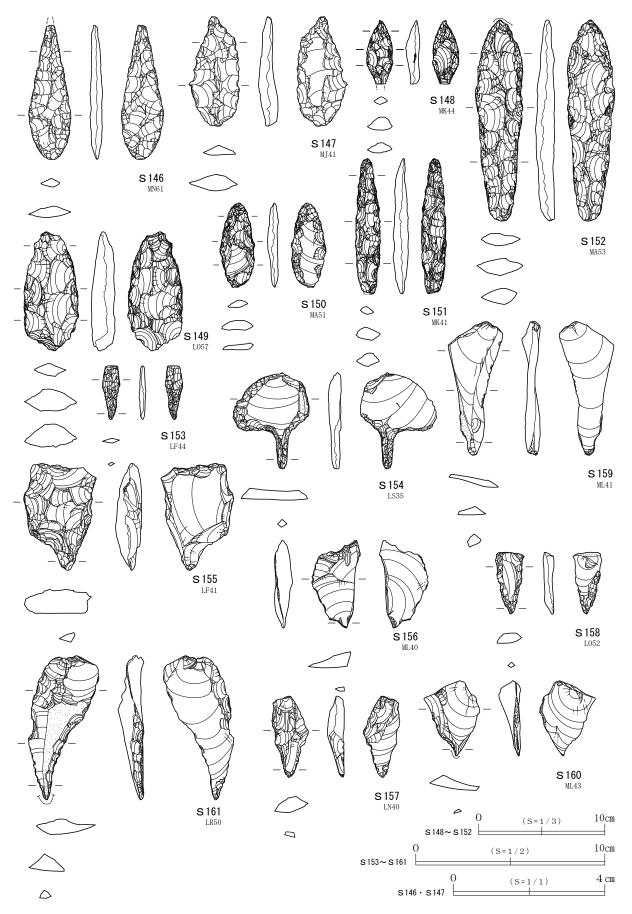
第106図 遺構外出土土器(14)



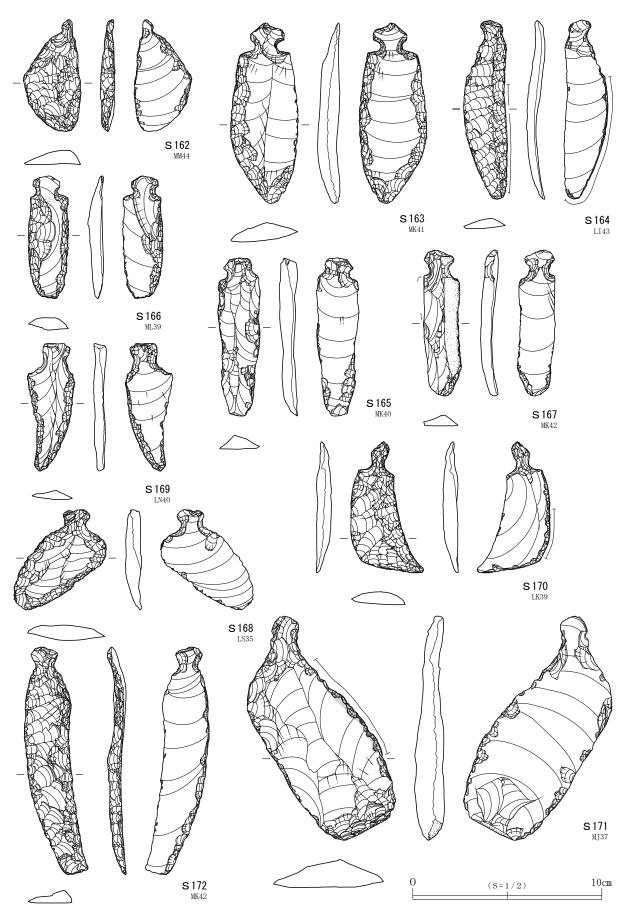
第107図 遺構外出土土器(15)・土製品



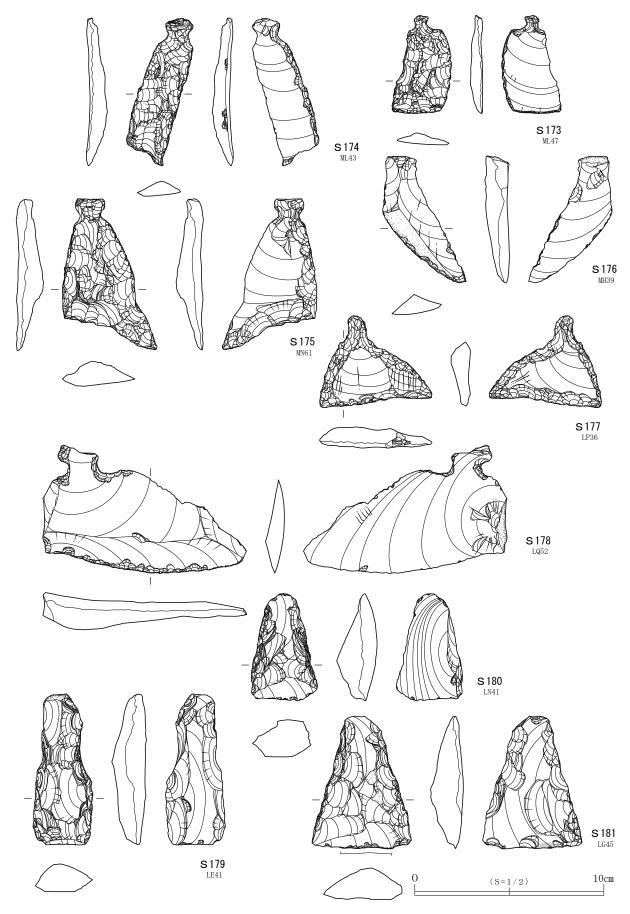
第108図 遺構外出土石器(1)



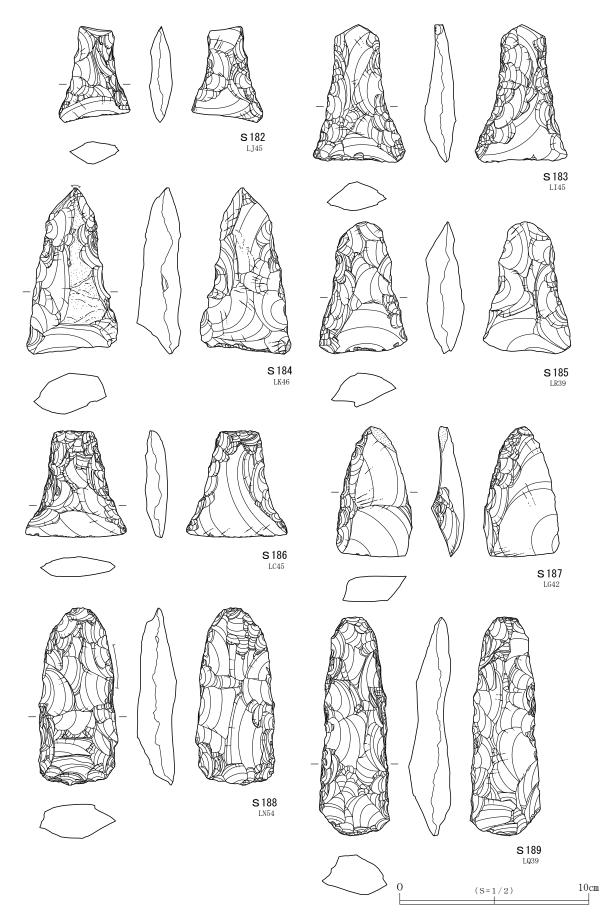
第109図 遺構外出土石器(2)



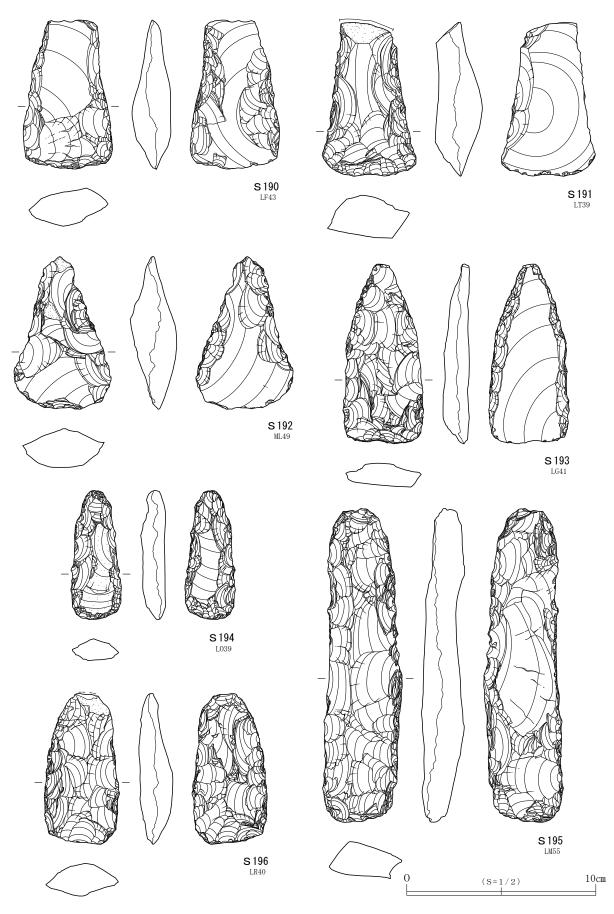
第110図 遺構外出土石器(3)



第111図 遺構外出土石器(4)



第112図 遺構外出土石器(5)



第113図 遺構外出土石器(6)